「あいまい語辞典」

芳賀 綏・佐々木瑞枝・門倉正美　著

東京堂出版

まえがき

日本語はあいまいな言語だ——という見方が日本人自身にも定着している。
ただし、理くつっぽく考えると、日本語に限らず、人間の使う言語は、どの言語でも、多少なりともあいまいさを含んでいる。数式のような「人工言語」は別として、普通にコトバ（言語）と呼ばれるもの、すなわち日常言語（自然言語）では、語（word）と他の語の意味の境界、ケジメがはっきりしなかったり、一つの語の意味内容が確定しにくかったり、あいまいである。その語を連ねた文章や会話にも、自然、何らかのあいまいさがつきまとう。ファジーは日常言語の本性である。
それにしても、物事を気むずかしく考え、正確・厳密に表現したがる集団（言語社会、文化共同体）と、思考や表現があいまいでも構わない、あいまいなのがよい、とする集団（言語社会、文化共同体）の差があることは認められよう。日本語使用の長い歴史を持つ主体としての日本人の場合は、後者の性格を濃く受け継いできた集団である。
第一に、日本人は「物事を区分せず、類別せず、境界づけず、対立せしめないという特徴」（文化人類学者石田英一郎博士）を示してきた。事物認識が不明確・不徹底、全体に理詰めは苦手である。

第二に、古来「やは（柔）しき心」（賀茂真淵）を美点と自覚してきたことにも連なるのか、対人意識の上でも、人と人との間のシャープな対立を避けたがる。間にクッションを置いて「角の立たない」関係を生み、保とうとする。

第三に、「言わなくても通じる」ようなコミュニケーションを尊重してきた。多くのことを言語化するよりも言語化を抑制し、人と人との間にかもし出される模糊たる雰囲気を通して理解が成立すればよい（そのほうが美的だ）という、この種のあいまいさも捨てがたいものとされてきた。

高名なドイツ文学者が、外国からの仕事の依頼に対し、「私に出来るか出来ないか、自信をもって言えないが、お引き受けしたい」と返事を書いたら、ヨーロッパの友人が声を立てて笑ったそうだ。「出来るなら出来る、出来ないなら出来ないと書けばいいではないか」と。しかし、日本人は、こういうパターンの表現が身についていて、抵抗なく話し、書いてしまうし、読んでも聞いても少しも奇異に感じない。可能・不可能の境界づけをぼかし、それを通じて相手に対する強い自己主張をも控える。それが「ゆかしい」とさえ感じられる。見方によっては、あいまいの固まりこそ日本人である。

洋の東西、どこの社会にも多少のあいまいさは生きている。いや、あいまいさを生かしている。レトリック（言いまわし）の技術ともなれば、あいまい表現を欠くことはできないほどだ。文芸の方面では〝あいまいの七つの型〟が言われる。イギリスの詩人、批評家、ウィリアム・エムプソンが二十余歳の若さで著した『あいまいの七典型』は名著の聞こえ高く、文芸理論の上に重要な位置を占める

ものとされている。

そのような「あいまい」に、言語表現上、そして社会生活上、どの程度に価値を認めるか。各社会の保持する文化（culture）の差が、その点にも現れる。その多様・複雑な差違相は興味つきない文化論のテーマであるが、総じて日本人の社会は、日常、無意識のうちにも認識や表現のあいまいさをプラスに評価する傾向が強く、「含み」の効用を生かしてきた社会に属する。

こうして、日本的な意識の中では、自然言語が本性として持っているあいまいさは嫌われるどころか、それの活用・妙用が文化の一大特徴とされ、日本人像を描くには欠かせぬ要素になってきた。そのような伝統と歴史を通じ、日本語の個々の語の意味・用法にも、それらを連ねたフレーズや更には文章・談話にも、ファジーな要素のしみ込んだ度合いは深い、と見てさしつかえあるまい。

＊

そこで、この本では、辞典の形式の中で、主に日常生活に多用され、しかも、理解のあいまいさを実感させる語を拾いつつ、日本語が具有しているあいまいさを、さまざまのレベルや角度から眺めてみようと試みた。「引いて調べる辞典」よりも「拾い読みして考える辞典」が狙いである。

ただし、個語（word）やそれを連ねたフレーズ、更にはそれらの集合した言表全体にまでわたって「あいまいさ」を記述するなら、辞典の形式だけではつくせない。例えば「あいまいな日本の私」だったら、あいまいなのは日本なのか、私なのか。二通りの場合がある。この種のものは、統辞（語の連

結連用）上のあいまいさ、いわば syntactic ambiguity に属するものとして、文法書の領分にゆずるべきことと考え、この辞典にはほとんど盛り込んでいない。そして、多くの抽象的な語句を組み合わせた難解または婉曲なメッセージが、結局何を意味しているのか確定できない（哲学者エルンスト・トーピッチュの言う「空虚公式」を生み出しているにすぎない）といった類のあいまい現象に至っては、文章・談話から意識・行動様式にわたっての分析の対象でもあるから、これも表向きの対象には据えていない。

しかしまた、一般の辞書のように、見出し項目を、厳密に「語」に限定・統一したわけではない。また、見出し項目は、いわゆる語義・用法の不明確なものとも限定せず、その語句が存在し多用される基底に日本の文化の「あいまい好み」そのものが読み取られるようなものも併せて含ませた。

そして、各項目の解説は、一般の辞書の記述様式とは大いに趣を変え、例話・エピソード・余談をまじえつつ評論・随想の色合いを含ませた読み物スタイルを一つの側面にした。読み、味わう辞典の中で、日本語を使って生活する人間の姿や心を描き出すことをも目ざしたのである。

東京堂出版の福島光行氏が立てられた企画にもとづき、編集・執筆の準備にとりかかったが、おそらく珍しい試みに属するであろうこの辞典を、限られた期間に独力で作りあげるのは至難のことと考え、佐々木・門倉両教授のご協力を求め、ご快諾を得て共著者になっていただくことにした。

白紙に近い状態の中、両教授が中心になって見出し項目の原案を作成してくださったことによりス

タート・ツインが出来た。個別の語句が何百と集まったところに、「あいまい語」の輪郭がおのずから形成された。それぞれ、専門領域を少しずつ異にする三人の分担執筆としたので、執筆者ごとに視点や関心の分野、予備知識の異なる点が記述に反映されていて、多角的・多面的な説明や議論が盛り込まれたかと思う。各項目の末尾に（芳）（佐）（門）と記して執筆者を示したが、三者三様の記述にフレームをかけて統一をとろうということは、全くしなかった。「あいまい語」の定義をくだすための理論的統一もはからないで出発し、個別項目の集積によって一先ずゴール・インとする方針のもとに作業を完了した。

こうして、理論書的な側面はほとんど含ませてないが、このような形でも日本人と日本語の実態のかなりの部分が照射でき、新たな知見の開発への足場が作られたと思う。楽しみながら考える知的散歩の時間を、読者に提供することができたら、そしてまた日本語によって意思を伝達し合う実生活の中での参考にしていただけたら、満足この上ない。日本語を母語とする人・しない人、内外の多様な立場の方々のご愛読を希う次第である。

一九九六年初夏

芳 賀 綏

あいまい語辞典 項目一覧（目次）

コラム

◎解説文中の言葉に＊印のあるものは、見出し項目として収録していることを示す。

あいまい語辞典

相変わらず

「相変わらず」は「いつも変わらず」という意味で使われ、時間の前後で、ある事柄が同じであり、変わっていないことが前提になっている。しかし、時間の幅は広く、話者の意識の中の以前の残像と現在がぴったり合った時に、この表現が使われる。

小学校の同窓会などで六十年ぶりに会った人にも、三日前の状態に対しても使うことができ、時間の幅という点では非常にあいまいだ。しかし、もっとあいまいな点は、この言葉を「褒め言葉」として使うのか「けなす表現」として使うのかという点だ。次の例を見ていただきたい。

結婚した娘のところに、数年ぶりに父親が訪ねてきた。「お父さん、久しぶりですね。①相変わらずお元気で何よりです」。妻が食事を作り夫が運ぶ。それを見た父親「②二人とも相変わらずだね」。寝室にと用意された部屋にはプラモデルが所狭しと並べてある。「③相変わらずこんなものに凝っているのか」、「お父さんこそ、④シャープな皮肉は相変わらずですね」。ここには「相変わらず」を使った文を四つあげたが、①〜④の「相変わらず」に込められた話者の気持ちは、それぞれ異なることが分かる。

①は、年配者に対する挨拶のパターンにさえなっている、もっともポピュラーな使われ方だ。相手が以前と変わらず元気であるのを、共に喜ぶ気持ちが出ている。しかし、長寿社会の今、五十代の働き盛りの人に対しては使いにくい表現だし、それより若い人に対して使うと「何を失礼な」ともなりかねない。

②は、話者である父親が「夫婦で一緒に夕食を作る。夫が妻を手伝うのは当然で好ましい情景」ととらえて言っているのか、それとも「恋人時代に息子が嫁をチヤホヤするのは仕方ないにしても、結婚して何年も経つのにまだこんなことをしているのか」と「好ましからざる情景」と見ているのかは、父親の社会観や価値観によって異なる。非常にあいまいであり、その余韻からどちらをさしているのか判断するしかない。

③は、「こんなもの」が後に続き、「プラモデルに凝るなど子供っぽい」という半ば呆(あき)れ、半ば侮蔑の感情が伴う。「あの人は相変わらず音痴で」「相変わらず汚い部屋だね」「相変わらずケチで聞いてはいられない」「演説が長いのも相変わらずで」など、「相変わらず」には以前から現在まで、「道義に欠ける、価値がない、くだらない」など、感じていた話者の価値観が率直に出ているのだ。

④も、父親の③への応答で同等の価値観を持つ。ただし「シャープな」というプラス指向を表す言葉が伴うことで、「相変わらず皮肉がお上手ですね」よりは父親を持ち上げる気持ちと、年長者への配慮が感じられる。

このように、時代は流れ、価値観が変わるなかで、「相変わらず変わらないもの」に対して「古き良きもの」と懐かしさを感じる人がいる反面、「無用の長物」と感じる人がいるように、「相変わらず」は全く正反対の気持ちを込めて使うことができる。（佐）

あいさつ ⇩ あしらう

あいそ（愛想・愛相）

「あいそう」が「あいそ」になった。もとは「愛敬相」だという。つまり顔だちや表情に可愛げのあるのが「あいそう（愛相）」だった。にこやかな様子を意味するこの語には「笑い」に通じる要素がある。

そこから、この語の意味は次第に広がって、大別しても四通りほどあるようになった。

①人に示す好意、親しみ。にこやかな表情や態度、発言。

②人に対して抱く好意、よい評価。

③（好意を示した）もてなし。応対。

④（「おあいそ」の形で）飲食店での勘定・支払い。

このうち、「あいそ」と聞いて真っ先に浮かぶイメージは、やはり①にちがいない。もともとが「愛敬相」という顔だち・表情のことなのだから、好意的・友好的な雰囲気をかもし出す態度、言動というイメージが強いのは自然だと考えられる。

「好意的」「非好意的」の中間が問題になる
いわば人の言動には虚と実があるということだ。

江戸の川柳にも

愛想のよいを惚（ほ）れられたと思ひ

とある。実意が足りなくても、雰囲気をやわらげ人を喜ばせる言動というのがある。そっくり真に受けるか、割引きして受け取るか、「あいそ」の裏の心を読まないと、乗せられる、ひっかかる、ということさえある。

そこで、①の派生的な用法として、実意の足りないお世辞をも「あいそ」ということが生じた。「おあいそ言って小遣いせしめようって算段か？　その手には乗らねえぞ」

この語には元来、にっこり「笑う」というイメージがあるが、この語と「笑い」が複合した「お愛想笑い」はよく使われる熟語だ。好意を持っていない、喜んでもいない、そこを無理して笑ったのがこの笑いで、対人関係の潤滑油である笑いを、心にもなく無理して使う処世の苦しさを思わせる笑い。ほろ苦さもただよう。

さしずめこの語にヒントを得たのか、こんな複合の妙技を示した人もある。

作家内田百閒は、戦前、法政大学のドイツ語の教授をしていたが、机に向かって創作の原稿にとりかかろうとする深夜、同僚の教授たちがどやどやと遊びに来た。百閒の迷惑もおかまいなしに座り込んだ面々の一人が「お忙しいんじゃなかったんでしょうか」と一応のあいさつをした。百閒老は「いえいえ」などと応答しながら、もはや運を天にまかせた気持で「お愛想煙草に火をつけた」……。

うまい造語ではないか。「お愛想笑い」に実意がこもらず、間（ま）を持たせるだけの笑いなら、笑いの代りに煙草で間を持たせることもある。複雑な気持をまぎらして煙のうちにうやむやにしてしまうのを「お愛想煙草」とは。言い得て妙。

ところで、最近、日本で頻用されるようになった「パフォーマンス」という語の意味が「あいそ」の意味と重なる部分がある、と指摘した人がある。大橋緑郎氏は、アメリカのバケット・ハットという作家が日本に来た時、雑誌のインタビューに答えた中に、

「人間は、ひとりひとり違った相手に、違ったパフォーマンスをするでしょ」という発言があったのをとらえて、こう言った。いわく、

『カタカナ語の辞典』(小学館)に出ている「パフォーマンス」の五つの意味の、どれとも、この「パフォーマンスをする」は合致しない。むしろ日本語の「ふりをする」とか「合わせる」とかのニュアンスに近い。そして「あいそ」につながっている。つまり「あいそ」とは、相手に好意をあらわすパフォーマンスにほかならない。

と。なるほど。日・英の両語がこんな風に結びつけられるとすれば興味深い。

そして、氏は「あいそは人の性質そのものというより、もっと外面にあらわれたマナー(人間関係をよくする技法)だ。技法には出来・不出来が生じやすい」とも指摘している。「お愛想笑い」などはまさしくパフォーマンスの一種ということになり、その表現がぎこちなかったら、それは不出来な技法であるわけだ。

そして、文化・社会が違えば同じパフォーマンスが違った理解を招くことも勿論ある。お愛想笑いの身についた日本人は、法廷の証人席につく時など、まずお愛想笑いを浮かべがちだというので、アメリカの法廷に出てこれをやると、法廷侮辱かと怒りや不信を買って損をすると指摘された。

なお、「あいそ」の意味②となると、外面にあらわれたものではなく内面に抱いている評価や感情を意味する。「唐人お吉は、仲のいい鶴松に、心にもない愛想づかしを言わねばならなかった」といった場合である。

なおまた、④の意味について、飲食店などで客が「おあいそしてください」というのは、とんでもなくおかしいことだ、と指摘する人がいるそうだ。あいそは店の人間のパフォーマンスであって客のパフォーマンスではない、というような理由が言われているらしいが、すでに「お勘定」という意味を持つようになって久しいから、そこまでつきつめて批評するほどのこともあるまい。

(芳)

間・間に

「間」には「休み時間の間」や「机の間」のように時間的・空間的な範囲を表したり「仲間の間」「夫婦の間」のような人間関係などを表すが、ここではある期間を表す時間的な範囲の「間」に焦点を絞って考えたい。

　たとえば「木村先生が講演している間」という文がある時、後にはどんな文章が続くだろうか。「彼はずっと居眠りをしていた」「彼はメモを取りつづけた」「私は立ちっぱなしで聞いた」「隣の人はひっきりなしに私に話しかけてきた」などの文章がごく自然に浮かんでくる。しかし「彼は講演会場を抜け出しお茶を飲みに行った」「大きな地震があった」などは続かない。後の文には「間」よりも「間に」の方がふさわしい。なぜだろうか。

　「間」の後に続く文を見ると「ずっと」「～続けた」「～ぱなしだった」「ひっきりなしに」といった動作が継続していることを表す語彙が使われていることに気がつく。これに対して「間に」は「お茶を飲みに行った」「地震があった」のように一回限りの動作が来ている。「間」が「講演の期間、ずっと続けて～だ」動作が線として表されるのに対して「間に」は「講演の時間のある時点でお茶を飲みに行った(地震が起きた)」のように点として表すことができる。「間に」は、「講演を聞く」という状況の中で、全く無関係な動作をしたり、あるいは無関係な事柄が起きたりするのだ。

　この日本人にとっては一見何でもなさそうな区別が、留学生に対する日本語教育の視点からは大切になってくる。「動詞＋て＋補助動詞(ていた)」という形を例に考えてみよう。「トムが昼寝している〈間・間に〉私は静かにしていた」「妻がせっせと掃除する〈間・間に〉夫はウイスキーをチビリチビリと飲んでいた」「首相が外遊の〈間・間に〉国内では大事件が起きていた」「外出している〈間・間に〉荷物が届いていた」、文末はどれも「～ていた」で終わっている。しかし前の二文は「間」が、後の二文は「間に」が来る。なぜなら前者は「静かにしていた～(状態)」

「飲んでいた～(継続した動作)」であるのに対して「大事件が起きていた」「荷物が届いていた」は、一過性のできごとだからだ。

概して「間」の後には「飲む」「歌う」「話す」「書く」「雨が降る」「寝る」「走る」といった動作の継続を表す「継続動詞」が、また「間に」の後には「届く」「結婚する」「止まる」「落ちる」「閉まる」「始まる」「終わる」のようにある瞬間に行為が成立し、その状態が継続している「瞬間動詞」が来ることが多い。

「間」を「ま」と読むと時間的な間隔は狭くなる。「あっという間に遠ざかっていった」「知らぬ間に盗まれた」「迷っている間に買われてしまった」などは、どれも話者が時間の幅を短いととらえている。「ちょっとの間だったよ」と、「ちょっと」などの語彙と共に使われた時は「あいだ」ではなく「ま」と読む方が短い時間を表すのに適しているようだ。（佐）

間に ⇩ 間

あいにく

何かをしようとする時、都合の悪い状態にあることを言う。この都合の悪い状態は、話者にとって都合が悪いが、他者にとっては都合の良いこともあり、きわめてあいまいである。

ショーウインドーに飾ってあるコートを見て買いたいと思う。でも即断は禁物と一晩考え、やはり買いたいと翌日店に行ってみると、もう売れてしまってない。「あいにく他の人に先に買われてしまった」、翌日会社に行くと、同僚がそのコートを着ている。気心の知れた同僚なら「お生憎(あいにく)さま」と言われてしまうかもしれない。自分にとって痛くもかゆくもないが、相手にとっては都合が悪い状態のとき言うあいさつの言葉だ。

友人にコンサートに誘われた。

「あいにく今晩は主人が早く帰ってくるんですって。こんな時に限って早いのよ。ごめんなさいね」（ふだんは遅い帰りを嘆いているのに）

あいにく、私のところではその商品は扱っておりませんので」

「せっかく訪ねたのに、彼が留守とはあいにくでしたね」

「できればお貸ししたいのですが、あいにく今持ち合わせがなくて…」

どれも個別的な事柄で、相手の気持ちを思って使う「あいにく」である。

「あいにく」は誰が聞いてもマイナスと思う普遍的な事柄に対しても使う。「運動会にあいにくの台風の到来で…」、普遍的であるがゆえにニュースなどで使うこともできる。しかし、もし怪我をして運動会に出られない学生にとっては、運動会の延期は決して「あいにく」ではないかもしれない。

「会社が倒産したら良い機会だから会社を辞めようとおもっていたのに、あいにく景気の波にのって急成長し、今ではやめるどころではないんですよ」

などという使われ方もある。会社が大きくなるのは良いことだが、彼のような場合やライバル会社にとっては「あいにく」となる。この表現は、誰にプラスで、誰にマイナスかを把握してからではないと使えないようだ。

（佐）

あげる・くれる・もらう

外国人に日本語を指導する際に最も教えにくいことの一つとされるのが、受給関係を表す動詞の「あげる・くれる・もらう」であると言われる。難しさの一つは「あげる」に対して「やる・さしあげる」、「くれる」には「くださる」、「もらう」には「いただく」といった相手が目上か目下かの待遇を考慮して使い分ける必要のあること、また「くれる」も「もらう」も、相手から自分への事物の授受という点では同じであるのに対して、自分の視点に立つか、相手の視点に立つかによって、「くれる」になったり、「もらう」になったりする点であろう。ものの授受を表す動詞には、ほかにも贈る・ゆずる・受け取るなどがあるが、「買ってあげる（やる・さしあげる）」、「買ってくれる（くださる）」、「買ってもらう（いただ

く)」のように「動詞+て+授受動詞」の形式をとるのはこの七つだけである。

この「買ってあげる」のように、補助動詞を伴う時には、物の授受ではなく、行為が他者のためになされる時に使われる。

実際に教室で指導すると、「先生は私に写真をあげました」などという文章が飛びだすことがある。これを直そうとすると、まず「あげる」ではなく「くれる」であること、先生にはできれば「くださる」と言った方が良いこと、さらに「私は先生に…」と自分に視点をおいた場合には「もらう—いただく」という動詞を使うことなど、何段階もの説明が必要になる。

たいていの場合は、口頭による説明よりも、実際にチョコレートや花束を小道具に

「カーチャにチョコレートをあげます」

「カルロスにチョコレートをもらいました」

「カルロスがチョコレートをくれました」

とあげたり、受け取ったりの動作を繰り返しながら指導する方がうまくいく。

「カルロスがカーチャにチョコレートをあげます」

「カーチャが私にチョコレートをくれます」

の使い分けも難しい。英語ならgiveという動詞だけですむところだ。日本人の子供は、こういった複雑な体系を自然のうちに会得していき、大人で使い方を間違える人はまずいないが、外国人から見れば「使い方を覚えるだけでも大変だ」というのは十分に理解できる。「やる」は最近「あげる」に変わりつつある。家族の目下の人に対してや、植物に対しては「やる」と指導したいところだ。

中国語では「あげる」も「くれる」も「給」という動詞一つで処理できるということだし、日本語と似た文法構造を持つ韓国語やモンゴル語もgiveにあたる言葉は一つだという。ここにあげた七つの動詞は具体的なものの授受に使われるが、これが補助動詞と共に使われた場合にはどんな例があるのだろう。

動詞+て+あげる(やる・さしあげる)

◎「あっ、雨だよ、僕の傘を貸してあげようか」

中そってくれ、持ってあげましょう」

この「あげる」は、相手に好意的に行為を与えることが多い。恩恵関係ともいえる。相手が目上の場合には「貸してさしあげましょうか」「持ってさしあげましょう」となるが、好意の押しつけという感もある。

◎「なに、あいつそんなことを言っていたのかよ。
よし、とっちめてやる」
「私に二度と逆らえないようにしてやる」

のように相手に不利益を与える場合にも、この表現が使われる。「あげる」よりも「やる」の場合の方が多くなる。これを「よし、とっちめてあげる」となると、誰かのために、その人をとっちめるという感じが強く、やはり恩恵関係になると言えそうだ。

◎テレビドラマで中学生が母親に向かって
「そんなこと言うなら落第してやる」「死んでやるからな」

と捨てぜりふを吐いていた。この場合も「〜てやる」しか使えない。これは中学生が自暴自棄になって言った言葉だが、相手に不利益を与えるという意味で

番目の例と一緒にすることもできる。

動詞十て十くれる（くださる）

◎「母はいつも子守歌を歌ってくれた」
「弟はアメリカを案内してくれた」

これらの表現の背後には感謝の気持ちがある。「母はいつも子守歌を歌った」が、母親を客観的に観察しているのとは対照的だ。今の例のように、行為が話し手に対してなされる場合と、「弟は娘たちに、アメリカの地理を教えてくれた」のように、話し手の身内に対してなされる場合とがある。

「池田さんは弟にチョコレートを買ってくれた」

この文の「くれる」から、「弟」は話し手の弟であることが分かる。ところが「池田さんは弟にチョコレートを買ってあげた」となると、弟は池田さんの弟ということになる。

◎「主人に電話なんかしてくれなくても良かったのに」
「よく、そんなひどいこと言ってくれますね」

これらの「〜くれる」には感謝の気持ちは微塵も

なく、迷惑という思いがにじみ出ている。

◎「～てください」は「～てくれる」の変形ともいえる。

「もう一度ゆっくり言ってください」

外国人はこの表現を丁寧だと思いがちだが、日本語では「もう一度ゆっくり言ってくれませんか」と言った方がより丁寧であり「くださいませんか」なら完璧だ。夫が妻に怒った調子でいう時は「もっとゆっくり言ってくれ」となる。「～てくれる」も使い方次第でいかようにも変化する。

動詞＋て＋もらう（いただく）

◎話し手、あるいは話し手の身内のために、誰かに好意的な行為を受ける場合に使われることが多い。

①「木村さんに家まで車で送ってもらった」

②「母は木村さんに（から）、お琴を教えてもらった」

この二つの文は非常に似ているが、①の文では「木村さんに」としか言えないが、②の文では「木村さんに」とも「木村さんから」とも言える。なぜだろうか。「家まで車で送る」という運転、車の移動など目に見える直接的な行為が「に」しか使えないのに対して、「教える・褒める・知らせる」のように間接的で知的・精神的な行為は「～に」とも「～から」とも言えるようだ。

これらの授受動詞をどのように使い分けるかは、話し手の意識とも大いに関係がある。一般的に男性は「持ってやろう」など、「やる」をよく使うが、女性はあまり使わない。また夫と妻の会話にしても、女性の方が「すいませんが、それ取ってくださる？」というのは普通だが、夫が妻に「それ取ってくださる」というのは不自然に聞こえる。ここからも、日本の社会の中での関係が浮かび上がってきそうだ。

年齢や地方によっても、使い方は異なる。いずれにしても、話し手の意識の中で、どこまでを目上と判断しているかによって「いただく・くださる・さしあげる」の表れ方は違ってくる。

話し手の意識という点でもう一つ重要なことは、「くれる・あげる」の使い分けの中に、その人物を自

分の身内と感じるか感じないかが出てくるのだ。「～てくれる」のところでも少し説明したが、「木村さんはロイにチョコレートをくれた」となると、話し手はロイをかなり身近な存在としているが、これを「あげた」にすると、ロイは身内の境界から外れることになる。

話者がその人物をどこまで身内と感じているかが、これらの動詞の使い分けになるというのは、いかにもあいまいで、時と場合によっても使い方が異なり、説明のつけにくいところである。（佐）

あしらう・あいさつ

①「なかなか人あしらいのうまい人で、会っていても楽しいね」

「お客様のお気持ちをお察ししながら、と努力しておりましても、あしらいに不行きとどきが出て来ましたり……やっぱりねえ」

動詞「あしらう」の第一義は、取り扱うこと・応対すること・受け答えすること。その名詞形「あしらい」から「人あしらい」「客あしらい」などの複合名詞が生まれた。もてなし・待遇のキメ細かさを重視する日本人には忘れてならない重要概念を示す語、つまりキーワードにも数えてよかろう。

ところが、そのキーワードも、転じて第二の意味になると、とんだ冷遇を意味する語に変ずる。

②「横綱に軽くあしらわれてしまった。もう少し相撲になるかと思って挑戦したんだけど…」

「この交渉は是が非でも成立させようと意気込んで乗り込んだが、相手がとんだ古ダヌキで、いいようにあしらいやがって…」

相手にしない・まともに対応しない・軽視してい い加減に扱う…と、マイナス評価ばかりこめられた語になってしまう。

①と②の差が明瞭に認識できる場合は問題ない。「あしらう」には二つの場合あり、と心得ておけばすむことだ。

ところが、世慣れた人間、世間ずれした人間というのがいるもので、表面厚遇、内心冷遇、という行動に出ることがある。「いんぎん無礼」というのがそ

れだ。昔、デパートによっては、客の身なりによってあしらいに差をつけてはいけないということから、服装の粗末な客ほど丁寧なことばを使え、と店員に教育していると聞いた。となると、丁寧に応対された客は自分をどう考えたらいいのか？……これなども、いんぎん無礼の一種になりかねない。そして、もっと露骨に、自己の優越に自信を持って相手を見くだしながら、うわべは丁重をきわめる類の、いんぎん無礼も少なくない。

これらの場合は、「あしらう」のプラス面を表面に出しながらハラの底ではマイナスに取り扱っていることになる。プラスとマイナスが、うわべと本心に分かれて同居しているのは、一筋なわで行かない、食えない人間の生み出す対人行動である。

このような「あしらう」の重層性を眺めていると、「あいさつ」という日本語に連想が及ぶ。

社交上の儀礼を尊重する日本人は、あしらいを言語・動作や贈り物によって具体化することを重視する。あしらいの第一義が形にあらわされ、定型化されたものが、社会のもろもろの場面における「あいさつ」である。

歌舞伎俳優の襲名披露の舞台あいさつなどは、しきたりを守ってものものしく、大相撲初日の恒例、協会ごあいさつも型通りに行われている。定型に忠実な日本人の作法の好例だろうが、結婚披露宴の仲人のあいさつが長すぎて客を困らせるなどは注意を要する。金品を贈られないと「何のあいさつもない」と怒る人は、あいさつ重視の伝統に忠実な人なのか……？

ところで、あしらいにもプラス・マイナス両義があったように、あいさつも、誠意がこもらず、うわべだけの場合があり、実意のない「お世辞」（社交辞令）のこともある。

さらに、相手が皮肉や悪口を言ったのに対して「おれが皆のためにやってることを、点数かせぎとは、こりゃ〝ごあいさつ〟だなあ」と応ずることがある。このように皮肉をこめてやり返す時は必ず上に「ご」が付く。

「あしらう」のプラス・マイナス両面と「あいさつ」の両面は、完全に一致しているわけではないが、元

やよい対人態度を意味するはずの語も、ひねりすると、うわべだけの不誠意な対人態度の意味に転ずるところは、人間の言動と本心の複雑なからみ合い方が思われて興味をそそるものがある。

なお、「あしらう」には、①②に加え第三の意味がある。すなわち、「盛り付けの時に、ちょっとパセリをあしらうのを忘れないように致しましょう」というのは、美しさ・心地よさなどを考えて「取り合わせる」「配合する」ということ。ちょっと（軽く）アクセサリーを添えるわけで、「軽く」のニュアンスは第二義と共通するようだが小バカにするのとはむしろ正反対。プラスの添え物をするわけである。

これに相当する「あいさつ」の用法は思い当たらないが、しいてさがせば、映画の公開に際して、監督やスターがステージに並んで「ごあいさつ」するあたりが、けっこう悪くないアクセサリーというところだろうか。

（芳）

あたり

「今年の六月あたり、お姑（しゅうと）さんが上京されるそうよ」

「明日の午後あたり、一緒にお茶でもいかがですか」

「来月あたり、そちらに出張することになりそうなので、その時はお寄りします」

ときどき用いる「あたり」は、いつとはっきり断定できなかったり、時間を提示することができず、時に大きな幅を持たせていて、時間がはっきりしない点であいまいさが伴う。これを「六月の十五日の九時あたりに」とか「午後三時十五分あたりに」と言うことはできない。

人間についても

「会議室の鍵の行方、誰か知りませんか」

「あっ、それなら木村さんあたりに聞いてみたら」

と使うことができる。この場合は、木村さん個人を指すのではなく、木村さんのまわりにいる人達も含

めてさすことができる。木村さんのまわりに同僚がいることが暗黙の了解としてあり、「社長あたりにきいてみたら」というのは不自然だ。

場所についても使うことがある。

「すみません。須藤さんのお宅を捜しているんですが」「さあ、ここらあたりで『須藤』っていう人はいないと思うけど」

「うちの子供見かけませんでした」「公園の砂場あたりで遊んでいると思いますよ」

空間に幅を持たせるという意味で、この「あたり」は実に都合の良い表現だ。場所を表す「あたり」に近い表現に「近所」がある。しかし、「公園の近所」といった場合は公園は含まれないことになり、意味的にはだいぶ異なる。

場所に関しては、「公園の砂場の辺」と「辺」を使うこともできる。（佐）

あのう・ええと

「あのう、せっかくご招待いただいたんですが、明日は都合が悪くて…」（断る）

「あのう、すいませんが、課長の木村さんはどちらにいらっしゃいますか」（相手に尋ねる時）

「その曲はですね、あのう、演奏会用に作曲されたもので」（つなぎの言葉）

外国人から見ると日本人は「あのう」をどこででも使っているように見えるらしい。

しかし、断る時やたずねる時に使う「あのう」は人間関係を円滑にするための布石のようなもので、家族、それも目下に対してはあまり使われないし、独り言に「あのう」を使う人はまずいない。

「あのう」という表現は、日本の社会が個人主義で成り立つものではなく、相手との人間関係によって成り立つ証でもあるのだ。

男性と女性で、どちらが「あのう」を多用するだろうか。これは具体的な場面を思い浮かべるとはっきりする。たとえば夫と妻の会話で、妻に向かって「あのう」という夫はどれだけいるだろうか。それに対して妻から夫に話しかける時には「あのう、一郎なんですけど、学校でね…」とか「そのセーターは

ね、あのうバーゲンで買って…」と言葉に詰まった時につなぎ言葉として使ったり、使う機会が実に多い。夫と妻の上下関係を歴然と示す言葉の一つが「あのう」だ。

会社ではどうだろう。部長が部下に対して使うことはほとんどないと思うが、部下が部長に対してはたとえ男性でもよく使う。「あのう」は男女両方が使う言葉だが、男性・女性とも平社員の場合はどうだろう。最近は会社でも女性たちは男性と肩を並べて仕事をしているから、「あのう」を使う率は少なくなっているのだろうか。「あのう、これワープロミスだと思うけど…」という表現は、男性社員と女性社員がどちらが多用するだろうか。

「あのう」と同じような機能を持つ「ええと」という言葉について考えてみよう。右の会話の社員の例で「ええと、これワープロミスだと思うけれど…」と「あのう」を「ええと」に変えると、丁寧な感じが失われ、直接的で聞き手に対する敬意はあまり感じられない。これは男性と女性、部長と部下のどちらの表現だろうか。

部長　ええと、あの人誰だったかな、確かに一度会ったことがあるのに思い出せない」。ええとは独り言の場合でも使える。これを「あのう」に言い換えることはできない。

どうしても誰だか思い出せなくて、部長が部下に聞くと部下は考え込んで「ええとですね。あの方は…」と「ええと」を使って答えるとする。この場合の「ええと」は、思考する際の時間稼ぎの「ええと」であり、男女・上下に関係なく使える、待遇関係を意識しない表現だ。

「ええと、ニンジンとキャベツで三百五十円、それからええとミカンね、ミカンが…」という具合だ。

つなぎ言葉はその人の癖がもっとも出やすいので、「エー」「アノー」「アー」「ソノー」と色々ある。しかし、つなぎ言葉がなく、次の表現を捜す間沈黙しているとすれば、ちょっと気詰まりだ。これらは言わば会話を柔らかくするクッションのようなものだろうか。

（佐）

甘い

味覚を表すことばには「おいしい、うまい、まずい、あまい、からい、にがい、しょっぱい、すっぱい」等がある。この中では、「おいしい(うまい)↔まずい」の対立のほかには、「甘党」「辛党」や「甘口」「辛口」のように「甘い↔辛い」の対立が目につく。前者は味覚そのものというより味に対する評価を表しているから、「甘い」と「辛い」が代表的な味覚表現の対立である、と言えよう。

中でも「甘い」は、「蜜の川」や「甘露」といった言葉が示唆しているように、食文化の相違を越えて、人々を魅惑する味覚である。一説によれば、母乳の甘さが甘味への憧れを普遍的に養っているのではないかとのことである。たしかに、母乳の記憶はないにしても、子どもの頃に味わったキャラメルや駄菓子の、口の中いっぱいにひろがる「あまみ」は幸福感・充足感にみちていたものである。「あまい」が「うまい」と通じている、という指摘にもうなずけるものがある。

日常の食生活の中でこんなにもふんだんに甘味に接することができるようになったのは、近代化の産物である。近代ヨーロッパの帝国主義は競って植民地から砂糖等の甘味の材料を奪ってきた。それによって、ヨーロッパの人々の大量の甘味摂取が保証されたのである。日本でも、甘味がカロリー過多や虫歯の原因としてセーブされるようになったのは、つい最近の現象であることを見逃してはならない。

「甘さ」の魅惑は味覚を越境して、「甘い香り」「甘い調べ」「甘い言葉」「甘い追憶」のように、嗅覚や聴覚、さらには精神世界一般にまでひろがっている。

しかし、過度の「あまさ」が歯だけでなく、心まででとろかしてしまうことへの警戒感が「甘さ」へのマイナスイメージを形成する。「あまったるい」という言葉は、「あまさ」が精神を「たるませる」、弛緩させることを語っている。「甘い言葉」は優しい愛の言葉であることよりも、堕落におとしいれる誘惑の言葉であることのほうが多い。また、臣下の「甘言」は主君を惑わすのである。

弛緩」の感覚は、「ネジがあまい」「ピントがあまい」「刃物切れ味が甘い」という具体的事物の「しまりの悪さ、鈍さ」から、「攻め(守り)があまい」「読み(見通し)があまい」というように事態への「対応の鈍さ」にもつながっていく。そしてさらに、「考え方や態度がしっかりしていない」という意味合いもおびる。「考え方が甘い」「人間が甘い」「敵(世の中)を甘くみている」。

「子ども(女)に甘い」「点数が甘い」「甘い評価」という場合は、「厳しさ・正確さに欠ける」という意味だが、この場合には、「娘にはあまいが、息子にはからい」「ずいぶん点がからい」というように「辛さ」が「厳しさ」として、比喩的にも反対の意味で用いられる。

土居健郎は「甘え」をキーワードとして日本人の精神構造を分析してみせたが、「甘える」とか「甘やかす」という表現自体は否定的なニュアンスをもっている。「甘味」があれほどの至福感をもたらすわりには、「あまい」をめぐる日本語表現は「甘味」に対して「あまく」ないようだ。　(門)

あまり

母親が中学生の息子と話している。

「今日は遠足疲れたでしょう?」「あんまり」、返事は短くイントネーションは最後でピンとあがる。

「水族館、楽しかった?」、息子は面倒くさそうに「あんまり」

「ねえ、おなか空いた?」「あんまり」

とうとう母親は堪忍袋の緒が切れたように

「あんまりだけじゃわからないでしょ。それに、あまりテレビゲームばかりやっていると(過度—テレビゲームをしすぎること)、頭が悪くなるわよ」「どうせ頭、あまりよくないもん」(それほど)

そばにいた私の方を向いて、「あまりにひどいと思わない(過度の状態)? お宅はお嬢さんばかりだから、こういうご経験ないでしょう」「ええ、そう言われてみれば、あまりこういう経験はありませんね」(少ない)

実際の会話ではこれほど「あまり」を多用するわ

けではないが、会話の出だしの部分はこの通りだった。最近は母親との会話を省エネして、エネルギーをテレビゲームに向けてしまうのか「(あまり)疲れていないよ」「(あまり)楽しくなかったよ」の否定形の部分を省略して言う傾向が見られる。
いずれにしても「程度がそれほどではない」という意味で使われる表現で、「楽しかった—楽しくなかった」「疲れた—疲れていない」と言い切らずに「あまり」で返事の全てを代用するのは、返事をあいまいにしておきたいからだろうか。それとも、はっきりと返事をし、理由を追求されるのが面倒だからか。
これは友人の子供に限ったことではなく、テレビアニメなどにもよく見られる傾向だ。
「水族館、見物の人がたくさんいた?」「あまり」
「珍しい魚がたくさんいたでしょ」「あまり」
人数や魚の数などに使われた場合の否定形は、「人数は少ない」「珍しい魚はそれほどいない」という意味になる。その程度がどれほどであるかはあいまいで「あまりよくわからない」。
しかし「あまり」は、
「あまり見物人がたくさんいたので、水槽の魚があまり見えなかった」
「あまりにも珍しい魚だったので、つい見とれてしまった」
のように、「見物人の多さ」「魚の珍しさ」といった事柄に「あまり」を加えることによって、その程度が極端だったことも表す。
「泳ぎはあまり得意ではないが、あまりきれいな魚がいたので、その後をついて行ったら、沖につれていかれた」
これはグアム島での私の体験で、これなどもその魚が他と比較して極端に「きれい」だったことを表している。「あまり」の後に肯定文が来るかで、意味はあまりに違ってくる。
(佐)

ありがたい

欧米の文化は人間を本位(主体)にした能動的な文化である。それに対して、日本の文化は、人間が突出せず、むしろ事象の中に人間がひそみ、まぎれ込

んで、人間が万物の一部のようにたたずまう文化である。文化人類学者クラックホーンが、日本の文化を〝人間が自然と共存する〟タイプに分類したのはもっともなことだ。

英語の"A Happy New Year"は元来は"I wish……"と始まるセンテンスの一部である。「私ハ祈ル」と始まる、まことに人間の行動を本位にした発想である。それに対して、日本人は「新年（明けまして）おめでとうございます」とあいさつする。「めでたくあり」「めでたい」は、祝イタイ心地ガスル、祝ウノガヨイ、慶賀シタイという意味だ。私ガドウスルというのではない。人間は後ろに退いていて、祝イタイ雰囲気を客観描写しているのだ。英語の表現が動詞的なら日本語のは形容詞(形容動詞)的とも言える。

平素のあいさつにも同じ対照は現れる。"Thank you"は「アナタ(君)ニ感謝スル」と、人間の行動をはっきりさせているが、「ありがとうございます」は「滅多ニアリ得ナイコトデス、稀ニ見ルコト(恩恵、ゴ好意)デス」の意で、人間は行動せず、やはり事態を客観している形である。感謝するのは人間(自分)だが、自分が感謝するとは言わず、客観的な事態が得がたい(ウレシイ)ものだと表現するのだ。

「ありがとう(ございます)」の原形(終止形)は「ありがたい」で、この形は、勿論、あいさつ文句に先行して存在した。自然の恩恵にせよ、人の好意にせよ、それを感謝すべきものだとする意味で、現在も常用されている。

「久しぶりの雨はありがたいねえ。水不足も少しは解消するかもしれない」

「徹夜作業のところへ夜食のさし入れとは、ありがたいことだ」

「ありがたくお受けいたします。この上は一意専心、相撲道に精進し、大関の名をけがさぬよう…」

「ありがたいお話です。存分に自分を発揮できる職場を求めてたところですので…」

日本人の発言や行動は明快にはきわ立たないが、心情を深く抱き、あたためるのをよいとする意識が強い。心の中で「ありがたい、ありがたい」とくり返し、肝に銘じているのがよいという価値観は、日本人の生活を支配してきた伝統的な徳目の重要な一

項である。仏教(特に鎌倉時代以後の庶民を教化した宗派)の影響もここには強く生きており、江戸時代の庶民の処世道徳にも、神仏(お天道さま)への感謝、他人(世間さま)への感謝が重要徳目として生きていた。「おかげさまで…」という常用句や「恩返し」「恩知らず」「謝恩会」「謝恩セール」などは、みな「ありがたい」と地つづきの語句である。

ところが、このような感謝、感謝、の庶民道徳のキーワードの一つである「ありがたい」は、反転して、アイロニカルな使い方をされることがある。

「トホホ、ありがたいことになったもんだ。あのコーチがつきっきりだって？　どうすりゃいいんだ、おれ」

「見込まれたのは感謝すべきなんでしょうが、何から何まで私を相談相手なんて、こっちの身がもたない。〝ありがた迷惑〟というところですな」

「それじゃあヒイキの引き倒しじゃないの。とんだ〝ありがた迷惑〟だわ」

こうなると発言者の心理は複雑で、心理の屈折、表現の影の部分を読み取るセンスが受け手に要求される。

「ありがたい」「ありがとう」だけなら、外国人にとってむずかしい語句とは言えないはずだが、数歩進んで、〝ありがた迷惑〟のニュアンスがわかったり、迷惑な立場までも「ありがたい」と表現する気持ちが理解できたりするようになれば、日本人の意識のヒダ、表現のヒダがかなり読める境地だと評してよいだろう。

(芳)

コラム

あいまい表現の語源

「曖昧(あいまい)」は「曖」も「昧」も「暗い」という意味。「曖昧模糊(もこ)」という時の「模糊」は霧や煙などがかかった状態のことを言う。つまり「曖昧模糊」とは暗かったり、霧がかかったりして、物の輪郭が定かにつかめないことをさしている。まさに「分けられる」ことが、「分かる」ことなのだ。

「そんなあいまいな（あやふや）な返事では困る」では、「あいまい」と「あやふや」はほぼ同

じ意味だろう。例えば、原発に賛成か反対かの問いに対する返事だとしよう。「あいまいな返事」とは、賛成か反対かの輪郭をぼかした官僚的な答弁を思わせるのに対して、「あやふや」の方は賛成とも反対ともとれるどっちつかずの、論理的な一貫性のない政治家のその場しのぎの対応を思わせる。

「あやふや」の語源について、『大言海』は、「あやし」から派生して、「うやむや」や「むにゃむにゃ」と同種の連想が働いた語構成によるものではないか、と推測している。ところで、「うやむや（有耶無耶）」は「ありや、なしや（あるか、ないか）」の漢文体から来ている。

『伊勢物語』の名歌、「名にし負はばいざ事とはむ都鳥わが思ふ人はありやなしや」の「ありやなしや」は「無事であるかないか」の意味だし、『源氏物語』の「ありやなしやを聞かぬ間は」では、「真実か否か」という意味になる。この「ありやなしや」がいつのまにか漢文調で「うやむや」と読まれ、しかも「どっちかわからない」という意味になったようだ。「むにゃむにゃ」は「うやむや」が訛ったものと思われる。

「曖昧」が「暗さ」によって、物事の形を隠すことに本義があるとすると、「えたいが知れない」という表現の「あいまいさ」さの由縁もつかめてくる。「えたい」とは「得体」ないしは「為体」と書く。つまり「体（形）を得る」「体（形）を為(な)す」という意味である。「えたいが知れない」とは、そのものがそれとして「体を得る／為す」ところの「正体・本性」が「知れない／わからない」ということなのだ。ここにも、「形」を見てとることが「分かる」ことという発想がある。

「お茶（ことば、態度）を濁す」が「あいまい」さを表しているのも、「濁す」ことが透明な状態を不透明にさせることだからだろう。それにしても、どうして「お茶」なのだろうか。お茶が大変貴重だった室町時代には、お茶は最高の接待として交渉相手をまるめこむことができたことから、「急場をなんとかしのぐ」ことを「お茶を濁す」と言うようになったという説と、茶道

の作法にかなってない、いい加減なやり方でとりつくろうことから来ているという説がある。いずれにしても、どうしてお茶を「濁す」なのか、という疑問が残る。

日本の政・官・財の鉄の三角形の理不尽な癒着ぶりがさまざまな領域で露呈し、国民の怒りをかっているが、そうした癒着の土台をなしているのが接待で培われた相互の「なあなあ」の関係である。この「なあなあ」は、歌舞伎の舞台で役者が相手の耳元でささやく場面の終わりに「なあなあ」というのがキマリだったことに由来している。ここから、事態を公開してはっきりさせず、内輪であいまいなままになれ合って物事を進めていくことを「なあなあでやる」というようになった。

住専問題追求では、多くの官僚・政治家の答弁は「しどろもどろ」だった。「しどろ」は秩序なく乱れた、とりとめのない様子、「しどけない」も同じ語源である。「もどろ」は、斑(まだら)から転じた言葉らしく、これも乱れる様をさしている。つまり、「しどろもどろ」とは、「乱れに乱れている」というのが元の意味なのである。「乱れる」とは、分節や脈絡を「乱す」ことであり、あいまいさにつながるわけだ。

最後に、「プラス・アルファ」で、「プラス・アルファ」の「アルファ」について考えてみたい。「アルファ」とはギリシア語のアルファベットの第一文字であり、英語で言えばAにあたる。代数の約束からすれば、A、B、Cなどアルファベットのはじめの方の文字は既知数を表すことになっている。本来なら、いくら増えるかわからない量を表している「プラス・アルファ」は、野球で勝利チームの九回裏の得点を「+X」と表すように、「プラス・エックス(ギリシア語ではカイ)」と言うべきなのだ。一説によれば、「+X」のXの筆記体χをα(アルファ)と混同したためらしい。もっとも「プラス・アルファ」にあたる英語表現は"plus something"のようであり、いずれにしても和製英語(?)たることにかわりはないようだ。

(門)

ある

主体や事物の存在を表す文は基本的だし、応用範囲が広いので日本語教育の一番初めの方で出てくる。

「机の上に本があります」

「このクラスには学生が八人います」

といった表現である。ここでさっそく問題になるのは、「ある」と「いる」の使い分けである。日本語教育では、「植物以外の生物」には「いる」、それ以外には「ある」と教える。

「いない、いない、バアー!」というように、自分の意志でそこに存在したり、存在しなかったりできるものについて「いる」が用いられる。動物以外では、例えば「上空には敵機がうようよいた」のように、乗り物には「いる」を用いることがある。乗り物は自分の意志で動いているようにみえるし、運転している人の拡大身体とみることもできるからだろう。反面、動物であっても動きを失ってしまえば、「あそこの魚市場には生きのいい魚がたくさんあった」となる。

もっとも書類で「配偶者　有・無」となっているように、「私には妻子がある」「兄弟が三人ある」ということもある。この場合の「ある」には、「存在」というより「所有」の意味合いが強い。「存在」を表すことばが「所有」をも表すというのは、哲学的にみて興味深い言語現象である。

「ある」には、以上の「〜がある」の用法のほかに、「〜である」という広範な用法がある。次に、「AはBである」におけるAとBの関係についてみてみよう。

①AとBが同一である場合。

「2たす2は4である」

「彼は山田太郎である」

「父とは男の親である」

「水はH_2Oである」

②AがBに含まれる場合。

「正方形は四角形である」

「彼は日本人である」

「父は会社員である」
「水は液体である」
③AとBの包含関係があいまいな場合。
「緑は green である」
「私の夢は子どもが立派に育つことである」
「世界は演劇である／歴史は鏡である(比喩表現)」
④BがAの性質・状態である場合。
「外は一面の銀世界である」
「その町はとてもにぎやかである」
「中は真空である」
「手口はきわめて悪質である」

これらの内の①と②の混同は、「逆は必ずしも真ならず」と戒められきたが、政治的な攻撃はこの混同を悪用することが多いので注意が必要だ。例えば、「共産主義者は反戦主義者である」とする。この場合、「反戦主義者」の中には「非共産主義者」もいることが含意されていることは明らかである。しかし、戦争推進派は自分に敵対する「反戦主義者」をおとしめるために、「共産主義者」の悪評「アカ」を使って、「反戦主義者はアカである」という逆命題を駆使するのである。

「AはBである」という単純な表現の論理構造を半ば意図的に混同する、この種の政治宣伝は決して過去の話だけではない。

（門）

あれ・なに（何）

「ほれ、あの子はどうした？　来てないのか？　あの、ナニは」

名前の浮かんで来ない時、ナニ(何)という疑問詞(不定称の代名詞)で代用する習慣が、かつて日本人の会話にはさかんだった。

「現在のわが国の国際的なナニにかんがみるとですよ、この、日米間の微妙なナニを、それはそれとして認識してですよ、その上においてだ、有無相通ずるナニを一段と強めるべく、政府としては……」

岸信介首相の、このようなナニの用法は昭和三十年代当時の国民にはよく知られていた。その文脈に適合する名詞が思い浮かばない時、もしくは気がせ

いて思い浮かぶのを待っていられない時、あるいはまた明確に表現するのを避けたい気持がはたらいた時などにこの「何」が使われた。そのつど、聞く側は、ここに代入されるべき名詞は何だろう（関係？立場？　事情？…）と考え、限定する余地があった。

日常会話では、その余地をなくそうなどとは野暮だ、余地は余地として残しておくのがオトナだ、というコミュニケーション観が伝統的に作用した。さらに、考えたり質問したりせずに〝勘〟で「何」の内容を理解するのがイキなやりとりだ、と、例えば江戸の職人仲間などでは考えられた。

「おい、源公、ナニはどうした？」

「へえ、ちゃんとナニしておきました」

これで用が足りるようでなくては一人前ではない、という意識は長く受け継がれていて、島崎藤村の『おさな物語』などにも、東京人はナニばかり使って、それでちゃんと話が通じてしまう、という事情が記されていた。しかし、現代ではもうその意識の痕跡もうすれたかもしれない。

昨今、ナニのこの種の用法はすたれたが、代わりに、アレが用いられることはある。岸信介首相がナニと言ったところに、三十数年後の羽田孜首相はしきりにアレを用いるのが有名になった。

「率直にアレしまして、国際関係のアレを改善するために、誠実にアレして行くことが必要だという認識で、一致しているわけであります」

時代の違いを思わせる用例の差であるが、アレを咄嗟に口にする心理は昔の人（特に中高年男性）がナニを用いた場合とほとんど共通している。（芳）

案外・割合

「君の料理、案外上手だね」

婚約者の家で将来の夫になる人が言う。それを聞いた彼女は、何だか急に彼と結婚するのはやめようと思う。彼女の不機嫌な様子を見て彼は「褒めたつもりなんだけど、何か変なこと言ったかな」と心配になる。彼女の心境に大きな影響を及ぼしたのは、「案外」という軽率な一言だったことには気づかずに。

「君の料理上手だね」と「案外上手だね」には、その上手さを認める度合いにおいて、天と地ほどに開きがある。単に「上手だね」と言った時の尺度は総合的なものであるのに対して、「案外上手」となると「もっと下手だと思っていたのに」と、もともと評価していないことに対して「思ったより上手だ」と主観的な評価になるからだ。主観は当然のことながら人によって異なり、「案外」の尺度もあいまいこのうえない。

「銀メダルですみません」、以前オリンピックで一位を期待されていた選手が記者団のインタビューで発した言葉だ。「日本勢は案外ふるいませんでした」とその日のニュースショーは報じた。オリンピックで二位を取りながらである。「案外」が主観的な語であるがゆえに、この表現は結果が総合的に見て高い場合にも低い場合にも使われる。

外国人は日本に来る前に日本に対してさまざまなイメージを持っている。イメージはステレオタイプ的なものが多く、

「日本の家は狭くありません。広いです」

「日本人は良く働きます。しかしよく遊びます」

「日本の物価は高いです。でもスーパーは安いです」

と日本の生活が考えていたほどではないことを表明する人も多い。彼らの率直な感想は「案外」という語彙を使うと、その気持ちが表現しやすい。「日本の家は案外広い」「日本人は案外生活も楽しんでいる」「日本の物価は案外安い。特にスーパーでは」などのようにだ。

不動産屋さんの案内で留学生とアパートを見にいった時のことだ。「割合に広い部屋でしょう?」という不動産屋さんの言葉に「割合広い? この部屋は狭いです」と留学生が答えた。この場合、留学生は「広い」だけを聞き取り「わりあい」を聞きのがしたのだろう。我々は物事に対するそれなりの尺度を持っている。学生一人なら六畳一間で十分、それが八畳間なら「割合に広い」となる。これが家族のための居間なら「割合に狭いんですね」となる。

「割合」という表現が使われる際の価値基準は、日本人の価値観に沿った場合が多く、「案外」と使い方

が似ているように見えるが、主観的な要素が少ないという点では似て非なる表現と言える。（佐）

いい

「いい悪いをはっきりさせよう」などと言う。

「日本語では、価値（好ましい事物）の表現の代表が、「いい」、反価値（好ましくない事物）の表現の代表が「悪い」である。

「いい」は、言うまでもなく「よい」の平俗化した語形。ただし、「よい」と違って「いい」は終止形・連体形しかない。

「いい（よい）」は価値の表現の代表格の日本語だから、好ましいことなら何事でも「いい」と表現してしまえるぐらい、適用範囲が広く、手軽に融通自在に使える。その代わり、かなり多様な概念や感情的ニュアンスを抱え込んでしまっていて、あいまい度が高くなっている面も否めない。

語義の細かい区分は一般の国語辞書にゆずり、大きく分けると、①性質・形状などが好ましく、すぐれている、②道徳的に好ましい、すぐれている、のどちらにも用いられる。

①は、「いい子だね」「いい声を持っていますね」「いい体してる」「山の姿がいい。眺めてもあきないわ」「何よりも場所がいい。気に入ったよ」「この絵はいい。私の好みにぴったりだ」「もっといい柄のネクタイを、と思ったんですが…」「あいつは何と言っても腕がいい」「いい仕事しましたね」「打撃は勿論だが守備もいい」「いい所のお嬢さんらしいよ」「いい顔しているね」「いいこと言ってくれるわよ」…など。

②は、「いい行いをすれば必ず報いられるものです」「だれも悪口を言う者がない、いい人物です」「あなたがいい方だと信用して、特別に打ち明けるんですが」…など。

以上のほかに、「適している。～にかなっている」意味の「いい」もある。

例えば「いい所へ来てくれた」「タイミングがいいね」「もうこれ以上のいい配役は望めませんよ」「こんな時節ですからね、それを考えれば全くいい人事

じゃありませんか」…などがそれである。
　これほど広範囲に用いられる語になると、さらに範囲を限定したり、細かいニュアンスを伝えたりしようとすれば、他の語で言い代えたほうがキメの細かな表現になる。

優秀だ(な)、善良、立派、抜群、上品、豊富、明快、理想的、好適、ユニーク、快適、あざやか、すばらしい、またとない、絶好、巧妙、適切、濃密、格調高い…

必要に応じてこれらを使い分けられる表現者に比べると、「いい」一点張りの人は話に味がないし、多義を一語で代表させたためにあいまいさが生まれる余地が大きい。

「明快な文章」「味のある文章」「感動的な文章」「格調の高い文章」…これらすべてを「いい文章」としか言えない人はヴォキャブラリーが足りない、という評を受けることにもなる。

　さて、次に、価値の表現である「いい」が、一転して反価値の表現に用いられることがあるから、ことばは複雑、そしてまた味がある。

例えば「いい加減*」は「適度」を意味するはずだったが「いい加減な野郎だ。実行する気がないのに約束だけするなんて…」となれば「適度」とは全くへだたってしまう。

「いい気なもんだ」は、本人はいいつもりでも客観的には不当、また他者に迷惑が及んでいる場合に言う。

はた迷惑の面が強調されると「いい迷惑」「こっちこそいいツラの皮だ」となる。

「いい気味ねえ。あんまりお高くとまってたからバチがあたったのよ」は、逆に、本人にとってはよくないことが、他者に快感を与えた場合に、他者が発することば。「きっといい薬になるわよ」も、第三者が「いい」と思うのであって、本人は「いやだ、不快だ」とマイナスに受け取っているのである。

ところで、

「パパったら、いい年をして、そんな子供じみたこと言うもんじゃありませんよ」

「いい大人が、あそこで分別を見せられないなんて。なってないね」

「いい年の大人がキリキリ舞いしてるって。ウチの娘のテニスもなかなかね」
という時の「いい年」「いい大人」とは何だろうか。「いい」は、十分・立派…など、価値の表現として用いられているが、それに対応すべき行為・性状などはほめられない、年齢などにふさわしくない、というネジレ現象をマイナスに叙述する際に「いい」を冠する。けっこう手のこんだ反語的な言いまわしである。
「いい」にひねりをきかせて「悪い」ニュアンスを帯びさせる表現は、発言者の心理の機微をうかがわせるもので、世間慣れした話し手はひねりをきかせることに長けており、その機微の読める者には理解ができ、説明もつく。
だが、「迷惑もいいとこだ」「重労働もいいとこだ」…などの「いいとこ」となると、何気なく使っていながら説明がなかなかむずかしい。「しごきは薬だなんて監督は言うけど、ハードもいいとこよねえ」なども、「十分すぎる」「もうたくさん」のニュアンスがにじみ出ている。日本人は、どこまでも、陰影を読み取らせる表現が好きなのだろうか。

（芳）

いい加減

漢字で書けば「好い加減」となる。本来はほどほどである様子を言ったものが、最近では「いい加減な人」「いい加減な話」「いい加減な判断」のようにでたらめ、おざなりといった意味で使われることも多い。

いい加減＋な＋名詞

「いい加減な政治家に国をまかせておけない」
「いい加減な政策では、国民がついていくはずがない」
「いい加減なことを言わないでください」
「試験が難しくて、いい加減な回答を書いてしまった」
「彼の英語は、かなりいい加減なものですよ」
「彼女はいい加減な人ではありません」

いい加減＋に＋動詞

この場合は「身を入れずに」といったマイナス評価の意味になることが多い。
「彼と会いたくないので、いい加減に返事をしておいた」
「いい加減に仕事をしていると、首になりますよ」

適度な

「いい加減な大きさに切ってください」
「いい加減な温度になったら、火をとめましょう」

かなり・とても

「私だって、彼の態度にはいい加減腹が立つ」
「昨夜は飲みすぎて、いい加減酔ってしまいました」
「彼のケチぶりには、いい加減あきれてしまいました」

生ぬるいこと

「いい加減なことでは、すみそうもない」
こうして書いていると「いい加減」という表現に、あまり良い意味がないことが分かる。プラス評価にする場合には「いい加減ではない」「いい加減な医者というわけではない」と否定表現を伴う必要があるようだ。

相手の態度に腹をたて、忠告したり、怒りをぶつけたりする時には「いい加減にしろ」「いい加減にしたら！」「いい加減にしてよ」「いい加減にしてください」などと使われる。

これは「もうたくさんだ」という時の決まり文句で、男女関係なく使われる。ただしタテ関係を考えた場合、下から上に向かって使うことはないようだ。もし言うとすれば、「毎日残業も、いい加減にしてほしいよ」などと陰でぼやく場合などだろう。（佐）

いいです

二十年以上も前のことになる。ある仕事をやらないかとそれとなく打診され、考えたあげく、自分のアイデアをもとにやってみようという気になった。知人に相談したら「いいですね」と賛成された。ところが時間の都合がつかない見込みになって、その仕事に着手するのはやめることにした。相談した知人に、やめにしますと報告したら「ああ、それがい

いでしょう」と、前と打って変わって、その仕事の欠点を並べ立てた。

着手しようとした時も「いいですね」、やめにした時も「いいでしょう」。この人は白にでも黒にでも賛成する調子のいいイエスマンなのか？　そう単純に割り切ることはできない。

「いい」*という語そのものが、抽象度の高い、きわめて包括的な意味内容を有する上に、これが具体的な会話の中で使われるとなると、前後の関係（文脈）と話し手の心理がからみ合い、語のつながり（フレーズ、センテンス）全体として、その都度、特定の意味を帯びる。「いいです」以外の、発言されていない〝空白部分〟の意味を取り巻く発言者の心理の流れを汲み取り、補って解釈する必要があるからだ。

知人の第一回の「いいですね」は、とりあえず調子を合わせただけの相づちだったかもしれず、事後にあらためて考えてみて第二回の「いいでしょう」になったのだとも考えられる。が、それよりも、客観的なプラスやマイナスは二の次にして、アナタガソノ仕事ニ取リ組モウトシテイル気持ハ尊重シタイというのを圧縮して「いいですね」としたのかもしれない。日本語の「いい」は、これぐらい複雑な意識内容を全部たたみ込んでしまうぐらいの包容力があるからだ。そして二回目の「いいでしょう」は、仕事デ苦労シナクテスムノダッタラソレモマタ結構…というのを「いい」一語に圧縮したものとも解釈できる。

また、そこへ持ってきて、文末に添えられる助詞（終助詞）が発言全体の方向を決める力も持っていて、それが「いいです」の意味を左右することがある。「帰りにちょっと一杯、どう？」と誘われて「いいですね」と応じれば賛成・同意の発言になるが、「ちょっと一杯、おごろうか？」に対して「いいですよ」と言えば「気をつかってもらわなくてもいい」という辞退の発言にもなる。この違いがつかめないと日本人社会での社交にはさしつかえる。

「いいです」の意味の広さプラス語尾の微妙さ、のもたらす結果である。

（芳）

いかが(如何)

「かつてはうまく機能した行財政のシステムも、もう歴史が古くなっているだけに、今回、ご指摘の大蔵省の対応などもいかがなものかと、かように認識しております」

官房長官などが、政治・行政上に生じている問題に対してこんなフォローをすることがある。

この場合の「いかが」には、①「どうかと思う」「不都合である」などのはっきりとした意味がある(危惧もしくは非難)。したがって官房長官の「いかが」には、官庁への批判がこめられている。

もともと「いかが」は、②「いかにか」(如何にか)の略で、第一義的には「どんな」「どのように」(疑問の提示)の意味がある。「お味、いかがですか」「いかがお過ごしですか」というときの「いかが」がそれである。

今日の「いかが」は、ほとんどこの意味に使われるから、官庁の方針などを評して言ったときには、「真意はなんだろう、まだよくわからない」とか「よいとも悪いとも言えない」とかいうニュアンスを感じさせがちになる。この種の語句のあいまいさゆえに当該官庁や大臣との関係を悪化させず、さらに外部から「行政府内部の不一致」とか「不協和音」とかと突っ込まれるのを辛うじて防ぐ効果も期待できるかもしれない。そこで、政治家の代表的な愛用表現の一つにもなっている。

しかし日常の場面では、危惧・非難の意味で「部長、それを強行なさるのはいかがなものでしょうか」などとやると、そのもって回った言い回しが、あとを引くような不快感を相手に与えかねない。最近は、私的な場面でも目上に対してこの言い回しをすることが増えているようだが、慇懃無礼(いんぎんぶれい)の一種？　と感じられて、後味の悪いことが多い。あいまい化のマイナス効果の一例になる。

(芳)

いけない

一九六四年に、ザ・ピーナッツが歌った「ウナ・

セラ・ディ東京」という歌に「いけない人じゃ ないのにどうして 別れたのかしら ウナ・セラ・ディ東京」というのがあった（作詞、岩谷時子）。
「いけない」は「いける」の否定形で、次のような意味がある。
①不可である。…すべきではない。（禁止を表す）
「走ってはいけない」「棄権してはいけない」
②よくない。まずい。だめだ。困る。（非難・絶望・拒否・あわれなどの意味）
「裏切りはいけない」「万策尽きた、もういけない」
（おごってもらったときに）
「いけない、いけない、そんなことをしてもらっては！」
③生理的・体質的に合わない。「ヘビはいけません。ヘビは」（「いける」の連用形に「ません」がついた形）。「酒はいけないクチです」
ザ・ピーナッツがいう「いけない人」とは、②の「よくない」と「困った」が混じり合った人、法律に触れるような〝危ない〟人ではなくて、許せる範囲に困った人物ということになるだろう。
あいまい語になりやすいのは、主に②の意味で使う場合である。非難・困惑・絶望・拒否…などのどれに当たるかが瞬時にはわからないことがよくある。そのあいまい線（？）の上をねらってアイロニカルな球をころがし、捕球に当惑させるのがこの語の〝いけない〟用法であろう。
おごってもらったり、人から何かを贈られたりしたときにいう「いけません」は、禁止や非難ではなく、困惑や遠慮だから、相手は軽く受け流すことになっているが、年配の女性が店先でどちらが払うかで押し問答をしている様子などを見ると、〝遠慮〟の段階を越えて対立や争いの様相を帯びているようにさえ感じられることもある。
また公共のスペースで、若い母親が、いうことをきかないわが子を叱るときにも「いけませんよ、あとでパパに叱ってもらうからね」などというが、これも語義としては禁止または非難だが、これを周囲の目に対する弁解またはポーズに利用していることがしばしばだ。
③の「酒はいけないクチ」も、時にはあいまい語

になる。落語の「らくだ」は、鼻つまみ者のらくだがフグに当たって急死し、それをさらにワルの兄貴分が弔ってやる話だ。たまたま通りかかったくず屋がこれにつき合わされる。通夜の真似事とかで酒を勧められたくず屋は、仕事前に酒なんぞいけないと最初は断るが、飲むうちにしだいに気が大きくなって、むしろその悪友を毒づくようになる。ここでの立場の逆転のおもしろさは、八代目・三笑亭可楽の名人芸だった。くず屋は大いに酒がいけるクチだったのだ。

同じく落語の「饅頭(まんじゅう)こわい」も、甘いものはいけないはずの男が、仲間をひっかけて、まんじゅうをたらふくごちそうになってしまう話である。

嗜好(しこう)品についての自称「いけない」を額面どおりに受けとってはいけないのは、大人の〝裏の（？）常識〟というところか。　（芳）

以上

「○○以上」という表現は、基準となっている当の「○○」を含んでそれより上を表す場合と、「○○」は含まれないで、それより上を意味している場合の二通りある。

四捨五入で「五以上は切上げ」といえば「五」は切り上げられるし、「満二十歳以上は飲酒・喫煙できる」という場合には「満二十歳」の人は酒を飲むことができる。このように、数学や法律では基準となるものを含むことになっている。それは、数学も法律も物事を明確に規定しておく必要があるからであり、また、事態が数量化されていて基準となるものの輪郭がはっきりしているからでもある。したがって、日常表現においても序列やランクがはっきりしているものについては、例えば、「課長以上は参加費一万円」「中級クラス以上は面接あり」と言えば、基準を含めてそれより上という意味である。

これに対して、「今回の地震の被害は予想以上にひどかった」や「君以上に美しい人なんてこの世にいない」という場合はどうだろうか。明らかに、「予想以上」は「予想を上回る」という意味であり、「君以上」に「君」は含まれていない。つまり、優劣や程

度の比較といった価値判断において、数量化できないような場合には、基準となるものは含まれないのが普通である。もう少し例をあげよう。

「収入以上の生活を望んではいけない」
「当地の受験競争の厳しさは日本以上だ」
「必要以上の交通違反取締りが行われている」
「これ以上うまく表現することはできない」

以上のこと(と言う時にも、この「以上のこと」という語句自体は含まれない)は、「以下」にも同様にあてはまる。「十九歳以下は喫煙できない」↕「あいつのやったことは動物以下だ」

また、「以上」には、

「結婚した以上は、二人で生活を切り開いていかなければいけない」
「約束した以上、必ず守る」

のように、「以下」とは対応しない独特の用法がある。前文の事柄が成り立つことを前提とすれば、当然後文で示されるような事柄が「その上に(その先に)」展開されなければならない、という意味である。以上(というように、文章の終わりを示す場合もある)(門)

いずれ ⇩ そのうち

一応

会社の課内でA氏という飲酒運転の常習犯がいたとする。事故が起きてからでは遅い。誰かが忠告しなくては。しかし忠告して逆恨みされるのも嫌だ。誰も猫の首に鈴をつけたがらない。運悪く忠告役を言いつけられてB氏は言う。「一応言うだけは言っておきましょう」と。

この「一応」に込められた意味を分析してみよう。まず忠告役のB氏は「忠告する」という行為はするつもりである。しかし、その忠告が聞き入れられるかどうかについては、全く自信がない。忠告してみると案の定「いや、ビールの一本や二本、どうということないよ」と言われてしまう。「一応は忠告したのだが…」というB氏のぼやく声が聞こえてきそうだ。

この「一応」には「することはするが効果は期待できない」といった意味合いがある。人に何かを依

頼する時にも「一応Cさんに頼んでみてはどうだろう」と、「一応」がつくと「断られることは承知の上で」頼むことになる。

「一応薬を飲んでおく」

「一応答えは書いておいた」

「セールスマンの説明を一応聞いておく」

これらはどれも「一応」の後に動作が来る例だが、その動作とは裏腹な心の動きが「一応」に込められている。

「一応」は自然現象などに対しても使う。

「三日前からのひどい吹雪も一応おさまったかに見えます」

「怪我の後のひどい腫れも一応とれたし、この辺で薬をやめてみますか」

「吹雪」も「腫れ」も人間の意思の力ではどうにもならない。いつ猛吹雪が再び襲ってくるかしれないし、腫れだって薬を止めてしまえばまたおこるかもしれない。人間の意思の力ではどうにもならない自然現象などに対しても、私たちは「今のところ一応は大丈夫なようだけど」と「一応」を使うことで「再発・再燃・再来」などの可能性があることを表しているのだ。

「一応」の後に「後でするつもりだ」と自分の意思が込められている場合もある。

「いつライセンスがとれるかわかりませんが、一応試験を受けてみます」

この「一応」には「だめでも来年がある」といった希望が込められている。B氏の忠告がほとんどあきらめているのに比べると、この「一応」には「再び受けるのだ」といった自分の意思が背後にあり心強い。これは「試験を受ける」という行為が自分の意思でコントロールできることだからだろう。

「辞書なしで一応読んでみたい」という使い方も同様で、その後には多分辞書を使って精読するというのだろうという意味合いが感じられる。

「一応」は、相手のある行為か、自分の意思かで意味あいが異なる。はなはだあいまいな言葉である。

（佐）

コラム

あいまいさの効用

「朝とは何時から何時までのことですか」と留学生に聞かれたら、あなたならどう答えるだろうか。気象庁の定義によると、「日の出からだいたい午前九時ごろまで」とのことだが、「朝」の時間帯は、早起きの人と寝坊の人、また住んでいる地域（東の方が日の出が早い）によっても大幅に違ってくるだろう。

ある調査によると、「朝一番におうかがいします」などという時の「朝一番」は、九時という人が五三・一％、九時半が一四・二％、十時が一〇・八％だったそうだ。同様に、「夕方」とは四時という人が三一・四％、五時が三五・二％、六時が一五・七％というように分かれている。また、「ちょっと出かけてくるよ」の「ちょっと」*は三十分が三七・六％、六十分が二〇・六％、十分が一二・一％となっている。

このように、時間を表す言葉はあいまいさをともなっており、また、それで十分にコミュニケーションが円滑に行われているわけである。もちろん、待合せをする時には、「明日の朝、渋谷駅のハチ公前で待っているからね」というような約束をする人はいない。どこまで時間表現を限定するかは、脈絡によるのである。

この点について、哲学者のヴィトゲンシュタインの鋭い指摘がある。教師が態度の悪い学生に向かって、「そこらへんに立ってろ」と言った時の「そこらへん」は決して「あいまいな」表現ではない、というのである。こういう場合に「教壇に向かって教壇の右側一・五メートル、黒板から一メートルのところに立っていろ」などという人はいない。必要とされない精確さを追求することは、コミュニケーションの円滑さをかえって損ねるだけなのである。また、この種の数量表現が唯一精確な表現であると考えるのは、近代西欧科学がもたらした物理学的世界観の枠組みによるものであることにも注意する必要がある。

たしかに数量化されることによって、同じ条件が備えられれば誰にでもいつでもデータを再確認できるという客観性が保証される。しかし、数字が一人歩きすると、数字信仰にのった新たな「あいまいさ」が幅をきかすことになる。例えば、日本の失業率が相対的に低いのは、就職をあきらめて「家事手伝い」となっている若い女性たちを失業者とみなさない統計基準によるものだし、日本の製造業労働者の労働時間が一九九三年にはアメリカの同種の労働者よりも少なくなってきているとされるのは、残業時間の算定の仕方によるところも大きいと思われる。数字の「あいまいさ」を見極めるためには、その数字が算出された基準を問うていかねばならない。

話をもどそう。ここで主張したいのは、「あいまいさ」は決してネガティブにのみとらえられるべき事柄ではない、ということである。日本社会や日本語表現の「あいまいさ」が時に内外で批判の矢面になりがちなだけに、どの社会もどの言語もそれぞれの形で「あいまいさ」を内在させていることをここで強調しておきたい。

例えば、「ちょっと、少し、いくぶん、やや、かなり、とても、たくさん」といった程度や分量を表す表現は、「朝」と同様な「あいまいさ」を含んでいるし、また、含んでいなければならない。人間関係においては、ある程度の「目分量」や「丼勘定」の大まかさ（あいまいさ）が必要だし、それに、大部分の事柄が、厳密には程度をはかれないものであったり、またあえて数量化する必要のないものなのである。また、「大きい／小さい、広い／狭い、良い／悪い、美しい／醜い、便利／不便」等々の形容詞的対立も境界線は、人それぞれに「あいまい」であろうし、「あいまい」であるべきだろう。

「曖昧（あいまい）」の二つの漢字は「暗さ」を表している。「曖昧」とは「暗くて、物事の輪郭が定かでない」ことから来ている。問題は、物事の「輪郭」をどの程度明確にすべきかは、その語の性格とその語の使われる脈絡による、という点である。

細密画としてとらえられなければならない事柄もあれば、スケッチで描かれなければならない事柄もあるのだ。

「あいまい表現」がもたらす「ゆとり」と柔軟性の機能を忘れてはならない。（門）

いっそ

女子大生の就職を報じる女性雑誌の見出しに「いっそ見合いでもしようかな」というのがあった。なぜ「いっそ」なのかと、この見出しに興味をひかれた。なぜなら「女性でも就職するのが当然」という社会の風潮がこの見出しの中に込められているからだ。

「いっそ」はたくさんの会社を訪問し、面接をし、試験を受け、それでもどこからも内定の通知が来ない。あらゆるコネを使ってみたがそれも無駄。大学にもう一度残ることもできるが、翌年に就職できるというあてもない。四方八方行き詰まりの状況の中で「もう就職はあきらめていっそ見合い…」となる。

「見合い」は一種あきらめと絶望から行き着いた場所なのだ。それほどに「見合い」はマイナス評価なのか、仕方なくてするものなのか、という印象が「いっそ」という言葉から感じられる。

女性にとって結婚は「永久就職」であり、「一番安全な落ちつく先」という印象が持たれていた頃なら「結婚したくても、良い相手もいないし、いっそのこと働こう」という見出しも成り立ったはずだ。

「いっそ」は論理の筋道を何段階も飛び越えて、まったく考えつかない結論に達する時に用いる表現であり、社会の風潮や世代差によって、使われ方も違う。「〜いっそ」と言われて、その次に来る言葉の予測がつきにくいという点でもあいまい語の部類に入るだろう。

「いっそ」の後、消極的な行動に移るのか、積極的な行動に移るのか、その両方に使うことができる。よく芝居などで使われる表現に「いっそのこと死んでしまいたい」がある。現実社会からの逃避の一番の近道で、これ以上マイナスの選択はない。

「子供が学校でいじめられるので、いっそ会社を辞

めて、どこか地方でのんびり暮らそうかと思っているんです」

これは「いじめ問題」の特集でテレビのインタビューに答えた父親の弁だが、この場合の「いっそ」もマイナス志向で、父親が仕事を辞めて地方に行ったところで、義務教育である以上、子供は学校に行くことになり「いっそ」と決意してまで、長年つとめた会社を辞める必要があるのだろうかと思う。

しかし「いっそ、校長先生や父兄に呼びかけて、子供たちと『いじめ』について話し合う機会を作ってはどうだろう」となれば、「いっそ」はプラス志向となる。

「日本にいても芽が出そうにない。いっそ外国に行ってチャレンジしてみよう」といって飛びだした多くのデザイナーたちや音楽家・野球選手・学者、彼らはずっと日本にいたら、下積みで終わっていたかもしれない。「いっそ」と飛びだした未知の世界が彼らを認めてくれたのだ。

（佐）

一定の

読んで字の通り、一つに定まっているのが「一定」だ。変化・変動のないこと、ブレやズレの生じないこと、疑問の余地を残さず理解でき、安定感・安心感をもたせる状態である。

こんな明確な語はないはずなのに、この語が、けっこうくせものである。「の」がついて「一定の」となった時、あやしくなる。

「これにつきましては、一定の基準に達しておりますれば薬害は生じないものと認定する慣例に従来からなっておる次第でございます」

この「一定」には客観的根拠が示されていない。目分量である。手ごころを加える余地が多大だ。いい加減の見本ではないかと不信感を抱かせる。

「政府側では今次の措置をもって一定のけじめをつけることができたとしています」

この「一定の」も、「形式上は(うわべだけは)…」というニュアンスの表現で、どこが「一定」なのか

は表現者自身にもわかっていなかろう。これらの例のように、疑問の余地がないはずの「一定」が一転して主観的なものになってしまう。

「当初の目標議席には達しなかったものの、一定の前進をかちとることができた」

という選挙総括は政治勢力の得意のものだが、一議席ふえただけでも「一定の」だからかなりの強がりを感じさせる。

「明治以後の日本の〃近代化〃には一定の限界があった、というのがわれわれの陣営の共通認識である」

などと、思想や学問の世界の人たちもけっこうこの一句を使うことがある。

「先生方のご協力により昨年度も一定の業績をあげることができました」

と、大学生協などは毎学年始めにあいさつ状を寄越したが、もうけゼロでも赤字でも「一定の業績」というつもりではないか？　と思いながら眺めていた。

つまり、一つに確定しているのではなく、「ある程度の」と解すべき場合の多いのがこの一句である。使い手が増えれば増えるだけ意味内容が稀薄になり、ついには「イワユル一つの…」というただの口ぐせ文句と同じぐらい語義が蒸発して行きそうな慣用語句ではある。

行政機関や思想団体などには、ことばに重みをつけ、権威を持たせるという根強い因襲がある。どうとでもとれる「一定の」を意識的に用いて勿体(もったい)をつける姿勢も、この語の使用頻度を高める一因になっている。

「ことばの行革」に取り組んでいる地方自治体がいくつもあるが、ある自治体では、例えば「使用済みの器具は所定の位置に返却する」という文言は「使った器具はもとの場所にもどす」と言い直させているそうだ。普通のことばにもどすことによってあいまいのベールをはがそうという努力である。「一定の」もこの種の治療を加えて、あいまいさをなくして行くべき対象の一つかもしれない。　（芳）

いっぱい

子供は、親からこんな仕事を言いつけられることがある。
「おふろにお湯をいっぱいになるまで入れておいて…」
「湯飲みに、お茶をいっぱいまで入れておいてね」
親の言うとおりにした子供は、ここでたいてい叱られる。
「いっぱいと言ったって、あふれるほど入れることはない。しようがないな」と。
辞書で見ると、「いっぱい」には「一定の容器、場所などにものが満ちている様子」の意味もある。この意味でならば子供の解釈のほうが正しい。それを叱られて子供は、「いっぱい」の意味が時と場合で変わることを知る。「いっぱい」とは、一〇〇%とか八〇%とかの絶対的な分量ではなく、相対的な分量であることを学習する。
これは日本語のあいまいさというよりも、程度を表す語（たとえば副詞や形容詞・形容動詞などの一部）に共通するあいまいさである。日本語で「もうおなかがいっぱい」といっても、英語で"I've had enough. Thank you."といっても、そこで別のごちそうが出てくれば、「入る場所が違う」などといって、また食べ続けることはある。
このあいまいさを補うためか、「いっぱい」を重ねて「いっぱいいっぱい」などということがある。
「敷地のいっぱいいっぱいまで使ってください」
「支払はいっぱいいっぱいまで待ってほしい」
などと。
この用法によって「いっぱい」は一〇〇%に迫って行く。
「いっぱい」の用法には、右の支払い期限の例のように「限度に達するさま、ありったけ」などの意味もある。
このほかには「水をコップに一杯下さい」（分量）や「一杯きげん」（少量の酒できげんがよくなる）「いっぱいくわす」（だます）などがあるが、これらの用法にはあいまいさは少ない。

ところで、「いっぱい」を文章の中で使うとき、「いっぱい」と書くか、「一杯」と書くかで迷うことがある。

こんな場合のために、「一杯」はあっても「二杯」はないときには、かな書きにするという原則を作っておくといくらかは判断しやすい。

「精一杯働く」と書くとき、「精二杯」はないから、「精いっぱい」と表記する。「おふろに湯を一杯に入れる」も「二杯に入れる」はないから「いっぱいに入れる」と書く。「コーヒーを一杯ください」には、「二杯ください」もあるから、「一杯」と書く、という具合である。

「一」のつく語、「一度に」「一時に」「一番」などの表現法にも応用できる。（芳）

いや・いやいや

否定の応答詞「いや」は、丁寧な否定詞「いいえ」と同様、意外さに対する驚きの言葉から発している。「いやはや」「いやどうも」「いやあ、参った（困った）」「いや、すごいのなんのって」といった表現にその名残がある。

こうした驚きの表現が、相手が自分の思っていたことと違うことを言うことへの驚き、つまり否定を表すようになった。「いいえ」が多少くだけた形としては、「いや」と「いえ」があるが、「いや」は男性に、「いえ」は女性に多用される傾向がある。

「これ、君の？　いや、ぼくのじゃない。／いえ、私のじゃないわ」

「君、知らなかったの？　いや、知ってたよ。／いえ、知ってましたよ」

ただし、次のように否定の意味を含まない、単なる相づちのような働きの「いや」もある。

「いや、そうでしたか。ちっとも存じませんで」

「いや、全くおっしゃる通りです」

前者には、多少「驚き」の意味があるようだ。また、相手のことばだけでなく、自分のことばを否定する時にも使われることがある。より的確な表現に言いなおす場合である。

「わが国の、いや世界の誇りといってもいい」

「参加者はざっと一五〇人、いやもっといたかな」
「いやでもおうでも」とか「いやおうなく」という言い方の「いや」は「否」、「おう」は「応」であり、「是が非でも」とか「有無をいわさず」と同様、「当人が応じようが応じまいが、むりやり」という意味である。「いやが上にも」は形は似ているが、ちがう「いや」つまり「いやさか(弥栄)」の「いや＝ますます」という意味である。

「いやいや」は、「いやいや、そんな事をされては困ります」のように強い否定を表す場合と、「いやいや練習しても身につかない」というように「いやだと思いながら」の意味がある。単に音が同じというだけでなく、この点からも、否定の「いや」と嫌いの「いや」の近しさが感じられる。

実際、「留守番してくれない／いや！」という時の「いや」という拒否反応は、「否定」の「いや」に限りなく近い。

また、「いやというほど向こうずねをぶつけた」時の「いや」にも、同様に忌避と否定の両義性を感じる。

（門）

いやいや ⇩ いや

いよいよ・ついに・とうとう

「先生、きのうレポートがんばりました。夜中の二時まで起きていました。でも、いよいよできませんでした」

留学生が申し訳なさそうに言い訳をする。気持ちはこちらに十分に伝わるのだか、相手を慰めるより先に、「いよいよ」の使い方を訂正したい気分が先にたつ。この場合は「いよいよ」よりは、「ついに」「とうとう」を使った方が適当だろう。なぜなら、レポートを書くという行為が、実現しなかったことを言おうとしているからだ。「いよいよ」には、このように否定形と共に使う用法はない。

しかし留学生が間違えるのも無理はない。なぜなら、この三つの副詞は次のように実に似通った使い方が可能だからだ。

①「いよいよ（ついに、とうとう）合格者の名前が発表されますね」

②「今日、ついに(いよいよ、とうとう) 彼に私の秘密を打ち明けることにした」

③「とうとう(ついに、いよいよ)これが彼の責任であることが明確になった」

この三つの共通点は、それぞれ物事が表現するまでの過程を意味しているということだろう。「いよいよ」に関して見てみると、

①は「合格発表はまだ行われていない」という動作が未完了の状態、

②も同様に「まだ秘密を打ち明けていない」という動作が完了していない状態だ。

③は「最終的な線がはっきりした」という時に使われる用法で、①や②が、ある事柄がクライマックスに到達する様子を表すのに対して、ある事柄が「確かになった」という使われ方をしている。しかし、まだ「全容」がはっきりしたのではないという点では、動作が未完了と考えても差し支えないだろう。

「ついに」はその前に長い時間があり、最終的な結果が現れる時、「とうとう」は前の段階が進行した結果と、この三つには微妙な使い分けがある。

「いよいよ」を時間の軸の上で考えると、継続する動作の中での位置が少しずつ違うことに気づく。

①「口答えすると、部長はいよいよ怒りだし…」(前の段階よりさらに)

②「いよいよケーキカットです。カメラをお待ちの方は…」(クライマックスの直前)

③「いよいよ飛び下りる段になって、彼は震えだした」(いざという時)

④「これで、いよいよ独身貴族の生活にもオサラバだ」(最終段階)

「いよいよ」の使い方が「いよいよ分からなくなった」は、この中のどれに入るのだろうか。 (佐)

色

人間があるものの属性を視覚によって判断しようとする時、最も大切な要素は色と形だろう。あるインターナショナル・スクールの幼稚園が入園テストに面白い試みをした。

「袋の中に入っているものをあててごらん」、袋の

中には丸いものがたくさん入っているのが、デコボコした布の外側からも分かる。ある子供は見ただけで「ボール」と言い、ある子供はそばに来て匂いをかぎ「果物」と言う。ある子供は袋を外側から触って「あっ、りんごか梨だ」と言う。

そして色が問題になった。先生に聞くと「緑」だと言う。それならメロンかもしれない。すると一人のイギリス人の子供が「りんご」と一言、中身は青くすっぱいりんごだった。

形は触覚でも感じることができるが、色は視覚でしか感じられない。日本人なら「りんごは赤い」「バナナは黄色い」という個別の物に対するイメージが定着している。「りんごは赤い」というイメージがあると、「緑の果物」でりんごを想像する日本人は稀だろう。

同様に「ポストの色は赤い」というイメージが頭の中にあると、ニューヨークを歩いていてポストを見つけるのは至難の業だが、ロンドンでなら簡単に見つけられる。ニューヨークのポストは青く、しかもゴミ箱のような形をしているので、日本人のポストのイメージとはほど遠いのだ。今改めて郵便制度はアメリカからではなく、イギリス人から入ってきたことに思い至る。色は目に見えるものが持つ最も普遍的な属性の一つでありながら、社会の風土の違いによって色に関するイメージが全くちがうのだ。

日本語では「色」は健康状態や感情の動きを表すものとして重要だ。「目の色を変える」「顔色を変える」「喜びの色」「失望の色」「焦りの色」「色を失う」「色をなす」「顔色が良い(悪い)」など、さまざまな色が存在する。

「忍ぶれど　色に出にけり　わが恋は　ものやおもうと　人の問うまで」(百人一首)

色が感情を表す言葉として様々な要素を内包しつつ、その微妙な感情を的確に我々に伝えてくれることが分かる。この「色」を外国人に説明するには、長い説明が必要だ。「恋をしている様子が、動作・表情・話しの仕方・趣味の変化などに表れて…」などと言ってもまだ説明しつくせない。この短歌を英訳するとしたら、どうなるのだろう。

音にも色がある。「フルートの音色」「琴の音色」、

単なる「音」と「音色」とでは全く趣がことなる。物理的な「音」に対して、高さや強さがたとえ同じでも、その音の特色になる感じ「音色」が違うことで我々はさまざまな音を味わう。音色を吟味する感覚がなければ「名器」といったものは存在しないだろう。（佐）

ううん

外国人学習者に日本語のくだけた会話における肯定・否定表現を教えると、意外そうな顔をすることが多い。

「今日、いっしょに映画を見にいかない？」「うん、行こう。／ううん、行かない」

正反対である肯定と否定の返答が、あまり違わない表現なのに戸惑うのである。もっとも、肯定の「うん」と否定の「ううん」ではイントネーションがかなり違う。それに、諾否という重要事は、「うん／ううん」だけでなく、「うなずく／かぶりをふる」といったジェスチャーや表情、この場合なら「行く／行かない」という短文が補われたり、とさまざまなサインで呈示されるものだから、実際の会話の中では学習者も諾否を聞き違えるということはほとんどないようだ。

「うん」は上代からある副詞「うべ(諾・宜)」から来ているようだが、「ううん」は何から由来しているのだろうか。夏目漱石にも「ううん」の用例が見られるので、明治時代からすでにあったようだ。「御前近頃岡本の所へ遊びに行くかい／ううん、行かない」(『明暗』)。もう一つ、川端康成からも拾っておこう。『「ううん」と、駒子はその小さい時のやうに、かぶりを振った」(『雪国』)

くだけた否定の返答には、ほかに「いや、いいや[*]」もあるが、女性はこれらはあまり使わない。それに対して、「いいえ」の短縮された「いえ」は両性とも使う。

「ううん、こんな素晴らしい作品を拝見するのは初めてです」

「ううん、なんてすごいヤツなんだ」

「ううん、こいつは参ったなあ」

というように、感動したり、驚いたり、困ったりする時も「ううん」と表記される言葉を発するが、否定の応答の「ううん」とは非常にイントネーションが違うので、混同する人はいないだろう。（門）

うちに

「うち」は外に対して自分の側を言う言葉で、「内の人」「うちら」「内輪」「内側」などのように空間的な範囲や物(着物の内側)、時間的な範囲（夏休みのうち）、心理状態(胸のうち)などに対しても使われる。

しかし、「うちに」となると、そこには単なる「内外」の区別だけではない、話者のあるメッセージが込められることになる。「若いうちに」「明るいうちに」「学生のうちに」「定期券が使えるうちに」「お金があるうちに」「彼があなたを好きなうちに」、ある特定の状況の中では行えるが、その時間の範囲を超すと状況が変化し、その動作が不可能であることを念頭においた表現で、その後に来る文章はかなり限定される。

「若いうちに—海外旅行をしておくべきだよ。そして同世代の若者たちが何を考えているのか知るべきだ」(忠告)

「明るいうちに—帰ってきなさい。パリは東京とは違うんだから」(命令)

「学生のうちに—読めるだけたくさんの本を読むつもりです」(意志)

「彼があなたを好きなうちに—プロポーズを受けて結婚してね。(希望）そうしたら、お母さん、どんなに安心するか」

「うちに」の後の文には、話者の相手に対する忠告・勧告・アドバイス・依頼・意志・断定・決意・命令・希望・後悔などが述べられることが多い。しかし「明るいうちに」「学生のうちに」のように状況の変化が明確である場合もあるが、「彼があなたを好きなうちに」(その後彼の気持ちが変わるとは限らない)、「暖かいうちに」(どこまで暖かいと感じるかは人によって違う)など、「うちに」のとらえ方があいまいな点も多い。

「うちに」は話し相手へのメッセージばかりではな

く、自分自身に向かっていう「独り言」としても使われる。

「学生のうちにできるだけ旅行しておこう。就職してしまってからでは休暇もとれそうもないからな」

「この花が咲いているうちに写生をしておこう。なんてきれいな色彩なんだ」

「彼がここにいるうちに、アンテナの調子をみてもらおう。一人ではできそうもないから」

「うちに」は、たとえ話者のメッセージがない場合でも「虹がまだ空に大きな七色の半円を描いているうちに、雨雲が物凄い速さで虹をみるみる隠してしまった」のように、ある動作が徐々に変化し、「うちに」から次の状態に移っていく様子を述べる時にも使うことができる。

「私が学生でいるうちに、日本の経済状態はどんどん悪くなり、一流企業に就職するのは至難の技となった」。これらは写実風に単に事実を述べた文で、そこからは何のメッセージも伝わってこない。（佐）

うっかり ⇩ つい

美しい ⇩ きれい

うまい ⇩ まずい

ええと ⇩ あのう

えらい

「野口英世は偉い人だった」のように、「人柄や行動がすぐれていること」を表す「えらい」が、どうして「えらい目にあった」とか「えらいことになった」というように「たいへんなこと」「非常に困ったこと」を意味したり、「雨にえらく降られた」「えらい人出だった」と単に「はなはだしい程度・度量」を表すようになったのだろうか。

まず、「えらい」というような価値評価を含んだ形容詞が「えらく寒い」のように程度を表す副詞化するのは、「すごい→すごく」や「ひどい→ひどく」と似た現象である。ただ、「えらい」の場合は、「偉大」「偉容」「偉丈夫」のように漢字の「偉」の語感に「大きい」という意味あいがあるので、「えらい→えらく（大いに、非常に）」となりやすかったのではないか。

興味深いのは、「偉人」「偉業」「偉才」「偉徳」というような「えらい」の「立派さ」、圧倒的なプラスイメージが、「えらいことをしでかしてくれた」「えらいところで、えらい人に会ったものだ」のように、「とんでもないこと、困ったこと、意外なこと」というマイナスイメージに転化している点である。

考えてみると、「偉い人」にも二通りある。人柄や業績のすぐれた「偉人」と、単に地位や立場が上位・高位にある「偉い人」とがある。「(お)エライさん」といった俗称は、後者のような「偉い(とされている)人」と前者の「偉さ」を区別するための言葉なのかもしれない。「偉がる」人、「偉ぶる」人は「おエライさん」と遇していなしておけばいいのだ。

「偉大」という意味での「偉さ」を感じさせる人に出会うことはまれである。「偉人」の伝記が若い人を鼓舞するということも少なくなってきているようである。「えらい」は多くの場合、「ひとりで留守番ができるなんて、えらい、えらい!」とか「毎日、そんなにがんばっているとは、えらいなあ」というように、子供や年少の者の成長や努力をたたえる表現になっている。

そんな中で、真の「偉さ」の前で凡人が感じる萎縮(いしゅく)や困惑の念はむしろ「とんでもない事態」の前で感じることの方が多いということで、「えらい目にあった」り「えらいことになった」りしているということなのかもしれない。(門)

遠慮

「深謀遠慮」と言い、「遠謀深慮」などとも言う。つまり、遠く将来のことを思いめぐらすこと、というのが元来の意味である。だから、原義通りなら「遠慮深い人」とは、深く考え、緻密に計算して将来の方針を立てて行く人、綿密にはかりごとをめぐらす人などを意味することになるはずだ。視野広く気宇壮大でも織田信長のように短気だと遠慮の人とは言いにくいが、徳川家康のような、先を見据えた慎重居士は遠慮の原義にぴったりのイメージがある。

ところが、この語は転じて、他人に気がねして言動を控え目にすることを言うようになった。「遠慮気

がね」と重ねて言うこともある。
　そうなると「遠慮深い人」は他人の気持を考慮する傾向の強い人、さし出ることを避けるつつしみ深い人ということになる。自分の好みや主義主張にこだわって自己流の行動で押し通すことを避け、周囲をさわがせず、世間から嫌われないように、控え目な言動に終始する人である。日本社会の伝統では、こういう人こそ好ましいパーソナリティーの持ち主である。
　日本人の文化の一大特徴は「控える」ことである(芳賀綏著『日本人の表現心理』参照)。出しゃばりは憎まれ、白眼視される。目立たぬように振る舞うのが美徳である。その美徳を備えた人は同時に「世渡り上手」でもある。突出しない人が好まれる社会では、対人関係を荒立てることのないのが重要な「世間知」の一つであるわけだ。
　この傾向にも多少の変化は見られ、アピール、パフォーマンス、自己表現…などが処世に必要なものという認識もかなり広まっては来た。それでも、自己顕示はまだマイナスの評価を受けることが多く、自己の才能をアピールするのも〝さりげなく〟やれば「利口だ」とほめられる。日本語の「利口」には出しゃばらず、自己の分をわきまえて派手な言動を控える、世間知に長けた人、という含意があるのだ。
　「遠慮する」という行為は自己主張の強い異文化社会からは理解されにくく、寡黙の美徳を示したつもりの日本人が、意思表示のできない人間、不気味な微笑を浮かべた不ラチな人間と解されてしまうケースが多い。異文化間に生ずるコミュニケーション・ギャップの一つである。
　日本人社会の中でも、遠慮が過ぎるとじれったがられるが、さりとて「無遠慮」は依然として悪徳であって、伝統から離脱したように思われている〝新人類〟世代でもひけ目・気がね・遠慮の意識は同じであるらしく、「居候、三杯目にはそっと出し」の句意は理解可能の様子を示す。
　こうして、対人行動・社会行動のスタイルとしての「遠慮(する)」は、日本人の間に深く根を張り、好感を持たれるという基本的傾向は大きくはゆらいでいない。しかし、この美徳を悪用？　したかのよ

うな「遠慮」の用法があって、これは何とも気持が悪い。それは、

「これまで寄付に協力してまいりましたが、財政的事情などもございますので今年からご遠慮させていただきます」

「せっかくレッスンしてやろうというお申し出で有難いのですが、私たちのグループは向いてないと自覚してますので、ご遠慮いたします」

「当方からお願いしたことではございますが、市民団体等の反発も予想されますので、今回はご来県をご遠慮いただきたいと、かように存じまして…」

といった用法。婉曲(えんきょく)なことわり・辞退として「遠慮する(してもらう)」という言い方をする習慣がいつ頃からかかなり広まっているが、クッションを置きすぎていてなんとも歯切れが悪い。「ご遠慮」というだけに、いたずらに上品ぶった、いんぎん無礼の物言いに感じられて腹立たしい。

「遠慮」という語をこんな風に使う心理には冷淡さはあっても誠実さが欠けるのではないか。あいまいの美徳もすぎれば悪徳になると評されかねない。(芳)

おかげ・せい

「おかげ」は漢字で書けば「お蔭・お陰」となり、本来は神仏の助けや加護のことだった。現在では物事が良い結果になった時に、「~のおかげ」と感謝の気持ちをこめて使うことが多い。「君と結婚したおかげで、いつもおいしい夕食が食べられるよ」という夫の言葉には、温かい感謝の気持ちが含まれ、妻を感激させるに違いない。

ところが「君と結婚したせいで」となると、その続きに来るのは「おふくろとの仲が気まずくなってしまったよ」とか「貯金があっという間になくなってしまった」などと、明らかに非難ととれる内容が続く。

その非難は「自分で考えてもいなかった望ましくない事態」に対して相手、または他者に向けられるものであり、こんなことを言われた妻は「何を理不尽な」と腹をたてるだろう。「おかげで」が感謝の気持ちを表し、「せいで」が非難の気持ちを表すと、き

ちんと分けられるなら問題はない。
しかし、「おかげ」という表現は、時に「せい」と同じ意味合いを持つことがあり、「君と結婚したおかげで、おふくろとの仲が気まずくなってしまった」という表現も可能なのだ。後ろにマイナス表現が来る場合には、「せいで」より話し手の感情は皮肉や非難の意味合いが強くなり、場合によっては「せいで」より底意地の悪い響きを持つ。
「おかげ」にはプラスの感情もマイナスの感情も込められているという意味では、極めてあいまいな表現と言える。
「ジョギングしているおかげで、体の調子がいい」
この文章はプラス表現が続くので「せいで」と言い換えると、ちょっと不自然だが「毎日ジョギングしているせいか」と「せいか」に言い換えることはできる。
「せいで」を使う場合は責任の所在がはっきりし、非難の対象に対して言う。しかし、「体の調子がいい」原因・理由が何なのか断定できない場合には、「せいか」とあいまいな表現にして逃げることができる。
「おかげ」「せい」と似た表現に「ため」がある。「円高のために」と文章を始めた時、その後にはプラス表現もマイナス表現も続けることができる。
「円高のために、海外旅行に安く行ける」
「円高のために、輸出産業が打撃を受けている」
冒頭の文章にもどって「あなたと結婚したために…」と言った時、後続にはどんな文が来るのが自然だろうか。
「こんなみじめな生活をすることになった」
「仕事を辞めなければならなかった」
「ため」はプラス評価の表現も、マイナス評価の表現も続けることができるが、日常会話ではマイナスの使い方が多いようだ。もちろん「あなたと結婚したために、幸せな家庭が築けた」と言えないこともないが、この場合は「あなたと結婚したおかげで」の方がより自然だろう。
(佐)

おきに ⇩ ごとに

おそらく ⇩ たぶん

コラム

言い差し表現

外国人と日本語で会話をすると、かなり流暢な日本語を話す外国人との間にも、コミュニケーションギャップがしばしば起きる。その代表的なものは、こちらは断ったつもりでも、相手はそう受け取ってくれない場合だ。

外国人「先生、明日研究室をお訪ねしたいと思います」

私①「明日ですか、明日はちょっと忙しいので…」

こんな場合、日本人なら「ああ、そうですか。それではいつ頃伺えばよろしいでしょうか」などと会話はよどみなく進んでいく。ところが外国人との場合には往々にして、そこで数秒から数十秒間の「空白の時間」が存在し、実に間が悪い。こちらとしては断ったつもりなのに、相手が理解していないことが見て取れ、もう一度はっきりと断る羽目に陥るからだ。②「明日は忙しいので、研究室に来ていただいてもお相手はできません。また別の日にしてください」と。

「忙しいので…」

実はこの後に来る話者の意志は、相手に判断が委ねられる。これが日本語の言い差し表現の特徴だろう。特に断る場合などに多用される。この言い方に慣れてしまうと、相手が外国人で、こういったコミュニケーション方法では通用しないと分かっていても、つい使ってしまい「空白の時間」の存在に愕然とする。

実際の会話において、②のようなパターンが使われるとしたら、対話相手が目下の場合かよほど遠慮のない関係の人だろう。日本語では会話はキャッチボールのようなもので、対話するもの同士の呼吸が合えば、言い差し表現で会話は何の抵抗もなく進んでいくものなのだ。

この言い差し表現は、何も断る場合に限ったことではない。現代作家の小説の中から会話の部分を抜き出してみると、この表現が実に多用

されていることが分かる。

『美食倶楽部』（林真理子）より

けど ①「これ少しだけど…」「あら、すいませんねぇ」

②「事務所に行けばあると思うんですけど…後できっとご連絡します」

③「私よ、ウイスキーの配給に来たんだけど…」

ここに書き出した例は、日常会話でしばしば耳にする典型的な例だ。

①は、「召し上がってください」「とてもおいしいんですよ」「差し上げたいと思ったんです」などが省略されていて、相手に好意的な動作をする場合に使われる表現だ。後に来る言葉を仰仰しく言うよりは、「けど」の後を省略した方が、押しつけがましくなく好感が持てるという日本の社会が、この表現の土台にある。

②は、「あると思います」と言い切らず「けど」を使うことにより、自分の記憶があいまいである感じが出る。もっとも、事務所にあることが分かっていても「けど」の後、しばらく間をおくことで、対話相手への配慮が出る。その空白の部分は「待っていただけますか。今なくてすみません」と言った気持ちがにじみ出る部分なのだ。

③は、特に「けど」を使わなくても文意はそれほど変わらない。「けど」が文末に来ることで対話相手に何らかの行動を期待している雰囲気が出る。他の例も見てみよう。

『ずっこけ宇宙旅行』（那須正幹）より

たら 「もしエレベーターが動いていてくれたら…」（いいのにな）

し 「ええ、何か毒ガスみたいなものでもいいし…」（殺虫剤なら何でもいいわ）

から 「これビタミンが豊富だから」（体にいいですよ）

て 「正体の分からない生物に占領されて…」（しまったんです）

「たら」「し」「から」「て」、これらは「けど」

に次いで言い差し表現の代表格で、実に頻繁に舞台に登場する。これらは、相手への配慮というよりは、文章の冗長な感じを避けるために使われることが多く、省略された要素は前に出ている文脈から予想されたり、社会的な常識で言う必要のない場合が多い。「これビタミンが豊富だから…」に対して「ありがとう。いただいておくわ」などと続けば、話者の意図は達成されたことになる。

言い差し表現は具体的な機能が異なる上に、その後にどんな文章が続くかは極めてあいまいだという点では、外国人学習者にとってわかりにくい表現の一つと言える。

日本語表現にこれほど言い差し表現が多用されるのは、日本人同士の間に「暗黙の理解」にあたる部分が相当あるためだろう。（佐）

おそろしい・こわい

「おそろしい人だ」というのと「こわい人だ」というのでは、話し手はどちらの人の方により恐怖感をもっているだろうか。方言性によるニュアンスの受けとり方の相違もあるかもしれないが、「おそろしい」の方が恐怖感の度合いが強いように思える。

「ふだんは優しい先生だが、本気で怒るととてもこわい」

「そんなこわい顔で見つめないで」

というように、「こわい」は一時的な恐怖状態にも使えるのに対して、「おそろしい」の方はよりそのものの本質に則しているようである。「こわいものなし」「こわいもの知らず」「こわいもの見たさ」というような表現は、「こわさ」の主観性をよく表している。本質的に「おそろしい」もの、つまり「おそるべき」ものであっても、当人が「こわがら」なければ、その人には「こわいものなし」なのである。「こわいものなし」という言葉はどちらかと言えば、褒め言葉というよりも、「おそるべし」という畏怖の観念をもてない傲慢(ごうまん)さ・未熟さを表しているようだ。

「おそろしい」は「身に危険が感じられて、不気味である、不安である」という本来の意味のほかに、

古くは「大したものだ、えらい」という意味ももっていた。「熟練とは恐ろしいもので、知らぬまに包丁が魚をきれいにさばいている」というような「おそろしい」の使い方に「驚嘆」という古義の名残がみられる。

「恐怖」が「驚嘆」とつながるのは、「おそろしい」と同根の「おそれる」が、「神をもおそれぬ不届き者」というように、神仏への「畏(おそ)れ」を含んでいるからであろう。そこから「おそろ感心」というような江戸・寛永時代の流行語や、「おそれいりました」という感嘆の表現が発している。また、「末おそろしい子供たち」という時も、その子供たちの将来を憂うというのと、凡人の想いを越えた人物になるのではないかという期待と両義的である。

また、「おそろしい」は「おそろしく丈夫だ」「おそろしく暑い」「おそろしい勢いでの物価の上昇」のように、程度のはなはだしいことを表すが、「こわい」にはこうした用法はない。「おそろしい」はこの面では、「すごい*」「ひどい*」「えらい*」と似ている。(門)

お宅

すまいや家を表す「宅」の丁寧語である「お宅」は、相手の家や家庭をさす言葉である。

「ずいぶんご立派なお宅ですね」

「お宅ではお正月はどのようにお過ごしですか」

もともとは相手の「家」を意味する言葉だった「お宅」が相手の「家庭」のこともさすようになった。これは、「山のあなた(彼方)の空遠く　幸い住むと人のいう」というように、もともと「あそこ」という場所を意味する言葉だった「あなた」が二人称になった経緯と似ている。「どちら様ですか」「こちらがあの有名な木村さんです」の「どちら/こちら」も、場所を示す言葉で人を表している。また、「あの方が木村さんです」という時の「方」や「お前」「手前(→てめえ)」などにも場所の痕跡が見られる。

別の面から見れば、「家」を表す「うち」が「うちに帰る」や「うちはみんな寝正月ですよ」のように「家庭」を表すのと対応している。もっとも、「お宅」

の場合は他人の「家・家族」を指すのに対して、「うち」は自分の「家・家族」を表している点が違う。自分の夫のことを「宅」とか「宅の主人」とよぶ言い方もあるが、山の手の奥様族ふうにとりすました感じがする。

「お宅」で二人称を指す言い方は、高度成長の六十年代くらいから主にサラリーマンの間でまず始まったようである。それもはじめは、「お宅ではボーナスはどれくらい出てますか」とか「お宅の売上ずいぶん伸びているようじゃない」のように、相手の会社を意味していた。ここでも、「ウチの会社」「ウチは、今年のボーナスはしぶいです」といった会社人間の「会社＝ウチ」意識と対応している。

それが、いわば「宅」が「宅の主人」を表すのと同様に、「あなたの会社」の意味の「お宅」が「あなた」を意味するようになった。

「明日の会合、お宅、出席なさいます？」

「お宅、最近あまり元気ないねえ」

と、同等以下の相手に対して、くだけつつも軽い敬意をこめた二人称として使う。しかし、どこかよそよそしい感じがあってなじめないのは、つかず離れずの距離のとり方が時に必要なサラリーマン社会になじんでいないからだろうか。

八十年代になって、相手と一定の距離をとった、この「お宅」という二人称でお互いを呼びあう若い世代が現れた。彼らの特徴は、世間一般ではあまり重視されていない一つの事柄に対して、その細部まで異常に執着して知識・情報を収集することである。同好の士との交遊はあるが、人間関係よりもむしろモノや情報にマニアックになっていることが、「お宅」という互いの呼称に表れており、「おたく族」と呼ばれるようになった。「アニメおたく」「ＳＦおたく」「オカルトおたく」等、さまざまな「おたく」がいる。連続少女殺害事件の被告の、無数のビデオが山積みになった部屋の光景が「おたく」の原イメージになっているように思える。普通の人たちが彼らを「おたく」と呼ぶときには、「お宅」つまり「家（の中）」という擬似胎内に閉じ篭もるという印象も付着しているのではないか。

（門）

おとしどころ

「現地の意向は尊重しなけりゃならんし、政府の対外的立場も一方にはあることだから、まあ、長官の私案として出された線に近いあたりがおとしどころかなあ…」

異なる立場が対立し、時には深刻に事態が紛糾することもある。解決のために複数の案が競合した場合など、その間の調整をはかって妥結点を見出さねばならぬ。妥結点のことを近頃は「おとしどころ」と言ったりする。

「Aの問題では野党に譲歩する代わり、Bの案件では与党の言い分をまがりなりにも通させてもらう。そこいらをおとしどころとして見通して行けば何とか会期中に…」

これもよくある「おとしどころ」だ。

「一件落着」と昔から言うように「落」には解決という意味がある。「解決」と書いて「おとしまえ」と振り仮名する例もあり、「おとしまえを付ける」は一種凄みのある解決法である。

「水の低きにつくように」終着点はおのずから定まる、その、自然決着という意味合いが「落ちる」「落とす」にはある。無理せず、無理なく、オトナの間で暗々裡に了解し合い到達するゴールが「おとしどころ」である。

西洋人の社会のように、人と人、集団と集団の対立を前提としていれば、丁々発止と討論し、そしてまた、かけ引き、ディプロマシー（外交技術）を駆使したあげく、劇的に妥協して決着点を明示する。漢民族も外交の巧者だから、着地点をにらみながら相手をゆさぶる妥結への運び方には舌を巻かせるものを示すことが多い。

あるいは、西欧流の弁証法的な思考法では、正（テーゼ）と反（アンチテーゼ）を止揚（アウフヘーベン）して、第三の、より高次・統合的な結論に達する。これが「理詰め」の教科書的モデルである。

ところが、日本流の対人法や思考法（論理）では、それらの過程がはじめからあいまいである。理で詰めず、「水の低きにつくように」人間の明確な意思と

はかかわりなく、自然界の運行が人事をも巻き込むような事態を想定したがる。

漱石の『三四郎』で、友人佐々木与次郎が広田先生を大学教授にしようと画策する様子を見て、三四郎は、方法が細工に落ちて面白くない、と評する。与次郎は「自然の手順が狂わないようにあらかじめ人力で装置するだけだ」と反論するが、人為的な調整(工作、細工)があってもなかったかのように装いたがる好みが日本人にはある。つまり自然の成り行きに擬したがるのだ。

そして、成り行きの帰結点、すなわち「おとしどころ」の中身は、どっちにでも解釈できるような「玉虫色」にしてあることもしばしばである。（芳）

おもしろい

「昨日の映画おもしろかったね／いやあ、あんまりおもしろくなかったよ。僕にはつまらなかったね」

こうした「おもしろい」の反対は「つまらない」だが、「おもしろい映画」の「おもしろさ」には二通りありそうだ。寅さん映画のように、ゲラゲラ笑える映画の場合と、喜劇的ではなくても、見てよかったと思うような映画の場合とである。和英辞典を見ると、前者には“amusing, funny”をあて、後者には“interesting”をあてている。

前者の「おもしろい」は「おかしい」と近いが、「おかしい」の場合には笑ってしまえばそれで終わってしまうような楽しさであるのに対して、「おもしろい」の方はただ笑えたというだけでなく、映画全体を楽しめたというニュアンスを感じるのは、「おもしろい」を前者の意味で使っている時にも後者の意味あいが潜在的に効いてくるからだろうか。

「おかしな顔」と「おもしろい顔」を比べると、「おもしろい顔」の場合はただ「おかしい」だけでなく、どこか「味のある顔」といった感じがするのである。

逆に、“interesting”の意味で「おもしろい」と言うと、時には前者の意味の混入で軽く解されてしまうきらいがあるので、文章ではつい「興味深い、触発的だ、刺激的だ」等と漢語を使ったり、「考えさ

せられた」等と思わせぶりな表現にしてしまうのではないだろうか。

「おもしろい」の語源説はなかなかに「おもしろい」。「面白い」という漢字は当て字ではなく、「明るい景色等を見て、目の前が白く開け、心が晴々とする感じ」から来ているので、まさに「面(前が)白い」のである。「景色の明るさに心も晴れる」という精神的連動ぶりは、“interesting”だが、『大言海』によれば、『古語拾遺』によった、そうした説はこじつけ」だそうで、「思著(おもしる)し、つまり心、切に感じる」から来ているとのことである。こうした語源説にふれると、“interesting”などと日本語の文章にちりばめるのは気恥ずかしくなってくる。

ところで、「事態はなんだかおもしろくない方向に発展していった」「ここ二、三日、母の容体がおもしろくない」の「おもしろくない」を「つまらない」に言い換えることはできない。この場合の「おもしろくない」は「不愉快な、望ましくない」といった意味あいである。「おもしろくない〜」と否定表現で使われることが多いが、「この株は将来おもしろい」「そのゲーム・ソフトはおもしろいようによく売れた」の「おもしろい」は「有望、愉快」の意味にとれよう。（門）

およそ

「誰が真犯人か、およその見当はついている」
「およそのところで結構ですから、見積もり額をお知らせください」
というように、「おおよそ(大凡)」がつづまった表現で、「大体」「概略」という意味が基盤にある。

そこから、
「この機械はおよそ三〇〇万円ほどするそうだ」
「駅まではここから歩いておよそ十五分かかります」
のように「約」の意味でも使う。また、
「およそ男として生まれたからには、何か後世に残るような仕事をしたいものだ」
「およそ食べられるものなら何でも食べます」
の場合は、「一般的に言って」とか「すべて」といっ

た意味を表している。

「女性にはおよそ縁がない」
「そんな額では、およそ話にならない」

と、次に否定がくると「まったく」とか「ぜんぜん」といった全否定の意味になる。

「だ*いたい」「おおむね」を単純に否定すれば部分否定になるが、同じ意味の「およそ」が全否定になるのは、「およそ人間たるものは…」といった一般性・原則性を表す表現が媒介として働いているからだろう。（門）

～か ⇩ または

～が・～は

「事務所に田中さんがいます」という文を、「田中さん」を一番はじめにもってくるとどうなるだろうか。「田中さんは事務所にいます」の方が、「田中さんが事務所にいます」よりふつうだろう。

「います、あります」という存在を表す表現は、日本語教育ではかなり始めのほうに出てくるが、そこで日本語学習者ははやくも「が」と「は」の使い分けという大問題の片鱗にふれてしまう。「が」と「は」は両方とも主語を表す助詞なのに、どのような区別があるのか、と困惑と好奇心の入り交じった留学生たちの顔が何回も問いかけてきた。

この段階では、大野晋説（「は」は既知の情報、「が」は未知の情報をあらわす『日本語の文法を考える』）を翻案して、こう説明することにしている。「は」の文では、言いたいこと、大切なことは「は」の後にある。それに対して、「が」の部分では、言いたいこと、大切なことは「が」の前にある。

初めの文でいえば、「事務所に田中さんがいます」という文では、「田中さん」にスポットライトがあたっているのに対して、「田中さんは事務所にいます」では「事務所にいます」の方にウェイトがいっている。その証拠に、それぞれの文が答えとなるような疑問文を考えてみると、前者は「事務所に誰がいますか?」、後者は「田中さんはどこにいますか?」となるだろう。疑問に答えている部分こそが、その文の要点なのである。

このことから、「疑問詞の前は〈は〉、疑問詞の後は〈が〉がくる」という第二の規則が導きだせる。

「います、あります」の学習者にはこの二つのポイントで十分だが、「が」と「は」の区別をさらに追求すると、当然、「が」が主格を表さない時もあるし、「は」は格助詞ではない、という点に話は進む。

「果物が好きです」「テニスが上手です」「漢字が書けます」「水が飲みたい」「そのネクタイがほしい」というように、「が」が目的格を表す場合がいくつかある。どうして「を」ではなくて「が」なのか、という疑問が出てくるが、「が」を目的格助詞としてとる述語群と結びつけて覚えてもらうしかない。

また、「自分の部屋はもう掃除した(部屋を)」「東京は人が多すぎる(東京に)」「今日はあまり仕事がはかどらなかった(今日)」というように、「は」は必ずしも主語に限らず、文のさまざまな要素を取り出して、話題ないしは主題として提示する、という働きをもっている。そもそも、日本語の文の構造は印欧語のような「主語―述語」構造ではなく、「主題―述部」という構造をなしており、「は」は、その「主題」を提示するキーワードなのである。

この問題をめぐる、三上章の古典的著作『象は鼻が長い』によれば、「『は』は（「主題、題目」として）大きく、大まかに係り、「が」は小さくきちんと係る」。

「私がカナダに行く時、妻はマフラーを買ってくれた」

「私はカナダに行く時、マフラーを買った」

「が」は副文の動詞までしか係らないのに対して、「は」は文末まで（時には、句点を越えて次の文まで）係っていく。したがって、副文だけの主語には必ず「が」を使わなければならない。

ところで、この副文の主語を表す「が」こそが、主格を表す「が」の出自を表している。例えば、「私が愛した女」という語句は、「私が→(愛した→女)」という構造から来ている。「我が国」「君が代」という言葉に残っているように、「が」はもともと名詞と名詞を結ぶ連体助詞だったのである。この点は、「私の愛した女」と同じ構造である。

さらにいえば、「は」には、「が」にはない対比の働きがある。「鬼は外、福は内」「男は外で働き、女

は家を守るべきだ」「成績はいいが、素行はよくない」といった具合である。

「は」は普遍的な事柄を表すのに対して、「が」は現時点での事実を表すという対比もおもしろい。

「夕焼けはきれいだ」と「夕焼けがきれいだ」はどう違うだろうか。前者が「夕焼けというものは、きれいなものだ」という一般的な判断を述べているのに対して、後者は目の前に広がる「夕焼け」の美しさを述べているのである。もっともこの点は、はじめに述べた「「が」の文では、言いたいこと、大切なことは「が」の前にある」で説明できるとも言える。「夕焼けがきれいだ」という文は、「夕焼け」への注目を暗に呼びかけているからである。（門）

かえって

知人のお母さんが風邪をこじらせてしまった。熱はないけれど、咳（せき）がとてもひどいという。「それで思い切って入院させたんですよ。直ると思ったらかえって重くなってしまって、毎日点滴をうけているんです」とは友人の弁。

この場合の「かえって」には、予想とは反対の結果になったという意味あいがある。それもプラスの結果になると予想したのに、マイナスの結果が出たという使い方だ。それに対して別の友人が言う。

「うちのおばあちゃんも、入院してたんだけど、あまり家に帰りたいというから家に帰したの。そうしたら病院にいた時よりかえって元気になってね。食欲もすごいのよ」

この場合は予想したのとは逆にプラスの結果になった場合だ。「かえって」の前の節を「たら」で言い換えることが可能だ。

「かえって」の後に、プラス表現がきたりマイナス表現がきたりする。しかし、日常会話ではマイナス表現がくることが圧倒的に多い。

「あまり子供を厳しく育てると、かえって反抗的になりますよ」

「親切心でアドバイスしたつもりなのに、かえって恨まれてしまった」

「近道をしようと思ったら、かえって渋滞に巻き込

まれてしまった…」

人間の社会とは、予想とは逆の結果になることがよくあるのだ。それも悪い結果に。

「かえって」の前に表れる予想は、常識に大きく左右される。常識が違えば「かえって」の使い方も違ってくる。

「ダイエットして五キロも痩せたのよ。少しはスマートになったでしょ」

「でも、前の方がかえってチャーミングだったけど」

痩せていることが美人の条件と思う人と思わない人、そこに違いが出てくる。しかし、ここで使われている「かえって」は「痩せていること」を否定しているのではなく、「どちらかと言えばむしろ」という意味で「かえって」を使っている。

この点では先ほどの「予想に反して反対の結果になった」とは別の使い方と言える。

「こんなまずい料理を食べるくらいなら、かえって(むしろ)食べない方がいい」

「この人を雇うくらいなら、かえって(むしろ)ロボットの方がマシですよ」

「かえって」の前にくる事項より後ろに来る事項を選ぶ使い方で、前節に「なら」が来る。「Aならかえって(むしろ)B」という使い方だ。この場合Aには現在の状態や状況が、そしてBには話し手の考えがくることが多い。「今晩残業するならかえって(むしろ)明日の朝早く来た方がいい」のように。

さて「こんな説明を聞いたら、かえって分からなくなった」などと言わないでくださいね。　(佐)

かたい

外的な力によって、壊したり、曲げたり、動かしたり、変化させたりすることが困難な性状をさす。

「言うはやすし、行うはかたし」や「ありがたい」の「難(むず)しい」という意味の「かたい」も同じ語源といわれている。こちらは、「かたい」事物を前にしての働きかけの「困難感」から発しているのだろう。

「かたい」ものは、変形させようとする外的な力に抵抗する「強固さ」と「凝集力・緊密さ」をもって

いる。前者は、ダイヤモンドを基準とする硬度に表されるような「固さ」であり、「柔らかい」の反対である。もちろん形容詞の常として、絶対的には固くなくても、そのものの中で相対的に固い場合にも使う。「固い肉(パン・布団・紙・髪・豆腐等)」。これに対して、「かたい結び目」「かたい握手」「タオルをかたくしぼる」「唇をかたく閉ざす」という場合は、後者の「凝集力・緊密さ」を表している。こちらの反対語は「柔らかい」ではなく「ゆるい」である。

「かたい」ものがそれに直面する主体に「難い」感覚をよびおこすように、ものの「かたさ」はそれと接する際の力の緊張を媒介に、精神の「かたさ」に比喩的に転移する。

容易に変わらない精神の「強固さ」は「かたい約束」「かたい決心」「彼の意志はかたい」「かたく辞退する」のような表現に表れる。「凝集力・緊密さ」は、例えば「かたい守り」「かたい団結」「かたい友情」「口がかたい」「身もちがかたい」等に表れる。

「強固さ」がゆきすぎると、「頑固」で「かたくな」「かたぶつ」となり、必要な融通がきかなくなる。「あいつは頭がかたい」「文章がかたい」「かたい一方の男」。「緊張」のしすぎは、「かたくなる」「表情がかたい」「身体がかたい」「かたくるしい」。

「かたい」事物の「動かしにくさ」「変化しにくさ」は、失敗のない堅実さ、確実さに通じていく。「かたい商売」「彼はかたい人だから、安心してみていられる」「合格はかたい」「どうかたく見積もっても、十億円は利益があがるはずだ」。

以上、「かたい」話ばかりになってしまったようだ。（門）

かの⇩例の

上(かみ)・下(しも)

長野県の南佐久郡に川上村という名前の村がある。村の中心を千曲川が流れているが、その源流にあるから川上で、全国に六か所の同名の地名があるという。奈良県の吉野川、岡山県には二つあり、旭川と高梁川、山口県の阿武川、岐阜県の木曽川だ。どれも恐らく川の上流にあるのだろう。

知らない地方を訪れたとき場所を聞くと「もっと上の方に行くと…」とか「その家ならもっと下の方ですよ」という答え方をされることがある。川上村のように、町や村に川が流れている場合には「上の方」は川の上流を、「下の方」は川の下流を指していることが多い。

たとえば宮城県の館築町には、宮野上町・宮野下町がある。村の上町・下町は、村の入口が上町で、奥に行くと下町だが、川が宮野の入口を流れ、川を基準に命名されたものであることが分かる。

しかし、日本の全ての場所に川があるわけではなく、「上と下」の区別はあいまいだ。たとえば瀬戸内海には下関と上関がある。これは川とは関係なく、どうやら東西が基準になっているようだ。地図で見ると下関は西に、上関は東にある。上・下の命名は京都、ないしは東京を意識した言葉だろう。

京都は御所を中心に上ル・下ル、寺町上ル、寺町下ル、上京区、下京区と上・下の区別が非常にはっきりしている。

しかし東京となると、何を中心に命名したかはわかりにくい。たとえば「下井草・上井草」は「下井草」の方が東京の中心に近く、「上井草」の方が遠い。

「上り(のぼ)電車・下り(くだ)電車」という呼び方もあるように、東京駅は「上り電車」の終点であり、東京駅からの上り電車はない。それを考えると東京の中心に近い方が「上」と考えるのが自然だが、「上井草・下井草」は逆になってしまう。

『杉並風土記』によると「井草は正保年間二ヵ村に分けられ京に近いほうを上、遠い方を下とした」という風に記録されている。内陸で古くから「上・下」と分けられているものの多くは、やはり京都が中心となっているようだ。（佐）

～から・～ので

「台風が接近しているので(から)、こんなに波が荒いんだね」

「道路がひどい渋滞だったので(から)、約束の時間に遅れてしまった」

というように、「～から」「～ので」も前文の「～」

の部分が後文の「理由・原因」であることを表している。では、「〜から」と「〜ので」は全く同じ意味あいかというと、必ずしもそうではない。

まず、「〜から」を「〜ので」に置き換えられない文例について考えてみよう。例えば、

「寒いでしょうから、窓を閉めましょうか」
「いくら待っても来そうもないから、もう帰ろう」
「一段落したらすぐ行くから、そこで待っていてください」
「あんな小さな子供でもできたのだから、君ができないはずがない」

これらの文の「〜から」はなぜ「〜ので」に置き換えることができないのだろうか。「寒いでしょう」という推量、「帰ろう」という意向、「待っていてください」という依頼、「できないはずがない」という判断といった主観的な要素がはいっている文には、「〜から」を用いなければならず、「〜ので」による結合はなじまないのである。つまり「〜から」と「〜ので」は同じように因果関係、理由／帰結関係を表すが、「〜から」の文には前文または後文に未確定の事柄に対する主観的な判断を含みうるのに対して、「〜ので」の文はより客観的な説明といったニュアンスがある。

理科系の留学生に科学技術の日本語を教えるテキストが、「原因・理由」の表現として、「〜から」を排して、「〜ため」「〜により」「〜ので」だけをとりあげているのも、このためである。

反面、理科系に弱いとされている女性の方が男性より「〜ので」を多用するようである。「〜から」が主観的な要素を入れやすいために、自己主張のニュアンスをともなう傾向があるのに対して、「〜ので」には、理由／帰結関係に「自然のなりゆき」といった客観性の趣をとることによって「丁寧さ」を添える効果があるためだろう。もっとも、そこには、女性は自己主張をあまりすべきでなく、「丁寧」な表現を多く使うべきである、という女性差別の言語現象がかいまみられるのだが。

「電車が遅れたので(から)、遅刻しました」
「急いでいますので(から)、お先に失礼します」

ともかくも、右の二つの文では、「〜ので」と言わ

れる方が感じがいいことは確かである。「〜から」と言われると、「〜から」がもつ主観的ニュアンスが働いてしまって、「遅刻」や「先に帰ること」を正当化されるような印象を受けるためだろう。（門）

柄

「柄」は「伝統的な柄」「浴衣の柄」などのように織物などの模様を意味する場合と「柄の大きい人」「柄のわりに気が小さい」などのように体格を大小の観点でとらえた使い方がある。これらの用法は意味がはっきりしていて、外国人にも分かりやすい。

しかし

①「私、皆さんと同席する柄ではありませんので」

②「柄にもなく、こんなところで遠慮なさるんですね」

での「柄」の使われ方は、かなりあいまいな意味合いを持つ。ここで使われている「柄」は、地位・能力・性格・身分・立場などを表し、社会的な状況の中での人間関係の中で、はじめて意味を持つ。

①の場合は、会や集まりの中で、自分が周りの人たちよりも劣っていると感じたり、場違いだと感じる場合に使われる表現だ。社長や重役の席に一介の平社員が混じっている時、学会で医者の集まりにサラリーマンが混じった時など、個別的な状況によって使われる意味合いが異なる。

「柄が悪い」という表現も、何が悪いのかという意味ではかなりあいまいだ。

「柄の悪い人が出入りしている」

「柄の悪い人と付き合ってはいけないよ」

面白いことに「柄が悪い」というマイナス表現は存在するが、「柄が良い」というプラス表現はない。「悪い」の基準が自分の所属する社会なり集団であり、その集団から外れた人を異端視するものが「柄が悪い」なのかもしれない。

服装が悪い(スーツを着ているのが当然のサラリーマン社会で、アロハシャツやサングラスは「柄が悪い」に該当する。しかし、これがホノルルでは構わない。一種のユニフォーム化である)、態度が悪い(立てるべき相手を立てず、傍若無人な振る舞いをする人、もっとも『坊

ちゃん』のように痛快な例もあるので、態度に関しては判断が難しい)、言葉遣いが悪い(「てめえ」「おめえら」「こんちくしょう」、罵詈雑言を浴びせる時に男性が使う言葉を日常的に使えば「柄が悪い」となる)。

あるパチンコ店に「柄の悪い方お断り」の貼り紙があった。興味にかられて「どんな方が柄の悪い方ですか。もし、そういう人が店に入ろうとしたら、どうやって断るんですか」と聞いてみた。店員は困ったように「そうですね、たとえば入れ墨のある方とか…」と言葉を濁す。実際のところ、たとえ入れ墨をした人が来たとしても、きちんとした服装に丁寧な物腰なら「柄が悪い」と言えるだろうか。

「柄が悪い」の背景には、ユニフォーム信仰と集団志向があるように思えてならない。中学や高校で制服の基準を細かく決めすぎるあまり、「柄が悪い」の範囲はどんどん拡大する。少しでもはみ出せば、それは「悪いこと」につながる。「柄」を決めすぎるのも問題だ。

「柄」は名詞に接続して「家柄が合わない」「場所柄を考えて行動しなさい」「時節柄お体に気をつけて」などと使われる。この「柄」も、それらのものが本来持っている性質や品格・身分にふさわしいかどうかの判断の決め手として使われる。「柄」には、何かを規定し縛りつけるという役割が課せられているようだ。

(佐)

かわいそう・気の毒

「先生、わたし、かわいそうです」

と言いながらドイツ人の女子学生が教室に入ってきた。思いがけない面倒なことが起きて、その始末に時間をとられ、授業に遅刻してしまった、という話である。

パニック状態に見えるその学生の事情を聞いて、本当にかわいそうだと思ったが、本人が自身を「かわいそう」と表現したのには違和感があった。日本語の「かわいそう」は、他者についてしか言わない習わしだからだ。

「情け深い」「情けをかける」「情にもろい」「情にほだされる」…などの表現でもわかるように、日本

語には、他者への同情に関係のある語句が多い。日本人の、他者への関心の深さ、他者への配慮の深さとつながっているだろう。

他者の境遇や胸中を「思いやる」のも情け深さのあらわれになるが、日米安保条約に基づく駐留米軍の経費のかなりの部分を日本側が負担するについて、その国庫支出を「思いやり予算」と政府みずから称しているのも、なかなか日本的ではある。

それら一群の語句の中には、他者の、同情すべき状態、同情に堪えないありさまを表現する「かわいそう」という語まで含まれている。自分で自分に同情するということはないから「わたしはかわいそうだ」という連語は生じない。その事情が、異言語のメンバーには的確につかめないところがあるかもしれない。使いなれないうちは「かわいそう」の用法にあいまいさを感じさせる余地のあるゆえんである。

「気の毒」も日本人の多用語の一つだが、これも他者の境遇や心情に同情して胸を痛める時に使う、という制限がある点で「かわいそう」と共通している。「あの人は気の毒な人だ。あんなに真面目にやるのに報いられないなんて…」のように。あわれむべき他者の状態が、こちらの心の毒になる、というのがこの語の源だから、自身の主観を言う語句のように見えるが、じつは、「自分の心を痛ませるような他者の客観的状態」を言う語とは、ひねりがきいて複雑だ。

なお、「気の毒」が「かわいそう」と違うのは、「気の毒」はその下に「する」が連接して動詞を作りうる点である。

「あらかじめことわっておかないと、後で気の毒することになっても悪いから」、「ゆうべは介抱してもらって気の毒しちゃったなあ」などがその例で、動詞表現を持つ分だけ「かわいそう」より用法がハバ広い。

(芳)

感じ

日本人は論理が苦手なほうだ。二言目には「理屈抜きで行こうや」「若い男が理屈を言うと女の子にもてないよ」などと言い、「理屈」にマイナスの評価を

こめてきた。

明確な事実認識や、それに基づいた論理構成よりも、感覚的な、また情緒的なもののとらえ方を好む。「感じ」という単語の意味・用法にもそれと関係の深い面がある。

先ず「感じ」の基本的な意味としては、次のようなものがある。

①「なんだか変だな。舌の感じがいつもとちがうよ」は「感触」

②「初対面から感じのいい人だったな」「いやな感じだよ、あの物言いは」は「印象」

③「うーん、よく描けてる。感じが出てるよ、この似顔…」は感覚（この場合は視覚）でとらえられるは「特徴」

④「もっと感じを出して歌えないもんかねえ。マイクにぎって、ただわめいてるなんて…」は「気分」

大別してもこれぐらいある。

このように多義に分かれるが、すべて感覚や情緒に関している点では共通だ。「歯ざわり」「舌ざわり」など感覚のデリケートさを示す語や、「ほんのり」「しっとり」など感覚と情緒の複合した表現を生み出した日本人の意識が、「感じ」の多様さにもうかがわれる。

さて、この「感じ」が、こんな風に使われると、少しずつ意味のピントがぼけてくる。

「ああよかった、一敗を守ってホッとしたという感じ」

「いかがです、近いうちに『お食事でも』という感じで…」

「会議は会議、宴会は宴会、けじめがあるよ、っていう感じで行くわけですがね」

この種の表現が常用化したあげく、

「あなたがここの責任者という感じでやってもらいたい。期待してますよ」

などと言われても、名実ともに責任者なのか、責任者ではないが責任者になった気分でやってくれというのか、不明確だ。

一日の勤務時間は八時間という感じ

コーヒー一杯三五〇円って感じ

となると、これまた何が「感じ」なのか、使った理

山がわからなくなる。「八時間」「三五〇円」と決まっている場合にまで「トイウ感ジ」と付け足して輪郭をぼかしておく。日本人得意の、辺縁のブレた事物描写である。

江戸時代の学者室鳩巣（むろきゅうそう）が、自分で書いたことに間違いのない著書『駿台雑話』の序文に、「書きつけおきけらし」（書きつけておいたらしい）と、自己喪失的なぼかしの叙述をしたのと同じ好みが、現代庶民の会話に連なって生きている。日本〝ぼかしの文化〟の面白さである。

一九七〇年頃からか、若い世代が「フィーリング」派だと言われはじめたが、この種の「感じ」の使われ方も比較的新しい語感を帯びている。フィーリング好みの傾向を象徴する新用法の一つとして、「授業とかサボっちゃって」「試験とかあるから本当は遊んでられないんだけど」「コーヒーとか好きなもんだから」…など、やたらに「とか」*で輪郭をブレさせる表現と同列に並ぶものであろう。　（芳）

感　触　⇩　雰囲気

気・心

「気」という語が日本語の世界から消えてしまったとしたら、日本語の表現がどれだけ貧しくなるか想像を絶するほどである。

「気」は「気分・気持ち・気位・気性・気味・気合・気運・気色・気勢・気配」や「空気・雰囲気・天気・元気・本気・意気・短気・景気・人気・平気」というように、日常よく使う漢字熟語の重要な構成要素であるだけでなく、「気が〜」「気を〜」「気に〜」「気の〜」という形で、実に多彩な慣用表現をうみだしている。一番大きな国語辞典である『日本国語大辞典』では、「気が〜」が八十七項目、「気を〜」七十八項目、「気に〜」二十四項目、「気の〜」十九項目が掲載されている。それぞれのよく使う表現をあげておこう。

①気がいい、多い、大きい、重い、強い、ない、長い、若い、合う、置けない、変わる、利く、進む、する、つく、まぎれる、めいる、楽になる。

②気をいれる、失う、落とす、配る、使う、取られる、吐く、引く、回す、もたせる、もむ、よくする。
③気になる、いる、かかる、くわない、する、なる。
④気のせい、迷い、持ちよう、毒、病、まま。

これらの慣用表現の中の「気」は人のこころの動きや精神状態を表しているが、「空気・大気・天気・気象」等の言葉が表しているように、「気」は自然界の「気体」一般をさしてもいる。「浩然(こうぜん)の気を養う」とか「気がみなぎる」という言い方が示唆しているように、「気」はもともとは天地の間に充満する目に見えぬ霊気であり、生命の活力のもとなのである。一種のエネルギーのようなものとも言えよう。

呼吸の停止がもっとも目につきやすい死のしるしでもあり、「いき」と「いのち」をつなげる発想はさまざまな民族の神話に見てとれるが、「気」の表現体系にも大自然と人間の精神の交流を読みとることができる。

また、「雰囲気」「まわりの空気」「会場の熱気」「和気あいあい」といった言い方からは、「気」が単に個人の心の内にあるものではなく、その場にいあわせる人々によって共有されるものである、という趣がある。個人の心の中にある「気」は、人々に共有されている「気」を分けもった「気分」であり「気持ち」なのである。「気」の多種多様な表現がこうした「気」の間主観性に裏打ちされていることを読みとる作業を通して、精神病理を間主観的な「気」の「違い・狂い」としてとらえる視点を打ち出している精神病理学者もいる(土居健郎、木村敏等)。

先ほどは、「気」を「こころの動きや精神の状態」というように説明した。実際、「気」と「心」はほぼ同じような意味あいで使われることも多い(「気が重い・心が重い／気を落とす・心を落とす／気にかける・心にかける／気配り・心配り」等)。しかし、「気」が人と人の間にただよい、各人に分有される「気体」状のものであるのに対して、「心」は「凝る」という言葉から発しており、そもそもは「心臓」を意味する言葉であったように「固体」状のニュアンスがある。例えば、「心」は「深い・浅い・広い・狭い」ものであり、「奥・隅・底」があるものであり、「開い」

たり「閉ざし」たりするものである(これらの表現はいずれも「気」には使えない)。「心」には、何か箱のような物体としてイメージされているところがある。

ちなみに先の『日本国語大辞典』は、「こころ」には大きく分けて五通り、細かく分けて二十七通りの意味を見ており、五百数十の慣用表現、延々二十ページにわたる複合語をあげている。それらの用例の多くは古文を出典としており、「こころ」という言葉がいかに日本語の表現世界において豊富な意味あいをつむぎだしてきたかを語っている。

しかし、現代日本語において、特に口語表現においては、「こころ」よりも「気」の方がはるかに多彩な意味世界を作りだしている。先には、「気が～」「気を～」というように形態別に一瞥(いちべつ)したが、今度は意味によって分類してみよう。

①自然界における気体。「空気、大気、水蒸気、気流」
②天候等の自然現象。「気象、天気、気候、陽気」
③そのもの特有のかおり。「香気、気がぬけたビール」
④その場の雰囲気。「気配、熱気、活気、妖気が漂う」
⑤心の働き・意識。「気を失う、気をたしかにもつ」
⑥性質。「気だて、勝気、負けん気、気が強い、気がいい、気が短い、気があう」
⑦気持ち・感じ。「気をまぎらす、気が変わる、気をよくする、気が沈む」
⑧緊張した精神。「気力、気勢、意気、気を落とす」
⑨何かをしようとする気持ち。「気が進まない、やる気、その気になる、彼と結婚する気は全くない」
⑩注意力、配慮。「気を配る、気がつく、気がきく」
⑪心配。「気疲れ、気が気でない、気になる、気のせい」
⑫関心・思慕。「気がある、気のない返事、気が多い」

もっとも、これはあくまで大まかな分類であって、「気持ち」や「気分」を表す「気」の意味は文脈や次にくる言葉によって多様なニュアンスをおびる。ポイントは、「気」が個人の「心」の中に閉ざされている精神の働きにつきるものではなく、むしろ人々の間にある「雰囲気」のありように深く影響をこうむるものであるという点にある。「気は心」というように、「気」は「心」という個人の精神作用の本体が共

同性の場に表れている姿ともとれる。
最後に、「気」が「け」と呼ばれる場合を見ておこう。「け」は「き」の古い音がそのまま残っているものの、ととることができる。「火の気、気配、色気より食い気、湯気、やまっ気」等がある。「気色(きしょく/けしき)、人気(にんき/ひとけ)、寒気(かんき/さむけ)」のように、「き」と読むか「け」と読むかで意味が違ってくる言葉もある。また、「けぎらいする、けだるい、けおされる」の「け」や、「悲しげ、はかなげ、苦しげ」の「げ」も「気(け)」から来ている。
まことに「気」は本来の意味よろしく、日本語の表現世界のさまざまな場面に浸透している。(門)

コラム

「気がする」

二十余年前になるが、日本の教育に一家の見識を持つとされた学者で、中央官庁の審議会の類に加わってはよく意見を開陳する人がいた。
この先生は、カントやペスタロッチなどを引用しては荘重なメッセージを発して行くのだが、「えー、大学教育といえども、知育のレベルに限定して考えますと教育目的を十全に達し得るとは申せないのではないかという気ガ致シマス。つまり、その、知力の向上によって、善とは何か、美とは何かをも感得することができるのが人間でありましょうし、それは人間生活の実践の基本にかかわるものであろうという気ガ致シマスから、あー、教育過程においては常にそのレベルへの配慮が必要になって来るという気ガ致シマス」と、再三、気が致シマスの部分を強めて言い、腰をおろすのを常とした。
そこを強調するので、メッセージ全体の迫力が失せ、確信があるのかどうかが疑わしく感じられた。この人が立ち上がると「ああ、また、気ガスル先生が何か言う…」と心中につぶやきながら見ていたものだ。同席者の中には「自分の発言してることが自分でよくわかってないんじゃないか」とひそかに評する高名な医学者もいた。

そもそも、「気」とは、もとより漢語であるだけにまことに東洋的な、そしてまた日本的な概念である。「天気」「気象」「気配」「正大の気」…など、人間を取り巻く不定形のものこそ、日本人にとっての自然環境であった。しかも、「元気」「気になる」「気が重い」「気がすんだ」「気ばらし」「気くばり」…など、精神現象も「気」であらわしている例がきわめて多い。このように自然と人間の境界を画然とさせない融合的把握は、太古のアニミズム、いわゆる精霊信仰の世界以来、日本人の意識構造に深く根づいた感覚にもふさわしい（芳賀綏著『日本人の表現心理』九三ページなど）。

現代日本語における「気」の意味が少なくとも十二通りに分類されることは、本文の「気・心」の項に記述されている。これだけ多様、広範囲にわたるということは、それだけ輪郭を限りがたい、内容にも不分明さを伴なうものということになり、あいまい語の代表例の一つに挙げたくなる語でもある（本文「空気」「雰囲気」などの項なども参照）。

かなり混沌たる内容を含んだ概念の中で、知覚・認識・判断があいまいである意識状態をひっくるめて言うのが、この一句「気がする」である。「気が致します」は、私の判断はあいまいです、確信を持たないままで言っています…という自己告白と解される。いくら語気を強めても「気が致します」と結んだのでは頼りなく聞こえたのも道理である。

かつて、毎日新聞第一面のコラム「余録」の筆者からニュースキャスターに転じ、歯切れのよいコメントが評判だった古谷綱正氏のような人でさえ、ある日のニュースで「今日の首相の演説はちょっと迫力に欠けるきらいがないでもなかったんじゃないかというような気がします…」とコメントしたことがあった。古谷さんにも似合わない。世間一般の「気がする」癖の広がりと根深さを思わせるケースだった。

もともと日本人は、物事を厳密に類別しようとする志向がとぼしく、物の考え方が無構造的

・無結節的である。つまり物事のとらえ方がほんわかとしている。その上、賀茂真淵が「やはらか（柔）しき心」の主と評した上代日本人のメンタリティーにも連なって、われわれは、対人関係でも、他者との間にクッションを置き潤滑油をはたらかせようとする。断定的な物言いをしてカドを立てるのは日本人の最も避けたがることであり、しかも発言に責任を持とうとするキッパリした態度も取りたがらない。他者をかばい、自己をも守る。万事にあいまい、歯切れが悪いのだ。

この種のメンタリティーの主にとっては、「気がする」「気が致します」という結びの語句は、まことによく性に合う。もしくは都合がいい。

教育学者でもニュースキャスターでも、日本では「気がする」族が天下に満ちているのは不思議ではない。そして、「気がする」の同類として、「という風に思います」「と、そんな感じを持っております」「ではなかろうかなあ、と思っておるような次第でございます」……と、あげきれないほど多くの結び文句が用いられている（本文「感じ」の項の室鳩巣の例をも参照）。アメリカの話術指導の権威、D・カーネギーが「臆病なシッポ」と呼んで、その使用を戒めた類のボカシ文句群の多用によって、日本人は、臆病民族・あいまい民族ですよと自己告白している観がある。

ところで、「気がする」類の多用は、対人関係のクッションになる反面、じれったさ・頼りなさを感じさせ、発言に明快さ・力強さを生まないマイナス面が大きいが、ここで思い合わせておきたいのは、「気」の概念そのものにはむしろ積極的に評価すべき面があるという点である。

前述したように、「気」には、自然界と人間の境界をぼかし、両者を全一的に把握する境地が感じられるが、佐々木茂美教授（東海大学開発技術研究所）の「気は、意識と物質が一体となった生命エネルギー」だという説明も、その把握を裏づけるものであろう。西欧近代科学の視野と方法におさまりきれぬ「見えない生命エネル

ギー」が「気」だとすれば、東洋の文明が人類の未来に寄与する可能性を大きく感じさせる一例がここにもあるのではないか。欧米の「禅」再発見などもそれに通じる事実であろう。

このような積極面を認識し、「気」の概念の奥深さ、東洋流あいまい認識のふところの深さに思いを致すのはたしかに有意義である。同時に、一方で「気」の輪郭の不明瞭さに乗った「気がする」式慣用表現の腰の弱さなどは戒めて行かなければならない。そのような二面を見ただけでも、人間の物の見方・とらえ方や表現法の複雑さと妙味があると言えるだろう。（芳）

聞かれる ⇩ 聞ける

聞ける・聞こえる・聞かれる

「私の住んでいるところでは、朝早く鳥のさえずりが聞こえるの」と言ったところ、「今どき東京で鳥の声が聞けるとはうらやましいですね」と言われた。「聴く」に対して「聞ける」「聞こえる」と二つの形が出てきたことになる。私たちはこの二つをどのように使い分けているのだろうか。

「満員電車でまわりの人にも聞こえるくらい大きな音で音楽を聞いている若い人がいるでしょう。あれでよく耳が破裂しないなと感心しちゃいますよ」

もちろん、この場合の音楽はイヤホーンで聞いているのだろうが、こんな場合は「聞こえる」で、決して「聞ける」ではない。なぜなら、いやでも自然に耳に入ってくる音が「聞こえる」であり、「聞ける」は自分の意志で聞こうとした時に使う表現だからだ。「聞こえる」は「僕と結婚したいなんて、冗談としか聞こえないよ」とか、「それじゃ、私の片思いに聞こえるわ」のように、声や音だけでなく、相手の言っている言葉に対して、「冗談と受け取れる」「片思いと受け取れる」の意味で使うことも多い。

「聞ける」は、場所を示す言葉と一緒に使われたり「〜たり」「〜ば」「〜と」といった条件文の中で使われることが多い。「あの喫茶店では、いつでもバロック音楽が聞けますよ」（場所）、この文章では「聞こ

える」は使えない。なぜなら、自分の意志で喫茶店に行き、バロック音楽を聴くからだ。留守番電話に「電話をすれば、懐かしいあなたの声が聞けると思ったのに、いらっしゃらなくて残念です」と吹き込む。これも同様に「聞こえる」は使えない。また「聞ける」は「あの歌手、デビューしたばかりだそうだけど、なかなか聞けるじゃない」のように、「耳を傾けて聴く価値がある」という時にも使われる。

それでは「聞かれる」は、どんな時に使うのだろう。「聞ける」「聞こえる」のように鳥のさえずりやバロック音楽に対して使うのだろうか。「政府の対策が遅かったという不満があちこちで聞かれる」とか、「留学生を一か所に集めて教育するのは、留学生のゲットー化につながるという意見も聞かれる」のように我々は、実際に音として耳に入ってくるものに対してではなく、意見や主張・風評といったものが入ってくることに対して「聞かれる」を使っているようだ。

この微妙な使い分けを留学生に聞かれたら(これは受け身形)、説明するのに骨を折るに違いない。

（佐）

聞こえる ⇩ 聞ける

汚い・汚らしい

日本人の国民性に関する調査の中で「日本が世界に誇れるもの」として「勤勉・礼儀正しさ」に並んで「清潔好き」がある。清潔なことを好む、裏返せば汚いことを嫌がるということだ。

「そんな汚い手で触らないでください」「どこが汚いの。今洗ったばかりなのに」というとぼけた漫画を見たことがある。一方が心の汚さを、他方が手を衛生面からの汚さでとらえているという点で面白い。「汚い手」はその人の卑劣さ・あくどさ・野卑さ・醜悪さといった日本人の最もきらう局面が出ていると言える。

「金銭に汚い」はよく使われる表現だ。「宵越しの金は持たない」といった生き方が「潔い」とされるのと対照的だ。「清貧」という言葉に価値をおく日本人の思想には、「金銭的には不自由しても、心は美し

くありたい」といった道徳観が行き渡っているように思える。
精神的な意味での「汚さ」は地域や時代・環境によっても異なる。「忠臣蔵」の吉良上野介は「汚いやり方」で浅野家を潰したということになっているが、最近歴史の解釈も変わってきている。石田三成に関しても同様だ。
「女の子が汚い言葉を使うものではありません」
「彼の字は汚くて本当に読みづらい」
ここで言う「汚い」は、話し手が言葉なり字に対して、ある一定の正しい形を要求していることから起こる。個人の価値判断によって「生き生きした言葉」になったり「味のある字」になるところが面白い。
日本語では「汚い」とはっきり言い切れない時、「汚らしい」とあいまいにその雰囲気を伝える言葉がある。
「汚らしい手で触らないで」
「汚らしい部屋ですね」
「汚らしい言葉を使ってはいけません」
具体的に何がどう汚いのか指摘はできないが、それでも「汚い」と感じる時、我々はこの表現を選ぶのだ。(佐)

汚らしい ⇩ 汚い

きちんと

物事が整然として乱れていない様子を言う。しかし、「物事が整然とする」というのは、さまざまな社会的要素によって異なる場合もある。
「あの方は盆暮には、きちんとした挨拶をしてくる」
「お世話になった方には、きちんとお礼しておくのですよ」
外国人はこの表現の意味をどう解釈してよいか迷うだろう。盆暮の「きちんとした挨拶」が御中元や御歳暮をさすことは、日本に長年住み慣れてもなかなか理解できないことだからだ。また日本社会のしきたりである、お世話になった時には、たとえ何がしかでも品物をお礼として贈るという慣習は、世界

の中で普遍的に行われていることではない。日本の社会が儀礼的であるという側面は、この「きちんとした挨拶」からも見て取れる。制度・習慣・文化の違いによって「きちんと」の概念は異なる。

侍ものの映画を見ていたら、こんなセリフが耳についた。「この場をどうしてくれるんだい。きちんと始末つけてもらおうじゃねーか」、それを聞いた主役の侍が丁寧に「きちんと始末をつけるとは、どうすればいいんでございますか」、見ていた視聴者も「きちんと」の意味を図りかねたのではないだろうか。何をもって「きちんと」とするかは、はなはだあいまいと言える。

「きちんとした身なり」はよく言われる表現だ。サラリーマンの背広姿、学生が就職試験で着るリクルートスーツ、主婦がPTAに行くにも、それなりの服装がある。日本の社会では、その場に応じた「きちんとした身なり」が重要視される。大きな店に入って説明を求めるにも、我々の目は自然に店員の制服姿を求めている。もしこれが、Tシャツにジーンズ姿の店員なら、個人店舗ならいざ知らず、店員としては通用しにくいのではないだろうか。

見合いの席で仲人さんが「彼の部屋はいつもきちんと片づいているし、毎日決まった時間にきちんと帰るそうですよ」と言い、そのセリフが決め手となって彼は縁談を断られたそうだ。「きちんと」は、ある人にとってはプラス評価に、ある人にとってはマイナス評価になる。

「きちんきちんと」は日常繰り返される動作に使われる。「出勤簿はきちんきちんと押す」「家のローンは毎月、きちんきちんと払う」のように。

「きちんと並びなさい」「きちんと座りなさい」——子供の頃から日本人はこの「きちんと」を聞いて育つ。そこには例外を認めない、集団志向の社会の一員を育てるキーワードが隠されているようだ。(佐)

気の毒 ⇓ かわいそう

～きり・～だけ

「弟は大学に入学したその日に召集令状がきて、満州に行ったきりもどってきませんでした」

この場合の「きり」は何を意味するのだろう。「満州に行って」と、どう意味が違うのだろう。「行く」という行為は「帰る」という行為を前提としている。戦争の場合は特に「生きて帰ってほしい」というのが家族の願いだ。しかし、希望は裏切られ、失望に変わる。その気持ちが「行ったきり」に込められているのではないだろうか。

「今日は郵便は一通きりだった」

「もう、あなたとは会いたくないの。これっきりにしてね」

「〜きり」の後に行為が続く場合には、実際はもっと続くであろう行為が、予想に反して続かないという意味になる。「一通きり」、期待していた郵便が来なかったのか、それとも、もっとたくさんの郵便が来ると思ったのか、これだけでは分からない。

しかし「〜きり」の中に失望の念が含まれていることは確かだ。「これっきり」は、会話でもよく使われる表現だ。歌詞に「これっきり　これっきり　これっきりですね」というのがある。その言葉の余韻にたくさんのあいまいな感情を残しながら歌う。「さびしい、悲しい、悔しい、泣きたい、叫びたい」、しかし、万感の思いを「これっきり」に込めているのだ。

これほど強い感情でなくても「あの人、私の本を借りたっきり（いつ返してくれるのだろう）」「父は脳溢血で倒れてから寝たっきりで（回復する見込みがたたないんです）」など、（　）の部分が省略されたとしても、その後話者が言いたいことは予想がつく。

「残っているのは、これっきり（これだけ）です。デザインもたくさんあったのですが、もう全部売れてしまいまして」

のように、「〜きり」は物に対しても使われる。「あるのは、こんな傘っきり（傘だけ）ですが、よろしかったらお使いください」「三日間で口にしたのはパン一切れとスープきり（だけ）」、この場合は「だけ」との置き換えが可能で、「たったそれだけ」という意味になる。

（佐）

きれい・美しい

留学生たちとレンタルビデオを借りて「カサブランカ」を見た時のこと、最後のシーンに感動した留学生が「きれいな友情ですね」と感嘆して言った。私はふと「美しい友情」とは言うが「きれいな友情」とは言わない。使い分けを指導しなくてはと思ったものだ。

この二つの語は、ぴったりと重なる部分と重ならない部分がある。

「きれいな(美しい)人ね」(姿や形)

「摩周湖の水の色はなんてきれいな(美しい)んでしょう」(色)

「こんなにきれいな(美しい)鳥だから、さぞ美しい(きれいな)声で鳴くかと思ったら、『ギャギャ』って、汚らしい声で鳴くんだ」(声や音)

これらに関しては重なる部分だ。

「きれい」は話し言葉で、また「美しい」は書き言葉で使われることが多い。「きれいな人」と言った場合には、何割かは個人の好みが加わっているという感じがするが、「美しい」となると衆目の一致するところといった評価が加わる。しかし、意味がほとんど重なることには変わりがない。

それでは重ならない部分には、どんな用例があるだろう。上に書いた「美しい友情」は非常に精神的なもので、道徳的にも立派だという時に使われる。たとえば「美しい夫婦愛」や「美しい行い」といったもので、これらは「きれいな」に置き換えられない。

「きれい」は「このタオルきれいですから使ってください」のように、「美しい」という意味と「清潔」という意味がある。「洗濯したばかりできれいですから」といった場合には、当然のことながら「美しい」には置き換えられない。

「残さないできれいに食べなさいね」の「きれい」は残りの全くない様子だし、「きれいな政治」はやましい点がなく汚れのないことを言う。

花を見て「きれいな花ですね」というか「美しい花ですね」というかは、地域によって差がある。『日

本言語地図』によれば、花を見て「きれい」という地域は「美しい」という地域より多い。ここでは「美しい」が使われる地域をあげておこう。この地域以外は「きれい」がよく使われるようだ。

「美しい」は主に東北地方（岩手・宮城・山形〈庄内を除く〉福島）や、関西地方（三重・滋賀・京都・大阪・奈良・和歌山）、そして九州（福岡・佐賀・長崎・熊本・大分・宮崎）などだ。興味深いことに、これらの分析は「清潔だ」の意味を表す語を「美しい」とする点も一致する。

大部分の辞書には「きれい」の項に「清潔」という類の意味があるが、「美しい」の項に「清潔」の意味は載っていない。しかし、これほど多くの地域が「美しい」という語を「清潔」と同義としているなら、国語辞典にも注の形ででもそのことを付け加える必要がある。

もっとも、近年、東京一極集中の傾向はますます強まり、それに伴って日本語も画一化していくようだから、将来、こうした使い方は姿を消していく運命にあるのかもしれない。（佐）

空　気

「あんまり日常のことになって空気か米の飯みたいなもんだ」「空気と平和はタダで買えると思ってはならない…」などと言われる。

つまり、人間にとって同時存在、生存に不可欠の気体、国語辞書的に言えば「地球をつつみ、われわれがそれを吸って生きている気体」が空気だ。この場合の「空気」は物理的存在で、格別あいまいな意味合いは持っていない。

これが転用されて心理的状況を言うようになると、

「あの場の空気は何とも名状しがたいものでしたな」

「あの空気の中で自分の意見をはっきり言うなんて、ちょっとできそうもない状況でしたわ」

「その時の空気に押されちゃうからね、どうしても。なごやかな空気だったら問題ないんだが…」

と、自分を取り巻く場面から与えられる心理的な感

じを意味する。

さらに、社会心理的状況を言うのにも使われる。

「それが時代の空気とでも言うのかな」

「開戦までの何年間かの空気には要路の人といえども抗しがたいものがあった」

「いまの世の中の空気をひしひしと感じさせられる話ですねえ」

この「空気」は、「世論」(public opinion)と同じではない。世論は、言語化され、さらにはデータとして数字化されたものだが、「空気」は言語以前のもの、言外のものである。言語によるメッセージなら反論することも可能だが、言語以前、無言の社会的圧力に対しては反論の機会がつかめず、じれったい。実体がないようであるような、まさにあいまいで、しかも強い圧力・拘束力を持った、始末におえないものだ。

すなわち「空気」は実体そのものがあいまいである。日本人の社会意識、そして世論の作られ方はプロセスが明確でなく、いつの間にか、何とはなしに構成されて行くが、それは、各自が論理的文脈(logical context)によって思考するよりも、自然発生的に流れの出来はじめた社会的文脈(social context)に身をゆだねるメンバーがずっと多数だからである。

日本人における「空気」を考察のテーマの一つにした山本七平氏は、太平洋戦争の終わりの時期、日本軍が、制空権を失っている沖縄へ向けて戦艦大和を単独で発進させ、みずから大和の破滅を招いたケースを一例に挙げ、この作戦会議に参加した参謀たちが、「あの時の空気では反対できなかった」と述懐した事実を紹介している。人間の主体性よりも、先行した空気が決定力を持つ、日本人にとって空気とは何か、と氏は論じた(同氏著『空気の研究』)。〃あいまいな日本人〃を語るのに「空気」は不可欠のキーワードである。

さて、ここで、さかのぼってみれば、物理的存在としての「空気」も、化学的には〃混合物〃であって、二種以上の物質が明確に一定の比率で結合した〃化合物〃とは異なる。その点では組成内容があいまいと言えばあいまいだ。とらえどころのない社会

心理を名づけて「空気」と比喩的に呼んできたのも、案外、元来の「空気」の本性にかなうものかもしれない。

（芳）

～くさい（臭い）

「腐る」との語源的連関を指摘する説もあるように、腐臭に代表されるような不快なにおいをさす。その基本語義から転じて、次のような表現にも用いられる。

①「どうも、あいつが臭いな」「あの二人は臭い仲だ」のように、「疑わしい」「怪しい」といった意味。

考えてみると、匂いは目に見えず、匂いの出所は経験則的にしか判明しない。「くさい」が「疑わしい」に転じるのは、匂いのこうしたあいまいな本性を表していて、おもしろい。

②「～くさい」という接尾辞として、そのものの匂いや感じ、*雰囲気、さらには否定的イメージを表す。

(1)「汗くさい」「ガスくさい」「かびくさい」「こげくさい」は、実際の匂いを表している。

(2)「バタくさい」「ぬかみそくさい」「あおくさい」「土くさい」「なまぐさい」では、実際の匂いと雰囲気がいっしょくたになっているようだ。

(3)「教師くさい」「インテリくさい」「田舎くさい」「素人くさい」「貧乏くさい」となると、具体的な匂いというより、雰囲気を表す表現になっている。

(4)「けちくさい」「じゃまくさい」「あほくさい」「古くさい」「照れくさい」「面倒くさい」等の「くさい」は、もはや雰囲気でもなく、「臭さ」のもつ不快感・拒否感のみを表し、語幹部分の意味を強調している、ととれる。

もちろん、「いやな」匂いという「くさい」の否定的・拒否的ニュアンスは②―(4)のみでなく、①、②のすべての表現に共通している。「くさい」という言葉のもつ強烈なマイナスイメージは、不快な匂いの強烈さと、逃れ難さに由来しているように思える。

もう一つ、興味深いのは、②の(1)～(4)で具体的な

「匂い」が「感じ・雰囲気」さらには「否定的価値判断」に転じていったように、「くさい」には匂いのもつ全体性が体現されている、という点である。

しかも、そこには「土くさい、泥くさい、田舎くさい」といった地方出身者への差別や、「女くさい、男くさい」といった性差別、「あおくさい、乳くさい」といった若者差別、「バタくさい」といった西洋コンプレックスが、「匂い」という客観的基準のあいまいな全体性に乗じて、入り込んでいる。学校で子どもたちが、「クサい」という差別表現でいじめられっ子を排他的に弁別しているのは偶然ではない。（門）

～くせに・～のに

「主婦のくせに料理も洗濯もしない」
「会社員のくせにTシャツで通勤している」
「大学生のくせにちっとも勉強しない」
「新入社員のくせに、五時になるとさっと帰る」
「子供のくせに生意気だ」

など、会話表現でよく使われる「～くせに」はかなり強い非難の調子を含んでいる。

しかしその非難も、社会通念や常識に反している場合に逆説的に使われることが多く、常識そのものはかなり個別的なもので、国籍やその人の所属する社会によってかなり異なるので、「～くせに」という表現を使うかどうかもかなりあいまいだ。

「主婦のくせに…」という表現も、年配の世代には受け入れられても、若い世代には通用しないかもしれない。また都市と地方でも違うだろう。アジアやイスラム圏の留学生には受け入れられるが、欧米諸国からは反発を買うかもしれない。

「新入社員のくせに…」も同様で、残業を建て前とする社会では通用する表現だが、夕方の五時になると潮がひくようにさっと仕事を終える欧米の社会では、通用しにくい。

「子供のくせに生意気だ」という表現が通用する社会は、学校制度の中で子供たちが受け身で教育を受けている場面が浮かんでいる。「女のくせに…」という表現もよく使われるが、これに至っては「性差別的な臭い」がプンプンする。

「〜くせに」は他人に対しての強い批判で、主語は当然一人称以外に限られる。

「あんなに約束したくせに…」

「知っているくせに…」

「知らないくせに…」

「ピアノもひけないくせに…」

「お金があるくせに、寄付をいやがる」

「お金もないくせに、大きな家に住みたがる」

「イギリスに留学したくせに、英語がぜんぜん話せない」

「おなかがすいているくせに、ヤセ我慢して食べようとしない」

「おなかがいっぱいのくせに、まだ食べたがる」

どれも前に来る文章から予想される事柄に反する内容が後が続く。この場合はほとんど「〜のに」に言い換えることができるが、「子供なのに生意気だ」と言えば同じ逆説表現でも、話し手が非難している感じはずっとやわらぐ。

「〜くせに」と「〜のに」の使用法を比べてみると、「〜のくせに」はかなり使用法が限定されてくることに気がつく。「九月なのに、涼しくならない」「朝なのに、いつまでも暗い」のように自然現象を主体にした場合は「〜のに」は使えるが、「〜くせに」は使えない。

また「列車が来るのに、踏切が閉まらない」「防腐剤が入っていないのに、腐らない」など、無生物が主体になるときも「〜のに」は使えるが「〜くせに」は使えない。他にも「雨が降っているのに、サッカーの試合は続行中」「彼が尋ねてきたのに、彼女は会おうとしない」など、前にくる文と後に来る文の主体が違う場合には、「〜のに」は使えるが「〜くせに」は使えない。

「〜くせに」に非難の気持ちが強いところから、「子供なのにえらいわね」「まだ学生なのに、司法試験に合格したそうですよ」などのように、相手に同情したりほめる場合には「〜のに」が使われる。

「いつも妹の面倒を見ているそうですよ」「まだ子供なのに…」

「自分の部屋にはピアノ・テレビ・ビデオ・コンピュータ、何でも揃っているそうですよ」「まだ子

供のくせに」
「〜なのに」も「〜くせに」も終助詞的に使われることが多い。この場合、文脈からその後に続く言葉は判断できる。日本語ではこういう場合、言い切らないで終えた方が直接的な表現を避けることができ、相手に判断をまかせるという点で適している。

「高校生のくせにね」「本当ですね」
ある女子高生が通りすぎるのを見て、奥様方が噂する。その中に一人混じっている外国人の奥さんは、皆が何を話しているのか分からない。

「女子高生のくせに、イヤリングをしたり、マニュキアをしたり」
「女子高生のくせに、車で高校に通っている」
奥様方の脳裏には共通する女子高生像があるに違いない。しかし「〜くせに」で文を終え、最後まで言わないことで非難・反発・軽蔑の気持ちを多少は軽減できる。

それにしても「〜くせに」は、狭い固定観念を助長させる表現ではある。「〜くせに」という表現が良く使われる社会は、物事をネガティブにとらえる社会と言えるかもしれない。

（佐）

九分九厘 ⇩ だいたい

〜くらい・〜ほど

電話をしていたら、途中で割り込みが入ったので「すいませんけど、五分くらい（ほど）したら、掛けなおします」という。別に五分でなくても良い。お金を借りる時も同様で「ちょっと雑誌を買いたいんだけど、千円くらい（ほど）貸してもらえない」と聞く。

「五分したら、掛けなおします」というのは、あまりにも時間を限定しすぎていて、日本語としてはビジネスライクに聞こえる。それでは、この「くらい」とはどのくらいを指すのだろう。

「くらい」はおおよその数量・程度を示す。「ほど」「ばかり」*と同義に使われることも多い。こう言えば、大体の日本人は納得してくれるが、考えてみれば「おおよその数量」とは甚だあいまいだ。私たちはどのぐらいを「おおよそ」としているのだろう。また「ほ

ど」と「ばかり」との使い分けはどうなっているのだろうか。

「くらい」しか使えない場合

「くらい」の用例を考えてみると、ある事柄を例えとして示し、その上で「〜くらい」としているものが多いことに気づく。

「死にたいくらい悩んだんです」「お茶ぐらい出してくれてもいいのに」(極端な事例で、本当に死にたいわけでも、お茶が欲しいわけでもない)

「このくらいの曲ならすぐに歌えます」(連体詞のこの・そのにつく場合も多い)

これらの文は「ほど」や「ばかり」に置き換えることはできない。

「くらい」と「ぐらい」の使い分けだが、我々はこの使い分けを暗黙のうちにしているようで、「お茶」と名詞に続く時には「ぐらい」が、また「この・その」などの連体詞に続く時には「くらい」が使われることが多い。

言い換えられる場合

具体的な数字を示して、分量や程度を示す場合には、「くらい・ほど・ばかり」に言い換え可能な場合が多い。

「一クラスに四十人(くらい・ほど・ばかり)の生徒がいます」

「海外旅行は十回(くらい・ほど・ばかり)したと思います」

ただし、次のような場合には「〜くらい」しか使えない。どうしてだろうか。

「一クラスに四十人もいるんだから、一人(くらい・ほど・ばかり)百点をとってもいいのに」

具体的な数字を示しても、それが最低基準の数字「一体・一枚etc」である場合には「くらい」しか続かない。数字が最低基準であることから、極端な場合の事例と同じような働きをするからだろう。

両方とも使えるがニュアンスが変わる場合

次のような文では両方とも使うことができるが、ニュアンスは多少変わる。

①「学会に人材多しといえど、木村先生（ほど・くらい）の実力者はそうざらにはいませんよ」

②「学会には人材がありあまるほどで、木村先生（ほど・くらい）の方ならざらにいますよ」

この二つの文のように程度を表すために一つのことがらを例として出して、だいたいそれと同じ程度という意味を表す場合には、「ほど・くらい」両方とも使うことができ、実力を高く評価した場合には「ほど」が、また低く評価した場合には「くらい」の方が文章として落ちつくのではないだろうか。

「あなた（くらい・ほど）素敵な人はいないわ」と、「一番〜だ」という意味を表す場合にも、この二つの表現は言い換え可能だが、「ばかり」は使えない。

会話などでは、ここで最初に「極端な事例」としてあげた「〜くらい」を使うことで、表現に面白みが出る。

「風呂ぐらい、毎日わかしとくのが妻の役割ってもんだろう」

「酒ぐらい飲めなくて、営業が勤まるか」

「新聞ぐらい読んだらどうですか」

これらの「〜ぐらい」には、評価の最低基準にさえ達していないという相手を馬鹿にした雰囲気が漂い、このセリフは喧嘩の際の「売り言葉」になる。「ほど」や「ばかり」にはない「〜くらい」の特徴と言えよう。（佐）

結構

くれる ⇩ あげる

気(け) ⇩ 気(き)

「では、今度の歓迎会の会場はHホテルでよろしいでしょうか」、他の部長からそう言われ「ええ、結構です」とA氏は憮然(ぶぜん)と答えた。内心、この案には反対したいところだがとても反対できる雰囲気ではない。部長のB氏はこの案には大賛成だ。「ええ、結構ですね」、その提案に膝を乗り出して賛成した。同じ「結構です」が渋々賛成したことにもなれば、大賛成にもなる。

歓迎会の席で「これボルドーのワインです。まあ、どうぞ」と勧められ「今日は車で来ておりますので、

結構です」と断る。この断り方はかなり強い表現である。しかし、「もう一杯いかがですか」とたずねられ「いやあ、本当に結構ですから」と「もう十分いただきました」と感謝の意を込めて断る。

この場合「結構」は丁重な断りの表現にも、断固とした断りの表現にもなりうる。賛成にも断りにも使え、しかも声のトーンや語尾の上げ下げによってその度合いが変わる。「結構」は実にあいまいな表現と言える。

「歓迎会では結構なスピーチをありがとうございました」

「結構な」と使われる場合には「すぐれた、見事な」と褒め言葉で使われる。「結構なお味ですね」「結構なできばえでした」のようにだ。しかし、この表現も若い世代では使われることが少なく、将来は死語になってしまうかもしれない。

「へえ、着物も結構似合うんだね」

この「結構」は「案外*」の使い方と共通する。期待していなかったことに対しての意外性が「結構」という言葉になって表れ、他と比べてみて、自分の思っていた以上に良い時に使う表現でだ。「結構」「案外」のほかにもこういった表現が多く、「割合*」も同様に使われる。

「あの人、割合さっぱりしていて気持ちがいいね」

話しことばでは「割りと」「割に」「わりかし」などに変化する。

公的な場や固い表現の場合には「結構」「割合」「案外」の代わりに「比較的」が使われることもある。

「今回のプロモーションは比較的うまくいったと言えます」

一般的の基準に比較して言っているのだが、この「比較的」を外すと、自画自賛といった自信にあふれた表現となり、日本の社会では使いにくい用法だ。「他と比べてみて、公平な目でみても」といった気持ちが、これらの表現にあるようだ。（佐）

けれども

「けれど」と言ったり、「けど」と短縮して用いたりする。「それにもかかわらず」と前で述べた事柄に

相反する事柄が続くことが多い。
「賛成してもらえたけれど、内心はどうなのでしょう」
「あの人、黙っていればエレガントなのだけれど、話し始めるといっぺんにムードが壊れてしまって」
「今まで我慢していたけど、もう我慢の限界だ」
いずれも話し言葉に使われ、レポートや論文などでは「が」*が用いられる。手紙文などで「けれども」が多用されると稚拙な感じを与えがちだ。
「この間お願いした件ですけれども…」
「最近の会社の様子ですけれども…」
「が」と比較してみると、その違いがはっきりする。
「けれども」は後に続く文に関係なく、単に次に述べる事柄につなげる役割も果たす。現代の日本語会話ではもっとも多用されている用法で、話し手自身意識せずに使っている場合が多い。結婚式でこんな祝辞を述べた青年がいた。
「友人の代表の○○ですけど、えーと、新郎との付き合いは部活を通じて高校時代からですけど…」

文が長々と続き書いてみるといかにも奇妙に響くが、聞いている場合には自然に聞こえる。前の句と後の句に何の因果関係もなく、単に文を展開させていく。「けど」を使わなければ、一つの文として十分に独立できる。「です」「ます」で一つの文として言い切った方が、スピーチとして明快でさわやかな印象を与える。それをしないのも現代の風俗ということだろうか。
「参加したい気持ちは十分にあるんですけれども、(間)やはり今日のところは止めておこうと思います」
この会話文の特徴は「けど」の後に一呼吸の「間」が置かれることだ。この「間」は相手の反応を見てのもので、相手が理解しているか、同意か反対かなどを見ながら話を進める場合が多い。「けれども」は人間関係を考えながら展開される「察し用法」の一つと言えないだろうか。対話相手の顔が見える場合は話しが進めやすい。顔が見えない電話などの場合は、「けれども」の後の「間」で相手の相づちを待つことになる。

「日本人は電話の間に何回も相づちを入れ、それが耳について仕方がない」と多くの外国人が言う。電話の際「はい」を繰り返すのは、この相手の「間」に対応してのことだと思う。一気に自分の話したいことを話す場合には、「間」をおく必要もなく、また「けど」で終える言い差し表現も必要ないからだ。

そのほかに「けれども」の用法としては、

「留学生にただでアパートを貸してくれる人がいるといいんだけれども」

「彼がプロポーズしてくれるといいんだけど」

のように、まず実現しそうもないことや、事実の反対を言う場合に使う。会話文の最後が「けれども（けど）」で終わっていても、言い差し表現と大きく異なるのは、相手の返答を期待していないことだ。希望・落胆などの気持ちが「けれども」の短い表現に込められている。

「けれども」は、

「英語は話せないけれど、中国語は話せる」

「金銭的援助はできないけれど、精神的な援助は惜しまないつもりだ」

のように逆説や対比に使われる場合、「このレポートは次回の会議のためだけれど、年次報告の原稿でもある」などのように二つの事柄を並べる役目も果たしている。

「けれども」はさまざまな姿をとりつつ会話文に表れるが、その用法は話し手自身が意識していないくらいにあいまいであると言える。（佐）

心⇓気

コラム

終助詞

外国人に教える初級の日本語テキストを見てみると、とても不自然に思える表現によく出くわす。

「このボールペンはあなたのですか」「いいえ、ちがいます」

文章で読むとそれほど不自然には思えないかもしれないが、実際に相手を目の前にしてどんなときにこの会話を交わすだろうか。全く見ず知らずの人がボールペンを置き忘れた時でも想

定しなければ、使えそうにない会話だ。
初級の初めだから、こんな表現にならざるを得ないと言われればそれまでだが、「このボールペン、木村さんのなの?」と「の」を加えてイントネーションをあげることで、同じ内容も文の感じが柔らかくなり、質問もかなり自然な感じになる。「の」は主に女性が使うが、最近は男性も使うようだ。
この「の」の使い方には三通りあり、ここで示したように「の」でイントネーションをあげる場合には疑問の意味になるが、「次は君が話すの」と「の」にストレスを置くと、それは命令調になる。また「次は私が話すの」の「の」のイントネーションを下げれば、単に相手にそのことを告げている平叙文になる。たった一文字の「の」の役割は大きい。
答えも「いいえ、違います」に「違いますよ」と「よ」を加えたり、「いや、違うね。○○さんのでは?」と「ね」を加えることもできる。こうすることで、テキスト調の不自然さはずっと緩和される。なぜ、こういった表現が初級のうちに出てこないのかと思うが、それは「よ」や「ね」といった終助詞にそれぞれのニュアンスがあり、初めからその使い分けを指導するのが難しいということもあるのだろう。
日本語会話の文末表現を見てみると、「です」「ます」で終わる文は、ほとんどなく、「わ、よ、ぞ、ぜ」のような終助詞で終わったり、「君も行くか」「彼の講演など聞きに行くもんか」「いいか、彼の講演には絶体行くな」「彼の講演、聞きに行くの」のように係の助詞や接続助詞が終助詞のような働きをしていることが多い。
終助詞の中で最も頻繁に使われるのは「ね」と「よ」だろう。夫と妻が会話をしているとしよう。夫が「明日は展覧会に行くよね」というのと「明日は展覧会に行くよ」というのとでは、どんな風にニュアンスが変わるだろうか。
「行くよ」と言い切ると、自分の「展覧会に行く」という意志を相手に押しつけようとする感じが強くなる。それに対して「ね」が加わると、

話し相手、この場合は妻に展覧会に行くかどうか確認を求めている表現になる。
「ね」は相手に同意を求めたり、確認を求める気持ちを表し、相手に選択の余地を与えることになる。夫と妻が話すときに、どちらが「ね」を多用するだろう。それによって夫婦間の力関係が分かるというのは言い過ぎだろうか。
「よ」が疑問詞とともに使われると、ひどい詰問調になる。
「どうして知らせてくれないんだ（ヨ）」「いつから知っていたの（ヨ）」「何があったんだ（ヨ）」「誰が相手なんだ（ヨ）」
ヨがない場合のイントネーションは上昇調、それに対してヨがある場合は下降調、「ヨ」を使うか使わないかは、感情によってコントロールされているようだ。
「安いよ、安いよ、お買い得だよ」「この店、おいしいよ」「今日は雨が降りそうだよ」
これらはどれも、話し相手に自分の感情、判断、意見などを押しつけようとするもので、自分の主張が強く出ている表現だ。男女両方とも使える表現だが、柔らかさを残しつつ女性が自分の主張を強調したい場合には「わよ」を用いる。「これはおいしいわよ」「もう行くわよ」のようにだ。
これを「ぜ」や「ぞ」に変えると凄味（すごみ）を帯びた表現となる。
「これは安いぜ。買っとけよ」「この店おいしいぞ」
男性にしか使えない終助詞で、自分の力を顕示しようとする時には、これらの終助詞が役に立つ。歌の歌詞も、これらの終助詞の持つニュアンスを借りて成り立つものも多い。
「海のかもめにたくしておくれ、俺は待ってるぜ」「うぶなお前をみつめていたら、ただ泣けるぜ」「抱いてやりたいいじらしさ、ああ俺を泣かせるぜ」
これら三曲はどれも同じ歌手によって歌われた歌だが、時代が男らしさを求めていたということもあるのだろう。「ぜ」が効果的に使われて

いる。
「これは演歌だから『ぜ』や『ぞ』が使われるので、ふつうの会話では使われないのではないか」といった疑問が生じる。しかし電車の中での学生どうしの会話などを聞いてみると、意外なほどあっさり「ぜ」や「ぞ」が使われている。
ここでは現代作家が会話文をどんな風に書いているかの参考に、赤川次郎の作品から「ぜ」と「ぞ」をとりあげてみよう。
「あんまり深入りすると危ないぜ」「少しもびっくりした風じゃなかったぞ」（『忘れられた花嫁』より）
「しかし、実際にローソクがたててあったんだぞ」「君が、お母さんに事故に遭ったという電話を聞いてた時は僕は一緒に講義に出ていたんだぜ」（『忙しい花嫁』より）
これらの話し相手は仲間うちか、相手が下の場合に限られる。「ぜ」はそういった間柄の人に念を押したり注意を促すという機能があり、「ぞ」は相手に有無をいわせず一方的に通告したり、自分の考えを断定的に主張する場合に使われる。なぜ、これらが男性だけに使われるのか、「ぜ」や「ぞ」の持つ機能とも深い関わりがありそうである。
「この店おいしいわ」「今日は雨が降りそうだわ」
「わ」「だわ」は女性専用の言葉で、主張をやわらげる働きがある。カラオケでよく耳にする「瀬戸の花嫁」には最後のフレーズが「父さん母さん　だいじにしてね」「二人の門出　祝っているわ」と「わ」で締めくくられ、女性らしさが意識的に出されている。もしこれが「二人の門出　祝っているぞ」となった時、どんな人を想像するだろうか。この違いは外国人には非常に分かりにくく、英語に翻訳する際にも違いを出すのは至難の業である。（佐）

コソアド

人や事物の名前を言うかわりに「こちら」と言っ

たり、「これ」と言ったりする。国語の試験問題には必ずと言っていいほど「文中の『それ』は何をさすか」といった問題が出る。それほど日本語では、指示代名詞の使われる頻度が高いと言える。こうした指示代名詞を「近称、中称、遠称、不定称」の順に並べてみると、「これ、それ、あれ、どれ」「こちら、そちら、あちら、どちら」のように語頭が「コソアド」の形を示すので、これらの代名詞を総称して「コソアド」と言う。

アメリカの映画を見ていると、人物を話し相手に紹介をする場面がよく出てくる。たとえば、"This is Tim." という何でもない文が、字幕スーパーには、「これがティムだよ」とか「こちらがティム」、カウボーイがぶっきらぼうに紹介する「こいつがティムだ。よろしくな」、執事がお屋敷の部屋をいくつも通って奥に案内し「この方がティム様です」とか、一見何でもない文が、いくつものスタイルに変化している。「コ」が人称に使われた場合だが「ソ・ア・ド」に関しても同様のことが言える。

コソアドが使われる範囲は人称にとどまらず、物には「これ・それ・どれ・あれ」、場所には「ここ・そこ・どこ・あそこ」、方向には「こっち・そっち・どっち・あっち」、もっと丁寧に言えば「こちら・そちら・あちら・どちら」(これは人称にも使える)、「自動販売機はあっちだよ」というのと「自動販売機はあちらでございます」と言うのとでは印象が大分違う。大部分の日本語の教科書の第一課に出てくるのが、この「コソアド」だから、外国人の日本語を勉強する方々に同情を禁じえない。

もっとも、外国人学習者にはじめに指導するのは、「これは傘です」「あの傘は誰のですか」といった程度で、待遇場面は設定しない。むしろ、はじめに指導する際に問題となるのは「ソ」の扱いだ。「コ」は近称で話し手たちの近くにあるものを指し、「ア」は遠称で遠くにあるもの、「ソ」は中称、それでは「ソ」はどのように考えるべきなのだろうか。大部分の日本の方々は「話し手から近くもなく、遠くもなく、その中間にあるもの」と答えるのではないだろうか。

残念ながら、そうではない。たとえば団体客がホテルを出ようとドアまで行って振り返り、ロビーに

スーツケースが残っていることに気づく。「あれは誰のスーツケース？」ときくだろう。ところが、ガイドさんがスーツケースのところにいて、遠くのドアのところにいるお客さんに「このスーツケース、どなたのですか」ときいたとする。おそらく答えは「あっ、それ私のです」と「それ」になり、遠くにあるものでも「それ」を使うことになる。我々は話し相手の近くにあるものを指して「それ」というのであり、「それ」がたとえ十メートル離れていようと、「それは私のです」となるのだ。

「コソアド」はこんな場面でも威力を発揮する。

①「ね、こんな話、お聞きになりましたか」
②「いや、そんなことがあったとは初耳でしたね」
③「えっ、どんな話ですか、私にも教えてくださ
い」
④「あの話のことですね、私も聞きましたよ」

非常に思わせぶりな会話だ。

①が切り出した「こんな話」の「コ」には、これからする話は話し手だけが知っていて、聞き手にとっては全く新しい情報であること、この後に新しい情報がもたらされることを明示していて相手に期待を持たせている。「コ」に共通する役割で、冒頭で「こんな場面でも威力を発揮する」と「コ」を使ったのも同様の効果を期待した書き方だ。

②の「そんなこと」の「ソ」は相手はその情報について良く知っているが、自分は知らない、あるいは経験したことがない、といった場合に使われる。「ソ」は相手に情報があり、自分にはない場合に使い「それは良かったですね」「そのことでお聞きしたいと思いまして…」などと使われる。

③の「どんな」は英語の疑問詞にあたる。「ド」は「どこ、どれ、どの、どう、どんな、どいつ、どなた、どうして、どうした」とさまざまなバリエーションがある。

④の「あの話」の「ア」から、聞き手にも話し手にも共通の体験で、自分も相手もそのことを知っているのだということが伝わってくる。「あの件、どうなりました」、会議で出席者が共通に知っている事項ならこれで済む。しかし一人でも知らない人がいるとすれば「その件に関しては、後で皆さんにご説明

致します」となるだろう。これを「あの件に関しては後日改めて…」などと言われると、その情報を知らない人にとっては疎外感がつきまとう。「ソ」と「ア」の微妙な違いだ。

これらの使い方は「現場指示」と言われるもので、直接話の中に出てくる事物を示しているが、「コソアド」は文章中でも使われ、一定の語や文を指示する「文脈指示語」の働きをする。これは受験生泣かせで、高校受験や大学受験に頻繁に問題として使われる。それほどに「コソアド」の用法はあいまいということだろうか。（佐）

こと⇩もの

ごとに・おきに

「先生、横浜駅行きのバスは何分ごとに出ますか」と留学生に聞かれ「一時間おきにありますよ」と答えた。留学生は「それは一時間ごとにあるんですね」と念を押すようにたずねる。なるほど、私は無意識のうちに「〜ごとに」と聞かれたことに対して「〜おきに」と答えてしてしまっていた。留学生にとっては聞きなおしたくなるのも当然だ。

時間の間隔を表すものとして「〜ごとに」も「〜おきに」も使えるが、ニュアンスはかなり異なる。

「この病院では三時間ごとに(おきに)看護婦さんが見回りにくる」

「この薬は八時間ごとに(おきに)飲んでください」

「〜ごとに」という場合には「バスが来る」「看護婦さんが見回りに来る」「薬を飲む」という繰り返し行われる動作を、一時間、三時間、八時間という一定の単位で切り、その一定の単位の中で毎回動作が行われることを示す。この一定の単位は、ある長さを持った「線」と考えてはどうだろうか。

それに対して「〜おきに」は「バスが来る」「看護婦が見回る」「薬を飲む」といった動作が定期的に起こることを表し、それは「点」として意識される。これらの表現を使い分ける時、我々の頭にこの「点」と「線」の意識はあるが、どちらを使うかの判断はかなりあいまいであり、上のような留学生との会話が成立することになる。

ところが同じ表現も、
「一日ごとに(おきに)」
「一週間ごとに(おきに)」
「一か月ごとに(おきに)」
「一年ごとに(おきに)」
となると、まったく意味が違ってくる。「イギリスに来ても、彼とは電話で一日おきに話しているんです」は隔日を意味し、同様に「隔週に出る雑誌」は一週間おきに、「会議は隔月に行われる」は一か月おきにだ。

この用法は他にも、
「ひとつおきに駒がおけます」
「一本おきにビールとジュースを並べてください」
「青い屋根と赤い屋根が一軒おきにある」
など多様である。「それだけの間隔をおく」という意味になる。

ある時には「〜ごとに」「〜おきに」がほぼ同じ使い方がされ、ある時には意味が変わるというのでは、外国人に分かりにくいのは当然だ。しかし日本人は案外おかしいとも不便とも感じずに使っている。「バスは一時間おきに出ています」と聞いて、二時間に一本の割合で出ていると勘違いする人は恐らくいないだろうから。

「〜ごとに」は、「党派ごとに意見をまとめる」「学年ごとに代表を決める」「学校ごとに特徴がある」のように、ある動作をする場合、「党派」「学年」「学校」などを一つの単位としてとらえる用例があり、「点」「線」というより「立体」と言えるだろう。(佐)

このごろ・最近

「このごろ(最近)、いやな事件が多いですね」
「本当に、最近(このごろ)世の中がぶっそうになってきましたね」
「このごろ」も「最近」も、話し手が現在いる時点からかなり近い過去のことを言う。それでは「かなり近い」とはどのくらいを指すのだろうか。
「このごろ(最近)、父が痩せてきたので心配しているんです」
「最近(このごろ)円高傾向が続き、留学生たちの

生活は苦しくなっている」

我々は漠然と「最近」や「このごろ」を使っているが、時間的な幅としてはどちらが広いのだろうか。また、この二つの語を我々はどのように使い分けているのだろうか。

「このごろ、ゴミ問題が深刻で…」といった場合の「このごろ」は、少なくても一年以内ぐらいを言う人が多いと思う。それに対して「最近五年間を例にとると、東京で一番深刻な問題はゴミ処理をどうするかということである」のように、「最近」は数年間を単位にすることも可能だ。

「最近、神戸では大きな地震が発生した」

「最近、木村さんに会った」

これらの文の「最近」は、「地震が発生した」「木村さんに会った」という一回限りの過去に起きた出来事を指している。「最近」を「このごろ」に置き換えてみよう。

「このごろ、神戸では大きな地震があった」

「このごろ、木村さんに会った」

どちらの文もどこか不自然ではないだろうか。しかしこれらを否定文にして

「このごろ、神戸では大きな地震は発生していない」

「このごろ木村さんに会っていない」

とすると、文は落ちつく。なぜだろうか。否定文にすることによって、動作の継続を表すことになるからだと思う。「最近」は一回限りの近い過去に起きた出来事に対しても使えるが、「このごろ」は使えない。しかし否定文では両方とも継続した動作を表すので、使うことができる。

「このごろ」でよく使われる文を考えてみると、

「このごろ寒い日が続きますね」

「このごろ、中国ではやっと物価が安定してきました」

「このごろ、彼はいつもジーンズにセーター姿ですが、会社を辞めたんですか」

など、どれも状態を表す文になる。私たちは無意識のうちに、この二つの語の使い分けをしていると言えそうだ。

（佐）

～込む

「込む」とは、ある場所に人や物事がいっぱいに入りあっている状態をさす（「電車が込んでいる」「スケジュールが込んでいる」）。また、複雑に入り組んでいる状態を指すこともある（「手が込んでいる」「込みいった事情」）。いずれも動きがとれないくらいの高密度状態という点が共通している。

動詞の連用形に「込む」がつく表現は、「入り込む」「住み込む」「書き込む」「誘い込む」「ふけ込む」「考え込む」「決め込む」「冷え込む」という具合にたくさんある。よく使うものだけでも約百四十くらいある。「～込む」の意味はだいたい四通りに分かれる。

①ある場所や状況の中へ入っていく。

「部屋へ忍び込む」「賭け事にのめり込む」「ようやく職場に溶け込むことができた」「開いていた窓から雪が吹き込んできた」「どっと遠足帰りの子供たちが乗り込んできた」「汚れがしみ込んでしまった」

②人や物をある場所や状況の中へ入れる。

「柱に釘を打ち込む」「決勝のシュートを蹴り込んだ」「コンセントを差し込む」「荷物をたくさん積み込んだ」「優しく包み込んでくれる母の愛情」「この掃除機はゴミの吸い込みがいい」「食べ物の持ち込みはご遠慮ください」

③すっかりある状態になりきってしまう。

「座り込んでしまった」「セザンヌに惚れ込む」「ぐっすり寝込む」「そのまま黙り込む」「ずいぶんふけ込んだね」「そんなに思い込まないほうがいいよ」

④あることを十分にする。

「事の善し悪しを教え込む」「鍛え込まれた名刀」「その事なら上司に頼み込んでおいた」「たっぷり煮込んだカレー」「すっかり話し込んでしまった」「ずいぶんめかし込んだね」「試験に出そうな単語は徹底的に覚え込んできたよ」

もっとも①と②、③と④は自動詞的意味あいと他動詞的意味あいの相違にすぎないとすれば、「ある状況の中へ入る（入れる）」ことと「ある状態にすっかりなる（させる）」と大まかに分けることができる。そして、「動きのとれない高密度状態」という「込む」

の原意からすれば、そうした「状態の中へ入る」ことはとりもなおさずそうした状態に「はまり込む」こと、つまりそうした「状態になりきる」ことに他ならないのである。
(門)

ごめん

「ごめん」は、①「ごめんなさい」のような謝罪の意味、②「ごめんください」のように訪問や辞去の際の挨拶(訪問と辞去の両方に使える、というのもおもしろいが)、③「戦争はもうごめんだ」のように拒絶の意味に分かれる。

「ごめん」は「天下御免」というような言葉が表しているように、もともとは幕府によって何かを免じられることを意味している。ところが「免じる」ないし「免」という言葉が三通りの意味あいをもっているために、それに応じて「御免」も多義化したようだ。

「免じる」にはまず「許す、許可する」という意味がある。「これまでの働きに免じて、今回の失敗だけは見逃してやろう」というように「〜に免じて」という言い方しか残っていないが、熟語としては「免許」「赦免」「放免」の「免」がこれにあたる。次に、「職を免じる」という時の「免じる」は「やめさせる」ことであり、「罷免」「免官」「任免」などの熟語にその意味が表れている。さらに、「免れる」という読みが表しているように、「のがれる、みのがす」という意味あいがある。「税を免ずる」「お役御免」「免責」「免疫」「免罪」がこの例である。

では、冒頭にあげた「ごめん」の通常の三つの用法と「免」の三通りの意味はどのように連関しているのだろうか。

①「ごめんなさい」は「御免なさってください」がつづまった形であり、「許す」ことないしは「みのがす」ことを相手に乞うている表現と見ることができる。

②訪問や辞去の挨拶「ごめんください」は、自分の訪問や辞去が相手の平常を乱す行為であることに対して、あらかじめ「許し」を求めている、ととることができる。あるいは、辞去の挨拶の方には、「客」

としての「お役御免」のニュアンスをうかがうこともできるかもしれない。

③「そんな仕事はまっぴらごめんだね」の「ごめん」は、由来からすれば、「免れる」「しないこと」ことを「許可」してもらう、という意味あいをもっている。この点は、「ごめんこうむりたい」という言い方によく表れている。もっとも、「ごめんだね」という言い方は、きっぱりとした拒否を表しており、相手やましてお上にそれを認めてもらおうなどという感じは全然なくなっている。

「帯刀御免」や「御免駕篭」といったものものしい言葉だった「御免」が平仮名書きがにあうような、「ごめんください」とか「ごめんなさい」という優しい挨拶言葉に変容していくのは、興味深い言語現象である。（門）

こわい ⇒ おそろしい

さあ

「さあ」は、新たな事態の生起に対する何らかの対応を示す前置きの言葉である。その際、その新事態を積極的に受け止めていく方向性と、消極的に受け止め当惑・逡巡する方向性との両面がある。また、「さあ」という言葉が自分自身に対して発せられる内言の場合と、相手への対応や呼びかけの場合とがある。つまり、つごう四通りの「さあ」があるわけである。

積極性を＋、消極性を－で表して、それぞれの例をみてみよう。

①内言＋

「さあ、やっと終わった」
「さあ出来たぞ」
「さあ、今日から新学期だ」
「さあ、頑張るぞ」
「さあ、起きるとするか」

これらの例では、「さあ」という感動詞によって、事態の決着を喜んだり、新しい事態を新鮮に受け止め奮い立つ気持ちが表されている。

②内言－

「さあ、困った」

「さあ、どうしよう」
「さあ、たいへんだ」
「さあ、これからが難しい」
「さあ、弱ったぞ」
この場合は、「さあ」に新しい事態への困惑、困難さの自覚等が含蓄されている。

③呼びかけ＋
「さあ、どうぞ。お掛けになって」
「さあ、こっちへいらっしゃい」
「さあ、出掛けましょう」
「さあ、お立会い！」
相手に行動や返答を勧めたり、促したりする時に用いる。歌舞伎の掛け合いにも、「さあ！　さあ！」というのがある。

④応答－
「さあ、よくわかりません」
「さあ、どうなることやら」
「さあ、それはどうかな」
このように、相手の問いにはっきりと答えかねるときに「さあ」を発することも多い。こうした「さあ」は日本語版「ノー・コメント！」とも言えるかもしれない。
さあ、あなたも「さあ」の四つの座標についてちょっと考えてみませんか。

	プラス	マイナス
内言	さあ、頑張るぞ	さあ、困った
外言	さあ、召し上がれ	さあ、どうでしょう

（門）

最近⇩このごろ

～さえ

テレビドラマで、夫と妻が激しく言い争っている。
「こんな料理、犬でさえ食わないぞ」
「なによ。大して給料も持ってこないくせに。あなたって、女事務員でさえいやがる仕事を押しつけられているんですってね」
「何だって。僕に向かって、社長でさえ、そんなことは言わないぞ。それに、女のくせに男を馬鹿に

するのか」

ここで「さえ」の前に引き合いに出されている語彙は「犬」と「女事務員」と「社長」だ。「犬」でさえ食べないのに、まして人間が食べられるか、「女事務員」でさえ嫌がる仕事を、まして大の男がさせられているのか。ここで事例として出された語は、それぞれマイナス度が高く軽視していることを表す。

「猫さえ、豚さえ―食べない」と他の動物に置き換えも可能だ。「女事務員でさえ」は、会社というタテ社会が場面となっているため、課長・部長など、他の語にはおきかえ不可能だ。

なぜなら、会社の中で一番つまらないコピーとりの仕事などは「女性の仕事」といった社会の認識があるからで、シナリオライターがこの夫婦げんかのセリフを書き直すとすれば、「年下の社員でさえいやがる仕事を、いい年のあなたが…」と、地位ではなく年齢で比較するしかないだろう。「男女雇用機会均等法」が成立して大分時がたってもいまだに変わらない、仕事上の男女差別を示唆した「〜さえ」の使い方だ。

「社長でさえ」は一転して、会社では一番地位の高い人が引き合いに出されている。プラスの尊重表現の極限というところか。「〜さえ」は極端な事例を出すことによって、話者の感情を巧みに表現できるが、この場合はシニカルな皮肉の応答に利用されている。

「さえ」の前に来るのが尊重表現か、軽視の表現かは文脈を見た上でないと分からず、はなはだあいまいである。たとえば次の例では、夫婦げんかでの事例とは対照的になっている。

「犬でさえ臭いをかぎ分けることができなかった」となれば、「犬でさえ」はプラス材料として使われている。「女事務員でさえ、一晩で資料を作成するのは難しかった」というと、この人はよほど有能ということになる。しかし、「女事務員」といった言葉自体が差別的な響きを持っているために、こういう場合なら「ベテランの木村さんさえ…」のように名前を呼ぶのが普通だろう。

「囲碁大会、社長でさえ勝てる相手だから、君なら絶対だよ」

この場合、社長を会社の地位で見ているのではなく、「囲碁の腕前」で評価しているので、「軽視表現」の対象となる。（佐）

「さえ」の他の使い方を見てみよう。

「でも、木村さんさえ行くんですよ」

これなどは文脈や状況が分からないと、「木村さん」が「さえ」の前でどんな機能を果しているのかは分からない。ただ「木村さん」を引き合いに出すことで「だから、あなたが行くのは当然ですよ」といったことを暗示している。

「後は君さえこのチームに加わってくれれば…」

「ホテルは建った。従業員もいいのが揃った。後はお客さえ来てくれれば…」

これらは「それが加われば完全になる」という発想だ。「君さえよければ」「命さえあれば」、「君」が賛成すれば条件は整う、「命」があれば、他のものはどうでもよい。仮定条件として「さえ」が使われている例だ。その他にも「先進諸国ばかりか、近隣のアジア諸国*さえ（まで）反対しているそうですよ」といった「まで」に言い換えられる累加の表現もある。

さき（先）

「ケ・セラ・セラ　なるようになる　先のことなど　わからない」――投げやりムードのはしりだったのだろうか、こんなシャンソンが一九五〇年代後半あたりから流行した。

さき（先）のこと――もちろん将来のこと、という意味だ。

さき（先）には、右のような、時間的な意味と、もう一つ、空間的な意味がある。

両者のうち、空間に関する場合は、あまり問題がない。「指の先にトンボがとまっている」「目と鼻の先」「賞金が鼻の先にぶらさがってる」「鼻の先でせせら笑う」「この峠の先は、もう越中です」「列車の行先は、アルプスの南、イタリアだ」「二、三百メートル先に信号がありますから、そこを左へ曲がっていただきますと手前どもの店が…」「送り先ははっきり書いてありますね？」「輸出先の文化を考えません

とね、やみくもに売ればいいってもんじゃないんで…」

　これらはほとんどすべて、空間的に見て、「尖端」とか「前方」を意味する。ごく近くても「先」なら、海のかなたでも「先」である。

　ところが、である。時間に関することになると、わが日本語の「さき(先)」は、過去のことにも使い、未来のことにも使う、というのだから話はややこしくなる。

　さきの関白太政大臣、さきの大戦において――これらは過去(それも相対的に見て近い過去)を言っている。

「さき」の変形「さっき」は「先刻」ということ、近い過去である。いわんや「そんなことはせんこく(先刻)承知だい」とくれば、とっくの昔、ずっと前から知っている、ということは明らかである。

　では、「あとさき(後先)の分別もなく」というのは何のことだろう？　過去(後)と未来(先)ということだろうか？

「今後どうなるか、成り行きを見守りたい」というのと「この先どうなるか、…」は同じことだ。なんと、未来のことを「後」とも言い「先」とも言う。あいまい、いい加減…と日本語を非難する人もありそうだ。まして外国人となれば、過去も未来もごっちゃになって使い分けがわからない、と嘆くにちがいない。

　しかし、「先行き不安」と言ったら未来のことに限る。これを「後行き」とは言わない。「先物買い」も「先走る」も将来に関することだ。「この先どこまで伸びるか、すごい大器だ」を「この後…」とは言わないから、これも将来のことに限られている。ただし漢語なら「今後」と言うことは前記の通り。やはり〝あとさきの分別〟をはっきりしてくれという要求が出るのをおさえきれない面は残る。

　映画『カサブランカ』の、ハンフリー・ボガードとイングリッド・バーグマンの恋愛会話はほれぼれするような巧者ぶりを見せたものだが、一つには邦訳のうまさもあったのだろう。

「ゆうべはどこにいたの？」

「そんな昔のことは忘れた」

(間を置いて)「今晩また会える?」
「そんな先のことはわからない」
さらりとかわしたボガードの「先のこと」は、もちろん「将来のこと」である。
英語でのセリフは "I never make plans that far ahead." だったから、aheadは空間的な「前方」のほかに時間(未来)の意味にも使われるわけだ。一部の日本人が「前向きに」と言う時も、空間的に前面を向いた姿勢を想わせつつ、未来指向といった時間的なニュアンスを帯びている。国境を越えて共通する意識の傾向をのぞかせた一例だろうか。(芳)

〜しか・〜だけ

吉川英治の『宮本武蔵』には「お通(つう)」という名の武蔵を慕う女性が登場し「私には武蔵様だけです」と、悲しげに言う場面が何回もある。沢庵和尚(たくあんおしょう)が「武蔵のことばかり考えていないで…」と助言するが、「いいえ、私の目には武蔵様しか映らないのです」と。しかし武蔵は「私の生きる道は剣しかない」と言い、生涯伴侶をもつこともなく、孤高の道を貫く。
ここにわざわざ武蔵を登場させたのは、物事をある範囲や事柄に限定する役割を果たす「だけ」「しか」「ばかり」が非常に効果的に使われていると思ったからだ。
「武蔵様だけ」は彼女の愛する人は限定されているということ、「武蔵のことばかり」は考える対象が限定されていること、そして「剣しかない」は彼の人生の選択の範囲を限定している。「だけ」と「ばかり」は言い換えが可能だが、「しか」は必ず「しか…ない」と「ない」を伴う。
「だけ」の語源は「丈」からきていて、本来は物の高さ・長さを表す名詞だった。「ばかり」の語源は動詞の「はかる」の名詞形「はかり」からきている。いずれも「だけ…ある」「ばかり…ある」と存在を前提としているのに対し「しか」は「しか…ない」と非存在を前提とする。
「遺産として残してやれるのはこの土地と家だけだ」
「えっ、土地と家しかないんですか」

同じ土地と家でも、両者の受け取りようは「存在・非存在」という点で明確に異なる。物事の範囲や事柄、数や量に関係なく、話し手の意識でこの「だけ」と「しか」は使い分けられる。

「今日、もっと寄付したいけど一万円しかないんだ」「今日一万円だけ寄付させてもらうよ」

「彼と私の間にあるのは精神的な絆(きずな)だけです」「えっ、精神的なつながりしかないの」

「いつもアルビノーニのアダージョだけ聞いていますす」「えっ、その曲しか聞かないんですか」

「しか」はさまざまな範囲を表す。全て文末は「ない」になる。例文をあげておこう。「聴衆は三百人しか…」「これほどの演奏ができるのは彼しか…」「この電話は会社内しか…」「この取引は中止するしか…」「この野鳥はアマゾンにしか…」

「しか」を使うか「だけ」を使うか、それはなぜか、考えてみると面白い。　（佐）

仕方がない・仕様がない

「仕方」も「仕様」も「物事を行う方法」であり、「仕方（仕様）がない」とは事態に対処する「いい方法が全然ない」という意味である。「仕方がない」も「仕様がない」もほぼ同じように用いる。

①どうすることもできない。

「すんでしまったことは、仕方（仕様）がない」

「泣いたって仕方（仕様）がないじゃないか」

「仕方（仕様）がないから、あきらめよう」

②ほかにいい方法がない。

「ひたすら謝るより仕方(仕様）がなかった」

「業務命令では、それに従うしか仕方(仕様)がないですね」

「大雪で電車もバスも止まってしまい、仕方(仕様）がないので、歩いて行った」

③どうしようもない。やむをえない。

「サボッてばかりいて、仕方（仕様)がないヤツだ」

「努力した結果がダメでも仕方（仕様)がない」

「まだ小さな子どもがいるんじゃ、残業できなくても仕方(仕様)がないか」

④どうにもならない。たまらない。

「どうにも寒くて仕方(仕様)がない」
「腹が立って仕方(仕様)がない」
「かわいくて仕方(仕様)がない」
「眠くって仕方(仕様)がない」

話しことばでは、「仕方がない」は「仕方ない」、「仕様がない」は「しょうがない」と言うことがある。

ずっと以前だが、歌謡曲に「ションガナイ節」というのがあった。「くよくよしたって　ションガナイ　ションガナイ」というのである。また、別れた人を想っても「仕方ないじゃないの」という歌の一節も耳に残る。①の「しょうがない・しかたない」には、庶民の「諦め」の哲学のニュアンスがあるのに対して、③には、そうした「諦め」を背景とした他者への寛容さを感じる。

おもしろいのは④の用法で、自分の感覚がコントロールできない様子が、いわば「お手あげ」という感じで表明されているわけである。「こう暑くちゃ、やりきれないよ」という時の「やりきれない(文字通りの意味は、やり終えることができない)」や、英語の"I can't stop ～ing"と似た表現である。

上で見たように、「仕方がない」はほとんどすべて「仕様がない」と言い換えることができるが、「たわいない、くだらない」という意味の「しょうがない話(事件)」を「仕方ない話(事件)」と言い換えることはできない。　(門)

次第

「式次第」というように「次第」とは事の順序をいうのが原義。

「事の次第は、こういうことです」
「事と次第によっては黙っているわけにはいかない」という時は、単なる順序ではなく、「事のなりゆき、顛末、事情」という意味である。

「それで私がご挨拶にうかがった次第です」
「いやあ、まったくお恥ずかしい次第です」
といった言い方もある。

「次第」の次の用法は、「順序・なりゆき」とは一見あまり関係なさそうである。
①「次第」が名詞につくと「それによって決まる」という意味になる。
「この世の中、金次第でどうにもなる」
「すべては君の決心次第にかかっている」
「先生の教え方次第で、生徒はどうにでも伸びる」
②動詞の連用形につくと、「〜するとすぐ」の意味になる。
「荷物が着き次第、ご連絡します」
「でき次第、お届けにあがります」
「見つけ次第、連絡してください」
③「次第に」となると、状態が少しずつ「だんだんに」変化していくようすを表す。
「しだいに雨風が強くなってきた」
「先に進むにつれて、しだいに道は細くなっていった」
「慣れれば、しだいにらくになるよ」
しかし、「次第」の順序性にこだわれば、これらの用法も「その事態の次の状態」を示している、という点では「順序」の含蓄がある、と言えよう。①は「それによって次の状態が決まる」という意味であり、②は「次の状態がすぐ続く」のであり、③は「次次にその状態が進んでいく」と言える。（門）

慕う

デンマークの文芸批評家ゲオルヒ・ブランデスは、ロシア人を評して「愛にも憎しみにも、服従にも反抗にも、何事によらず極端派である」と言っている。ここではロシア人が代表に挙げられた形だが、おしなべて欧米人は「愛にも憎しみにも」徹底的で、その表現も激烈である。
日本人は、このような傾向とは対蹠的に、おとなしい。感情の表現がおだやかであるばかりか、感情の動きそのものが欧米人ほど激しくない。アジア諸民族と比べても、感情の起伏にとぼしく、模糊（もこ）としている。そこから、しばしば、煮え切らない、態度があいまいだ、じれったい、という印象が生まれる。
対人感情にしても、じっと自分の胸中に秘めて表

明しないことがある。日本語の動詞「したう（慕う）」の意味は、「恋しく思う。なつかしく思う」のであって、「恋しい」「なつかしい」と口に出すことではない。動詞「しのぶ（偲ぶ）」は、やはり「なつかしく思い出す」とか「想像してしたう。したわしく思う」のであり、「あこがれる」も「強く心をひかれる。思いこがれる」にとどまり、口に出して表現するのではない。

このような、ひとり心の中に愛情（や敬意）を抱きつつ、それを表明せず胸中にあたためているという事態は、欧米人には考えにくいらしい。大学院で日本語学を専攻している各国留学生の中で、アジアの近隣諸国からの学生はそれらの語を「理解できる」と言い、自国語に翻訳可能だと言ったが（現に、漢字には「慕」「偲」「憧」などがある）、アメリカやヨーロッパから来ている学生たちは「自国語に訳しにくい」と答え、むずかしい日本語に属する、と評した。愛にも憎しみにも徹し、それがごく自然に表現される文化の中で育ったかれらには、〝東洋の不思議〟の一つと映じたのかもしれない。

日本人は、そのあいまい模糊たる境地を、むしろ大事にする。「したう」も「しのぶ」も、日本人にとっては語感のよい、愛用すべき語である。藤山一郎のデビュー曲『影を慕いて』は七十年に及んで生き続けており、『無法松の一生』の主人公、荒くれ車夫の富島松五郎も、吉岡大尉未亡人をひたすらしたい続け、長い間それを表明しないことによって人間関係を破綻（はたん）させなかった。まことに日本人好みの人間像である。

喜怒哀楽をはっきり表現せず、態度をあいまいにしていると、誤解されやすい、というのは欧米流の公式だが、いくら批判されても日本人には捨てがたい境地である（同じ欧米の中でもイギリスの文化には、あいまい好みのところがあるので、アメリカ人からは誤解を受けがちで、じれったがられるという）。「愛している」とは明言できず「おそばに置いていただきたい」と辛うじて言う控え目な態度などは、殊に日本人には「ゆかしい」と感じられる。

なお、「したう」には「その人の学問・人徳を尊敬して、それにならおうとする」意味もあるが、その

際、尊敬する人にほとんど接したことがなく、遠い位置にいて模範と仰ぐのを「私淑する」と言う。最近、親しく接して教えを受ける意味に「私淑する」という用例が増えたが、無学を露呈した類の誤用である。（芳）

コラム

数字表現のあいまいさ

数字が入っている表現はいろいろあるが、中にはどうしてその数なのかよく分からないものもある。そんな数のあいまいさを、その由来をたどることによって明らかにしてみよう。数え歌ふうに、一から十まで見ていくことにする。

　まずは「人一倍臆病」という時の「人一倍」はどうして「一倍」なのか。「一倍」なら他の人と同じ、つまり「人並み」ということなのではないか。ところが、「一倍」にはなんと「二倍」という意味があるのである。

「結婚の楽しみは独身の淋しき時よりも一倍して尚ほ余りあれば…」（福沢諭吉『福翁百話』）。算盤の計算の仕方とでも関係があるのだろうか。ともかくも、「人一倍働く」とは文字通りは「人の二倍も働く」という意味なのである。

「二の舞」とは、舞楽で「案摩の舞」の後で、それを滑稽に真似る舞から来ている。人のしたのと同じ失敗をすることを「二の舞を演じる（舞う）」と言う。「二の舞を踏む」は「二の足を踏む」との混同のようだ。

「三国一の花嫁」はどのくらいの範囲で一番美しいのだろうか。この場合の「三国」とはインド・中国・日本を指している。「三国一」は室町時代の流行語で、当時からすれば「世界一」ということだったわけである。

「四苦八苦」は仏教の教える人の世を生きる苦しみの種類を表している。「四苦」とは生・老・病・死。「八苦」は根本をなす「四苦」に、「愛別離苦（愛する人と分かれる苦しみ）」「怨憎会苦（憎む人と会う苦しみ）」「求不得苦（求めているものが得られない苦しみ）」「五蘊盛苦」（物質的存在やさまざまな心のはたらきに執着する苦しみ）」を

加えたもの。そう言われると、人生が「憂き世」に思えてしまう。

人がバラバラにいたり、集まったりすることを、どうして「三三五五」と言うのだろうか。これは、人の連れ立って来る様子が三人ずつ、五人ずつくらいに見てとれることから来ているらしい。友人や仲間とどこかに行くときは、それくらいの人数が多いということだろうか。あるいは、三と五の語呂のよさや、縁起のよさがあるのかもしれない。

「うちの宿六、昼間からお酒飲んでぐうたらしてるんだから…」の「宿六」という夫への愛称(?)もあまり聞かなくなったが、この「六」は「ろくでなし」に由来するとのことだ。実際は、「ろくでなし」の「ろく」は数の六とは関係ないのだが、「家＝宿でゴロゴロしているロクデナシ」をつづめて「宿六」となった。

「そんな七面倒くさいこと、まっぴらゴメンだね」。「七面倒」は「四苦八苦」のように「七つの面倒」というわけではない。この場合の「七」は「多くの数」を代表して「非常に」という意味であり、「面倒」さの度合いを強調している。「色の白いは七難隠す」や「七転八倒」の「七」も同様である。「男がいったん外に出れば、七人の敵あり」の「七」も「たくさん」の意味なのかもしれない。

「村八分」は、学校でも社会でも陰湿なイジメを潜在させている現代社会においては、他人事ではない。江戸時代以来、村民に規則違反のあった時、全村が申し合わせて、その家とは村の十の交際のうち、火事と葬式以外は援助も見舞いもしないことから来ている。ちなみに、他の八つは、①元服、②結婚、③普請、④病気、⑤水害、⑥旅行、⑦出産、⑧年忌である。

結婚式の「三三九度」は、三つ組みの盃で三度ずつ酒杯を酌み交わすことから来ているが、武士の世では出陣・帰陣などの献杯の礼でもあった。「天地人」を象徴する三という数字は陰陽道ではめでたい数とされており、その三の三倍の九は三より更にめでたい数である。生死をか

けた日々を送っていた武士たちは、「九＝苦」といった掛け詞よりも、陰陽道を重んじていたようだ。

「十人十色」は、「日本＝単一社会」という固定観念を打破して、異文化への寛容を養うにふさわしい格言だ。この「十」は「すべて」を表している。「十人並み」「十分」「十全」「十方」の「十」もそうだ。

七や十が「多数」や「すべて」を表しているのだから、十の十倍の百となると「世界全体」を表すことになる。最後に百の「百態」を見ておこう。「百科辞典」「百人力」「百聞は一見にしかず」「百面相」「百も承知」「百貨店」「百般」「百姓」（もともとは単に農民だけでなく、庶民全般をさした）」「百害」「百計」「酒は百薬の長」「百獣」「百草」「百戦錬磨」等。　（門）

しっかり

童話にこんな表現が出てくる。

「おじいさんは、とてもしっかりものでしたから、朝はにわとりが鳴くころに起きて…」

「しっかりものってどんな人」と子供に聞かれて、大人はどう答えるのだろうか。とても一言では言い尽くせない内容を、この「しっかり」という表現は内包している。

まず、このおじいさんの行動が道徳的だということ、もちろん時代や社会によって通用するモラルは違ってくるのだから、今の子供に「早起き＝しっかり者」とは教えられない。考え方が堅実であること、性質が真面目で、あまり駄洒落など言わない人、仕事の内容がきちんとしていて間違いのない人、こうなるとかなり定義は難しくなってくる。

「あの娘さんの家庭はしっかりしているから…」となると、「しっかり」は個人の内容を表すのではなく、この家の両親のしつけ、家庭を支える一人一人の健全な精神的結びつき、一人一人の力が家庭という大きな枠の中で集団としての優秀な機能を果たす時に使われる。

日本の社会で、学校でいじめられた子供が、家に

帰って事実を話そうとせず、問題を大きくしてしまうのは、この「しっかりした家庭」というイメージを自分の存在が崩してしまうのではないかという、漠然とした不安もあってのことではないだろうか。自分の家庭に自分の存在があることで、外から変な目でみられたくない。

この内外意識は、会社や学校・国家についても言える。「しっかりした会社、しっかりした学校、しっかりした国」、全て内的な事柄についての形容だ。

「しっかりした生き方・考え方・研究態度・判断・技術・腕前」どれも、その内容を表す。これらは全てプラス評価として使われるが、「あいつ、しっかりしてるからな。人にはおごらせても自分では絶対におごろうとはしないよ」などと倹約家をさしたり、「いつの間に課長にとりいったのかしら、あれで彼女しっかりしているのよ」などと嘲って使う場合もある。これらはマイナス評価だ。

内的なことをさす場合、他にも「結婚前に君と約束したことはしっかり覚えているよ」と、記憶が確かな時に使ったり、「お父さん、しっかりして」と人間の意識に対して使ったりする。

外的なものに対して使われる場合は、「選挙ポスターは、掲示板にしっかり貼ってください」などのように、後に動詞を伴って両者の結びつきが強いことに用いる。

「しっかり、つかまってください」

「彼は私の手をしっかり握り、しばらく力をゆるめようとしなかった」

ここにあげた貼る・つかむ・握るのほかにも、縛る・結ぶ・巻くなどの動詞が多様される。外的なものに対して使われる場合には、意味は明確であるといえる。

「このカバンはしっかりしていますよ」と持ち物や建物・家具・道具などに使う場合にも、外観と同時に機能が長持ちする時にも、この表現を使う。すぐに壊れてしまった道具に「しっかりしているように見えたんだけど」は、「しっかり」に外観からの話者の判断が伴うことを示す表現だ。　（佐）

しばらく・当分

「しばらく」とはどれくらいの長さの時間を表しているのだろうか。「しばらくお待ちください」という時と「やあ、しばらく」という時とでは、同じ「しばらく」でも、それによって表されている時間の長さはずいぶん違うのではないか。

楽しい時間がアッという間に過ぎ去り、退屈な時間はやたらと長く感じるというように、時間に心理的要素はつきものだが、それにしても「しばらく」の許容する時間幅の伸縮はかなりのものがある。

「しばらくお待ちください」と言われたら、どのくらいの時間までイライラしないで待てるものだろうか。人によっていろいろだろうが、だいたい十分からせいぜい一時間くらいといったところだろう。それに対して、「しばらくぶりに会う」となると、一か月から十年くらいまで、話の脈絡や相手との人間関係、その人の時間感覚によって伸縮自在である。

だから、「円高はここしばらく続く」とか「しばらく事態を静観しよう」などと言われても、どのくらいの期間なのかはきわめてあいまいである。もっとも、当人の意識としては、「そう長くない間」というニュアンスを込めていることは確かなのだが。

似たようなことばに「当分」がある。

「当分はこのメンバーでやっていこう」

「当分これで間に合います」

「当分、通院してください」

「当分、休養いたします」

「当分」も「しばらく」と同じように、話者からみての「そう長くない間」を表している。ただし、「しばらく」が「彼と連絡がとれるまでに、しばらくかかった」というように過去の事態にも使えるのに対して、「当分」はこれから先の期間しか指せない。

将来のことはどうなるか分からないし、まして期間をあらかじめはっきりさせることは難しい場合が多い。そうした事に関してむやみに正確さを求めるより、「それほど長くはない期間」と話し手が思っているということを理解することの方が大切なのだろう。あいまいさをひたすら追放することだけが能で

はない。

（門）

渋い

「君の瞳に乾杯！」は名画『カサブランカ』の字幕スーパーですっかり有名になった。"Here's looking at you, kid." の訳である。

これは訳のほうが華麗でちょっとキザっぽいが、いかにも欧米人の会話らしい雰囲気を巧みに伝えている。イギリス人などは別だが、一体に欧米の文化はきらびやかだ。派手好みだ。日本にも、桃山文化や近世以来の歌舞伎が示すような絢爛（けんらん）たる一面があるが、大体に日本人は地味好みに傾く。あの地味な風格の笠智衆が、小津安二郎作品を通して、「渋い」日本を代表する映画俳優の一人として世界に知られるとは、たしかにふさわしい。

そもそも「渋い」の第一義は、味を示すもので、「渋柿を食べた時のように舌をしびれさせるような味」である。その点ではあまりいい意味の語とは思われなかったらしい。お茶の渋みなどはなかなか捨てたものではないと思うが。

転じて、事物の様子や人の性格・雰囲気などを言う用法が生じた。その中で、

「社長は渋い表情で『賛成』と言った」

など、不愉快そうな（意に沿わない、気分がよくない、気落ちした）様子を言ったり、

「今年の春闘も予想より渋い結果しか出なかった」

のように、金品を出し惜しみする（けちな）様子を言ったりするのは皆マイナスの意味に使われている。

それが「渋い声」となると、「滑らかでない」面を見れば悪い意味だが、低音の魅力が感じられたりしてかえって好まれ、プラスの語感が持たれることが多い。白黒を決めかねる、グレイゾーン的な用法とも思われるが、渋い声のことを a well-trained voice（よく訓練した声）とした和英辞典もあるから、むしろプラス面が大きいとすべきである。こうして、ニュアンスの異なる面が現れ、ついに、

「ロマンスグレイの年齢になって渋くなってきたね、あの男も」

「目立たないが、ああいう渋い人がいてくれてこ

そ、組織の運営はうまく行くんだ」
「さすがに『徒然草』は渋い。中世の世界だ。世阿弥の流れを汲む能の作風にも渋いものがある」
「渋い当たりのヒットを打ってくれますねえ」
「くろうと受けしますね、こういう渋い力士は。〝花がある〟タイプとは逆ですが〝いぶし銀〟の風格ですね」
に至り、「持ち味が地味で落ち着きがある。趣味（好み）のよさがある。深みがある。老巧さがある」などの様子をほめる、完全にプラスの語になる。

和英辞典の「渋い」の部分は、好みが渋い場合は simple yet refined などとあるが、「単純だが洗練されている」と、苦心した訳にも日本語ほどの深みは出ていない。「渋い当たりのヒット」は a well-placed hit と意訳するしかないらしく、日本人のほうが「渋い」が深く身についていることを思わせる。

一九六〇年代、アメリカに〝日本ブーム〟が起きて「シブイ」という語が流行し、ニューヨークのレコード店が「シブイ」と改名したり、サンフランシスコのデパートが「シブイ」商品を売り出したりしたことがあったという。谷崎潤一郎・大佛次郎・川端康成・三島由紀夫らの小説がドラッグ・ストアで売られはじめたのもその一環だったようだ。だが、国民のメンタリティーの深層を支配している文化の差は簡単に埋まるものではないから、単語に先導されて「渋い」意識がアメリカ人の身についたわけではなかった。それはアメリカ人の言動の現状を見聞すればわかることだ。

谷崎が『陰翳礼讃』の中で、東洋人は「美は物体にあるのではなく、物体と物体との作り出す陰翳のあや、明暗にあると考える」と言い、暗がりに沈潜し「その中におのずからなる美を発見する」性向を強調したのは、「渋い」好みの心理的地盤の広さと深さを思わせるものでもあろう。

プラスの意味での「渋い」には、老成した境地、禅の精神空間などに通じるものがあるから、同じ日本人でも年が若すぎたりバタくさい趣味の持ち主だったりすると、どこがよいのか理解できず、何やらファジーな用語だといらいらする向きがあるかもしれない。「渋い」は色で言えば原色とは全く違い、「暗

がりの中に美を求める」という谷崎潤一郎の日本文化観にふさわしく、くすんだ、複雑な色合いの中間色と言うべきで、そこから日本人が得意とする「玉虫色」にも通じてくる。玉虫色となれば、あいまいの極致とも評すべく、いよいよもって「渋い」は心理的成熟のシンボルたりうることが証明されている感じがする。（芳）

下⇓上（しも⇓かみ）

じゃ（あ）

「それでは」がつづまって、「それじゃ（あ）」となり、さらに「それ」が落ちた「では」が「じゃ（あ）」になる。

相手の言葉を受けて、「それでは」こうする、こう思う、というように話をつなげていく時に使う。

「コピー機が壊れているんですが／じゃあ、こっちのを使ってください」

「課長はただいま席をはずしています／じゃ、また後ほどお電話します」

「あしたは雨らしいよ／じゃ、試合はあさってに延期だな」

特に相手の言葉を受けるというわけではなく、話を切りあげたり、別れをつげる時にも使う。

「じゃあ、もう結構です」

「じゃ、そろそろ失礼いたします」

「じゃ、また明日」

この場合の「（それ）じゃ」の「（それ）」は、それこそ「それとなく」話のやりとりを受けているとしか言いようがない。

くだけた万能挨拶言葉の「どうも*」が舌たらずで無意味な表現だとくさす人がいる。そういう人は、「じゃ、また」からさらに短くなった「じゃ」あるいは「じゃーね」にも同様に眉をしかめるだろう。しかし、英語の“Bye-bye”や“Bye”も似たようなものではないか。それに、そうした評価をくだす人がえてして美しい挨拶ことばとして褒めることの多い「さようなら」も、「それでは」や「じゃあ」の文語版とも言える。

「じゃ」の後に「元気で・また会おう・気をつけて

お幸せに」等、その時の出会いごとの万感の思いが込められている場合もある。それに、出会いの交歓の余韻を断ち切らずに軽く中断し、次なる出会いにつなげるには重々しい表現よりも「じゃ(あ)」という短く軽やかな離別のことばの方がふさわしいのではないだろうか。

(門)

じゃま（邪魔）

商店街の歩道を歩いていたら、うしろから「すみません、どいてください」と女性に声をかけられたことがある。びくっとして振りかえると自転車に子供を乗せて走ってくる若いお母さんだった。察するところ、ベルが壊れていてリンリンという音が出ないらしい。そこで、ことばで「邪魔者」をどかそうというのだが、このお母さんには「通してください」とか「おじゃまします」とかいう表現法の持ち合わせがないらしかった。

「邪魔」とは「邪見によって悟りの正道をさまたげる悪魔」というのが元の意味だという（『広辞苑』）。しかし今日では、次の意味で使われる。

①「障害」「さまたげ」

②「おじゃまします」のように、人を訪問するときのあいさつ言葉として。

この①②のどちらの場合でも、さほどあいまい度の高い語句ではない。このうち、②のあいさつ表現としての「おじゃまします」のほうは、むしろ使わないことによるトラブルが問題になるかもしれない。

動物行動学に関する著述家デズモンド・モリス（イギリス）が著した『マンウォッチング』は、人間のいろいろの行動を動物行動学の視点で見て、それを写真つきで解説するというおもしろい本である。これには、人間が他者と必要以上の接近を避けようとする無意識的な行動が写真で示されている。

例えば、行列ではみんなが前後の人ときちんと間隔をあけて立っている。海水浴場ではマットを敷いて自分たちのテリトリー(なわばり)を主張し、そこに他の人が入ってこないようにしている。また満員電車のように相手との間隔が保てないときには、相手

から視線をそらして無視することにより(非人間化)、気分的な距離を保とうとしている、という具合である。こうした過接近が起こると、その緊張を緩和するために、日本人の場合には、「おじゃまします」などと、一声かける。

西洋人は自分で自分を律する自律タイプと評され、これに対して日本人は、世間が自分を見る目を考えて行動する〝他律タイプ〟と言われる。こちらは〝気がね民族〟である。こうしたメンタリティーを持つ集団の成員にとっては、他人のじゃまになることはもっとも心が痛むところである。そのため、外出したときには何回となく「おじゃまします」を言う。

花火大会で河原の芝生の上に自分の見物スペースをとるとき、すでに陣取っている人に「おじゃましてよろしいですか」と声をかける。乗り物やレストランなどで見知らぬ人と相席になるときなども「おじゃまします」と声をかける。走行中の車が、前の車を抜くときにクラクションを鳴らすのも、「おじゃまします」または「失礼します」のサインだろう。

いずれにしろ、こうした習慣は、対人関係に伴う緊張緩和に役立つ〝緊張緩和語〟つまり有効なあいさつの意味を持つ。だから、レストランで「おじゃましていいですか」と声をかけられたときに、「別に私の店ではないのだから、私に聞かれても困る」と応じたのではカドが立つ。「どうぞ」と答えることでまるく収まる。だれにとって邪魔なのか問うたりするのは野暮で、あいさつの効用を理解しておけばすむことかと思う。(芳)

仕様がない ⇓ 仕方がない
少々 ⇓ ちょっと

知る・分かる

「邪馬台国がどこにあったのか、まだ誰も知らない」
「まだ誰にも分からない」
この二つの表現は非常に似ていて、違いを説明するのは難しい。しかし「邪馬台国には、卑弥呼と呼ばれる女性が君臨していたことを知っていますか」

とは言えるが、「分かっていますか」とは言いにくい。なぜなら、既にそのことは『魏志倭人伝』に書かれていることで事実であるから、その知識を問う場合には「知る」が適当で「分かる」は意味合いが異なる。

いちばん良い例は数学の計算の際に言う「この問題の意味がやっと分かりました」だろう。計算は知識では解けない。この場合は、数学の答えは厳然として存在し、計算するうちに答えが明らかになることが「分かる」であり、「知る」は誰か、または何かによって既に知識を得ている場合に言うのだ。

テレビのクイズ番組でも知識を問うものは「知っていますか」だし、ちょっとしたヒントの積み重ねで徐々に頭の中に答えの輪郭が描けてくるものは「分かりますか」だ。「知る」は意識的に頭に入れ込んだ蓄積であるのに対して、「分かる」はそれほどの努力を伴わない、いわば無意識的なものと言えるだろう。

ガリ勉に天才はいない。いくら「知識」を積み上げたところで「多くのことを知った」に過ぎず、ちょっとした思いつきから「万有引力の法則」を発見したりはできないからだ。頭の中に詰め込む知識には限りがあっても、思いつきに限りはない。

「宇宙では重力がないから、人間は立っていられないんだよ」と言うと、子供は大人に向かって「どうして、そんなことが分かるの」ときく。大人は経験によって、重力の存在や空気の性質、立つという行為の物理的意味などを知っている。他から得た知識で知っているのであり、決して「分かった」のではない。だから、この場合は正確には「どうして、そんなこと知っているの」だが、大人は子供に偉いところを見せたいから、「分かるの？」と言われた方がきっとうれしいに違いない。もしかしたら、頭の良い子供たちは「分かる」を使った方が大人が得意そうな表情になるのが「分かって」、そう聞いているのかもしれない。

別の角度からこの二つをくらべてみよう。「分かる」は存在しながら、その実態がつかめない時に使うことが多い。たとえば、電車の向かい側に、確かにどこかで会ったことがある人が座っている。しば

らく見つめているうちに「分かった」となる。ワープロの使用説明書を読んでも全然「分からない」、「ミラン・クンデルの小説で彼は何を伝えようとしているのか分からない」のようにだ。「知る」は存在がゼロのものを頭の中に認知することだ。

恋人に「あなたのことを、もっと知りたいな、知ることができれば、…」と言うと、「でも、あなたに知られると困ることがあるの」などという返事が返ってくる。これを「分かる」にしたのでは、「あなたのことをもっと分かりたい…、分かることができれば…」「あなたに分かられると困るの」では喜劇になってしまう。

「〜たい」や「可能」「受け身」の表現は「分かる」のように無意志的行為の場合は使いにくいのだ。（佐）

数人

ゼミの教授が学生から「今日、数人でお宅にうかがいます」と聞き、四、五人分のもてなしの用意をしていたところ、学生が二人しか来ず、拍子抜けするとともに、「数人」の「数」に対する感覚がずれていることに驚かされた、という話を聞いたことがある。

実際に、「数年前」のアンケートでは、中学生の大半が「数人」とは「二、三人」であるとしているのに対して、戦前生まれの人々の多くは「五〜六人」と答えている。受け取る人によって、「二〜六」の幅ができてしまうわけである。若い人々の間では、「数〜」は「複数であればよい」というような理解でもあるのだろうか。戦前生まれではないが、一応の年配の私にとっては、二人はとても「数人」とは思えないのだが。

「数回、数本、数冊、数個、数千円、数日後」等とけっこう使う表現なだけに、こう世代や人によってそれが示す範囲が違うとなると、使い方には慎重であらねばならないようだ。例えば、さきほど紹介したアンケートの行われた年にしても、「数年前」などと言わず「一九××年の」アンケートと言う方が正確なのだろうが、残念ながら孫引きなので引用者が用いた「数年」という表現を踏襲せざるをえない。

冒頭の例でも「数人」ではなく「二人」、予定のはっきりしない人がいる場合には「二、三人」と言っておけば、教授を拍子抜けさせることもなかったわけである。（門）

すごい

「すごい」は「ものすごい」とも言うように、「ぞっとするほど恐ろしい・気味悪い」が基本的な意味である。

「すごい目つきでにらまれた」

「夜中にすごい悲鳴が聞こえた」

「すごい」は単に恐怖感だけではなく、中世文学などでは、荒涼とした景色や戦慄（せんりつ）を感じさせるような美しさも「すごみ」として表現されてきているところからすると、「心に強烈な衝撃を与えるような物事のさま」をいうようだ。

「彼はまったくすごいヤツだ」という時は、「恐れ」の感情が全くないわけではないが、「驚嘆・賛嘆」といった感じの方が強い。同様に「すごい作品」「すごい美人」「すごい成績」は強いプラス評価を表している。

恐怖感や価値評価をはなれて、ただ「強烈さ」の印象だけが残り、「ひじょうに」や「たいへん」よりもさらに甚だしい状態を表すことも多い。

「すごい雨だ／すごく降っている」

「すごい人だかりだ／すごく混んでいる」

「すごい暑さだ／すごく寒い」

もともとは「悪い」という価値判断を表す「ひど*い」も程度の甚だしさを表すのに用いられることがある。しかし、「すごい／すごく」がプラス評価、マイナス評価の両方に使われるのに対して、「ひどい／ひどく」の方は、「ひどい」のマイナス評価の印象が強いためか、事態の悪化を表す時に限られる。

「ひどい寒さ・頭痛・災害・病気」

「ひどく降られた・困った・悩んだ・痛い」等。

本来は心理状態や価値判断を表す語が単に程度を表す表現に転用され、しかもそうした用法がほぼ口語に限られるという点で、「すごく」「ひどく」は英語の terribly, badly 等の表現に似ている。（門）

少し⇓ちょっと

すみません

「すみません」は、「済まない」(決着がつかない、きまりがつかない)から来ている。「済む」は「澄む」から転じた語だが、どうして「澄む」ことが「済む＝終わる」ことになるのだろうか。そこには、濁っていたものが「澄む」こと、つまり「濁る→澄む」という状態の変化が「終わる・決着がつく」ということなのだ、という感覚が見られる。

こうした「澄んでいる」ことこそが本来のあり方という考え方からは、「清明心」を是(ぜ)とし、「穢(けが)れを払う」ことを中心的な儀式とする神道の影響がうかがえる。

「荷物おもちしましょう／あ、どうもすみません。お願いします」

「遅刻してしまって、すみません」

「ちょっと、すみません。ここから駅へはどう行ったらいいんでしょうか」

「すみません」には、感謝、謝罪、呼びかけの三通りの用法がある。興味深いのは、「感謝」と「謝罪」という一見あい反するようにみえる気持ちが、「すみません」という同じ表現で表されている点である。

R・ベネディクトは、文字通りは「終わらない」という意味の「すみません」は、「恩を受けたが、恩返しができない」ので「事態が決着しない」ということから来ている、と解釈する(『菊と刀』)。そのために、「恩を受けた」ことへの「感謝」の念と、「恩返しができない」ことへの「謝罪」の念の両義性が生じる、というわけである。

一方、柳田国男は、「すみません」は「(気が)澄みません」つまり「過分なことをしてもらって、心が安らかでない」という意味だとしている(『毎日の言葉』)。柳田が「過分」ととらえた事態の中に、ベネディクトは「恩の貸し借り」の不均衡を見ている。

たしかに、「そんなことまでしてもらっては、こちらの気がすまない」といった言い方からは、そうしたニュアンスが感じられる。

しかし、「そんなに好きなら、気のすむようにとこ

とん付き合ってごらん」というように肯定形の時には、「過分ではない」というより、「気がはれる」「気持ちの上で満足する」といった意味だから、「すみません」という表現の内に「恩の貸借関係」を見るのは深読みかもしれない。

いずれにしても、謝罪と感謝のことばが、「すみません」という同じ表現であることにとまどう外国人はけっこう多い。また、日本人が、感謝の「すみません」からの語感で、"Thank you." と言うべき時に、つい "I'm sorry." と言ってしまったというような話もよくきく。

しかし、考えてみれば、「謝」という漢字自体が「謝罪」と「感謝」の両義性をもっている。「謝意」「謝辞」は「お礼の気持ち(ことば)」であると同時に、「おわびの気持ち(ことば)」でもある。また、英語にも "I'm sorry to disturb you. And thank you!" (お手数かけてすみません。ありがとうございます)という言い方がある。そこで述べられている心情は、まさに前述の柳田が解明している「すみません」の心理に通じている。「すみません」の両義性を特に日本的心情としなくてもいいのではないか。 (門)

～する

丸山真男は、個人の自由な行為を保証する西欧近代的価値観を「する」価値として、身分や出自に価値をおく封建的な「である」価値と対比させた(『日本の思想』)。たしかに、「する」は「スポーツ(買い物・練習・勉強・食事・報告等)(を)する」という他動詞の典型的な用法や、「行くことにする」「やめにする」「休憩にする」「ビールにする」といった意志決定や選択を表す表現、「息子を医者にする」「値段を高くする」「椅子を台にする」というような意図的に働きかける行為の表現に用いられる。「する」は、主体的・意志的な行為を表す他動詞的なイメージがきわめて強い動詞である。

しかし、「する」には、主体の意志のいかんにかかわらず生起する現象が主語にくる場合もある。「音(匂い、味)がする」「寒けがする」「胸騒ぎがする」「頭痛がする」。いずれも視覚以外の感官でとらえられた

現象である点が興味深い。視覚のように意志的・能動的でなく、おのずから「感じる」自発的な受動現象なのである。「する」を構成要素とする擬音語・擬態語にも、こうした傾向が見うけられる。上例の意味あいを擬音語・擬態語で言い換えれば、「がやがや(ぷんぷん、ぴりぴり)する」「ぞっとする」「どきどき(わくわく)する」「がんがんする」となろう。

「ぽっちゃりした顔だち」「がっしりした体格」「さっぱりした性格」「ぽかんとしている」「つまらなそうにしている」といった表現での「する」にも、他動詞の意味合いはなく、性質や状態を表す自動詞である。また、「十億円もする絵画」とか「あと十分もすると電車が出ますよ」の「する」も「値する」「経過する」という意味の自動詞である。

つまり、「する」は「運動する」「デートする」という表現が表しているように他動詞の代表格であるだけでなく、性質や状態を表す自動詞の役割を果たす側面もあり、いわば動詞一般を代表しているわけである。

「する」の他動詞的働きの強さを思えば、丸山の「である」価値と「する」価値という簡明な対照の妙の揚げ足をとるわけにはいかない。しかし、日本語の「する」という動詞が、いわば近代西欧的な「する」価値の世界からはみ出して、「である」領域まで侵出しているという点はおさえておきたい。

池上嘉彦は、英語のように行為者(主語)と行為(述語)という構造を土台とする言語を「〈する〉的な言語」と呼び、日本語のように過程を全体的にとらえる言語を「〈なる〉的な言語」と呼んで、対照している(『「する」と「なる」の言語学』)。例えば、結婚通知葉書などによく見られる文章、「私達、6月に結婚することになりました」は「6月に結婚します」では、なんとなくおさまりが悪い。「…と思う」という文体よりも、「…と思われる」という文体が好まれるのも、「する」より「なる」という発想の方が日本語に親しいからだ、という説もある。

ともあれ、「〈する〉的な言語」の中核である「する」が、性質や状態を表す表現にも用いられているということ自体が、日本語の「〈なる〉的」な構造をうかがわせるところかもしれない。　(円)

正論

この語を辞書で引くと「正しい議論」「道理にかなった正しい意見・議論」などと出ている。

そうなら、正論を吐くことは立派なことでケチのつけようがないはずだが、そうは一筋なわで行かないからオヤと首をかしげたくなる。

「キミの言ってることは正論だからイヤになる、とよく会議で言われてしまいます」

と中年のジャーナリストが言っていた。二十年ほど前にも、某週刊誌が、近頃気に入らない文化人として十人ほどをリストアップした中に、気に入らない理由として「正論を吐く」からと書かれた人があった。

これには、同情あるいは義憤をおぼえずにはいられない。道理にかなった意見を言うことが非難の対象になるとは。

ところが、どうも、「正論」の解釈が違うらしいのだ。理詰めで、論理的にスキのない議論の進め方をすることを「正論を言う」という習慣が、あちこちに発生しているらしい。意見内容の当否の以前に、意見展開のプロセス(論法)で、好き、嫌い、と感情的反応を見せるわけだ。

いかにも「理詰め」を息苦しいと感じ「理くつ」を敬遠したがる日本人らしい。理詰めの人はウルサ型の一種とされてしまう。加えて、あんたの結論は悪くはないが、もっと情緒的な議論展開にしてくれ、あるいは、人の意表をついてドキリとさせるような言い方で眠気をさましてもらいたい、議論の関節をはずしてチャランポランにしてくれ、という要求も、殊に現代のマス・カルチュア(大衆文化)的心理の中では強まりがちである。

正論の反対は「邪論」「暴論」「俗論」だと筆者は理解し、邪論はしりぞけるべきだと確信してきたが、邪論はブラック・ユーモアなども含んでいてかえって面白い、という心理からも「正論」にマイナスの語感が付着してしまったらしい。

俗受けを生命とする週刊誌が「正論を吐く」論客

を目のかたきにしたのは、邪論だろうがチャランポランだろうが興味本位が喜ばれる傾向の中で、反論の余地のない手がたい議論展開はケムたいからイヤだ、ということのようだが、内容よりプロセスやスタイルをケムたがるのだったら、そちらは「整論」とでも書くようにしたらどうか（プロセスも整っているのが本当の「正」だが）。「正」は内容の評価を反映したものとしないと、まぎらわしく、いらいらする。

こんな、辞書の「正論」の定義からはみ出してブレている部分は整理・清算したいものだと思うが、ところが、一方、こんな説明もあるのであった。これに出くわした時は心底から驚愕した。

『例解新国語辞典』には、「りくつとしては、だれからみても正しい意見」と定義した上で、次のような説明が付記してある。「かたちの上では非のうちどころがないのだが、世のなかの現実をよく見ているかどうかということになると疑問があり、現実ばなれしていて心から承服できない意見についていうことが多い」。だから、「全面的に賛成できる意見にはこのことばを使わない方がよい」という忠告まで付いているではないか。

「全面的に賛成できる意見」にこそこの語を使うものだと筆者は信じてきた。いまでも信じている。この辞典の忠告にしたがうと、筆者の理解も信念も放棄しなければならない。こんな気の重い話はない。

ここには、じつは、日本語のあいまいさというだけではなく、日本人の思考法、意見の持ち方の特色が露頭している。そして「りくつ」という語に対する評価の低さが濃縮して示されているようだ。

「りくつとしては、だれからみても正しい意見」とは、論理的文脈（logical context）がスキ間なく整っている、というのであろう。だが、世の中の現実、すなわち社会的文脈（social context）をよく見ていない、そこから浮いている（空論？）というわけだ。二つの文脈が食いちがった場合、後者を優位に置く見方である。本当にスキ間のない論理は世の中の現実をフィードバックさせたものであるべきで、両者をことさらに分離して優劣を分けるのは「りくつ」の本質を理解したがらない日本人的な思い込みの影響ではなかろうか。

「りくつとしては正しい」のはタテマエ、現実そのものを承認・肯定するのはホンネ、両者を分離させて前者を信ぜず軽蔑し後者を信ずるのが、日本の文化の一特色である。スキャンダルをおこした指導者は悪い、というのは〃正論〃（タテマエ）だが、力のある指導者にスキャンダルはつきものだから正論を吐いてもソラゴトだ、とよく言われるような、〃世間の論理〃（ホンネ）の根強さを辞書の記述に（鏡に）反映させたもの、というリアリズムを代表するのがこの辞書の記述（忠告を含めた）だと解すべきなのだろうか。頭を抱えさせられているところだ。（芳）

せっかく

アメリカ在住の日本人二世に、自分の子供には上手な日本語を話させたいと願っている母親がいた。その子が会話の中に「せっかく」という副詞を用いるのを聞いた時、母親は、この子も日本語がわかってきた、と嬉しさをおさえられなかったという（渡辺実教授。雑誌『言語』昭和五〇年一二月号）。

「せっかく」を使いこなせれば日本語の話し手として一人前だ——なぜそうなのか？　と日本語に慣れきった人は首をかしげる。が、これは理由のあることだから、説明して行こう。

先ず、「せっかく」はもともと「折角」と書き、「力をつくすこと、わざわざすること、労力をついやすこと」などを意味する名詞である。それが副詞として使われる時は「せっかく」と仮名書きにすることが多くなったが、その場合の語義は二つある。

一つは「せっかく勉強して合格するんだな」「せっかくご自愛ください」のように、「つとめて、せいぜい」を意味する場合。これは特別に感情をこめない客観的表現というべきもので、格別こみ入った用法というものではない。

もう一つの用法が問題の点である。

「せっかく暇を作って手伝いに来てやったのに、当の本人がゴルフに出かけてしまったなんて…」

「役人がせっかく書いていてくれる原稿ですから、そのまま読みたいのが人情というものですけど、それじゃあ私が、あの女性長官は政治家じゃないのか、

デクノボウかと言われますんでね」
「せっかく庭の草木に水をやったら、すぐ後から大雨が来て…」
ここには、その行為が無駄になるのが惜しい、無駄になって残念（くやしい）…という感情がこもっている。純客観的表現ではなく感情をダブらせた、むしろ感情を先行させた表現である。ここが、日本語に慣れて来るまではむずかしい、という点なのだ。
というのは、日本語にはこの種の、主観的評価や感情にリードされた叙述が多く、そのための専用語とも言うべき「どうせ」「せめて」「よっぽど」「まさか」*「なまじ（なまじっか）」「ままよ」…などの類がそろっている。この事実は金田一春彦・板坂元教授らによって早くから指摘・分析されてきた。
その傾向が極まると、三十年も前、相撲の陣幕審判（力士時代は島錦）が場内説明によく「残念ながら軍配通りで西方の勝ち」と言って笑いを呼んだような、ユーモラスな〝勇み足〟まで生まれる。この用い方は別格としても、この種の主観・客観の複合的表現が飲み込め、使いこなせれば、日本語をマスターした証拠の一つにできる、というほどのものだ。
「せっかく」を用いるわが子の日本語会話に母親が「やったァ！」とよろこんだのも、この用法が耳に入ったからであろう。
この母親のエピソードに注目した金田一教授は、筆者に語っていわく、「せっかく手伝いに来たのに…」は英語に訳すのがむずかしい、まして、数学の教科書に日本語の日常会話風の「ナマジッカ直角三角形デアルノデ…」「サスガ二等辺三角形ダケアッテ…」などの表現をまじえたら国際的に通用するはずがなかろう、と。日本人の身についてしまったこの種の主観的副詞が、それを外国人にわからせようとすると意外な難物になる。異言語・異文化は日本自身をうつす鏡だから、国際理解のもやもや（あいまいさ）の所在の一つを、こんなところにも見出すべきだろう。

（芳）

コラム

日本語表現での男と女

「あの人、しとやかな方ね」
この「方」は男性だろうか、女性だろうか。もちろん女性である。「しとやか」は物静かでたしなみがあり、上品な様子を述べた言葉だが、女性の褒め言葉にはなるが、男性には使えない。
それでは男性で「しとやかな人」を何と表現すれば良いのだろう。「物静かな」「控えめな」「上品な」、さまざまな言葉が浮かんでくるがどれも「しとやか」とは異なる。
なぜ男性には、これにあたる表現がないのだろう。おそらく日本の社会が男性に「しとやかさ」を求めていないので、表現も存在しないのではないだろうか。
日本語をこのような視点で見てみると、男性にしか、あるいは女性にしか使えない語彙(ごい)が多多あることに気づく。小説の中から、無作為に抜粋してみたい。

押しかけ女房　「嫁ぐ」という言葉が象徴するように、結婚は女性が男性の姓を名乗りその家に入ることだ。最近は結婚に対する考え方も変わり、夫婦別姓の問題などもでてきているので、そのうち「おしかけ亭主」という言葉も市民権を得るかもしれない。
新妻　この反対語は「新夫」だろうが、いまだ耳にしたことがない。夫は社会的な経験を積んでいることに価値があり、妻は初々しい方が良いという概念が見え隠れしている。
未亡人　夫に死なれ再婚しない人はこうよばれる。「夫が亡くなったのにまだ死なない人」というのは何ともひどい言葉だ。妻は夫の死に殉ずべきだという、原始家父長制の匂いの残った言葉だ。もっとも女性が男性より長生きする社会では、未亡人が多いという理由から、この言葉も死語になっていくかもしれない。
やもめ　配偶者を失って独身でいるものという意味で、男女両方に使われることばだが、「男やもめ」と「男」をつけて男性に使われること

が多い。

売れ残り　最近は女性が男性を選ぶ時代といわれ、実際に「売れ残る」のは男性に多いという現実がある。しかし、男性の「売れ残り」は耳にしたことがなく、どういうわけか女性にのみ使われる。適齢期が過ぎてもなお独身でいる女性を指していう。

この「適齢期」という言葉も問題で、男性には適齢期はあって無きが如し。女性は会社に就職しても「結婚退社」が当然という風潮は依然消えず、いつまでも仕事に夢中になっていて、結婚しない女性は「ハイミス」と言われたりする。

この言葉は外来語で響きは軽いが、言われた人にはこの上ない侮辱の表現だ。なぜ男性には「ハイミスター」がないのか。そもそもミス、ミセスの区別さえなくなり、ミズになりつつある時代に「ハイミス」は、あまりに時代遅れだ。「婚期を逃す」も同様。

年増（としま）　娘盛りを過ぎたころの女性をさす言葉で、江戸時代には二十歳前後の娘さんにも使ったようだ。寿命が伸びるのと平行して、この「年増」の年齢もあがっているようだが、いずれにしても女性にとっては不必要な語彙に思える。これも男性にはない表現。

※

女性の動作に対しても社会の目は光っている。つかこうへいの小説には「あばずれみたいな座り方」「あられもない女」などという表現が頻繁に出てくる。「あばずれ」は、人ずれしてずうずうしい女性やその態度を言い、「しとやか」との対極にくる。女性は「しとやかが良い」という評価を裏付けるような言葉だ。

「あられもない」は女性の態度や振る舞いに似つかわしくないという、やはり、社会的な通念が根底にある。

※

「女性編集長」「女医」「女弁護士」

テレビドラマのタイトルには、いまだにこうした言葉がいかにも「かっこいい」という印象

を持たせるかのようにつく。確かに女優が演じる弁護士や医者は男性にはない切れ味を見せ、「かっこいい」。
英語では、チェアーマンがチェアーパースンに変わりつつある。日本でも社長・弁護士・医者・代議士、その他社会的地位の高い仕事に女性が進出している時代に、いつまでも「女」をつけるのは異様だと思う。

※

男性にのみ使われる表現も拾ってみよう。
「がっしりした体つき」「色の浅黒い」「二枚目の魅力」「にやけた野郎」
これらは男性を形容する時によく使われる表現だ。「がっしりした」や「色の浅黒い」は女性にも使えるが、男性に対して使った時にはプラス評価であるのに対して、女性に使った場合にはどちらかと言えば、マイナス評価につながる。

※

「一本気」「りりしい」「頼もしそう」も、男性の内面を褒めるもので、女性に使うとすれば男性的な女性をさすことになるだろう。「馬上のジャンヌダルクは実にりりしく…」
これと反対の表現に「なよなよした男」がある。柔らかくしなやかで弱々しい様子も、男性に使われると頼りにならない男性の典型のようだ。

※

このほかにも、日本語表現には男女の性差から生じた言葉が実に多い。時代と共にどのように変化していくか興味深いところである。（佐）

ぜんぜん（全然）

言語変化によって、もとは「誤用」とされていた用法が一般化し定着する例として、よくあげられてきたのがこの「ぜんぜん」である。
「その事柄を全面的に否定する様子」という元来の意味を本位にする人は、「ぜんぜんわからない」「ぜんぜん読めない」をよしとし、「ぜんぜん素敵」や「ぜんぜん笑っちゃう」を誤用とする。以前は、あとの

用法に嫌悪感を感じるという人が多かった。

しかし、多くの辞書は「俗な用法」と断わって肯定的な意味にこの語を使う用例も示している。「完全に」や「非常に」という意味での「ぜんぜん同感です」「ぜんぜんおもしろい」などである。

俗用とか誤用とか評されるこの用法は、戦後早々の新聞の文章にも見かけられたし（「（政府の憲法改正試案は）憲法の中核ともいうべき天皇の統治権については、現行憲法と全然同じ建前をとっている」一九四六・二・一、毎日新聞、など）、古くは明治の文豪の書いたものにさかのぼることもできる。

以上は副詞としての用法だが、かつては形容動詞としての用法もあった。この場合には「全くそのとおりであるさま。すべてにわたるさま」の意味となる。その用例として「全然たる狂人」をあげている辞書もある（『広辞苑』では名詞に「たり」がついた形とする）。

この用法は今日ではほとんどないが、ここには副詞の肯定的用法を誘い出す素地があったと言える。言葉の意味は多数決で決まるところがあるから、いつのまにか市民権を得ることはある。「ぜんぜん」の肯定的用法は、そうした事例の一つである。

あいまい語という観点からすると、肯定的に使っても否定的に使っても、それによってコミュニケーションに決定的な支障が出ることはあまりない。しかし日常会話では、

「雨、やんだ？」「ぜんぜん」

というふうに簡略化して使うことがあり、このときには小さな行き違いが起こる。

「やんでないんだな」「いや、ぜんぜん降ってない」

（芳）

〜そうだ

「そうだ」の用法を大きく分類すると「伝聞」と「様態」の二つに分けられる。

「天気予報によると台風が接近しているそうですよ」

「司法試験に合格されたそうで、おめでとうございます」

「ベトナムはドイモイ政策をとっているそうです」
これらは「伝聞」の「そうだ」で、自分で見たのではなく、他の人から聞いて知ったことを、そのまま話し相手に伝えている。そこには自分の判断は全く入っていない。

昔ばなしでは「おばあさんが桃を切ると、中から元気な男の子が飛び出してきたそうな」と「そうな」が使われている。「そうだ」の古風な言い方として現在も使われている例で、作者が耳にした話をそのまま伝えるという手法だ。

それに対して「様態」の「そうだ」は、自分の判断や勘が入り込んでくる。シャーロックホームズが犯人とおぼしき男の部屋に踏み込み

「暖炉の中に何かありそうだ」
「犯人がどこかに隠れていそうだ」
「ここに脱ぎ捨ててある靴は、あの大男にも履けそうだ」
「これだけの証拠では犯人を捕まえられそうにない」

と、推定していく。そこには確かな根拠があるわけではないので「そうだ」が頻繁に使われることになる。状態を表す動詞の後に使われる「そうだ」は、話者の判断がきわめてあいまいなことを表している。

それではこんな場合はどうだろうか。追い詰められた犯人の側から「そうだ」を使ってみると

「ホームズは自分を捕まえそうだ」（ホームズに捕まりそうだ）
「決定的な証拠の品があがりそうだ」
「こんなところに隠れていては病気になりそうだ」
「のどが乾いてどうかなりそうだ」

自分が恐れている悪い状況に自分自身が陥る直前の状態が、この「そうだ」によく表れている。

この「そうだ」は

「こんな簡単な問題なら彼女でも合格しそうだ」
「今晩あたり彼がプロポーズしそうだ」
「A教授は間もなく今の研究を完成しそうだ」

のように、自分自身のことではなく他のことがらに対して、「何となくそうなるのではないか」といった漠然とした推量から使うことも多い。

今までの「そうだ」は精神的・心理的なものであったが、外国人学習者に指導する際、初級指導項目にも必ず出てくるのが
「あっ木が倒れそうです」
「火が消えそうですよ」
「上着のボタンがとれそうです」
といった目で見て判断できる現象だ。当然あるべき状況から、悪い状況へ移る直前の状態を表すもので、絵などを使って教えると大変分かりやすい。
形容詞＋「そうだ」の文も
「このお茶、熱そうですね」
「何だかまずそうな食事なので食べたくありません」
「こちらの方がおいしそうですよ」
「病気だとうかがって心配していましたが、お元気そうでなによりです」
のように、目で見て判断したことを「そうだ」を使って述べる。これも外国人学習者にとって分かりやすい用法だ。ただし、「熱そう」と言った時、本当に熱いかどうかは分からないのだということを理解させたい。缶ジュースの熱いものと冷たいものを用意し、「熱そうですね」といって、缶ジュースを触って「あっ、あつい」などと言うと、この「そう」の意味が理解させやすいように思う。

（佐）

相当

物事を誇張して表現するのが好きなチェコ人は、何にでも「最大の」と言うのが得意で、ついには「二番目に最大の」という表現まで出て来たという。日本語でも、やたらに「ものすごく」を使うことが増え、「ものすごく上品」「ものすごく可憐（かれん）」など、考えてみれば奇妙な組み合わせまで出現しているが、しかし、元来は、大げさに物を言うのは日本人の好みではなかった。
抑制の文化こそ、長い間に日本人が育くんできた伝統だ。「ほどほどに」「ほどよく」「ほどがいい」など、ちょっと含みを持たせた、ファジーな表現はいかにも日本語らしい。
そこから進んで、もう一ひねり加わると、

「こりゃ相当なもんだぞ。有望な新人が出てきたもんだ」

「あんた相当なもんだね。よくもそんなにぬらりくらりとやってられるね」

のように、表現を抑制して事実を強調するレトリックも出てくる。

もともと「相当」は、①「それに当てはまること。該当。妥当」、②「つり合っていること。ふさわしいこと。匹敵。相応」という意味の語で、①「敵闘賞に相当するはたらき」「MVPに相当する活躍」「罰金十万円が相当である」、②「知事にも相当する貫禄」「トップリーダーに相当する力量」のように使われてきたが、これらは「敵闘賞をもらってもいい」「知事であってもおかしくない」という意味合いにもなるから、すでにあいまいにブレる余地を含んでいる。

それが「相当なもんだ」となると、「妥当」や「相応」ではなく、程度が強い・ひどい…ことを意味している。「立派なもんだ」「大したもんだ」「ひどいもんだ」「すごいもんだ」…と言いたいところを「相当なもんだ」と中和的表現におさえたのである。

「相当いい順位が期待できそうだぞ」

「相当頑張ってますからね、あの子も。相当いい結果が出せますわ」

のような副詞的用法も同様。「かなり」「よほど」と強く言いたいところを、表現を軽くし、やわらげるという手法をとった。

昭和初期、日本の戦前の文化は爛熟の様相を深め、モボ（モダンボーイ）、モガ（モダンガール）、モチ（勿論）、ダンチ（段ちがい）などの新語が東京の歓楽街やオフィス街から全国にまき散らされた。そんな時代の東京小市民のセンスを代表した一人である徳川夢声が「相当なもんだ」を愛用し、広めたと言われる。日本伝統のあいまい好みに加えて都会人的なシャイな感覚からも表現の抑制・屈折が生まれたわけだが、その動きの中には、同じ夢声が始めたとされる、「どうかと思うね」という言いまわしで不満や非難の気持ちを表明する、屈折した表現もあった。

いまでは、そんな歴史的背景にはかかわりなく、「相当」「相当な」は当然の強調表現と解され、常用語として定着している。あいまい語に由来する強調

語というところか。（芳）

そこいら

英米人やドイツ人に場所を指し示しながら日本語で「そこ」「あそこ」と言うのはたやすいが、「そこいら」「あのへん」「あそこのあたり」…と言いたい時、どうしようかと迷ってしまう。「…へん」だの「…*あたり」だの、辺縁をぼかした認識や表現は、日本人の得意ではあるが欧米人好みではない、と自制する心理がはたらくせいもある。アウトラインを限定するのを好む欧米人、ぼかしたがる日本人の差についての平素の理解がこんな迷いにも出て来る。

「そこいら近所」「そんじょそこら」などに至っては、先方のことばに訳するのが容易でない上に、かれらがこの日本語を聞いてピンと来るまでには、よほどの慣れが必要にちがいない。

「*そこそこ」「*それなり」「*そろそろ」「*ぼつぼつ」などが、外国人の日本語習得度をテストするのに適当な語であるのと同様、「そこいら」やそれに類似の指示語の一群も、日本語に身をひたした度合いをはかるテスト語になり得る。

ところで、同じ日本人でも、伝統的な用語・表現で会話してきた庶民と、欧米輸入（舶来）の思考法や言いまわしに慣れたインテリとでは、感覚に違いがある。庶民感覚でなら

「寄り合いをやってまとめてみようじゃねえかってんで、みんなでアケスケに言い合ってみたらよ、煎じつめるとやっぱり、いまのところはこれしかねえだろう、ってところに落ち着いたのよ」

と言えばすむところを、舶来好みのインテリは

「最終的総括のための討議集会が持たれ、開放的に意見が述べられて集約の結果、結論的に、現段階におけるこの方針の妥当性が確認された」

と、高級そうにかまえなければ気がすまないようだ。

しかし、滑稽なまでに、こんな翻訳調の言いまわしを使ってみたがる青くさい（？）インテリ青年などが、

「ちょっと、提案者の、そこいらの考え方に問題が

あるんじゃないかな」
「要するに、代案を用意するかしないか、代案なしの反対こそ本質的な抵抗だっていう部分は否定できないわけだしさ、そこいらをどう規定して行くかっていうところが…」
などと「そこいら」を使いたがる。同じように「そのへん」を使うこともある。
問題点を一つに限定して指摘せず「そこいら（そのへん）」とピントを甘くした言い方をする。インテリ青年はいかにも論理的表現を好み、駆使しているように見えるが（当人たちもそう思い込みたがっているが）、案外、対人関係に気を使い、純理よりも状況、内容よりもその場の雰囲気を重視する気持ちが無意識のうちにも強いのであろう。青年に限らず、言論界や学界の大家たちの討議でも同じ傾向が強い。
〝気がね〟の伝統の根強さと言うしかない。（芳）

そこそこ

「場所前の調子からすると、新入幕でどれぐらいやれるものだろう？」「もともと素質がいいんだから、そこそこの成績は残せるだろう」
それほど悪くはない成績、という見通しだな、と質問者には見当がつく。見当がつかないようでは、日本語の会話の〝勘〟が身についているとは言えない。
とは言うものの、
「金銭面の面倒を見ないと言ってるわけじゃありませんよ。そこそこのことはさせていただく考えですから…」
この発言を聞いても「そこそこの」金額とはいくらぐらいか、単純には推し測れない。と言って、「そこそこっていくらぐらいですか？」と質問するのは世慣れた日本人ではない。発言者の体面、社会的地位、経済力、相手との社会的・心理的な関係などから割り出して具体的な数字を浮かべるしかない。つまり場合ごとに違うのがその内容だ。
「一気に上位なんて…。まあ、連敗しないでそこそこでやってけば、オールスター戦以後に展望が開けると思ってね」

この「そこそこ」も、そのチームの力や現在の状況から推して見当をつけるしかない。とらえどころがないと言えば言える表現だ。

一般の国語辞書では、「そこそこ」の意味・用例は、「ものごとを簡単にすませてすぐ次のことをする様子。(例)夕飯もそこそこに出かける」「最低線は出来ている様子。(例)まあ、そこそこなおればいいさ」…などと説明されている。「簡単に」とか「最低線」とか、どうも語感がよくない。つまり、よい評価のこもっていない単語ということになる。

しかし、これだけで割り切ってしまっては、この日本語の、奥の深い使い方にはとどかない。

積極的に「よい」とは言えないが「悪い」ときめつけるほどでもない。「まあ、悪くはない」というニュアンス。このニュアンスがあいまいな会話を生み出し、そのあいまいさによって、厳格、冷酷なものの見方がやわらげられ、また、人間関係にもクッションの作用が加わる。「そこそこ」も、そんな効用を持ったあいまい語の一例になる。

もともと、場所を指示する語である「そこ」は、場合・状況によってはじめて具体的内容が決まる〈内容不定語〉、すなわちコソアド*の一例だ。それを二つ重ねても内容不定の本性には変わりがない。あいまい性はそもそもの源にあったと言える。

なお、「そこそこ」が接尾語として使われる(百メートルそこそこの近距離、四十キロそこそこの軽量、のように)場合は「…前後」の意味だからこの語の意味自体があいまいとは言えない。しかし、「……前後」だからというので「人口三百万そこそこの大都市」「百キロそこそこの巨漢」…などと使われたら黙過できない。接尾語「そこそこ」が付くのは、数量などを低く限定する場合であることだけは、習得途上者にわかってもらう必要がある。　(芳)

そのうち・いずれ

患者が医者に「いつごろ退院できるんでしょうね」と聞いたら、医者は「そのうち退院できますよ」と言った。心配になった患者は別の医者に同じ質問をした。その医者の答えも同じようだった。「いずれ、

退院できますよ」と。さて、一人の医者は「そのうち」と言い、もう一人は「いずれ」と言う。「何だかはっきりしないな」患者は独り言をつぶやく。
見舞いに来た息子に、どう思うか聞いてみると
「お父さん、人間はいずれは死ぬ。でもいつのことか分からない。でも『そのうち死ぬ』と言われたら何だか心配でしょう。何だか死が直前に迫っているみたいで。病気のお父さんにこんな例えでは申し訳ないけれど、でも『そのうち退院できる』と言った医者を信用したらどうかな」
と言う。なるほど息子の話ももっともだ。「そのうち」の方が「いずれ」よりは近い未来という気がする。「いずれ、地球は滅びる」「そのうち地球はほろびる」。やはり「そのうち」の方が近未来だ。
近い将来を表すこの二語は非常に似通っていて、どちらも未来のいつごろのことなのかという意味ではっきりしない。たとえば友人の家に遊びに行き「そのうち家内も帰ってきますから、そうしたら夕食を作らせますよ」と言われたら、「もう少し待とうかな」という気にもなるが、「いずれ帰ってきますから」と言われると、いつ帰るかわからない奥さんを待っているより、帰った方がいいという気になるだろう。
もう一つ言えることは「そのうち」が確信を持っているのではなく、「いつかははっきり言えないが、多分…」と不確定要素をあいまいに表現し、断定をさけているのに対して「いずれ」は、「時を指定することはできないが必ずそうなる、そういったことが実現するはずだ」と実現を信じる気持ちはずっと強い。
それぞれの人の語感によっても、この二つの語のニュアンスは変わってくる。「近いうちに、近日中に」の意味で「そのうちに」と連語で使うことも多い。
（佐）

それだけ

議員の家に強盗が押し入る。金庫を開けさせ「金はこれだけか」「はい、それだけです」と答える。
「それだけ」は代名詞の「それ」に助詞「だけ」がついてできた語で、この場合は前述の事柄を受けて、

その限度や程度を示している。

「今度の選挙資金どのくらい必要だろうか」

「どのくらい準備できますか。…あっ、それだけあれば十分ですよ」

この会話文を読んだだけでは「それだけ」はいくらのことなのか皆目見当がつかない。「それだけ」は議員の返事を受けてなされているからだ。

このように「それだけ」は、話し手の言葉を受けて、ある「程度」に対して自分の評価を付加する場合に使う。

「ご祝儀に一万円いただいたわ」「えっ（たった）それだけ？」（程度・少ない）

「社員旅行の予算、一人五万円でどうでしょう」「それだけあれば、十分だ」（程度・多い）

「ブルータスが裏切った」「彼だけはと信頼していた。それだけにつらい」（一層）

「バーゲンのセーターはあと三枚でおしまいですよ」「じゃ、それだけちょうだい」（三枚全部）

しかし、「それだけ」は常に話し手の言葉を受けるだけでなく、自分自身の言葉を受けて使う場合も多い。

「彼女に謝る？　それだけは許してくれ」（特にそのことは）

「この美術館にはクレーの絵が七枚あるという。今日はそれだけを見に来た」（限定・のみ）

「それだけ」は「それにふさわしい程度」という意味でもよく使われる。

「野茂がヒットを打つなんて、誰も期待していなかった。それだけニュースバリューもあるっていうことかな」

「眠る暇もないくらい働いているんだ。それだけ収入があっても当然じゃないかな」

「彼の素晴らしい人柄をみれば、それだけ人気があるのもわかる気がするよ」

最後に「それだけ」が強調を示す場合をあげておこう。

「話しておきたいことはそれだけですか」「そう、これで全部だ」

（佐）

それなりに

「あたしでも、きれいに写りますか」
「それなりに写ります」
というテレビコマーシャルが視聴者を喜ばせたことがある。
「それなり」には、
①そのまま。それきり。
「縁談は、それなりになっている」
「立ち退きの話はそれなりになった」
②それ相当。そのとおり。
「それなりの効果はあった」
「けもの道に沿って、それなりに歩いた」
などの意味があるが、今日では①の使い方は少なくなってきている。
さて、「それなりに写る」とは、この場合、そのとおりに写るという意味だろう。リアリティで勝負する写真は、写したとおりに写らないのでは困るわけである。しかし「そのとおりに写ります」では含みがなさすぎる。自信のない被写体に「そのとおりに」ではミもフタもない。そこで「それ相当に」というニュアンスを含ませて「それなりに」といった。まさに絶妙の〝あいまい化〟である。
この場合の「相当」と「それなりに」とは、類義関係にあることはすぐにわかるが、あいまい化の妙味という点からいえば、「それなりに」のほうが上だろう。
「相当」の意味は、
①あてはまること。
「一ドルは日本円で九三円に相当する」
②つり会うこと。
「この労働に対して相当な報酬だと思う」
③かなり。すぐれている様子。
「相当に怒っていた」「相当な人物である」
などである。このうち、今日では③の意味が断然優勢だ。そして①②③のどの場合でも、その判断は主観的であり流動的であるので、あいまい度は〝それなりに〟高い。
しかし「それなり」のあいまいさにはかなわない。

何しろ「それ」が何を指すかがかならずしも明らかではない内容不定語である。

つまり、「それなりに写ります」といった場合、「それ」は美人を指すものか不美人を指すものか、あるいは人物のいる風景を指すものかがはっきりしない。「一ドルは九三円に相当」というときほどの確かな対比とはならない。そこがまさに狙い目で、不美人を写す場合に、わざとピンボケの社交辞令でショックをやわらげようという算段だ。

よく欧米人はこう指摘する。「日本人は相手が同意することを前提にして発言し、欧米人は対立を予定して発言する」と。この指摘に従えば、「それなり」は、同意・同調や共感・協調、そして寛容さなどと縁のある用語である。未熟な人ががんばって何かをしとげた時には「それなりによくやった」というし、反社会的行動に対してさえ「そうしなければならないそれなりの理由はあったのだろう」などという。「それ」というから、何かありそうに見えるが、共通認識としては実質的内容は何も存在しない（存在させない）のである。

同意・同調や共感・協調、寛容などは、人間の好ましい性向である上に、一体に「やは（柔）しき心」を持つ日本人にはとりわけ強い傾向だが、それが「身内」の人にだけ向けられがちだったら、〝国際化〟が言われる今日、問題があることになる。（芳）

そろそろ ⇩ ぼつぼつ

～た

財布をどこかにしまい忘れ、見つかった時に思わず発する言葉は「あった」だ。この「あった」は留学生からみると、「今みつかったのに、なぜ『ある』ではなく、過去形の『あった』を使うのか」と不思議に思えるらしい。

「今日、本を買う」「きのう本を買った」

「これから部屋を掃除する」「さっき部屋を掃除した」

「日本語の動詞の過去形は過去の動作を表す」という説明は分かりやすい。しかし「あった」の例は単に過去として説明することはできない。

同様の例は、たとえば小学生が「先生が来た、来たよ」と皆に知らせる時もそうだ。先生が職員室を出て長い廊下をこちらに向かってくる姿を見て言う「来た」は決して過去ではない。

「日本語は時制のはっきりしない言葉だ」という人がいる。しかし、これは時間の流れを現実の現在・過去・未来において区切ろうとする概念が働くからであり、日本語の時の流れに対する基準は別なところにある。財布が見つかった時の「あった」は、どこかに財布があるに違いないという思いが「見つかる」ということで実現し発せられた言葉で、過去というより完了と言える。そこで問題となるのは話者の意識の流れであり、実際の時間の流れとは異なる。

「来た、来た」も同様で、もう時間だから先生は姿を現すに違いないという小学生の気持ちが、先生の姿を見たことで「実現」し、「来た」という表現になったのだ。

「〜た」は未来のことにも使える。

「私、来年の四月に結婚することになりました」

「それはおめでとうございます」

この場合「おめでとうございました」とも言える。期待していたことが実現した時に、思わず発せられる言葉は「〜た」になることが多いのだ。

「出た出た月が　まあるい　まあるい　まんまるい〜」

この「出た」は正に期待の実現そのものだろう。入学試験の合格発表で「ヤッター」と歓声をあげる。これなども完了を表す表現と言える。

他にも「〜た」は過去形以外にさまざまの用法がある。「会議は明日でしたね」「先生は独身でしたか」のように、以前聞いたことがあるのに、忘れてしまって思い出そうとしている時、「こんなに道が混むならタクシーに乗るんじゃなかった」「皆が着物を着てくるのなら、私も着物にすれば良かった」のように後悔する気持ちを表す時、カラオケで「歌詞があれば歌えた」「彼女が独身ならプロポーズしていた」のように、過去に実際にはできなかったけれど、できたかもしれない時などだ。

（佐）

たいした（大した）

普通一般を抜きんでていることを、驚きをこめて肯定的に評価する時にいう。

「まったく大したもんだ」
「大した出世をしたものです」
「ノーベル賞をもらったほどだから、大した学者にちがいない」
「年は若いが大した男だ」
「ふちが欠けているが、大した茶碗にちがいない」

逆説的に、否定的に突出しているものにも使うことがある。

「大した悪党だ」
「大した事件にまきこまれたものだ」
「君はまったく大したことをしでかしてくれたね」

また、程度が尋常でなく甚だしくても、自然界の事象、例えば、チーターのスピードを「大したスピード」とは言わない。動物の能力それ自体には驚きがないからである。しかし、チーターの走りをじかに見たり、時速を新幹線と比べたりすれば、「大したスピード」という場合もあろう。

後に否定表現がくれば、「取り立てていうほどではない」という意味になる。

「彼はどうせ大した人物ではない」
「大したおもてなしもできませんで…」
「大した病気ではありませんから、じきになおるでしょう」
「一年間では、大した研究もできない」
「試験といっても、大したことはありませんから、それほど緊張しなくていいですよ」
「病気が大したことにならなくて、よかったですね」

ちょっと興味深いのは、「大したもの」は肯定的なニュアンスが強いのに対して、「大したこと」は「大事・おおごと」につながる否定的なニュアンスも含んでいるように思える点である。（門）

～対して ⇓ ～とって

だいたい・ほぼ・九分九厘

部下が上司に出張報告し「大体そんなところです」と締めくくる。この「大体」は出張でさまざまな出来事があった中で、細かいところを除き、主要な部分だけを報告したのだという意識がある。

「全部ではないがほとんど」という意味で使われる「大体」が、どの程度であるのかは場合によって異なり、あいまいである。場合によっては、本人が意識的に報告から重要な部分をはずし「大体」とも言えるし、多少内容を歪曲（わいきょく）しても「大体」であることもある。

「宿題はどうしたの」と母親。「大体できたからあそんでくる」と子供。

「報告書はどうなった」と部長。「大体できました」と部下。

母親も部長もこの「大体」に安心してはいけない。しかし「報告書もほぼできあがりました」となると、部長の安心度は高くなる。「ほぼ」は「大体」と非常に近い使い方がされるが、実際の感覚としては「ほぼ」の方がより完全に近く「九分九厘」に近い。

話し手の感覚としては「大体」「ほぼ」「九分九厘」の順で完全に近づいていると思われる。ただし、子供は「ほぼ」「九分九厘」という語彙は使用語彙にないだろうし、「九分九厘」といった表現自体、使われることが少なくなっている。

「大体」が「ほぼ」「九分九厘」に言い換えられる場合とそうでない場合を示すと次のようになる。

①大部分「脚本の構想は大体（ほぼ、九分九厘）できあがった」

②おおまかな「この芝居を上演するにあたって、大体（×ほぼ、×九分九厘）の予定をたててみました」

③大部分においてそうであると認められる時「この講演が成功することはほぼ（△大体、○九分九厘）間違いありません」

④およそ「この車、大体（×ほぼ、×九分九厘）いくらぐらいするんですか」

⑤概要「大統領の英語の講演は大体（△ほぼ、×九分九厘）次のようです」

なお「大体」には
「大体、日本の文化予算はどうなっているんでしょうね」
「彼は、大体常識に欠けていると思いませんか」
「大体、君が変なこと言いだすからいけないんだ」
のように、まず第一に挙げられることを言う場合にも用いる。「大体」の後には総じて悪いことが来る。
議会が混乱に陥った時
「大体、議長がしっかりしていないからいけない」
「大体、代表質問はもっと綿密な調査のもとにやってもらいたいものですね」
のように、相手を攻撃する場合のきっかけの語として使われている。
「大体、仲人なんて自分には向いていないんだ」
「大体、どうしてこんな役目引き受けたのだろう」
「大体」は自問自答し、その原因を考える場合にも使われる。
大体、どうしてこんなに「大体」の使われ方が多いのだろう。
（佐）

たいてい

「おじいさんなら、たいてい家にいますよ」（ほとんどの日は家にいる。いない日はほとんどない）
「朝はたいてい六時前には起きています」（六時前に起きていないことはまずない）
などのように「たいてい」は多くの場合がそうであることを言う。
「こういう映画の結末はたいていハッピーエンドでしょう」
「電話をしてもたいてい留守番電話なんだから」
「いつも」と言い切れないところに「たいてい」の存在価値がある。残された数％の確率でそうでないことがあるからだ。
「今頃になると、たいがい軒に燕が巣を作りはじめるの」
「たいてい」は「たいがい」と言い換えることもできる。
「掃除・洗濯・料理、たいていの（たいがいの）家事

はできるわ」
「たいてい」は家事の範囲の大部分について言っている。もっとも家事も時代と共に変わっているので、「たいていの家事」の中身はだんだん少なくなるようだ。今にスイッチを押すことが（たいていの家事）になってしまうかもしれない。
「たいていの（大部分の）人は、そんなものに興味を示さない」
「ジョン・レノンは彼女に出会ってからは、死ぬまでたいてい（ほとんど全ての期間）ヨーコと行動を共にした」
「たいてい」は推量としても用いられる。
「社長はあの手紙を読んで、たいてい怒っていますよ」
「彼、たいてい来ると思うわ」
ただしこの使い方はだんだん少なくなっているようだ。
「これほどの水墨画を描く人はたいていの人じゃありませんね」
「これほどにされても笑っていられるとは、たいていの精神ではできないことだ」
「たいてい」は普通の程度ではない場合にも使う。
「並たいてい」はここから派生した表現で、普通考えられる程度を超えた物事に対して使う。
その他にも「空威張りもたいていにしてください」「依怙贔屓（えこひいき）もたいていにした方がいいですよ」のように、それが限度であるという意味で意識を超えたことに対して使う用法がある。しかし、この用法はだんだん姿を消しており、若者たちがこの意味で「たいてい」を使うことはほとんどない。（佐）

～だけ ⇒ ～きり・～しか

確か

「確か」は面白い言葉だと思う。「確かにこれは私の傘です」（形容動詞）と、自分の傘であることがはっきりしていて断言できる場合にも使うし、「これ、確かあなたの傘ですよね」（副詞）と、「自分の記憶の間違がなければ、そうだと思うが」と、確信が持てない場合にも使うからだ。

それでは、断言できる時に使う「確か」はどのような場合だろうか。断言するからには何らかの根拠があるはずだ。

「彼の性格は確かに短気だが…」とか「山形の庄内米は、確かにおいしいね」などと自分の経験に基づく場合、

「このリストをみると、確かにスウェーデンやデンマークの女性の地位は高いようですね」「(地図を見ながら)確かにこのマンションは駅から近いね」などのように、地図やデータなどの資料が判断の根拠になっている場合、

「テレビのニュースで言っていたのだから、確かですよ」「彼がそう言うのなら、確かだ」のように、テレビや新聞といったメディアを通じて、あるいは他人の情報を通じて知った場合、

ただしこれらはいずれも話し手が、自分の主観で判断し「自分の単なる憶測で言っているのではなく、自分が根拠にする事柄はあるのですよ。だから確かなんです」と自信のある場合に言う言葉だ。「確かなんだね」「いえ、そう言われると…」などという表現も、話し手の「自信のある無し」が問われることになる。後に名詞が続き「確かな人、確かな腕、確かな会社」などと使う場合も同様だ、話し手が自信を持って確信していることになる。

自分の記憶があいまいで「確か、君が入社したのは二年前だよね」などと相手に確認する場合には、文末に「~ね、のはずだけど、ではありませんか、はずですが」などの表現を伴うことが多い。また、はっきり言うよりも記憶があいまいというポーズをとりつつ「確か彼女いちど離婚しているはずですよ」という方が内容によっては柔らかい表現になることもある。「確か」も使い方次第というところだ。

この「確か」は常に相手がいるとは限らない。多少アルツハイマー気味を自認しているお年よりが「えーと、確か眼鏡はタンスの上だったよな」と独り言をつぶやく時にも使われる。

ただし「記憶が不確か」ということが根拠にある以上、一度は記憶したことがある事項でなれけば、この表現は使えない。「眼鏡を持っている」から「確か眼鏡は…」と言えるのだし、「入社したのは…」と

いう時には、彼が会社で働いている事実が必要不可欠だ。話し手にとって、対象になるものは、既知の事柄になるはずなのだ。 （佐）

コラム

価値的ニュアンス

「ジョージ・ワシントンは米国の初代の大統領だった」
「ジョージ・ワシントンは米国の最も偉大な大統領だった」
この二文にはどのような違いがあるだろうか。
アメリカの「言語技術教育」では、小学校五年生にこの二文の違いを「事実 fact」と「意見 opinion」として説明している。そして、さらに「事実」と「意見」とはどう違うのかを考えさせている。
右の例文を見てもわかるように、数量を表す表現が「事実」的であるのに対して、形容詞は価値判断を含んだ「意見」となりやすい。イギリスの哲学者ラッセルは、"I am, you are, he/she is" というように、人称によって動詞が変化することが多いヨーロッパの言葉を背景にわれわれがいかに自己中心的なものの見方に慣らされているかを皮肉りながら、価値判断を含んだ表現に注意を促している。ラッセルによれば、次のような人称変化をする述語がいろいろある、というのだ。
「私は志操堅固だ（プラス・イメージ）」
「君はがんこだ（中立的）」
「彼は石頭だ（マイナス・イメージ）」
かつて、論理学のクラスで受講学生にこの種の表現を思いつくだけあげてくるのを宿題としたら、次のような傑作が集まった。プラス、中立、マイナスの順に列挙してみよう。
「おおらかだ／細かいことを気にしない／鈍感だ」
「独創的（個性的）だ／考え方が他の人と違う／変わり者（変人）だ」
「半分もの金を出した／半分の金を出した／

半分の金しか出さなかった」
「ふくよかだ／太っている／デブだ」
「スリム（スマート）だ／やせている／貧弱だ」
「親切だ／面倒みがいい／おせっかいだ」
「もの静かだ／おとなしい／クライ」
「楽天家だ／のんきだ／脳天気だ」
「慎重だ／注意深い／優柔不断だ」
「人をたてる／人に話をあわせる／ゴマすりだ」
「繊細だ／細かい／神経質だ」
「柔軟だ／意見をかえた／変節漢だ」等々。

このように表現自体にその人の価値判断がしみ込んでいることに対しては敏感であらねばならない。ほとんどの形容詞は価値的な対立のニュアンスを含んでおり、一般的に価値が高いとされている方がその対立の尺度となっていることは興味深い。例えば、「高い／低い（高さ）」「良い／悪い（良さ）」「広い／狭い（広さ）」「明るい／暗い（明るさ）」「厚い／薄い（厚さ）」「太い／細い（太さ）」「速い／遅い（速さ）」「長い／短い（長さ）」といった具合である。

「侵略」か「進出」かという、一九八〇年代の歴史教科書の記述問題でも明らかなように、名詞も価値評価を含んでいることが多い。一九四五年八月を「終戦」と呼ぶか「敗戦」と呼ぶかで、戦中・戦後の歴史過程への認識がかなり違ってくるのではないか。また、「自衛隊」という名称はその「日本軍」としての潜在的な力を過小評価させている。「公害」という名称も汚染主体だった企業を免罪するようなニュアンスをもっている。「ゴミ問題」というと、家庭が出すゴミを少なくしたり、きちんと分別することが最大の課題と思わせてしまうが、日本における「ゴミ問題」の難題は、量的にも質的にも企業が出す産業廃棄物をどう処理するかにある。

このように、動詞・形容詞・名詞、あるいは「ね、よ、さえ、でも」といった短い助詞をも含めて、あらゆる表現に主観的な価値判断が、あたかも客観的な、あるいは事実的な記述であるかのようなあいまいな、なにげない形で刷り込

まれている場合がある。意味のあいまいさに注意を向けるだけでなく、あいまいな価値判断の混入にも注意する必要があろう。（門）

ただ・ただし・なお

「ただ」は日常会話でよく使われる多義的な意味を持つ語だ。

「僕、子供の時は天才と言われたんです。でも今はただの人で…」

大学の新入生歓迎会の席でこういって自己紹介した学生がいる。この場合の「ただ」は名詞で「特別に言うほどの値打ちも持っていない、ごく普通の」という意味だ。同様の使い方に「ただごとではない」「ただの風邪」などがある。

「ただほど高いものはない」「ただでもらった」「ただ働きさせられた」などの「ただ」は同じ名詞でも「無料」という意味になる。

副詞的に使われる場合には、「だけ・しか・ばかり」とよく一緒に使われる。「空にはただ風が吹いているだけ」は、一昔前にはやったフォークソングだが、この「ただ」には「他のことはしないで、そのことだけ」の意味がある。「主人にそのことを聞いても、ただニヤニヤするばかりで」「社長はただ会社の利益になることしか考えていないんですよ」などのように。

「たった」や「わずか」の意で「お山の大将ただ一人」「ただ一度の過ちがこうなるとは」などといった使い方がある。

しかし、「ただ」の使い方で何といってもあいまいなのは接続詞としての用法だろう。

・「このアパートは町に近くて買い物に便利だし、管理人さんも常駐しています。月七万円ならお勧めですよ。ただ…」

アパートを借りようと不動産屋さんの説明を聞いていた人は、この「ただ」が非常に気になる。なぜなら「ただ」の後には前で述べた評価とは逆の、この場合はマイナスの評価が来ることが多く、しかもその部分こそが本音であったりするからだ。この場合なら、「ただ、お隣の方がうるさい人で」とか、「日

当たりが悪くて、壁に少し黴が…」などと続くからだ。一応アパートの説明はしたが、説明せずにはいられない問題点、知らせておくべき事柄を「ただ」と言って続ける。「念のため言っておきますが」といった意味合いがある。

「あのホテルは海岸は目の前だし、部屋もきれいだが、ただ料理がまずくてね」

「先生は今日大学にいらしてます。ただ研究室にいらっしゃるかどうか」

「診療はいたしますが、ただ手術はちょっと」

「確かに良い人だけど、ただ仕事が遅くてね」

これらの文からもわかるように「ただ」には前の文のプラス評価にマイナス評価を補足する働きがある。

「色も柄も気に入りました。ただお値段が高くて…」

これは英語なら「私は買いません。なぜなら」とくるところだ。日本語は「ただ…」に続く文を配慮しないと文末が省略されるため、外国人には意味の分かりにくい文になる。

「ただし」も前の文で述べたことがらを認め、補足を加えるという点では似ている。しかし「但し十八歳未満お断り」のように客観的な条件を補足する場合が多く、こういった場合には「ただ」に言い換えることができない。

「なお」は「ただ」よりも「ただし」に近い使い方をする。

「これで会議を終わります。ただし役員の方はお残りください」（×ただ、○なお）

「この切符をご持参の方は料金が半額となります。ただし年末・年始を除きます」（×ただ、○なお）

「ただ」が使えないのは、これらの文に話者の評価が加わっていない所以だろう。（佐）

ただし ⇓ ただ

～だって・～って

話しことばの中で「…て」で終わる文は意外に多い。「そこの本とって（依頼）」「昨日は横浜で買い物をして、食事して、それから…（文の中断）」「おかあ

さんが『早く起きろ』って（引用）」といった場合である。「です・ます」のきちんとした教科書的な終止形しか習っていない日本語学習者は、時にこうした「…て」で終わってしまう会話のリズムになかなか慣れることができないようだ。

以前、「…、ナンチャッテ（などと言ってしまって）」と自分自身の言葉を「引用」にくくってしまうことによって、自らの発言の真面目さ、深刻さを相対化するのがハヤッたことがあるが、引用の「～って」は今でも結構多様されている。会話の情報の多くが他からもたらされたものであるわけだから、当然といえば当然かもしれない。

「～って」は、『～』と（ということだ）」という、引用を表す格助詞「と」が転じて終助詞化したものである。

「フランスがまた核実験をやったってさ」
「マジック・ジョンソンがNBAに復帰したってね」
「大雪で新幹線は大幅に遅れるってよ」
「鈴木さん。明後日からヨーロッパ旅行だって。いいわねえ」

この「～って」の前に断定の助動詞「だ」がついた「～だって」は、単なる「～って」にはないニュアンスが込められている。次の二つの文を比べてよう。

①「熱があるから休むって」
②「熱があるから休むだって」

①の文は、「熱があるから休む」という、たぶん同僚からの電話を誰かに取り次いでいるだけであり、「熱があるから休む」ということに関しては何の意見も表していない。それに対して、「だ」が一つ加わった②には、明らかに「熱があるから休む」ことに対する非難の調子が込められている。

一般に「～だって」は、引用の内容に関する驚き、意外、非難を表す。「だ」一音をおろそかにはできない。

（門）

たぶん・おそらく

「多分」には「今度は落選する恐れが多分にある」

「多分のご寄付をいただき感謝にたえません」のように名詞としての用法があり、「たくさん」を意味する。

しかし、ふつうはた推量の言葉を伴い、自分で判断してある可能性が高いことを言う場合に使う。「多分、今日あたり彼から電話がくると思うわ」のようにだ。この場合の可能性としては「きっと」や「ぜったい」よりは低く、「もしかしたら」よりは高い。どの程度かというのは場合によって異なり、あいまいである。推量の表現として使う場合には「思う」「だろう」「でしょう」などと呼応する場合が多い。

ここでは「多分」が推量の表現として使われた場合について考えてみたい。推量の表現は「多分」と同様の使い方をするものがほかにもある。その共通点は何だろうか。

①「この任務はたぶん彼には無理だと思いますよ」

②「選挙に出馬しても、おそらく過半数もとれないでしょうね」

これらははっきり断言できない時に使われる推量の表現だ。「過半数をとれるかとれないか」のように、実際に予測がつかない場合の推量もある。しかし、自分では内心断言したいところだが、そうすることによって人間関係に影響を及ぼすおそれのある①のような場合には、「たぶん」を使うことでクッションをおくことになる。

「会議の議長をつとめるのは木村さんには荷が重すぎますね。みんなそう言っていますよ」

こう断言すると、それがたとえ噂話としても木村さんにマイナスの価値判断を下したことになる。これに「たぶん」を付け加えることで、自分の断定の表現に「もしかしたら自分の思い違いかもしれないが」といった逃げ道を作ることができる。

「たぶん」も「おそらく」もこの点では同じ効果があるが、「おそらく」の方が丁寧な感じを伴う。「多分」や「おそらく」を付け加えると、文末の表現も「多分荷が重すぎるんじゃないでしょうか」「おそらく荷が重すぎると思うんですが…」など話し相手の気持ちを察しながら話を進めていくことになる。

「木村さんは確か（たぶん、おそらく）今日は欠席です」

「確か*」は、事実の裏付けがある場合に、ある程度

の確信を持って言う場合だ。確信の度は「多分」や「おそらく」よりずっと高い。「確か」には「確か、明日の会議は十時からでしたね」のように、相手に確認する機能があるが、「多分」や「おそらく」にその機能はない。「確か」に比較し、「多分」や「おそらく」は、断定できる場合にも断定せずあいまいに言うという点で、より話者の心理を反映した表現と言える。（佐）

たまらない

「たまる」は「溜る」のほかに「堪る」とも表記したように、「たまっていくものに堪える（もちこたえる）」の意味がある。

「負けてたまるか」

「そんなばかな話があってたまるものか」

「お前なんかにできてたまるか」

といった反語的表現にそうした意味合いが残っている。つまり、「負けてたまるか」とは、「負けることに耐えられるか？（いや、とても我慢できない）」という修辞疑問なのである。

「たまらない」は、①マイナス要素の蓄積に対して、精神的に「耐えられない・我慢できない・やりきれない」というのが基本的意味である。

「こう残業続きではたまんないな」

「母の病気が心配でたまらなかった」

「歯が痛くてたまらない」

「ストーブがないので、寒くてたまらない」

②時には、物質が悪条件に「もちこたえられない」という意味になる。

「この泥道じゃ、靴もたまんないな」

「この日照りでは、稲もたまらないだろう」

「こう大型トラックが多くては、舗装もたまりませんよ」

③過度のプラス状態で「こたえられない」気分を表すこともある。

「うれしくってたまらない」

「こううまくいくとは、たまらないね」

「汗をかいた後の一風呂はたまりませんね」

④「たまらなく～」という形で副詞化し程度の甚

しさを表すこともあるが、その場合も単なる程度というより、「たまらない」という否定的ニュアンスは強く残っている。

「たまらなく暑い・苦しい・淋しい・痛い・イヤだ」等。

ところで、「たまらなく好きだ」「好きで、好きでたまらない」という表現は、「忍ぶれど色にいでにけり我が恋は」の心境に通じている。「好き」という感情をもはや心の中に「ためて」おくことができなくなってしまっている、という表明なのである。

「〜て仕方がない」「〜てどうしようもない」「〜てならない」という表現にも同種の趣を感じる。(門)

〜たら

「もし」の意味を持つ条件節で会話を始めようとする。そのとき「と・ば・たら・なら」が続く可能性が高いが、その中でも「たら」が使われることが一番多いようだ。それはなぜだろう。

「スキーに行ったら…」

この「たら」の後にはどんな文が続くだろうか。まず、スキーに行ってからのことを考えて「楽しんできてください」「怪我をしないように」「あちらでたくさんの友達ができますよ」「きっと雪焼けしますね」など、これから起きることを想定して言うことができる。

ところが、「スキーに行ったら」は、既に起きてしまったことに対しても使うことができる。「とても楽しいことがあったんだ」「怪我をしてしまってね」「友達がたくさんできたんだよ」「真っ黒に雪焼けしちゃって」などだ。

この「たら」で始まる条件節は、後に未来のできごとが続くのか、過去に起きたできごとが続くのかは予測がつかず、時制がきわめてあいまいと言える。両方に共通して言えることは、前件で述べたことがらに対して、話し手は後件で何らかの意見や判断を述べていることだろう。

「これ以上円高になったら、本当に困ってしまいますね」(話し手の考え)

「円高になったら、海外に土地を買いませんか」

（勧誘）
「円高になったら､留学生たちの生活は苦しくなってしまうんでしょうね」（推量）
「円高になったら、無駄遣いしてはいけませんよ」
時間的な前後関係を考えると「～たら」を伴う前件は常に後件に先行する。「スキーに行けば」「スキーに行くと」「スキーに行くなら」などとの大きな違いはその点だろう。
「たら」はその他にも「木村さんを見たら､会議中なのに寝ていたんですよ」のように前件の条件のもとでの発見を表すことがある。本人も予期していなかったできごとで、たいていの場合、あまりよくないことが多い。
「図書館に行ったら休みだった」
「見合いの相手に会ったら､写真とは全然違っていた」
しかし「家に帰ったらまだ夫が帰ってきていなかった」（ああ良かった。外出を知られずにすんだ）などという場合もある。
「軽い驚き」という意味では、「と」も同様で、川端康成の『雪国』の冒頭の「国境の長いトンネルを抜けると、そこは雪国であった」の「と」の部分に軽い驚きが隠されていて正に名文と言える。
「お金があったら、この別荘を買うのだが…」は反実仮想で実際のこととは違うことを仮定している。この用法では「お金があれば…」と「ば」も同様の使い方ができる。
その他にも「たら」の用法は実に多い。（佐）

ちゃんと

「入学式くらい、ちゃんとした服装で行きなさい」
「あなたの付き合っている人ちゃんとした人なの。何だか心配だわ」
「ちゃんとした生活をしていれば､こんなことにはならなかったのに」
これらの文章でいわれている「ちゃんと」とはどういうことだろうか。「ちゃんとした服装」という言葉の中には、服装に対するその人なりの規範が隠されている。もしかしたら､当の本人はそれなりに「ち

ゃんと―きちんと」した服装をしたつもりかもしれないのだ。

制服があり、ソックスの色からカバンに至るまで決められている学校では、ソックスの色が違うだけで「ちゃんとした」の基準からはずれてしまう。しかし、服装が自由な高校では、いつもブレザーを来てくる学生は「あの人はいつもちゃんとした格好をしている」ということになるだろう。

「ちゃんとした人」、この言葉の背景には、男性がある年齢に達したら、定職を持ち、毎月収入のあることが「ちゃんとした人」であり、「フリーター」や「自由業」はその範疇（はんちゅう）に入らないといった意味が込められている。

これも日本が高度成長を遂げてから、一億総サラリーマン化した結果生まれた発想と言えるだろう。身元や身分が確かである「ちゃんと」の背景には「収入が一定した」（もちろん医者か弁護士のように高い収入は論外だが）という意味があることが多いのだ。

「最近の若いものは、畳の上にちゃんとすわることができない」

これは畏まってすわる意味であり、外国人にとっては全く意味をなさない表現になる。文化が異なれば「ちゃんと」も当然異なるという意味で極めてあいまいな表現となる。

「ちゃんと」には、「はっきり」「完全に」という意味もある。「お金貸してあげるから、ちゃんと返してね」「理由をちゃんと言ってください」などだが、「ちゃんと」と言いながら、その意味が極めてあいまいであるところが、この語の面白いところだろうか。

（佐）

中年・年配

「中年」は何歳から何歳か、解釈を一定すべしという意見があるようだ。作家の森内俊雄氏は、かつて中年・壮年・熟年など、年齢をあらわす言葉について辞書にあたって検索したことがあるという（『読売新聞』一九九四年四月一三日夕刊、「辞書にみる年齢感覚」）が、森内氏がとりあげた単語は、壮年・中年、熟年・中高年・実年・初老・老年。

それぞれの単語を辞書に当たってみると、少しずつ定義が違っていることに氏は注目した。なかには同じ出版社の辞書でも、編者などによって各用語が指す年齢の範囲が違っている例が少なからずあるという。

「中年」も、その例外ではなく、ある辞書では、「五十代半ばから六十代の前半にかけて」（表記は各辞書のとおりか）とし、同社の別の辞典では「四十歳くらいから五十歳なかばまで」としている。このほか「四十歳前後」などもあるという。

「この違いは何が根拠になっているのだろうか。編者の年齢感覚の違いではすまないだろう。感覚で辞典がつくられては困る。根拠、他の辞典との統一が必要」。

これが森内氏の意見だが、根拠を示すのは、この語の多様な使用例からするとむずかしそうだし、この語が専門用語ではないなら、ことばの意味のあいまい化は、覚悟しなければなるまい。辞書の説明にも統一がなくなるゆえんである。

「中年」はもともと一定の年齢を示すための語ではなく、『広辞苑』が最初にあげているように「青年と老年との中間の年頃」というぐらいのルーズな解釈であまり困らない。しかも青年にしても老年にしても、きっちり何歳と指し示す語ではないわけだから、それぞれのボーダーラインは初めからあいまいである。『論語』の「四十にして惑わず」（四十而不惑）なども一つの手がかりにはなるが、一般の用法は特に『論語』に従っているわけではない。

さらに、英語の「ミドルエイジ」にしても「四〇～六〇歳または四五～六五歳」などと、辞書によってその範囲はあいまいである。

おもしろいのは、森内氏が「年齢感覚」について書いているページの見開きの位置に、大きな文字の「中高年専門」結婚あっせんの広告が出ていることだった。それには「三〇過ぎたら〇〇会！」とあった。こういう解釈によって成り立っているビジネスもあるわけだ。もう四十年も昔、「二十六からは中年です」と、大きな活字で、栄養剤を飲めとすすめた広告もあった。

ついでながら、戦前は「青年」のすぐ上の年齢層

を「壮年」と呼ぶことが多かった。競技などにも「壮年男子」といったカテゴリがあった。三十代ぐらいを指したのか。とにかく、「中年」の手前に「壮年」という層を確定したい。元気な年代、という意味で。なお、森内氏によれば「熟年」は作家の邦光史郎氏が五十歳前後の年齢をあらわすのに一九七八年に使った用語であり、また「実年」は一九八五年に厚生省が公募して決めた用語であるという。

ところで、厚生省や、保健・医学関係者が「高齢者」というときには六十五歳からということになっている。厚生省では三十から六十五までは「中年」としているらしい。しかし日本人の寿命がさらに延び(まだ延び続けている)、ライフスタイルが変われば、「高齢者」の概念が変わることは十分考えられる。人生五十年の時代には、四十歳くらいになれば「翁(おきな)」などといわれたことを考えれば、この事情は容易に理解できよう。人は時代とともに若返っている。国民年金の給付年齢が六十歳から六十五歳に引き上げられるのは、支給金額の不足が大きな理由だが、こういうことも「高齢者」のイメージを変える要因の一つにはなりうる。

なお、関連語の「年配」には、①「四十歳くらいの年齢の人」(年齢の程度)や、②「そんなアマっちょろいことをいう年配でもないでしょう」(世間のことをよく知っている年ごろ、つまり中年)という規定もある。これも『論語』の「不惑」(「四十にして惑わず」)に通じている。

(芳)

ちょうど

「ちょうど」には様々な用法があるが、代表的なものは何と言っても数量・大きさ・時刻などが、ある基準に合致する様子をいう時だ。「正しく」「きっちり」「ぴったり」などと同義と言える。

消費税が導入されて以来「ちょうど千円です」などという機会が少なくなった。「ちょうど千三十円です」などのように端数を伴う場合には、「ちょうど」が使えないからだ。時刻に関しては「今、ちょうど十二時をお知らせします」など、テレビのニュースの始まるとき耳にすることがある。

同じ時刻に関係する「ちょうど」も、
「あっ、ちょうど十一時五十分、今からオリンピックの中継が始まるよ」
「待ち合わせで遅れたと思ったら、ちょうど同じ時に彼女も来てね、喧嘩にならずにすんだよ」
のように、話し手にとって都合がよかったり、良い具合だったりする時に使われる「ちょうど」がある。
この使用例は実に範囲が広く、
「あっ、ちょうどいいところに来てくれた、コンピュータが故障して困っているんですよ」
「ちょうど良い時に帰ってきてくれたわ。今、子供から夏休みにどこかにつれていけって言われて困っていたの」
話し手にとって相手の登場は「ちょうど良い時」かもしれないが、相手にとっては「具合の悪い時」かもしれないのだ。このように話し手にとって都合の良い基準値を持つ「ちょうど」の意味はきわめてあいまいと言える。
このような例を挙げておこう。
「予算にちょうどいい見積もりをお願いしますよ」
「この服私にちょうどいいの。お母様ゆずってくれない？」
「雨で傘もないしタクシーは来ないし、困ったなーと思っていたら、ちょうど君の車が通りかかってね。いやー、家まで送ってもらえて助かるよ」（本当はガールフレンドの家に行くはずが、部長を家まで送る羽目になった運転手氏にとっても「ちょうど良かった」かどうか）
「ちょうど会場が一杯になるくらいの聴衆で、コンサートはまあまあ成功と言えますね」
「君の料理はいつもちょうどいい味加減で、外で食べる気がしないんだ」と夫、実は妻の手料理の味に慣れすぎただけかもしれない。「ちょうど」など有って無きが如し。
他の用例として「モロッコの木になっているりんごを見るとね、黄色い実がちょうど梨のように見えてね」「ホーチミン市の活気はちょうど日本の一九六〇年代のようですね」のように、何かと類似していることを表す言い方がある。
「彼にとってお姉さんはちょうどお母さんのよう

だったのよ」などがある。（佐）

ちょっと・少し・少々

「ちょっと」は、「少し」や「少々」と同じ意味で、時間や物事の量や程度がわずかであることを表す。「ちょっと」がくだけた表現であるのに対して、「少少」は丁寧でかしこまった言い方である。

「ちょっと待って」「少し待ってください」「少々、お待ち下さい」

「食欲がないので、ご飯はちょっと(少し・少々)でいいです」

「この文章はちょっと(少し・少々)変ですね」

「ちょっと」の程度の小ささが極限的にちぢまった形が「もうちょっと(少し)で車にひかれるところだった」であり、「間一髪」の危うさを表している。

「ちっとも(少しも)心配することはない」というように、否定形になると、程度はゼロになり、「全然心配することはない」と同じ意味である。「少々」には、こうした用法はない。

さて、「ちょっと」の多義性は、「少し」や「少々」では言い換えられないところで発揮される。

①逆説的に「かなり、けっこう*」と程度の大きい状態をあらわすことがある。

「これはちょっと見ものですよ」

「ちょっとしたもんだろう」

「彼にはちょっとした財産があるようですよ」

②特に、交渉的な場で否定的なニュアンスの言葉に「ちょっと」がつくと、「かなり、そうとう*」と理解しなければならない。

「それはちょっと無理ですね(難しいです、困りました)」

「ちょっとひどいんじゃありませんか」

「ちょっと気をつけてくださいよ」

③「ちっとも〜ない」という否定の形は全否定だったが、「ちょっと〜ない」の場合は「容易にそうできない、そうならない」といった意味であり必ずしも全否定ではない。

「かなり前のことなので、ちょっと思い出せません」

「ちょっと考えられないような事故」
「こんな好い機会はちょっとありませんよ」
④相手に呼びかける時の「ちょっと」は、「すみません」とか「待ってください」といった後続の表現が省略されたものだろう。
「ちょっと、すみません」
「ちょっと、そこの方、ハンカチを落としましたよ」
「ちょっと、玄関にだれか来たようだよ」
「ねえ、ちょっと、どこ行くの」
⑤外国人にとっておそらく一番わかりにくい「ちょっと」は、断りの意向を表す「ちょっと…」だろう。
「一杯、どう？／今日は、ちょっと(つきあえません)…」
「まけてくれない？／それは、ちょっと（できかねます）…」
「パーティーにいっしょに行かない？　私はちょっと、用事があるので…」
「ちょっと」だけの答えなら、「ちょっと」は婉曲(えんきょく)なNO の意味ととればいいが、最後の例のように、断りの理由がすぐ続くと「ちょっと用事がある」というふうにもとれるので、かえって分かりにくいようだ。
日本語に深く通じている外国人が『〈ちょっと〉はちょっと』(ポン・フェイ著)と首をかしげるのも無理はない。　　　　（門）

つい・うっかり

ワープロが普及したためか、手紙などでも同音異義語のミスがよくある。「すみませんが、私は河合ではなく川井です」と言われて、普通は何と言って謝るだろうか。「あっ、すみません。うっかり（つい）間違えまして」などと「うっかり」や「つい」を使う人が多いようだ。
この「うっかり」も「つい」もぼんやりしていたり、不注意で何かをしてしまう時に使う表現で、どちらも本人が不本意でありながら起きてしまったことを言おうとしている。「あっ、つい、うっかり間違えました」と、この二つの語を重ねて使う例もある。

日本人は果たしてどのような心理状態でこの二つの語を使い分けているのだろうか。その点は、はなはだあいまいである。

他の文例で考えてみよう。腕時計を家に忘れてきてしまった時など、「つい時間を確かめようと腕を見てしまう」と「つい」を使う。これは実際、私が何回も経験したことだが、こういった習慣的な動作に対しては「うっかり」は使えない。

「彼に誘われると、つい断れずに誘いにのってしまう」

「まっすぐ家に帰ろうと思うんだけど、赤提灯（ちょうちん）を見るとつい寄りたくなるんですよ」

これらの文章は、習慣や癖になっていることを述べ、実際はしない方がいいのだがという気持ちが「つい」という言葉に表れている。

「あまりおかしなスピーチだったので、つい吹き出してしまったんです」

「疲れてついうとうとした隙に、スリにやられてしまって」

聖人君子ならいざ知らず、人間である以上、自己抑制には限界がある。「笑ってはいけない」「寝てはいけない」と自戒すべき行為も、抑制がきかず「つい」となる。こんな場合も「うっかり」とは言えない。

「うっかり」はどうだろうか。「私はうっかりもので」とか、「うっかりミス」という言葉がある。「うっかりもの」は、ぼんやりしていて注意力の足りない人、「うっかりミス」は注意が行き届かずミスが起きること、どちらにしても「意図的ではないのだから仕方ないのではないか」といったニュアンスが含まれている。

「パーティーの帰りに、うっかり他の人の鞄を持ってきてしまったんです。あまり似ていたもので」

これなど「うっかり」がなければ泥棒行為だが、この一言で「あわてものだが悪意はない」という意味が加味され救われる。

日本語には心の状態を表す形容詞が多いと言われる。その中でも、この「つい」や「うっかり」は無意識の状態で、気がついてみると自分では意図しない状況に立っていたという「甘さ」があり、また日

本の社会にもそれを許容する寛容さがあるように思える。「意図しないのに」という意味を含む語に
「思わず—思わず秘密を漏らしてしまった」
「ぼんやり—ぼんやりして一方通行に気がつかなかった」
「無意識に—無意識に言ってしまったことで、悪意はなかったんです」
などがある。これらの言葉がなぜ多用されるのかを考えると、日本人の意識構造を解明する上でも、重要な鍵となるに違いない。（佐）

ついに ⇓ いよいよ

つごう（都合）

「女性六人、男性五人で、都合十一人になりますね」
のように、「全部で、合計」という意味が元になっている。そこから、「物事が曲折を経て、結局」という意味、その「物事の曲折」の過程で「工面(くめん)する」、さらには「物事の曲折・事情」そのものを表すようになった。

現在では、「結局」の用法はまれになり、①「物事の事情、ぐあい、わけ」と、主に「都合する」「都合をつける」という言い方によって②「事態を工夫して都合よくする」の意味で用いられることが多い。
①「今晩、ご都合はいかがですか」
「今晩はちょっと都合が悪いので明日にしませんか」
こうしたやりとりでは、「都合」は実に便利な表現である。晩の予定のプライバシーを明かすことなく、「都合が悪い」というぼかした言い方で、相手の誘いを断ることができる。
外出途中に近所の人に「どちらへお出かけですか」と声をかけられるのを、プライバシーの侵害としていらだつ外国人が多いが、「ちょっとそこまで」という便利な慣用表現を覚えればそういらだつ必要がないのと似ている。
「どちらへお出かけですか」という問いは、別に相手の行く先への好奇心に発しているのではなく、あくまで何か声をかけることによって親しみを表そうとしているのだ。それに対する、「ちょっとそこまで」

も何か言葉を返すということ自体に意味をもたせた表現であり、別にあいまいさにめくじらを立てるものでもない。

これと同様に、その時の「都合次第」で、この「都合」というあいまい表現を使い分けていく知恵も人間関係の潤滑油として必要なのである。

「自分の都合ばかり考えてないで、他の人の都合も考えてあげなければ」

「ちょうど都合よくバスが来た」

「それは好都合、助かります」

「都合により閉店」

「この度、一身上の都合にて退職致すことになりました」

②「なんとか十万円都合してくれないかなあ」

「いやあ、申し訳ないが、ボーナス前なものでどうにも都合がつかないよ」

「久しぶりの同窓会なので、なんとか都合してできるだけ出席するようにするよ」

という具合に、「都合」をつけたり、したりする対象は圧倒的に「金」と「時間」が多い。「時は金なり」という近代の世知辛さが反映しているのだろう。

「都合」が融通無碍（むげ）の便利な言葉だからといって、あんまり「都合」をひけらかすと「ご都合主義」という芳しからぬ烙印（らくいん）を押されかねないので、要注意。

（門）

〜って⇩〜だって

つまらない

「つまらない」の肯定の形は、「つまり」とか「つまるところ」等の言い方に残っているような、「決着がつく、筋がとおる」といった意味あいなのだろう。そこから、「つまらない」とは、「決着がつかない、成果がない」というような意味になる。

「いつまでもこんな所で働いていてもつまらない」

「戦争なんて、実につまらないものだ」

「南に喧嘩する人あれば、行って『つまらないからやめろ』と言い」

「娘なんて、つまらないもんだ」

「成果が得られない」ものは、やっていて「面白く

ない、興味がわかない」ということになる。
「全然釣れなくて、つまんない」
「留守番なんてつまらないなあ」
「何もすることがなく、つまらない毎日を送っています」
こうした主観的な精神状態を表す「つまらない」が、人を「つまらなくさせる」当の対象に向けられると、「つまらない映画」「つまらない歌」「つまらない試合」というように、本来、面白くあるべきものへの否定的評価となる。
「つまらない」の否定性が単に「面白くない」状態よりもっとこうじると、「値打ちがない、くだらない」という意味になる。
「そんなつまらないことにこだわるんじゃないよ」
「つまらないことにお金を使わせられた」
「つまらぬ失敗のために、とりかえしのつかないことになった」
「つまらないものですが、どうぞお召し上がりください(お納めください)」は、「粗茶・粗品」と同様のへりくだった表現だが、外国人には概して理解しにくいようだ。
「つまらない＝面白くない」という主観的判断が「無価値」という客観的評価とつながってしまう点に、この語のあいまいさの注意点がある。　(門)

つもり

「私はA社と取引を開始するつもりです」
「社長はA社と取引するつもりだろうか」
最初の文は話者が予定を述べているのに対して、後の文は他者が社長の考えていることを推測している。
「つもり」は主語が話者である場合には、述べている内容について明確な意図や心組みがあるが、他者である場合には内容はあくまでも推測に過ぎず、「私の父は停年前に会社を辞めるつもりです」といった文は成り立ちにくい。この場合は「つもりらしい」「つもりだろう」「つもりではないだろうか」「つもりのようだ」と付け加えて使われるのが普通だ。
それでは否定文の場合はどうだろうか。「私はA社

とは取引しないつもりです」と社長が言った時、取引の可能性はゼロだろうか。実はこの「つもり」は「予定は未定」の範囲であり、後で「取引しないつもりでしたが、あまりにA社が熱心ですので取引することにしました」ということは多いにありうる。

しかし、同じ「つもり」を使った否定文でも言い方によっては可能性がゼロになることがある。「私はA社と取引するつもりはありません」と言った時だ。これを聞いた社員は「社長が断言したのだから、A社との取引はないだろう」と受け取るに違いない。同じ否定文でありながら「~しないつもり」と「~するつもりはない」には、これほどに大きな違いが出る。

娘が「私はお見合いなんてしないつもりよ」と言った時には、「まだ年が若いからそんなことを言っている」「相手によってはお見合いするかもしれない」と親は楽観できるが、「私はお見合いするつもりはないわ」と言われたら、どんな場合にせよ、娘はお見合いという形式そのものを否定していることになる。前者の使い方の方が、あいまい性を残していると言える。

事実に反した気持ちを述べる時にも「つもり」を使うことができる。

「予約したつもりですが…」

「貯金したつもりで…」

「死んだつもりになって働いてください」

これらには動詞の過去形が使われる。形容詞や形容動詞もよく使われる。

「私はまだ若いつもりだ」

「あれでハンサムなつもりよ」

「掃除したって、これできれいなつもりなの」

同様の使い方で名詞の場合は「私、あなたのお嫁さんのつもり」「彼はあれで我々のリーダーのつもりらしいよ」と「名詞＋の」形で使われる。実際はそうではないのに、そうなった気持ちを表すという点では共通している。(佐)

~で・~に

日本語で難しいことの一つに助詞の使い分けがあ

げられる。それは、外国人に限ったことではなく、日本人についても当てはまる。ちょっとした助詞の使い方一つで、言葉のニュアンスそのものが変わってしまうこともあるからだ。

「私でよろしかったら、ぜひお手伝いさせて頂きたいと思います」

この場合、助詞の「で」が話し手の謙遜した言い方を助けているが、「君でいいから来てくれ」と言われたら、誰でもカチンとくるのではないだろうか。「本当は君より能力のあるものが必要だが仕方ない。まあ、いないよりマシだろう」の意味が言外に表れていて「君でもいいから」の意味になるからで、「猫の手でも借りたい」と同様の使い方だ。

助詞にも「が」と「は」の使い分けに始まり、終助詞の使い分け、接続助詞の問題など多々あるが、ここでは格助詞の「で」にポイントをしぼって考えてみたい。

◎「あと三人で売り切れですよ」

電気屋さんの店頭で「限定十人」としてズーム、パノラマつきカメラを売っている。面白いから見ていると、先程からとっくに十人は超えているのに、「あと五人でおしまい、あっ一台売れました。あと四人で本当におしまい」などと拡声器でがなりたてている。人間の心理とは面白いもので、無限にあると思えば買いたくないものでも、数や量を限定されると「買わないと損」という気になる。その「限定効果」に一役かっているのが、「で」の存在だ。

◎「単三電池二本で、八時間は連続使用できます」

私が今使っているポケットワープロも、この「電池二本で」につられて買ったとも言える。この場合の「で」はワープロを八時間使用する場合の必要量を表し「電池二本あれば」と言い換えることもできる。

◎ケンブリッジで（に）手紙を書く

「で」は場所を表す名詞と一緒に使われることが多い。「今度の旅行はロンドンにもパリにも行くが、手紙はやはり学問の殿堂ケンブリッジで書こう」と場所の範囲を限定していることになる。これが「に」となると、手紙を書く行為の目的地がケンブリッジということになる。「に」には、「お風呂に入る」「バ

スに乗る」のように動作の帰着点を表す機能があり、ここが「で」との違いだろう。

◎「新宿で会う」「新宿にいる」

場所の後に「で」が来る時は、その後に「新宿で食べる、買う、乗る、写真をとる」などの動作動詞がくることが多い。「に」は「新宿に住む、いる、ある」などの状態動詞がくる。ごく基本的なことだが、やはり触れておくべきだろう。

◎「二次会は人事部でします」

会社の新入社員歓迎パーティーの最後に「二次会は人事部で行いますから」というのを聞いたA氏は、てっきり人事部で二次会が行われるのだと思って行ったところ、そこには誰もいなかった。「歓迎パーティーは営業部主催だったので、二次会は人事部が費用を持とうということだったようですね。場所を聞き損ねたのがまずかった」とA氏は頭を掻いていたが、間違えるのも無理はない。人事部は場所とも主催者ともとれるからだ。

「PTAで講演会に○○先生を招いた」「この機関紙は学会で発行しています」のように、「で」は組織や団体を示す語にも使われることから起きる混乱だ。

◎「明日で会社を辞めます」

カラオケで今もときどき聞かれる歌に「今日でお別れねもう会えない」というのがある。この「で」には、今まで続いた二人の関係も、今日という日を限度として終了するのだという悲しい響きがある。これを「今日にお別れ」と「に」を使う人がいるとしたら、それは日本語を母語としない人だろう。

しかし外国人には「クリスマスなので、来週に、国へ帰ります」などという人がいる。この場合は強いて「に」を使わず、「来週」だけでも良いのだが、授業は十二月二十日まであるのに、それ以前に授業を欠席して帰るような場合には「来週で帰ります」と言うところだろう。

「セブンイレブンは十一時で閉めます」

これは「十一時までです」と言い換えられそうだが、「まで」が「七時から十一時まで」とずっと開いていることを強調しているのに対して、「十一時で」は「閉める」ことを強調している。もしコマーシャ

ルを作るなら当然「まで」を使うべきだろう。「七時から十一時で」と言えないのも、「で」は継続している時間とは関係ない表現だからであろう。
◎「三分でお化粧するから、ちょっと待って」
「十分お化粧する」と「十分でお化粧する」、「で」が存在するだけで、なにやら言い訳めいて聞こえるのはなぜだろう。それは、「十分お化粧する」が口紅を塗ったり、アイラインを入れたりというお化粧の継続する時間を示しているのに対して、「十分でお化粧する」となると、お化粧が終わる時を問題としているからだろう。
この「で」の向こう側には、イライラしながら待っている恋人や夫の顔が浮かんでくる。これが「十分」なら良いが「一時間で」となると文章は成立しない。なぜなら「で」の背後には、「こんなに僅かな時間で」の意味が含まれるからだ。
「十日で論文を書き上げた」「八十八日間で世界一周」(今では通用しないが)「海外出張、一週間で戻るよ」などなど、この「で」の果たす役割は大きい。
◎「ハワイにカップルでご招待」
テレビのクイズ番組を見ていると、視聴率獲得にこんなキャッチフレーズが使われていることがよくある。この場合の「で」は、旅行に行ける人数を限定する言い方で、「で」の前には「一人で作った」「二人で飲んだ」「夫婦で買った」のように、その動作や行為をした人の数が来る。そういえば「赤信号みんなで渡れば怖くない」というときの「で」も同じ使い方と言える。
◎「渋滞で会議に遅れてしまった」
言い訳にも「で」は使われる。「風邪で休みました」「熱で頭がぼうっとしていて」「雨で中止にしました」、原因・理由に使われる「で」だ。「ショックで寝込んだ」「過労で倒れた」「あなたの忠告でたすかりました」「日本の援助で、学校が建った」、悪いことは「〜のために」、良いことは「〜のおかげで」で言い換えることもできる。
◎その他にも、原料や材料を表す「豆腐は大豆で作る」「このクリームは卵白で作られている」などや、情報源を表す「新聞で」「テレビで」「噂で」、必要量を示す「原稿三百枚で一冊」「三メートルでドレス一

着分」など、「で」の用例は数え上げれば枚挙にいとまがない。普段の会話の中で「で」がどんな風に使われているか、意識してみると面白いかもしれない。

（佐）

コ　ラ　ム

てフォーム

外国人に指導する日本語教育では、「てーフォーム（て形）」が初級の大切なポイントの一つになる。ところが日本語を母語とする日本人は「てフォーム」などという言葉は、ついぞ聞いたことがないという。なぜなら「てフォーム」は日本語の話し言葉の中で、ある規則性を持って頻繁に用いられていながら、我々日本人はその体系を意識することなく使っているからだ。

「えっ、ここにしまっておいたウイスキー、飲んじゃったの」

一見この何でもない会話文に「てフォーム」が二つ隠れている。傍線の部分を分解してみると、(1)「しまう＋て＋おく」と、(2)「飲む＋て＋しまう」になる。

「てフォーム」とは、動詞に「て」をつけた形であり、「しまう」は「しまって」、「飲む」は「飲んで」に変わる。五段活用する動詞は全て「てフォーム」に変わるとき、ある規則性を持っている。だから「しまう」が「しまって」に「飲む」が「飲んで」に変わるということは、日本人ならおそらく幼稚園の子供でも間違えることはない。ところが、外国人にとっては、これは全く新しい規則で、我々が英語を学ぶ時に、三人称の単数には動詞にsがつき、studyのようにyで終わる場合は、yをiに変えてesをつけるというのよりずっと複雑な規則なのだ。ここにその規則をごく簡単に書き出してみよう。（これまでの文中の傍線は「てフォーム」の箇所）

◎五段活用する動詞の場合

動詞の終止形が「む、ぶ、ぬ」で終わる時は「んで」に変わる。「ガムを噛む—噛んで」「荷物を積む—積んで」「遊ぶ—遊んで」「叫ぶ—叫ん

で」「死ぬ—死んで」（のみ）
「う、つ、る」で終わる場合は「って」に変わる。「犬を飼う—飼って」「彼が払う—払って」「岡の上に建つ—建って」「試合に勝つ—勝って」「レモンを切る—切って」「魚を釣る—釣って」

「す」で終わる場合は「して」に変わる。「中国語に訳す—訳して」「写真を写す—写して」

「く」で終わる時は「いて」に変わる。「日本語で書く—書いて」「席に着く—ついて」（例外が一つだけある。「行く」は「く」で終わるが「行いて」ではなく「行って」となる。英語に比べれば例外が一つというのは、外国人にとっては有り難いことのようだ）

「ぐ」で終わる時は「いで」に変わる。「ボートを漕ぐ—漕いで」「湖で泳ぐ—泳いで」

◎一段活用する動詞の場合

五段活用の動詞に比べればずっとシンプルで、「着る—着て」「寝る—寝て」と「る」を取って「て」にすれば良い。しかし、「きる」でも「切る」は五段活用だから「切って」、「ねる」も「練る」は「練って」と同じ終止形でも、その動詞の活用を知らないと「てフォーム」が作れないということになる。

◎「する」は「して」、「来る」は「来て」になる。

※

これで全てだ。我々は国語文法で音便について習った。しかし、既に話せる言葉の一部を「文法」として学ぶのと、全く未知の言語を規則から覚えていくのでは、頭にインプットされる過程が全く異なる。しかも「てフォーム」はこの変化を覚えただけでは会話に使えない。初めの例に戻ろう。「しまっておいた」の「て」の後に来る「おく」が問題なのだ。

ふつう、「おく」は「置く」で「机の上に置く」「棚に置く」という使い方をするが、「～ておく」となると「今、食べておく」「パスポート用に写真を写しておく」「主人が帰るまでシチューを温めておく」のように、「準備」や「用意」の意味

を持ってくる。「しまっておいた」は、来客の折りに出そうと思ったのになどといった「準備」の意味が感じられる。もしかしたら、自分が後でこっそり飲もうとしたのかもしれないが、それでも「置く」ではなく「いつかのための準備」と考えてよいだろう。

同様に「飲んじゃったの」は「飲んでしまったの」で、「てフォーム」の「て」の後に「しまう」が使われた例だ。「押入にしまう」「財布にしまう」の「しまう」が本来の意味を備えた動詞なら「飲んでしまう」「読んでしまう」「有り金残らず使ってしまう」「火事で家が焼けてしまう」は動作の完了を示したり、後悔の気持ちを表す。

このように「てフォーム」では「て」の後にいくつかの基本動詞が補助動詞として加わることによって、さまざまなニュアンスを表明するのが容易になる。

その例を書き出しておこう。

◎～ている

①今、風速四十メートルの風が吹いている。雨も激しく降っている。（動作が進行中）

②家に帰ると窓が開いている。鍵も壊れている。（窓が開くという動作の結果の状態が持続している）

③白いウエディングドレスを着ている。ぞうりをはいている。（服装）

④寝る前にいつもブランデーを飲んでいる。研究室ではいつもバロック音楽を聞いている。（習慣的な動作）

⑤このナイフは尖っている。このスプーンは曲がっている。（元からそういう状態にあるときに使われ常に「～ている」の形になる）

◎～てある

「床の間に花が生けてある」「掛け軸も掛けてある」

この状態が誰かの行為の結果であることを表し、「て」の前の動詞は他動詞になる。夫と妻の会話で「お風呂沸いている（自動詞＋いる）？」に対して「沸かしてあるわよ（他動詞＋ある）」

には、妻が夫に対して「自分が沸かしておいたので、自然に沸いたのではない」という暗黙の主張が込められている。お風呂は温泉と違い、自然に「沸く」ものではないのだから。

◎〜ておく

①地震に備えて非常袋を作っておく。若いうちに体を鍛えておく。(準備・用意)

②遊びたいだけ遊ばせておく。言いたいだけ言わせておく。(放任・放置)

◎〜てしまう

①「その映画はもう見てしまいましたよ」(行為が完全に行われたことを強調する)

②自動車部品の制裁措置がとられてしまった。取引先に断られてしまった。(残念)

③つい本音を言ってしまった。思わず笑ってしまった。(無意識の行為)

◎〜ていく・〜てくる

①自転車に乗っていく。「友人がケーキを買ってきたから一緒にいかが」、行く、来るという動詞本来の意味を保っている。

②夕方になってだんだん賑やかになっていった(きた)。(状態の推移)

③「ちょっとでかけてきます」(話者がその場に戻る意味がある)

◎〜てみる

味見してみましょう。まず、相手の説明をよくきいてみる。(試しに何かする)

※

要点だけを書き出してもこれだけになる。て形の意味の多様性、複雑さは、日本人自身も自覚してない面が多いように思う。

(佐)

〜的

「個人的、社会的、合理的、現代的、主体的、普遍的、積極的…」というように、ちょっと固い文章を書こうとするとやたら連発しがちな「〜的」だが、その由来はきわめて「漫画的＝漫画チック」なものだったようだ。

明治初期の先達(せんだつ)は近代化を推進するためには、必

死に西欧の概念を漢語を用いて翻訳・導入しようとしていた。「社会、個人、意識、文化、経済、教育、恋愛…」等々の膨大な名詞群は、なんとかそれなりの漢語をあてはめることができたが、その名詞に対応する形容詞をどうさばくかが大問題だった。それでなくとも、柳田国男がいうように、日本語は伝来「形容詞飢饉」に陥っており、「豪華な、健康な、元気な、勤勉な…」という具合に漢語に「な」をつけた、いわゆる形容動詞によって、「美しい、古い、高い、大きい」等のやまとことば本来の形容詞を補ってきたのである。そこで、明治の翻訳家の中で(駄)洒落のセンスのある人が、中国語で「～の」にあたる助辞「的」を英語の“-tic”という形容詞接尾辞に見たてたのである。“romantic, fanatic, fantastic”はそれぞれ「浪漫的・熱狂的・魅惑的」となるわけだ。

　さて、それ以来、形容詞不足を補う便利な小道具として濫用されてきたきらいのある「～的」(ちなみに、『広辞苑』では二百八十六項目の「～的」が見出しとなっている)だが、意味「的」にはだいたい次の三通りに分かれる。

①そうした性質を有する、いかにもそれらしい。
「いかにも日本的な解決の仕方だ」
「彼はバリケードの上で悲劇的な最後をとげた」
「実に感動的な映画だった」
「容貌は貴族的だが、行動は病的だ」
「この研究書はいまやこの分野の古典的な業績だ」
といった意味。

②それに関する、それにもとづいた、それとしての、
「日本では今、政治的関心は底をついている」
「事態の徹底的な究明が期待されている」
「もっと現実的にならなければね」
「科学的な知識だからといって、妄信してはいけない」
「身体的には成熟しているけど、精神的にはまだまだ子どもだ」

　これまで「～的」という言葉を使いたがるのは、知「的」階層の人たちが多かったが、最近は若者言葉で、既成の結合とは一風違った形で「～的」が用いられているようだ。例えば、「雰囲気的にはよく分

かるんだけどね」「人数的には揃ったようだ」「中島みゆき的暗さ」といった具合である。こうした「〜的」は、「〜とか」や「〜ぽい」と同様、表現の輪郭をボカすことによって語感をやわらかくする働きをしているようだ。（門）

適当・ほどほど

「解答の選択肢の中から最も適当と思われるものをひとつ選べ」
「ええい、適当に○しておけ」
といった具合に、「適当」には「ふさわしい、妥当する」という意味と「あてずっぽう、いい加減」の二通りの意味がある。もっとも、「いい加減」自体にも、「あてずっぽう」のほかに、「ちょうどよい状態」という前者の「適当」の意味があるわけだが。
「いいかげん」の場合と同じように、「適当」の分別くささが「出たとこ勝負」のちゃらんぽらんさに意味変容してしまう点には、「あべこべ祭り」のような、小さな価値転倒の含みがうかがえて面白い。
そうした目で見ると、先の「最も適当なもの」という、試験問題文の常套句はきわめて巧妙なレトリックを含んでいる。つまり、「適当なもの」という表現が受験者の主観的判断を許容するニュアンスを、「最も」という言葉によって試験問題作成者の主観的判断基準によって制限するという、高度の管理的性格をもっているのである。
「最も」という判断基準が恣意的なものであるために、試験問題に採用された当の文章の筆者もその試験問題に正解しえない、というようなこともしばしばである。
さて、こうした「適当」と似たニュアンスをもった言葉に「ほどほど」がある。「ほどほど」の「ほど」とは、そのものに合った「ほど」、つまり程度・限度ということであり、「適度」というわけである。「ほどほどのところで満足している（切りあげた）」という具合に、「分相応」という感覚がうかがえる。
おもしろいのは、「〜もほどほどにしておけ」という叱責の言い回しである。「冗談も（さぼるのも・甘えるのも・人を頼るのも）ほどほどにしろ（しなさい）」

という文句がとびだすのは、「冗談」等がすでに「ほど」を越えて、我慢の限界を越えた時である。決して、「適度な冗談」等なら許容するという、度量の広さを表す表現ではない。つまり、「しろ（しなさい）」という命令形は「その程度でやめておかないと許さんぞ」という意味のレトリックなのである。（門）

できる

「できる」の意味は、『広辞苑』によると次にあげるように実に多様である。

(1)出てくる

「江戸にできたこともおざるよ」（昔の表現）

(2)形あるものとして現れる

①（生まれる）「赤ちゃんができた」

②（生じる、発生する）「借金ができた」「にきびができた」

③（作られる、生産される）「この田からはコシヒカリができます」「この工場からは月に一万人分のパンができます」

④（男女がひそかに結ばれる）「あの二人はきっとできているね」

(3)まとまりがついて仕上がる

①（完成する、まとまる）「三年がかりの橋がようやくできた」「今月中にできないようだとキャンセルされてしまう」

②（ものごとがうまくいく）「注文の品はなんとか用意できた」「三回転半ジャンプがうまくできた」

③（完成度の高い人）「若いのになかなかできた人だ」「できの悪い息子でして…」

(4)あることについての能力、才能がある

「英語ができるし車の運転もできる」「人の心をつかむことができる人」

(5)可能である、なにかをする能力、権利がある

「力仕事ならお手伝いできますよ」「手話がちょっとばかりできます」「区民以外の方も受講できます」

一つの用語にこれくらいの意味があると、そのどれにあてはまるかがわからなかったり、また、わざと二つ以上の意味を含ませて使うこともあるので、

必然的にあいまい度は高くなる。
喜劇や漫才などで、
「あなた、できちゃったの…」
「どこにできたの？　軟膏でも塗っておけ」
などとやるのは、意図的に意味をずらして笑わせる古典的なお笑いのパターンである。

日常生活では、これまであげた意味、用例それぞれにもあいまいさゆえの行き違いはあるが、とてもあげきれない。二、三の例をあげると、(a)「できるだけのことはいたします」や、(b)「今月中にはできあがるっていったのに、約束が違う」などで誤解やトラブルが起こる。

(a)は好意的態度を示す外交辞令（あいまい表現の横綱格）として使われる。そのことばを信じる人は少ないが、いよいよのときは「できるだけのこと」をしてくれると期待して助けを求める場合もなくはない。しかし、意外にも（実は、やはり）冷たくあしらわれる、というのが不人情ドラマの定石である。

(b)「できあがるはず」は、完成予想のズレから生ずるトラブル。相手の要望に努めて応じようとする善意豊か(?)な日本人は、希望的、好意的、前向き*（これもあいまい語）な予定を立て、それを違えたときには責任を感じる。予定を几帳面に守りたがる人同士の間には、予定が変わったときに強い緊張が生まれる。しかし、世界には予定どおりいかなくて当たり前、という価値観の国もザラにある。

この種のディスコミュニケーションの原因は「できる」自身にあるというより、この語を含んだメッセージと事実関係との間のズレ（つまり事実の裏付けがあるかないかの認識の食いちがい）にあったと見るべきだが、「できるだけ」となるとその種の食いちがいを起こさせるあいまい語と認定すべきものだろう（「なるべく」「なるたけ」などと同類）。

なお、大橋禄郎氏によれば、男女関係について使う「できてる」も、俗に「焼肉をつつき合う二人は………」などと軽口めかして用いられるそうだが、これは、最初からベールの向こうの想像を楽しむ会話という、罪の軽いケースとでも見ればよかろう。

（芳）

～でも

50年代から60年代にかけて、「デモ・シカ教師」という言葉があった。「教師にデモなろうか、教師にシカなれない」というタイプの先生をおとしめた表現だった。その後、教員採用試験が難関になり、半ば教師自身の自嘲もまじったこうした言い方も消えていった。しかし、教師という職業につきまといがちな「聖職」意識の堅苦しさを軽く皮肉った表現として印象に残っている。

「教師にでもなろうかな」という時の「でも」には、「特に教師になりたいというわけではないが、他にこれといってなりたいものもないので」という消極的な選択といった感がある。「他にやることもないし、テレビでもみるか」「せっかく合格したんだから、この大学でもいいか」「新宿にでも行って時間をつぶすかな」

一般的に言って、「でも」は例をあげる時に使う表現だが、そこであげられる例が極端な場合と、軽い思いつきの場合とに分かれる。

①極端な例をあげて、他の場合も同様と類推させる。

「そんなことは子供でも分かるはずだ」

「今月は日曜日でも休むわけにはいかない」

「金持ちでも幸福だとはかぎらない」

「原作者でもまちがえるような国語の試験問題」

「雨天でも明日の道路開通式は行われます」

②同種の事柄の中から思いついたものを例としてあげる。

「コーヒーでも飲まないか」

「友達にでも相談してみたら」

「今度の日曜、映画でも見に行きませんか」

「そういう時、部屋に花でも飾ったらちょっとは気分がはれるよ」

「そんなところにおいて、なくしでもしたら大変だよ」

「コーヒーでも飲まないか」という時の「コーヒー」は、「でも」の働きによって飲み物の代表になっている。相手の好みによって、紅茶でもお茶でもいいわけだ。こうした効果から、「でも」は、「明日にでも

お返事いただければありがたいのですが」のように、依頼や要望を婉曲化する時にも使われる。

こうして「でも」の働きを分類してみると、「デモ教師」の「でも」に、もう一つの含蓄があることが分かる。ほかに強い志望もなく、なんとなく教師になったという上記の意味あいは②の「でも」の用例に近かった。それに対して、「いろいろ他の就職試験を受けてみたがうまくいかなかった。しょうがない、教師にでもなるか」といった感じだと、「生活保証のための滑りどめ」という①の極端例のニュアンスになる。もっともこの場合は、「教師にしかなれない」という「シカ教師」と大差なくなってしまうかもしれない。

なお、「いつ」「だれ」「どこ」「どちら」「なに」といった不定代名詞に「でも」がつくと「全部の場合に」という意味になる。（門）

どう

テレビを見ていたら、こんな場面があった。母親が娘に見合い写真を見せる「この方どう？」、娘は黙って首を横に振る。数枚ある写真の中から、母親は別の男性の写真を選び、「この方はどうかしら？」「どう言ったらいいかしら。何かピンとこなくて」と娘はふたたび首を強く横に振る。

そばで新聞を読んでいた父親が「もう構うな。どうでも好きなようにさせろ」とどなる。娘が父親をチラッと見て「『どうでも』って、どうしろっていうのよ」と答える。

これは留学生の授業に使えそうな場面だ。「見合い」は面白いテーマだし、ビデオに収録しておいて良かった。私はそう考えて授業で使ったところ、留学生の反応は「ずいぶん『どう』の多い会話ですね。『この方どう？』は何を聞いているのですか」と質問されてしまった。

確かに彼らの言う通り、じっくりと場面を繰り返しみると「どう」が六回も使われている。このシナリオライターの癖かと言われると、そうも言えない。「どう」は何を特定して聞くのでもなく、よく分からないことを提示するには、もっとも適した表現だと

思えるからだ。
「ねえ、最近どう?」「ええ、まあまあよ」
質問もあいまいなら答えもあいまい、これで会話が成り立つのだから「どう」は本当に便利な表現だ。
「どう? 何かあった?」「ううん、どうってこともないけど」
日本語では挨拶をしたり、相手の様子を尋ねる時に「どう」を多用するが、これなどは留学生に説明するのが最も難しい表現だろう。
このテレビのセリフは「『どう』は"How about~"で『どのように思いますか』です」と言いながら
「セーターを選びながら『この色はどう?』」
「パーティー、来週の日曜日どう?」
などと例文をあげてみせる。しかし実際はそんなに単純なものではない。この場合の母親の「どう」は娘に写真の男性を勧めたり、娘の意向を聞こうとしているので、この説明で当てはまる。
しかし、たとえば、写真の男性の服装のセンスの無さを「彼の洋服、どう」と語尾を下げて発音すれば、侮蔑している様子がありありと出てくる。「どう」が含みの多い表現だけに、イントネーション一つで誇らしげにも、憎らしげにでも表現できるのだ。とても"How about"などという単純な訳では言い尽くせない。
父親の「どうでも…」に対して、娘の「どうでもって、どうしろってこと」は留学生の喝采を浴びたセリフだ。
「この中から選ばなくても良いということなのか、結婚しなくてもよいということなのか、写真以外のどんな男性と結婚しても良いということなのか、父親は意見をいうべきで『どうでも』などという言葉は不適当」
というのが彼らの言い分だ。これも、「君の思う通り決めていいんだよ」とか「自分の人生だから、自分の好きな人を選びなさい」などと言い換えると、俄然父親の評価はあがる。
しかし、日本人なら、こんなバラの香りのするシャンプーをつけた父親よりも、キリッと口を結んで「どうでも…」といった言葉の中に、父親の暗黙の了解をみてとるのではないだろうか。それとも世代に

よって、了解の仕方も違ってくるのだろうか。
「どう」で気になるセリフに、むかし女性歌手が歌った「どうにもとまらない」がある。この「どうにも」は「どのようにしても」とすると納まる。「どうにも我慢できないんだ」とか「どうにも食べたくなって」と自分の抑えがたい気持ちを表現している。
「どう」のついた言葉は実に多い。それだけ、はっきりと言わないこの表現が便利で日本の社会に合っているということだろうか。ここでは、外国人によく質問される「どういたしまして」を、もう一つだけあげておくことにしよう。
「お嬢様、おきれいになりましたね」「どういたしまして…」、これは相手の褒め言葉を打ち消す表現、
「先日はありがとうございました」「どういたしまして」、これは相手の謝礼を打ち消す表現、
「この間は本当に申し訳ないことをいたしまして…」「いいえ、どういたしまして、申し訳ないのはこちらの方で…」、これは相手の詫びを打ち消す表現、
どれも丁寧な言葉だ。しかし、これらの表現もだんだん姿を消す運命にあるようで、僅かに生き残るのは"you are wellcome"の意味だけかもしれない。
これからの日本語は「どうなっていくんでしょうね」。

（佐）

どうか

「どうぞよろしくお願いいたします」と「どうかよろしくお願いいたします」を比べると、「どうぞ」よりも「どうか」の方が願望や依頼の思いを強く感じさせられる。もともとの意味は同じようだが、「どうぞ」の方は「どうぞ、お先に（お掛けください）」というように社交辞令としてよく使われるのに対して、「どうか」には「どう（に）かしてほしい」のように「なんとか」*に通じる切迫感があるからだろう。
そのためか、祈りの気持ちを口に出す時は、「どうぞ」よりも「どうか」の方がぴったりくる。
「どうか、息子が無事でいますように」
「どうか、合格しますように」
「どうか、彼女と結ばれますように」

「どうか」には、先にも述べたように「なんとか・どうにか」といった意味もある。
「飛行機の騒音をどうかしてもらえませんか」
「学費だけはどうかしてやりたい」
「どうかこうか危機をのりこえることができた」
「どうかする」で「ふつうでない、おかしい」といった意味になる場合もある。
「最近、どうかしてるんじゃないか」
「頭がどうかしているとしか思えない」
「どうも足の骨をどうかしたらしい」
「ここではどうかすると、夏でもはだ寒い日があったりするんです」
この用法では、「どう」の疑問のニュアンスが強く生きている。（門）

とうとう ⇩ いよいよ
当　分 ⇩ しばらく

どうも

「どうも」は実に便利なことばだ。日常のさまざまな場面で、挨拶ことばとして「どうも」がひんぱんに使われている。
「どうもありがとう」（感謝）
「どうもすみません（申し訳ありません）」（謝罪）
という挨拶の二大場面に用いられるが、それだけではない。
「どうも初めまして、木村と申します」（初対面）
「どうもお久しぶりです（ご無沙汰しています）」「どうもいつもお世話になっています」（知人と会った時）
「どうもこの度はおめでとうございます」「どうもこの度はとんだことで…（ご愁傷様です）」（祝儀・不祝儀）
「どうもお邪魔（失礼）しました」「どうもご苦労さま（お疲れさま）でした」（別れる時）
等々、「どうも」は、実にほとんどすべての挨拶局面で使用可能なのである。
しかも「ありがとう・すみません」等の挨拶部分を省略して、ただ「どうも」だけでも右のすべての状況での挨拶表現になる。かつての大物政治家がす

べての挨拶を「やあ、ドウモ、ドウモ」ですませていたという例もある。こうした「どうも」は、簡便さがうけて、多用されるようになってきている。

これに対して、「ありがとう・すみません」といった肝心の挨拶表現を省いてしまっては、礼を失するという批判もある。しかし考えてみれば、「ありがとう」も「すみません」も、どういう状態が「有り難い(そう有るのが難しい)」か、「(自分の気持ちが)済まない」のかを省略した表現なのである。また、関西弁の「おおきに」も「大いにありがとう」の、「大いに→おおきに」つまり「どうも」の部分の独立化だとも言える。一概に、簡便挨拶語の「どうも」を否定してしまうわけにもいかないだろう。

とはいうものの、「ありがとう」(感謝)と「すみません」(謝罪)の二大挨拶表現が同じ「どうも」になってしまうのには多少、問題があるかもしれない。もっとも、ルース・ベネディクトが『菊と刀』で指摘していたように、「すみません」自体がこうした両義性をもっている。簡略挨拶語の「どうも」は、いわば「すみません」の両義性を更に拡張して、ほとんどすべての挨拶局面で使用可能な万能語となってしまっているわけである。この意味で、挨拶語の「どうも」は「あいまい語」の極と言えるだろう。

ところで、「どうもありがとう(すみません)」の「どうも」は「ほんとうに、まことに」といった強めの表現と思われているが、もともとは、「どうしても・どのようにしても」という表現から由来している。

「いくら考えても、どうもよく分からない」

「ずいぶんいろいろやってみたのだが、どうもうまくできない」

のように、次に否定を伴う用法は、最大限に努力しても不首尾に終わってしまうことを表しており、この語の由来をよく伝えている。では、どうして、「どうしても」といった「どうも」の意味あいが、「ほんとうに、まことに」というような単なる強めの意味に転化したのだろうか。

挨拶表現の基本形ともいうべき「どうもありがとう・すみません」がヒントだと思う。それらの表現は、「どうしても(そのように)有り難い」「どうしても(自分の気持ちが)済まない」という表現から来てい

ると思われるからだ。先にみた挨拶表現の根底には、「どうもありがとう・すみません」といった「感謝・謝罪」のニュアンスがともなっているために、「どうも」が単なる強めとして他の挨拶表現にも転用されるようになったのではないだろうか。

さて、「どうも」には、もう一つ、「原因や理由ははっきり分からないが、何となくそう思われる」という意味あいがある。

「としのせいか、最近どうも疲れやすい」

「あの出来事以来、どうも職場の雰囲気がおかしい」

「さっきからどうも変だと思っていたら、そういうことだったのか」

これらの「どうも」の「何となく」というニュアンスは、「どうしても分からない（理解できない）」というところから派生してきているのではないだろうか。

「どうも」の多義性・あいまいさの根底からは、「どうしても分からない（できない）」という人知や、人間の努力を越えたものの存在を読み取ることができる。（円）

〜とか

「AとかBとか」というように、同種の物事や動作を二つ以上並列するときに用いる。「AとB」という並列表現と比べると、あまり厳密に論理的に列挙するという趣はなく、その場で考えつく例をあげていくという感じが強い。

「日本の伝統芸術といえば、能とか狂言とかがありますね」

「たまの休みなんだから、映画を見るとか本を読むとかしたら」

「自動車部品とか半導体とかが、日米貿易摩擦で次次にアメリカの標的になっている」

こうした「とか」による例示の恣意的（しいてき）は、「とか」がもともと「と＋か（いう）」というように、不確実な想像または伝聞を表すところから来ているのだろう。例えば、『琵琶湖周遊の歌』の歌詞の一節、

「雄松が里の乙女子は　赤い椿の森蔭に　はかない恋に泣くとかや」

あるいは「あの話は御破算になったとか（いう事です）」

文末のみでなく、文中でも、不確かさを表す表現として用いられる。この場合は「とかいう」となることが多い。

「天気予報によると、明日あたり大雨になるとかいう話ですよ」

「たしか彼には〈道〉とかいう作品がありましたね」

「さきほど佐藤さんとかいう人から電話がかかってきましたよ」

ところが最近の若者ことばでは、文中でも「とかいう」ではなく、しかも並列しないで「とか」を多用するようになっている。

「コーヒーとか、飲まない？」

「私って、赤とかが好きな人なの」

「私の場合、森崎君とかと違って、ふるさとって言えるところがないの」

「コーヒーとか」は「コーヒーでも」と同種の表現であり、それほど違和感がないが、「赤とか」や「森崎君とか」の「とか」は余分な感じがする。「赤が好き」とか「森崎君と違って」という言い方の断定的な調子を嫌った表現なのだろうか。「とか」が他の同種のものを言外に想定するニュアンスを通して、断定を避け自らの責任を回避するとともに、聞き手との協同性にもたれかかる、といった傾向を見てとることができる。

（門）

〜ところ

「ところ」はふつうは「空間・場所」を表す。しかし「その話を聞いて、危うく泣くところでした」のように、その動作が行われた場面や状況を表すことがある。

電話がかかってきた時、話したくない相手を撃退する方法は「今でかけるところですから」（その動作が今始まろうとしている）、「今でかけているところですから」（動作が進行中）、「たった今、でかけたところです」（動作がちょうど完了したばかり）など、「ところ」を効果的に使うことができる。もっとも家族の協力が必要だが。

この場合の「ところ」は動詞に付いて、その動作や現象が起きた時点を表すもので、「〜するところ、〜しているところ、〜したところ」と「ところ」の前に来る動詞が終止形(辞書形)ならば直前の動作を、「〜ている」なら進行中の動作を、そして過去形(タ形)ならば直後の動作を表す。

お寿司屋さんに出前を頼んだがなかなか来ない。催促の電話をすると

「あっ、今お作りしているところですから」(多分まだ何もしていない)

「今、出前に出るところなんです」(作っている最中か)

「たった今出たところです」(本当かな)

などという返事が返ってくることがある。半信半疑で聞きながらも、そう言われると「じゃ、お待ちしていますから」というしかない。「ところ」も使いようである。

お祭りで「金魚すくい」というのがある。大きな金魚を紙の網ですくおうとすると、サッと破けて金魚はもとの水槽へ。金魚屋のお兄さんはいかにも残念そうに「もうちょっとのところだったのにね」という。十分もその場にいて聞いていると、何度でもその台詞(せりふ)がきける。

この場合の「ところ」は、「金魚がすくえる」という特定の状態に至る前の段階を示し、「核戦争になるところだった」「不渡手形を出すところだった」「彼との婚約を破棄するところだった」など過去形で表され、「残念だ」とか「しなくて良かった」という気持ちを表すことが多い。

「ところ」は欧文の関係代名詞を訳す時にも使われる。「彼が買ったところの本は…」など実に不自然だと思う。「私が愛するところの人は、哲学者であると同時に…」、別に「ところ」がなくても意味は通じる。今でも中学校ではこういった訳が行われているのだろうか。

(佐)

〜として

日本人は名刺好きだとよく言われる。初対面の相手にまず名刺を出して挨拶するのが日本式だ。外国

人も日本に来るとすぐ名刺をつくる人が多い。その意味するところは、日本の社会で重要なのは個人ではなく、その個人の背負っている肩書ということだろう。「として」という表現は、その肩書・立場を表明するキーワードになる。

「私個人としてはぜひ参加したいのですが、学長としての立場を考えると…」

「この会社の広報係としては、そこまでしか申し上げられません」

「〜として」は実に都合の良い言葉だ。本音を言わずあくまでも、肩書の立場でものを言えば済む。

「彼は社長としてこの会社を育て上げた功績は大きく、またスポーツマンとしても柔道二段の腕前、男として魅力的な人物だと思うが、夫としてはだらしなく、また父親としては失格だった」

名詞＋「〜として」の形で、一人の人間のさまざまな側面が描かれている。しかし、それは部分、部分に光を当てたに過ぎず、全体像は「〜として」で表されることだけではあいまいである。

「何一つとして、不自由なことはない」は、不自由なことは全くないこと(しかし自由かどうかには触れていない)、「誰一人として、意見を言おうとしなかった」は全員言わなかったこと。このように後に打ち消しの言葉が来ることで、「例外なしに全て」という意味になる。

その他に「〜として」は、「はっとして気がついた」「ほっとしてため息をついた」「堂々として悪びれた様子がない」など、状態を表す言葉に続いて副詞的に使われることもある。

(佐)

どちら

歌唱コンクールで審査員たちが一位の人を決めるのに苦慮していた。票が二つに分かれてしまったからだ。司会者は時間を気にして「審査員の皆さん、どちらか(複数のもの、特に二つのものの中から一つを選ぶとき)に決めてください」と言った。

「うーん、どちらとも言えないな(はっきりと判断できない時)」と一人が言うと、「どちらかと言えば(あえて判断する時)、最初に歌った人の方がいいので

は」ともう一人が言う。「どっちを（人をさす、どちらよりぞんざいな感じ）選ぼうと、そう違いはないのに」と司会者は内心いらいらしている。

この例からも分かるように、会話の中ではっきりと限定できる時には「どちら」を使う必要はない。「こちらにします」「そちらの方が便利ですよ」「あちらの方にお願いしては」のように、「こ・そ・あ」を使うことができる。ところが迷う場合には「どちら」の出番が俄然多くなる。

「どっちかと言えば」は両者を比較して、差異がないので判断に迷う時の表現だが、実際には差異がはっきりしている場合にも、相手にはっきりどちらかを示すことで失礼にあたるのでないかという配慮が働き、あいまいな表現を選ぶとも考えられる。

「今度の土曜か日曜に研究会を開きたいと思いますが、どちらがよろしいでしょうか」と聞かれ、「そうですね、どちらかと言えば土曜日の方が都合がいいのですが…」という答え方をする場合がある。実際は日曜が都合が悪いのだが、それでもはっきりと断言することを避け、相手の出方をうかがう時だ。

もちろん親しい人同士や友人の間では、こういったことをする必要はない。「日曜は都合が悪いから、土曜日にしましょう」と言えばいいのだ。

「どちら」は場所や方角を示す場合にも使われる。近所の人と顔を合わせ「あっ、どちらへ」と挨拶する。返事は「ちょっとそこまで」でよい。しかし、外国人には、この「どちらへ？」を文字通りに解釈して」「これから新宿へ行きます」などと生真面目に答える。もちろん、この答えが間違っているわけではないのだが、どこかちぐはぐな感じを受けるのは、「どちらへ？」が必ずしも場所や方向を訊ねているわけではないからだ。

電話で「どちら様ですか」というのは、なかなかセンスのある表現だ。不特定の人を示す表現で、しかも丁寧である。最近は「失礼ですが…」と言ってこちらの名前を問われることがあるが、その聞きかたは本当に「失礼」に感じることがある。その後は省略しないで「どちら様ですか」と付け加えた方が、どれだけ礼儀にかなっていることだろう。

（佐）

コラム

同音異義語のあいまいさ

「キシャノキシャハキシャデキシャ」

という電報を受け取ったら、その意味を即座に理解できるだろうか。われわれはこれらのカナを頭の中で次のように漢字に置き換えて、はじめてその内容を理解する。

「貴社の記者は汽車で帰社」

こうした事はなにも電報を読む時にかぎらない。同音異義の漢字がある表現が会話の中ででてくるたびに、とっさに行っていることなのである。時には、違う漢字をイメージしたまま、互いにそれに気づかずに会話が進むことすらある。

「この間、横浜に講演に行ってきたんだ」

「ふーん、人がたくさんいた?」

「うん、たくさんきてくれたよ」

「? もう若葉がきれいだったろうね」

「? いやあ、講演会場の中の緑は人工植物だからね」

「あっ、そうか! てっきり横浜(の)公園に行ったのかと思った」

「こうえん」を『広辞苑』で引くと、「講演・公園」のほかに「公演・後援・好演・高遠・光炎」等全部で二十一の同音異義語がのっている。ほかにも、「かんこう/慣行・刊行・観光・感光・敢行等三十五項目」「せいか/成果・生家・青果・聖歌・聖火・正価・製菓等二十六項目」「せいき/生気・世紀・正規・精気・性器・生起等二十一項目」等、二十以上の同音異義語をもつ表現がけっこうある。

こうした言葉を使うときには、たえず漢字をイメージしながら使っているわけである。したがって、日本語学習もあるレベルまでくると、ある程度の漢字を習得していないと語彙が広がらなくなってしまう。

もっともワープロが浸透した現在では、こうした漢字は必ずしも正確に書ける必要はなく、読めてその意味の違いが理解できればいいわけ

である。われわれもワープロの変換ミスで、例えば「同音意義語」あるいは「同音異議語」などとついしてしまったりする。まったく油断ならない言葉である。

「記者／汽車」や「講演／公園」といった組み合わせを「同音異義語」というが、ほかにも「当てる／充てる／宛てる」といった漢字の使い分けの厄介さがある。こちらの方は「同訓異字語」と呼んでいる。使い分けが難しく紛らわしい「同音異義語」と「同訓異字語」の代表的なものをあげておこう。どのくらいきちんと使い分けているか、各自で確認しておかれるといいと思う。

【同音異義語】

以外／意外、意志／意思、解答／回答、開放／解放、観賞／鑑賞、共同／協同、脅迫／強迫、交代／交替、最後／最期、実態／実体、修行／修業、主催／主宰、自身／自信、白身／白味、進入／侵入／浸入、進路／針路、制作／製作、成長／生長、施工／施行、前進／漸進、専用／占用、阻害／疎外、促成／速成／即製、対象／対照／対称、体制／体勢／態勢、徴収／徴集、調整／調製、直観／直感、追及／追求／追究、転化／転嫁、特徴／特長、発行／発効、必死／必至、平行／並行／平衡、変移／変異、保証／保障／補償、民族／民俗、無常／無情、路地／露地

【同訓異字語】

会う／合う／遭う、空く／明く、足／脚、暑い／熱い、充てる／当てる、油／脂、荒い／粗い、表す／現す、痛む／傷む／悼む、打つ／撃つ、写す／映す、生む／産む、得る／獲る、遅れる／後れる、納まる／収まる、押す／推す、下りる／降りる、変える／代える／替える、課する／科する、形／型、皮／革、乾く／渇く、効く／利く、聞く／聴く、越える／超える、探す／捜す、割く／裂く、締める／絞める、攻める／責める、添う／沿う、絶つ／断つ、建てる／立てる、次ぐ／継ぐ、飛ぶ／跳ぶ、止まる／停まる、直す／治す、延ばす／伸ばす、早い／速い、

図る／計る／測る／量る、初め／始め、放す／離す、振るう／奮う、混ざる／交ざる、町／街、丸い／円い、回り／周り、見る／診る、破れる／敗れる、柔らかい／軟らかい、読む／詠む、技／業

※

話し言葉の中で漢字を思いうかべないと意味がつかめない場合があるというのは、日本語の表記や語彙形成に由来する難点だが、逆に漢字を見ると未知の語についても意味のイメージがわくという利点もある。（門）

～とって・～対して

①「彼にとって会社は生活の糧を得る場所にすぎない」

②「会社にとって彼は必要欠くべからざる人材だ」

①の文の中心は彼であり「とって」は「彼を中心にして考えると」と言い換えられる。同様に②は「会社を中心にして考えると」となる。「Aを中心に考えると、BはCである」という構文が成り立つ。

◎「私にとってあなたは…」「なんだい？」「生きてることの全てよ」「悪いけど、僕にとって君はガールフレンドの一人に過ぎないよ」

◎「私に対してあなたは…」「なんだい？」「どうしていつも冷たいの」「別に特に冷たくしているとは思えないけど…」

外国人学習者にとって「とって」と「対して」の違いは非常に難しいようだ。ところが、外国人学習者に対して分かりやすい説明が載っている辞書はほとんどない。

この場合のように「とって」は、その対象（外国人学習者）を中心にして述べ、「対して」はその対象に向かって言うという違いがある。

「とって」という言葉は、我々に視点の変換をせまる言葉でもある。

「日本にとってアメリカはかつて憧れの国だった」

「アメリカにとって日本はかつて…」

「学生にとって教師は…」

「教師にとって学生は…」

この言葉をキーワードにさまざまなことに思いをはせると、禅問答になる。
「人間にとって生きることとは…」
「夫にとって妻とは…」
「女にとって結婚とは…」
どれも、その立場から見た都合や利害が関係してくる。
では「対して」はどうだろうか。
「教師はいじめ問題に対して、どのように取り組むべきだったか」
「核実験に対して無関心ではいられない」
「社長に対して誰か意見を言ってくれる人はいませんか」
「対して」は対象に向かって働きかけたり、あるいは反対の立場を明らかにしたりする。
「アメリカにとって日本は…」
この場合「アメリカを中心にして考えると」であり、「アメリカに対して日本は…」となると、アメリカと日本が対等の関係になる。シーソーなら「とって」の場合はアメリカが下に下がるが、「対して」なら、棒は並行でその両端にアメリカと日本があるという図がかける。
さて、これから日本はアメリカに対してどういう姿勢でのぞむべきだろうか。（佐）

とにかく

「とにかく行ってみよう」、本来なら行く前に色々な事情を聞いたり調べたりする必要がある。それはさておいても、と行動が先に立つ。ゴチャゴチャ言わずまず行動というところか。
「とにかく一度食べてみてくださいよ。それはおいしいんですから」
「とにかく喧嘩はやめろ」
「まあ、とにかく会って説明を聞きましょう」
「とにかく取引先の言い分を聞いてください」
「とにかくタクシーで追いかけてみよう」
行動が先に立つ分、非常に潔く聞こえるが、実際は「問題はいろいろあるが」といった言葉が前提にあり、それを解決しないままの行動であるので、あ

いまいさが拭いきれない。行動したところで、解決するとは限らないからだ。

祖父のお蔵をのぞいた孫娘「とにかく真っ暗で」「とにかく薄気味わるいの」「とにかく黴だらけでね」、息子「とにかく値の張りそうな軸や壺がたくさんあってさ」「とにかく、よくこんなに集めたと思うよ」、お蔵の状態をそのまま現状を分析することなく、感じたままを述べている様子が「とにかく」に込められている。

「最近とにかく忙しくて」「何だか知らないけど、とにかく彼女最近きれいになったのよ」、このような使い方だ。話し手は「とにかく」を使うことで理由を言う必要はない。とにかく便利な言葉だ。

「被害を受けたA社が訴えるのはとにかく、こちらの世話になっているB社までとはどういうことですか」

「借金だけならとにかく、女性問題まであっては、ちょっとお助けできませんね」

会話では「〜はさておき〜は」という用法で「とにかく」が使われる。これらは、どちらかと言えば「ともかく」の方がぴったり納まるのではないだろうか。

(佐)

とりあえず

神戸で関東大震災に次ぐ大地震が発生した時のこと、親戚から慌てた声で「神戸の叔母ちゃんは元気やそうから、心配せんかてええよ。とりあえず電話しといた方がええと思って」と電話があった。こちらからは、ニュースを聞いて神戸に電話しても一向につながらない時だけにほっとした。

しかし、なぜ「とりあえず」なのだろう。「とりあえず」は「とるべきものもとらずに」の意味だ。この場合は「叔母の状態を心配しているだろうから、まず他のことは差し置いて、電話だけしておきますよ。後でゆっくり話しましょう」と、言外に「今はゆとりがないし、電話だけでは物足りないことは分かっているが、でもすぐに電話をかけたんですよ」と言った気持ちが込められている。

「とりあえず」が使われる背景には、「急いでいる、

これしか方法がないので仕方がない」といった状況がある。そうでなければ、この表現は、レストランでオードブルだけはすぐに出たが、なかなかメイン・ディッシュが出てこないような不完全さが伴う。「とりあえず、お知らせしようと思って」と知らせを受けたら、誰でもその後のことが気になるのではないだろうか。「とりあえず名刺交換だけしてきました」と言えば、その後に相手にもっとアプローチしようという話者の意志を感じる。

「一応、名刺交換だけしておきました」という言い方もある。意味は非常に近いが決定的に違うのは、「別に相手がそれほど大事な人物とは思わなかったが、名刺が何かの役に立つかもしれないので…」と多少相手を軽んじている感じが伴う。たとえば会社訪問に来た学生が「とりあえず、会いましょう」と言われるのと「一応会いましょう」と言われるのでは、期待の度が違おうというものだ。

相手が不在とは思うが「一応、電話してみましょう」は「念のため」という意味合いがあるが「とりあえず」にはその意味はない。「時間があるかないか」にポイントをおけば「とりあえず」には時間的な制約を感じるが、「一応」には感じない。

「さしあたり」も似た使い方をする。神戸地震の被災者が「さしあたり、水と食料は大丈夫です」は、「とりあえず」に言い換えることができる。この場合の「とりあえず」は当面という意味だ。しかし「さしあたり会いましょう」とか、「さしあたり電話してみました」とは言わない。やはりとりあえずには、もっと時間的に切迫した印象があるからだろう。（佐）

とんだ ⇓ とんでもない

とんでもない・とんだ

「とんでもないことになった」
「このたびはとんだことで…」

というように、否定表現があってもなくても「並はずれてよくない事」を表す点がおもしろい。一説によれば、「途でもない」が「とんでもない」に転じて、「程度や常識をはずれている」という意味になり、「とんだ」は「とんでもない」から否定が落ちたまま同

じ意味になったらしい。誤用が定着してしまった、ということだろうか。

最近、若い人たちの間で「なにげなく」を「なにげに」と言うことがある。「なにげに人を傷つけるようなことを言うのよね」といった具合である。「とんでもない」と「とんだ」の関係に似ている。

「とんでもないこと(目、ご迷惑、失礼、災難、嘘、人騒がせ、失敗、間違い、見込み違い等)」は「とんだこと」等に置き換えられる。しかし、「とんでもない時間に電話がかかってきた」や「とんでもない質問で先生を困らしたものだ」のような場合は「とんだ時間」「とんだ質問」とは言えない。この「とんでもない」は、「並はずれて」はいるが、「よくないこと」というニュアンスは薄い。事態の否定的側面よりも意外性の方が強い場合には、「途でもない」つまり「途方もない」という原義が強く働くのかもしれない。

また、相手の言葉や行為を強く否定する意味の「とんでもない」も「とんだ」とは言い換えられない。

「先生に送っていただくなんて、とんでもないです」

「お礼だなんてとんでもない」

「大活躍されているそうで／とんでもない」

「めっそうもない」という言い方に通じる強い否定を表しているわけだから、「ない」を落とすわけにはいかないということだろう。

逆に、「とんだお笑い草だったね」というように、「非常に」という強調の意味が強くて、否定的意味あいがほとんどない時は、「とんでもない」より「とんだ」の方がしっくりくるようだ。 (門)

なお ⇓ ただ

～ながら

二つの事柄が並行・並存することを示す助詞。意味上さまざまのニュアンスを伴うが、大きく分ければ二通りになる。

①順接的並行。もしくは同時進行。

ラジオを聞きながら勉強する。

考え事をしながら歩きまわった。

笑いをこらえながら講義を聴いていた。

立ちながら眠った。

②逆接的並行。

意欲はありながら力を発揮できない。

期待されながらなぜか足踏みしている。

小兵ながら大型力士を手玉にとる。

不満ながら軽いポストで承知した。

①は、古文の「よろずの所あけながらあれば涼しく見わたされたる」(『枕草子』)のような用法から一貫して動詞や一部の助動詞の連用形に接続する。②は、「いとあはれと物をおもひしみながら言に出でても聞えやらず」(『源氏物語』桐壺)のように、動詞、一部の助動詞の連用形につく用法のほか、さらに、名詞の下にもつくことは、前の例文の通り。

なお、①②とは別に、数詞などの下について「そっくりそのまま」の意になる「ながら」がある(「三人ながら同期のホープだった」など)。「涙ながらに語った」「昔ながらの山桜かな」などに意味合いの通じるところがある。

さて、①は、いわば素直な表現で、理解するにも問題はない(あいまいさがなくスッキリしている)が、②は少し問題を含む。

「ながら」によって結ばれた二つの事項を、逆接の関係でとらえることが自然か不自然か、判断が微妙に分かれることがある。

「ラジオを聞きながら勉強する」などは、戦前戦中なら疑いなく「逆接」の関係だった。戦後も十年近く経って「ながら族」の台頭が言われるようになって以後、いまでは両者の同時進行は不自然ではなく、「順接」の部類に入ると見るべきだろう。

大正時代、イプセンの『人形の家』が上演された時、観劇した一人の富豪夫人はヒロインのノラの言動を評して「生意気なお嫁さんだこと」ともらしたそうだ。この種の見方が一般的だった時代なら「女ながらに家事を嫌う」「女ながらに〝自立〟なんて言ったりして…」「女ながらに柔道をやりたがる」といった使い方は抵抗なく通用した。

が、時代状況の変化につれて、「女」という事項と「家事を嫌う」「自立志向」「柔道をする」という事項は必ずしも矛盾しなくなった。つまり前項と後項の共存が「不自然」「逆接」の関係ではなくなった。

このように、「ながら」の用法に変化はなくても、言語外の事情の変遷が両事項を「ながら」でつなぐことの適・不適を変動させることがある。これを「ながら」の語義のあいまい化と感じる人があるかもしれないが、「ながら」の意味内容が変遷したのではなく、この語でつながれた前後の事項の社会的関係・意味づけが変わったのである。そこに、あいまい化?という印象を持たれる余地があったのかもしれない。

なお、「ながら」は、それ自身に感情のこめられた語ではなく、それを用いて形成される文脈全体から発言者の感情をうかがわせる効果を生むが、「男のくせに未練たっぷりな……」「女のくせに〝自立〟だなんて……」となると、「のくせに」自体にはじめから非難・嫌悪の感情がこもっている。日本語によくある〝主情語〟の代表例。

夏目漱石は「のくせに」が多用されるのは「理想の一定した世の中」だと講演『創作家の態度』で語っていた。社会規範が厳格に決まっていて人間のあり方にも理想像が一定している時代には、理想像に反したものは「のくせに」とやっつけられがちだというわけだろう。

「のくせに」が進んで「だてらに」となると「女だてらに柔道を…」のように「女」とセットにする慣習が根強い。これはかつての男社会の発想としか言いようのないもので、アリストテレスが、戯曲の中で女が立派な議論をしたりするのはふさわしくない、と論じたことにも現れていたような、ギリシャ古代の女性軽視の思想やそれと類似の傾向の中ならいざ知らず、何事にも女性のほうが元気があり先導力がある、と言われる現代日本では、もはや前時代語というところであろう。

(芳)

流れ

「うーん、ビデオを参考にして判定しなければ何とも言えない微妙な一番ですがねえ。流れとしては、攻めていた側に有利な相撲でしょうねえ」

「一試合終わるごとにマスコミは〝流れが変わった〟と言うんだよね。シリーズの流れって、そん

なにくるくる猫の眼みたいに変わるものなのかね?」

勝負事には「流れ」がよく言われる。

「流れ」の語義を、ある国語辞書は、次のように解説する。「①川や、川のようにたえることなく流れているもの。例、流れにのる。車の流れ。時の流れ。②学問や芸術、また血すじなどのつながり。例、○○先生の流れ(系統、流派)。③(「お流れ」の形で、全体で)予定されていたことが中止になること」。

相撲の勝負や選手権シリーズの流れは、「全体の経過、経過の中に見られる傾向、勢い、趨勢、動向…」といった意味であろう。ちょっと右の①②③には当てはまらない(しいて言えば①の変形・応用的用法だろうが)。

客観的に判定・測定の困難(または不可能)な、優勢劣勢、勝負につきものの「勢い」や「ツキ」を判定し、それを頼りに勝敗を判断もしくは予測したがる。ここにもカンを頼りにする日本人らしい流儀が見られる。

そこに、あいまいさがつきまとう。物事を流動のままにとらえ(あるいは、流動の中に身を置き、ゆだね)ようとし、固定させて分析することは二の次にされる。あいまいでかまわない、誤差なんか気にするな、というアバウトな(しかし同時に一言でカンどころを言い表す)行き方が伝統日本人流だから、この「流れ」なども、最初から、あいまいを承知の表現と考えてよい。

芳賀綏著『日本人の表現心理』では、日本人のカルチュア(文化)の特徴的傾向を言うキーワードの一つを「流れる」とした。物事はどこで発生してどこで終結するのかわからない(それは問わない)。いずこからか来ていずこかへ流れて行く。デモ行進を「流れ解散」で了えるという方式があるが、全員到着してから解散せず、うやむやのうちにメンバーが三々五々帰ってしまう。実態もあいまいだが「流れ」という名づけが絶妙の日本風である。

このように首尾あいまいな「うつろい」の過程に身を置き、かみしめ、その中に美をさえ見出して味わおうとする。それが日本人の事物認識の大きな特色だ。

だから、論理的に因果関係を問いつめたり、論理に立脚した対処法を割り出したりすることは息苦しいと感じる。理屈はさておき、である。
近松門左衛門が描いた梅川忠兵衛の恋の物語にも、はかりがたきは「水の流れと身のゆくえ…」と言っているが、『源氏物語』や『雪国』になると、身のゆくえを問いつめることなどなく、ストーリーはそこはかとなく流れ、ゆくえ定めぬ未完の結び方をするのである。はかりがたいものははかりがたいままに（あいまい化）しておく、そのあいまいさにえも言われぬ美を見ようとするのだ。
幸田文の小説『流れる』は、衰退の色がきざした東京下町の花柳界で、行きづまって行く芸者置屋を舞台に、一つ屋根の下の芸者たちの家族的な関係がやがて解体して行く過程を凝視した作品だったが、隅田川の水の流れと二重写しに身のゆくえをしみじみと感じさせるあの物語に、「流れる」の題名はぴったり。情緒派の名匠成瀬巳喜男監督による映画化に至って「流れ」の文化が具象化された感じはいよいよ深かった。
（芳）

なに（何）⇩あれ

なまじ

「息子はなまじ成績が良かったばかりに、『世の中を変えてみたい』などと大きな望みを持ち、結局インチキ宗教に入るきっかけになってしまったんです」
ある番組のテレビインタビューで「なまじ」はこんな風に使われていた。父親の気持ちの中に「成績が良いのは良いことだ」「しかし、『世の中を変えてみたい』などという望みは、成績が良いくらいのことでできるはずがない」「そんな望みが宗教に入るきっかけになってしまった」「宗教に入ることはかまわないが、それが結局インチキ（父親の弁）だったために、息子は世間から糾弾されるはめに陥っている」「成績が良かったのが仇になった」となるのではないだろうか。
「なまじ」は「生」な状態を「強いる」ことで、それが中途半端に終わり、結局しない方が良かったと

いうという時に使われる。
「なまじ忠告したのがいけなかった。かえって逆恨みされちゃって」
「なまじ親が優しい人だったので、あんなにわがままに育ってしまって」
普通なら忠告したり、親が親切であるのはプラス条件のはずだ。しかし、その条件があったために、結果がマイナスになってしまった。この言葉を使わなければならない状況は、相当曖昧模糊（あいまいもこ）とした心理状態に違いない。
会話では「なまじっか」がよく使われる。条件文に「なまじ（っか）」を使い、後続文にマイナスの結果がくる。
「なまじっかな気持ちでうちの会社にくるのは（条件）、やめた方がいい」
「なまじっか親切にしすぎたのが（条件）いけなかったのかなー」
「なまじっかな語学力で通訳をつけないと（条件）、相互に誤解が生じる恐れがありますよ」
人間なら誰しも後悔することは多い。しかし、同じ行為も話者の生き方や感じ方によっては、「なまじ」という表現を使わなくても済むのではないだろうか。「結果は確かに悪い。しかし経験できて良かった」という風に。
「息子は子供の時から成績が良く、大きな望みを持つようになった。結果は悪かったが、息子がこれまで来た過程を振り返り反省してくれれば、かえって良かったということになると思うんです」
と肯定的にとらえることもできる。しかし、日本人の社会は「かえって」*と胸をはって言うよりも、「なまじ」とうなだれたほうが、その人を受け入れる。「なまじ」という表現が存在し続ける所以（ゆえん）だろう。

（佐）

波

夏の高校野球の実況中継を聞いていたら、アナウンサーのこんな解説があった。
「この選手のピッチングには波がありましてね」
「切れのいいカーブを出したかと思うと、イージー

ボールを投げる。投球にこう波があっては監督も心配ですね」
人生が好調だったり、不調だったりする時に「波」が比喩的に使われる。
「○○高校、好調ですね。このまま波に乗れれば優勝に一歩近づくことになります」
「残念、相手チームも負けてはいません。次々に変化球の波、○○高校、波にのることあたわず。絶好のチャンスをのがしました」
「波」という語の使われ方は、自然界の「波」同様、波のさまざまな様子の側面をとらえていてあいまいで、意味も「波」をどう見るかによって変化する。
浜辺で波の動きを見ていると、ある一定の場所で水が盛り上がり、そのままこちらに向かい浜辺の近くで割れて、そのまま浜辺にしみ込んでいく。その押し寄せて来る様子は
「ものすごいデモの人波が国会議事堂に向かい…」
「大変な人波で、とても切符は手に入りそうもない」
「お盆客が一斉にUターンを始め、主用幹線道路はどこも車の波です」
大きなパワーが一定の方向を目指す様子が波にたとえられている。
波の効果音が人間の脳をアルファー波の状態に持っていくという話を聞いたことがある。「ザザー」と押し寄せ「スー」と引き、何回も何回も宇宙の続く限り繰り返されるであろう波の動き、この自然の繰り返し音が、人の神経をリラックスさせるのだろう。
「ニューウエーブ」は音楽用語にもファッション用語にもなったが、「ニュー」はすぐ「オールド」になる。しかし果てしなく繰り返されるものの象徴として「波－ウエーブ」という言葉は何回でも表れる。
「維新の波が押し寄せ、人々の生活は一変しました」
「景気の波は好調で、経済は活気に満ちています」
「またも襲った不況の波」
という具合だ。
「離婚なんて言いだすから、波がたつんだ。辛抱しなさい」
「波立てるつもりはなかったんですが…」

波が立つことは嵐の前兆でもある。その側面をとらえた用法だ。
嵐の時の怒濤のような波、「凪(なぎ)」の状態の鏡のような海面、「ピッチングに波がある」のも、「営業成績が月によって波がある」のも、自然界の波同様、仕方のないことなのだ。
波は水面下では激しい潮の動きがあるが、サーフィンのように「波に乗れば」うまくいく。
「彼は今波にのっていますね。マスコミからも注目の作曲家です」
「日本のほとんどの会社は経済成長の波にうまくのって、世界の一流企業へと躍進したのです」
さて、我々も「健康状態に波があっても」「決して家庭や社会に波をたてることなく」「次々と押し寄せる荒波に揉(も)まれることもなく」生きていきたいものですね。　（佐）

コラム

「〜ない」という形容詞

「つまらない」「だらしない」という否定表現はあるが、それと対応する肯定の形としての「つまる」や「だらしある」といった表現はない。「つまらない」の否定は「つまる」ではなく、「つまらなく（は）ない」だし、「だらしない」の否定は「だらしなく（は）ない」という二重否定となる。
ふつう「〜ない」という否定表現は、例えば、「大きくない」のように、「大きい」という肯定の形を意味の基準としてもっている。否定表現は肯定表現が表しているカテゴリーの大枠の中で、肯定表現が妥当する集合の範囲外のすべてを表すあいまいさをともなっている。「大きくない」の例で言えば、「大きい」が表してるカテゴリーの大枠であるところの「大きさ」の範囲の中で、「大きい」とは言えない、あらゆる「大きさ」を表しているのである。この点に、否定表

現一般がもつあいまいさがある、と言えるだろう。当然のことながら、「大きくない」は必ずしも「小さい」ではないのである。

さて、それに対して、上で見た「つまらない」や「だらしない」は、その否定が派生してきた当の肯定表現「つまる」「だらしある」を欠いており、否定表現自体が意味の基準となってしまっている。そこで、その否定は二重否定の形にならざるをえないのである。

このように、「〜ない」という否定の形がもっぱら使われて、肯定の形を使わない形容詞的表現にはどのようなものがあるのだろうか。

①「動詞の否定」の形をしているもの

つまらない、くだらない、すまない、たまらない、やりきれない、おさまらない、いけすかない、おもいがけない、おぼつかない、煮えきらない、食いたりない、相いれない、いたたまれない、やむを得ない

②「名詞の非在」の形をしているもの

もったいない、なさけない、詮ない、仕方(が)ない、仕様がない、たわいない、だらしない、かたじけない、如才ない、正体ない、頑是ない、面目ない、たよりない、やるせない、やるかたない、ふがいない、造作ない、惜しみない、ゆるぎない、よぎない、心もとない、あじけない、あっけない、大人げない、さりげない、しどけない、そっけない、なにげない、所在ない、よんどころない、つつがない、たゆみない、程ない、みっともない、そつ(が)ない、らちもない、是非もない、ろくでもない、とんでもない、とりとめのない、あられもない

※

もともとは肯定的な表現があったのが、時代とともに失われたものが多いのだろうが、肯定の言い方がないだけに「〜ない」という否定のニュアンスが強調される表現になっている、と言えよう。

また、「あっけない、もったいない、たわいない、だらしない、しどけない、そっけない、あられもない、ろくでもない、とんでもない」等、

いったい何がない（あるいは、何でない）のかわからなくなっている否定表現もある。
しかし、「汚い、危ない、少ない」は言うにおよばず、「はかない、あどけない、せつない、つれない、おっかない、いたいけない、はしたない、せわしない」等、「〜ない」という形ではあるが、否定の形から派生したのではない形容詞もいくつかある。それらに対して、「はかない」は「はか」の何を否定したのかといった詮索は無意味だろう。
例えば、「あっけない」は「呆気ない」と書き、「呆気にとられる」という表現と通じている。「呆気」は「驚きあきれる状態」だとすると、「あっけない幕切れ」とは、「驚ける」ようなクライマックスがなかった、という意味あいなのだろうか。それにしては、「呆気」の「あきれる」というマイナスのニュアンスがクライマックスにはそぐわない気もする。とすると、むしろ「呆気ない」は「驚きあきれる」ほどつまらない、という意味であり、「あっけない」は「呆気」の否定ではなく、「切ない」と同様、「呆気」に、それを形容詞化する接尾辞の「ない」がついた形ともとれる。
『大言海』は、「あっけない」は「あくけなし（無飽気）」から来ている、としている。「飽くけ＝十分に満足する状態」ではない、というわけである。こちらの解釈の方は、素直に否定形に読める。
「あっけない」一つとっても、語源詮索はなかなか「埒（らち）があかない」ものである。（門）

なんだか ⇓ なんとなく

なんとか

「なんとかしていただけませんか（なりませんか）」「わかりました。なんとかしましょう」
難しいことを頼んだり、請け合ったりするときに「なんとかする」という。「なんとか」には、いろいろ手段を尽くしてようやく事が成就する、という困難さが含蓄されている。「なんとかしましょう」と言

われても、必ずしも要求が満たされるという保証はなく、「申し訳ありませんが、どうにもなりませんでした」というケースもある。でも、ともかくは頼み込むしかないという時に、「そこをなんとか…」とか「なんとかよろしくお願いします」となるわけだ。

「五回目になんとか司法試験に合格した」

「さんざん頼んで、なんとか受け付けてもらえた」

「突貫工事でなんとか期限までに開通させた」

「駆け足で行って、なんとか最終電車に乗れた」

これらの場合は、途中で困難さはあったものの、出来ばえについては、順調にいった場合と遜色（そんしょく）はない。しかし、「なんとか」には、「不十分だが、一応の水準には達している」というニュアンスもある。

「なんとかこれで食っていけるまでにはなった」

「なんとか一通り片づいた」

「あの子もこれで、ひとりでもなんとかやっていけるでしょう」

「日常会話ならなんとか話せます」

こうした言い方は、「どうにか」で言い換えることもできる。

「岡本さんとかなんとかいう人」というように、「～とかいう」に「なんとか」を同種のものとして添える言い方もある。「なんとかかんとか言う」のように、あれこれ言う、いろいろなことを言う場合の代表として「なん(に)」と「かん(に)」がなる場合もある。

（門）

なんとなく・なんだか

「なんとなく悲しい」と「なんだか悲しい」とでは、どう違うのだろうか。両方とも「なぜ悲しいのか理由がはっきりしないが、とにかく悲しい」という点では同じである。ただ、「なんとなく」の方が、「理由不明」を表明してもはや理由を探る態度を放棄しているようにみえるのに対して、「なんだか」の方は、「か」という疑問助詞のニュアンスもあって、理由追究の切迫感を残しているように思える点が少しちがう。

その証拠には、「何だか急に(とっても)悲しくなった」とはいうが、「なんとなく急に(とっても)悲しく

なった」とは言いにくい。急激な感情変化に対して「なんとなく」の「理由追究放棄感」はそぐわないのである。逆に、『なんとなくクリスタル』(田中康夫の小説のタイトル)が「なんだかクリスタル」だとすると、急にやぼったくなってしまう。「クリスタル」な気分について、しかつめらしく詮索しないで、その気分に軽くひたる感覚は「なんとなく」でなければならない。

「なんとなく」は「特にどうという考えもなく」といった意味で、無造作になされた行為を表す場合にも用いられる。

「何となく窓の外を眺めていた」
「なんとなく散歩に出ていた」
「なんとなくしゃべってしまった」
「なんとなくその本を手にとった」

この表現は「なんだか」では置き換えられない。

同様に、「特にどうということもなく」何らかの状態になる場合にも「なんとなく」であって、「なんだか」ではおさまりが悪い。

「夏休みはなんとなく過ぎてしまった」
「彼とはなんとなく疎遠になってしまった」
「なんとなく私が代表で話すはめになった」(円)

～に ⇩ ～で

～にくい (難い)

形容詞「にくい(難い)」から生じた用法である。「～にくい」には、①「読みにくい」のように、自分が何かしようとする時に、「読む」という動作に抵抗を感じる様子を表す場合と、②「最近の傘はとても丈夫で折れにくい」のように、「傘」の性質を客観的に述べる場合がある。

「にくい」は動詞の連用形につづき、容易にはできないこと、簡単にはできないことに対して使われる。

①「～にくい」が「話す」「食べる」「買う」「書く」「聞く」など、意志性の動詞につく場合には、「話しにくい」「食べにくい」「買いにくい」「書きにくい」「聞きにくい」のように、自分が何かしようと思っても簡単にはできないという意味を表す。

②この建物は地震でも「倒れにくい」「燃えにくい」

となると、建物そのものに「倒れにくい」「燃えにくい」原因があり、表現としてはより客観的なものとなる。

この場合の「〜にくい」はプラスに働くが、概して日本語の「〜にくい」は、「このナイフは切りにくい」「この椅子は座りにくい」のように、マイナス評価をする場合が多い。

もっとも、プラスに働くかマイナスに働くかは、立場によって異なり、阪神・淡路大震災の後、半分倒壊した建物を、建築業者が取り壊そうとする時、「この建物、なかなか倒れない。ずいぶん倒れにくい建物だね」と言えば、建築業者にとってはマイナス表現だが、「倒れにくい建物」は普通はプラス表現だ。

「〜にくい」は「〜づらい」という表現として使われることもある。「彼の話しは聞きにくい」と言った場合と「彼の話しは聞きづらい」と言った場合、「〜づらい」には、その行為をしていて不快な様子が加わる。

（佐）

憎い

「あたし、あんたなんか嫌いよ」と言い捨てて座を立った女が、部屋を出ながら「いまの、ウソよ」と言い足した、という話がある。なんと巧みな。日本人好みの、屈折した、ひねりのきいた言動である。

言動ばかりではない、心の中で感情が複雑に入りまじり屈折することもある。

「碁仇(がたき)は憎さも憎しなつかしし」

憎さがつのって喧嘩別れした碁仇に、妙になつかしい感情が湧いてまた手合わせしてみたくなる、という次第だ。

一体に、勝負の世界でライバルとして対立した相手には、心中、不思議な共感が湧くと言われる。プロ野球史上に両雄並び立たずとされた三原脩・水原茂両監督についても「本当は本人たちが一番よくわかり合ってたんだ」（青田昇氏）という評もある。ワンマン吉田茂政権を打倒せよと野党攻勢の一翼を担った三木武夫（後の首相）に対して吉田茂が快く思って

いたはずはないのに、晩年、「小生無聊をかこち居り」、真鶴（三木別荘）から帰京の途中、大磯（吉田邸）で一献いかが、と誘いの手紙を出している。

　憎しみは、心理学的に見ると「多くの情動をふくむ複雑な感情」（マクドゥーガル・シャンド）とも説明されるから、その多様な情動のどれかが、相手と共感する「愛」の感情と結びつくこともあり得る。それが心理学で名づけた「愛憎共感」という心の動きを生み出すのであろう。俗謡に「憎い憎いは可愛いの裏よ」とあるのは、人生の知恵で人心の機微を読み取ったもので、心理学の視角と期せずして一致したものだ。

　そんな感情の動きが多いことから必然的に生まれたのだろうか、本来は悪い意味の語である「憎い」が一転して、よい意味に使われる場合がある。

　もともと、「古語の『憎し』はせいぜい『気に入らない』という程度で、清少納言が『枕草子』に『憎きもの』としてあげているのも彼女から見れば取るに足らない人物の言動」と佐々木瑞枝氏は説明した。それが進んで、「憎い」の本義は「人の態度や性質が不快で、怒りや恨みが生じ、害を与えてやりたくなるような感情」というところまで来た。

　さらにこれが反転、アイロニカルに使われると、

「イチローは憎いね。冷静で、ポーカーフェイスで、けろりとしてヒット打つんだから」

のように「感心だ、見事だ、見上げたもんだ、かなわない（少しシャク）」の意にもなり、

「憎い人ねえ。どうしてあたしを別れられなくしちやうのよォ」

のように「惹かれる、魅せられる、憎みきれない魅力がある」の意にもなる。

　佐々木瑞枝氏いわく、『宇津保物語』に出てくる「かたちもにくし」などは外見が見苦しくみっともない様子をさしてマイナス評価だが、『保元物語』では「にくい剛の者なり」と、感心すべき様子を表すプラス表現に使われている、と。この指摘によれば、昔からこの語は愛憎両面をカバーしてきたと思われる。

　超現実派の詩などというのは解らないものだという通念があるが、料亭の女中さんや女子中学生がよく解ると言うのを聞き、そんなものかな？　と、英

文学の泰斗、福原麟太郎博士が「家へ帰って、その詩集を、とっくり、心を空しくして読んでみたら、成る程、にくらしいものだと解った」（福原『天才について』）とある。これなどは、やはり、惹かれるものがあった、という「にくらしい」であろう。

これが「心憎い」となると、

「(日本国憲法が) 天皇を国の象徴、国民統合の象徴という言葉で言い表したのはなかなか心憎い仕業だったと私は思っているわけです」（林健太郎『歴史からの警告』）

「若いのに心憎いことを言うよ。あんな名優のなさった役、あたしなんかにまだ早うございます、だって」

のように、「知恵がある」「思慮分別がある」ので感服・感心、といったほめことばになる。

これらの例のように、マイナスの語「憎い」をプラスの語に転化させられると、ファジーさに含まれたニュアンスを解する感覚のない聞き手・読み手にはぴんと来ないことがあろう。オトナの感覚をテストされる日本語の一つというところか。

これほど正反対でなくても「憎からず」という消極的な言い方で「いとおしい、好きだ」という心理を表現することもある。例えば、米画『ボレロ』を日本風に翻案したと言われる川口松太郎作『鶴八鶴次郎』では、新内の名人鶴次郎は三味線の鶴八を「憎からず」思っていながら芸人の意地で恋愛にまで進むのをおさえてしまう。シリーズ『男はつらいよ』の中でも、フーテンの寅が一番ウマの合ったマドンナのリリー（浅丘ルリ子）とたがいに憎からず思っていながら、結ばれるのを双方からさらりと避けた余韻が捨てがたかった。

（芳）

〜ね・〜よ

独り言などを別にすれば、言葉は常に聞き手を意識して発せられる。「私は明日パーティーに行く」ということを伝えるために、英語なら "I'll go to the party tomorrow." と言えば、相手がどんな人であれ使える表現だろう。しかし日本語の場合は、相手が誰かによって「明日パーティーに行きます」「明

日パーティーに行くよ（ね、わ、ぞ）」などとフォーマルな形、インフォーマルな形の使い分けがあり、インフォーマルな人間関係の会話の場合のほうが終助詞が使われる頻度も高い。

特に親しい間柄では、終助詞を付け加えて会話をすることが多く、終助詞の使い方で語調が微妙に変化する。「行くぞ」と言えば男性のぞんざいな口調がそのまま出るが、「行くよ」と言えば男性ならば「ぞ」より軟らかい調子になるし、女性なら「行くわ」よりは強い調子になる。何と言っても会話で一番使われている終助詞は「ね」と「よ」だ。

映画などを見ていると、このフォーマルな話し方からインフォーマルな話し方へ移行がはっきりと感じられて面白い。『課長、島耕作』はサラリーマンの日常を題材にとったものだが、まず名刺を交換する場面では「私、島と申します」「はい、賛成です」のように「ます形」が圧倒的によく使われ、終助詞はほとんど顔を出さない。ところがアフター5の付き合いともなり、話題も個人的なことになってくると、会話の語尾に終助詞がつきはじめ、相手との会話のバランスをとりながら、終助詞が綱引きの役割を果たしはじめる。

【〜よ】

①「やあ、やっぱり奥さんが待っているんですから、帰った方がいいですよ」（相手に言いきかせようとする感じ）

②「絶対、この店の方がおいしいですよ」（相手の言い分に対して反論し、自分の意見や判断を相手に押しつけようとする気持ち）

③「早く言ってくださいよ」「でも、誰にも言わないでくださいよ」（「〜ください」と一緒に使われ、命令に近い表現となる）

④「一緒に飲みましょうよ」（相手を誘う気持ち）

などだ。

【〜ね】

①「初めて来たけど、この店はおいしいですね」（相手に同意を求めている）

②「やはり、部長にも相談すべきでしょうね」（自分の意見を、どうにか相手にも納得してもらいたいと思っている）

③「それはですね…」「会議の出席者はですね…」(次の言葉がすぐに出てこない時のつなぎの言葉として使っている)

④「いや、この店思ったより高いですね」(驚きの気持ちを表現しているが、相手にも自分の気持ちに同意してもらいたい様子がこめられる)

「ね」と「よ」だけでもこれだけのバリエーションがあり、二人の間の綱引きで自分の方に引き寄せたい場合には「この店おいしいですよ」となるが、少し力をゆるめれば「この店おいしいですね」となり、外国人にはこのニュアンスは分かりにくいようだ。

終助詞の「よ」は疑問詞と共に使われると、強い詰問の調子を帯びる。これは夫婦喧嘩の場合などを考えてみるとよくわかる。

妻「何でこれ買ったの?」「何でこれ買ったのよ」

夫(支度の遅い妻に)「いつでかけるんだい?」

「いつでかけるんだよ」

妻「どうしてこんな番組が面白いの?」「どうして、こんな番組が面白いのよ」

ワイシャツにかすかに残る香水の香りに、妻「誰と会ったのよ」となる。この場合には「よ」が効果的な役割を果たす。「誰と会ったの?」の語尾をあげて聞くと、夫のことには関心がないか、関心のないふりをしている妻の感じが出てくる。「よ」というほんの短い終助詞の使い方一つで、二人の関係が分かる。面白いことだと思う。(佐)

年配⇩中年

~の

「の」は実に多様な働きをする助詞である。「の」の役割としてすぐ思いうかぶのは、「私の本」「父の時計」というように、名詞と名詞を結びつけ、所有関係を表すということだろう。しかし、「の」が表す関係は「所有」以外にも数多くある。「○○の本」という例で、「の」の様々な意味合いをみてみよう。

「図書館の本」(所有)、「日本の本」(出版地)、「戦争中の本」(出版年)、「カフカの本」(作者)、「戦後文化史の本」(内容)、「マンガの本」(分類)、「日本語の本」(表現手段)、「B5判の本」(形状)、「愛蔵の本」(属性)、

「棚の本」(所在)、「和紙の本」(材料)、「七冊の本」(数量)、「五千円の本」(値段)、「ベストセラーの本」(評価)といった具合である。

「本」から離れれば、ほかにも「カメラのレンズ」(全体と部分)、「正義の戦い」(のための)、「大和の国」(同格)等の意味合いがある。

さらに、同じ「ＡのＢ」という表現でも文脈によって意味が変わる場合もある。例えば、「カフカの本」は「カフカが書いた本」ではなく、「カフカが所有していた本」かもしれないし、あるいは「カフカについての本」かもしれないのである。

また、動詞文や形容詞文を名詞句にかえる場合にも、「名詞１＋の＋名詞２」の形をとる。「人口が集中する→人口の集中」「空が青い→空の青さ」では「名詞１」が主格であるのに対して、「株を売買する→株の売買」「英語を勉強する→英語の勉強」では「名詞１」が目的格である。前述の「カフカの本」の多義性にも、主格と目的格のニュアンスの違いが反映している、と見ることもできる。

さて、名詞をつなぐ「の」の意味合いを概括すると、「所有・所在・性状・主格／目的格」というように整理できるだろう。しかし、「の」の多才ぶりは、名詞と名詞の関係を自在に表現するという点につきるものではない。①「雪の降る夜」のように、連体修飾句での主語を表す場合、②「もっと大きいのをください」では、「〜〔ところの〕もの」あるい「〜のもの」の代用、③「風邪をひいたん(＝の)です」のように、説明であることを示す、あるいは説明を求める場合、④「夜寝るのはいつも二時過ぎだ」のような、文や句を名詞化する機能について順に見ていこう。

①「カフカの書いた日記」「彼女の来る時間」「私の嫌いなタイプ」「先の曲がったスプーン」の「の」はいずれも「が」で言い換えられる。連体修飾文では、その主格を表す「が」が「の」に置き換えられるのである。これは、「カフカの〈書いた日記〉」「私の〈嫌いなタイプ〉」というように、先に述べた「名詞＋の＋名詞」と構造的に類似してくるためである。

②「高いのと安いのとがありますが…」
「もっと丈夫なのが欲しい」

「彼が作ったのなら安心です」
における「の」は、「もの」の代用と考えられる。「使い古しので申し訳ない」「りんごは青森のがおいしい」「私のを使ってください」の「の」は、「〜のもの」を表している。

③「そんなに急いでどうしたの(ん)ですか？／遅刻しそうなの(ん)です」
「もう三日も寝ていないの(ん)です／そんなに忙しいの(ん)ですか」
「ん」と音便化することが多いが、こうした「の」は「です(だ)」と結びついて、原因や理由を尋ねたり、説明したり、説明に納得したりする時に用いられる。
くだけた言い方では、「です」が省かれ、「の」が終助詞化することもある。疑問文以外では、女性語のニュアンスが強い表現である。
「どうしたの？／遅刻しそうなの」
「もう三日も寝てないの／そんなに忙しいの」

④「会社に電話するのをすっかり忘れていた」
「本を読むのは苦手だ」
「彼が彼女と結婚しているのは、公然の秘密だ」
「フランスが核実験を再開するのは許せない」
これらの「の」は文や句を名詞化する役割をはたしており、概して「こと」と言い換えることができる。
しかし、「大きいことはいいことだ」を「大きいのは」とは言えない。「大きいこと」が「大きい事物一般」を表しているのに対して、「大きいの」は「そちらの大きいのをください」というように具体的・個別的な「大きいもの」を表しているからである。
また、「昨日、君がすてきな女性といっしょに歩いているのを見たよ」を「歩いていることを」とは言い換えられない。「見る」「聞く」等の知覚動詞の対象となる事柄は具体的・個別的なために「こと」とは言えないのである。
大江健三郎はノーベル賞記念講演「あいまいな日本の私」で、助詞「の」の機能に「あいまいさ」を見ている。上で述べたように、たしかに「あいまいな日本」と「私」との関係はきわめて多義性をおびているのである。　（門）

〜ので ⇒ から

～のに ⇩ くせに
～は ⇩ ～が

は　い

「はい」を“Yes”と同じ意味のことばとみなしている外国人は、よく言われるように、否定疑問文に対する返答としての「はい」に戸惑うことが多い。

「明日のパーティーに出席しないんですか？／はい、出席しません」

英語では“No”となるところを「はい」と言っているからである。英語の“Yes”“No”が自分の返事の内容が肯定か、否定かを表しているのに対して、「はい」と「いいえ」は質問者である相手の質問内容を肯定するか、否定するかを表しているのである。したがって、形が否定疑問であっても、その意味が勧誘であるような場合には「はい」の後に肯定形がくることになる。

「明日のパーティーにいっしょに出席しませんか？／はい、そうします」

“Yes”との相違のほかにもうひとつ事態を厄介にしているのは、「はい」が必ずしもつねに相手の言っていることに対する肯定・承認を意味しているわけではない、という点である。相手が「はい、はい」と言って聞いてくれているので、てっきり賛同してくれたものと思っていたら、話が一段落したところで、「ご意見はごもっともだが」と急に反論されびっくりした、というような述懐を外国人からよく聞く。こうした場合の「はい」は肯定・承認の表明ではなく、「あなたの言ってることをちゃんと聞いていますよ」ということを表す相槌（あいづち）にすぎないのである。

では、相槌の「はい」と返答の「はい」はどうやって区別できるのだろうか。相槌は相手の話の途中にはさむものであるのに対して、返答は相手の問いかけにこたえるのである。しかし、生きた会話では単に相槌を求める問いかけなのか、返答を求める問いかけなのかがはっきりしないようなケースも多い。「はい」につきまとうあいまいさを考えると、「はい」の一語を諾否のキーワードとみなしてはいけないようである。

さて、返答や相槌の「はい」のほかにも、出席点呼の際の「はい」、電話を受けての「はい、○○です」といった「はい」がある。また、これら応答の「はい」に対して、呼びかけの「はい」もある。
「はい、みんな先生の言うことをよく聞いて！」
「はい、チーズ！」
「はい、お待ちどうさま！」
同じ「はい」という言葉が、応答と同時に呼びかけの表現でもあるという点は興味深い。ちなみに、あまり使われなくなっているが、商人がもみ手をしながら言うような感じの、へりくだった「はい」もある。自分の言っていることに自ら合いの手をいれるような「はい」である。
「ご無理だと、申し上げたんですけどねえ、はい」
「その件については善処いたします、はい」
ところで「ええ」は「はい」の多少くだけた形で同種の肯定的返答を表すとされるが、「ええ」は肯定的返答の「はい」と相槌の「はい」にしか代用できない。点呼や電話の応答の「はい」や呼びかけの「はい」は、「ええ」というわけにはいかないのである。
反面、「ええ」の方が、「自分はそう思う」という肯定のニュアンスが「はい」より強いようである。（門）

〜ばかり

コンサート会場の楽屋でのこと、主催者は観客の入りが心配で仕方ない。舞台の幕からそっとのぞいては、お客さんの入りを確かめている。
「この感じだと八○○人ばかり入ると思いますよ」、そう言われてのぞいた人が「何だ、男ばかりだ。女性のお客さんを期待していたのに」と残念そう。
助詞の「ばかり」には実に多くの意味・用法があるが、数量を表す言葉についた場合は、「はっきりとは言えないがおよそ…」と推測して言う場合であり、数量はあいまいなものとなる。この場合は「ほど」「ぐらい」に言い換えることができる。
「一週間ばかり（ほど・ぐらい）でかけてきます」
「引っ越しの手伝いに三人ばかり（ほど・ぐらい）寄越してくれませんか」
「十平方メートルばかり（ほど・ぐらい）の土地で

は使い道がないと思っていたら、貸し駐車場になりましてね」

「一週間ばかり」や「十平方メートルばかり」は、はっきりと数を言い切れないということもある。しかし「三人ばかり」となると「三人人手が欲しい」というよりは、人数をあいまいにすることで相手に対する配慮が感じられる。

数量を表す言葉につく「ばかり」も場合によって、数を予測して言う場合と、はっきり言うことを避けて使う場合とがあり、「一万円ばかり貸していただけませんか」などの依頼表現では、この傾向が一層顕著となる。

それに対して「観客は男ばかりだ」のように名詞についた場合には、「男の客だけで女はいない」という限定の意識が存在し、ここにはあいまいな点はない。「毎日テレビばかり見ている」「部長は木村さんにばかり(だけ)に用事を頼む」「彼はゴルフばかりしている(他のスポーツは全然しない)」

くだけた話し言葉で高校生などの会話を聞いていると「なんだ。観客は男ばっかりか」「テレビばっかし見てないで、本でも読んだらどう」「先生は木村さんばっか用事を頼んで」のように「ばっかり・ばっかし・ばっか」が使われる。促音化することで、「限定」の意味が強調されるからであろうか。

「ばかり」は他にもいくつか面白い用法がある。

①「もう食事するばかりになっているのに、主人どうしちゃったのかしら。結婚記念日を忘れたのかしら」

②「あっ、ただいま、ごめん、今食事したばかりなんだ」

③「妻は最近、怒ってばかりいてね」

④「結婚記念日を忘れたばかりに、妻は口をきいてくれないんだ」

⑤「そんなに黙ってばかりいないで、ね。結婚記念日に真珠のイヤリングをプレゼントするよ」

⑥「あなたって、いつもうまいことばかり言って(グスン)」

①は、今すぐ何かをしようとする状態を表す時に使う「ばかり」で、「出掛けるばかりになっている」「報告書は提出するばかりになっている」のように

「〜ている」に続くことが多い。

②は、ある行為をして間もない状態にあることを表し「その映画は見たばかりだ」「今会議が始まったばかりだ」のように「〜たばかり」が後に続く。

③は、関係する用語に「ひたすら」の意味を添える「仕事をしてばかりいる」「笑ってばかり」。

④は、「ただそれだけが原因で」という意味に使われ「彼のことを笑ったばかりに」「社長が出席しなかったばかりに」「日本が援助しなかったばかりに」と、「こんな結果になってしまった」とマイナスの感情が続くことが多い。「彼と結婚したばかりに」「この会社に就職したばかりに」、単に原因・理由を述べているのではなく、グチになってしまうことに「ばかりに」の使用上の面白さがある。

⑤の「黙ってばかり」は、③と同じ。

⑥は、ある決まった事柄をそれのみ何回も行うこと。「お世辞ばかり言う」「いつもお世辞を聞かされる」。

ほかにも「ばかり」の用法は多いが「十万円ばかりの給料で、勤めていられるか」「こればかりの寄付で災害援助とは情けない」のように「十万円ぽっち」「これぽっち」に言い換えられ、その行為に対して見下げている感じが伴う。

こうしてみると、「ばかり」の使用範囲は非常に広いが、若い世代では「ばかり」を使わないで「だけ*」「くらい*」「ぽっち」の方が使用回数が増えている。「ばかり」の使われ方も次第に淘汰されていく傾向にあるようだ。（佐）

〜はず ⇓ 〜わけ

コラム

反対と矛盾

ふつう「反対語」ということで一括されることが多い対概念について、論理学では、「反対関係」と「矛盾関係」の違いに注意を促す。例えば、「賛成と反対」は「反対関係」だが「女と男」は「矛盾関係」である。ある事柄に「賛成」でないからといって、必ずしも「反対」ではないこともある。態度保留ないしは中立という立場がありうるのだ。対立概念ではあるが、一方の

否定が必ずしも他方を意味しない関係、つまり中間的立場がありうる関係が「反対関係」である。

それに対して、女でなければ男であり、男でなければ女である。ニューハーフをどう考えたらいいのかとか、稀に両性具有のケースもあるが、それらはごく稀な例外と考えれば、「女と男」は「矛盾関係」である。ただし、「女でないもの」は実は「男」だけではない。海も鉛筆もライオンも小説も「女ではないもの」である。しかし、「女」であるかどうかを問題にする時は、「人間」であることが暗黙の前提になっている。つまり、あらゆる対立関係には何らかの共通の土俵があるわけである。そうした共通領域の中で互いに相手の否定が自分であるような、二者択一的な関係が「矛盾関係」である。

政治や宗教などの世界で対立した相手を攻撃する時にしばしば「反対関係」を故意に「矛盾関係」と混同するようなことが行われる。例えば、先の大戦中には、戦争に賛成しないものはみな「反戦主義者」さらには「アカ」「非国民」と呼ばれたわけである。「異教徒」はすべて「悪魔の民」である、とするのもヒステリックな宗教にはよく見られる決めつけである。

「良い／悪い」「大きい／小さい」等の形容詞的対立のほとんどすべてが「反対関係」であることからわかるように、数量化や法律等学問的・実務的な線引きをした概念以外には「矛盾関係」をなす対立関係はきわめて少ない。「反対関係」と「矛盾関係」の差をあいまいにするキャンペーンにのせられないためには、冷静に中間的立場の存在に目を向ける姿勢が大切だろう。

世間知を簡潔に伝える諺（ことわざ）、俚言（りげん）にも「反対関係」をなすものが多い。「世の中いろいろ」であり、一つの諺、格言をモットーにする頑（かたく）なさをほぐすために、反対の主張をしている諺、俚言をいくつかあげてみよう。

「渡る世間に鬼はない／人を見たら泥棒と思え」

「君子危うきに近寄らず／虎穴に入らずんば、

虎児を得ず」
「善は急げ／急がばまわれ」
「カエルの子はカエル／トンビがタカをうむ」
「好きこそものの上手なれ／下手の横好き」
「先んずれば人を制す／残りものには福がある」
「武士は食わねど高楊枝／腹が減っては戦はできぬ」
「亀の甲より年の功／老いては子に従え」
「今日のことは明日にのばすな／明日は明日の風がふく」
「量より質／枯れ木も山の賑わい」
「大器晩成／栴檀(せんだん)は双葉より芳し」
「旅の恥はかきすて／発(た)つ鳥後をにごさず」
「昔とった杵柄(きねづか)／年よりの冷水」
「鶏口(けいこう)となるとも牛後になるなかれ／寄らば大樹の陰」
「三人寄れば文殊の知恵／船頭多くして船山を登る」
「弘法筆を選ばず／弘法も筆の誤り」
「苦あれば楽あり／楽あれば苦あり」
「もちはもち屋／猿も木から落ちる」

こうした諺、俚言もすべての場合について妥当すると考えるから、反対の諺、俚言に足をすくわれるわけで、「反対関係」であることを冷静にわきまえておく必要がある。つまり、ある場合は「渡る世間に鬼はなく」、ある場合は「人を見たら泥棒と思わ」なくてはならない、というわけだ。もっとも、そんなふうに使い分けていては、諺としての重みはなくなってしまうだろう。必ずしも常に妥当ではないことを、常に心がけるというところに「信念」といったものの良さがあるのかもしれない。（門）

はっきり

「はっきり」とは、あいまいさのない状態を言う。ある意味では、この辞典にもっともふさわしくない語彙(ごい)と言える。しかし、次のような会話を聞いた時、「はっきり」は本当にあいまいさがないと言い切れる

だろうか。
「取引先の社長との話、どうでした」
「いや、それがはっきりしなくて」
「何がですか。ああ、社長もう年ですからね。言ってる内容がはっきりしないんでしょう」（内容）
「あっ、もうお年ですから歯が抜けてはっきり話してくれないんですよね」（発音）
「えっ、社長の頭がはっきりしない。もうボケがきたのでしょうか」（思考能力）
「相手が何と言ったか記憶がはっきりしない？ それは君の責任だ」（記憶）
「はっきりした数字を示してくれないんですか。それがいつもの社長の手ですよ」（数字）
「そういう時は、はっきりと記録を残しておかないとね」（記録）
「態度がはっきりしない？ イエスかノーか分からないということですね」（態度）
「ライバル社の存在がはっきり分かった。なるほど、気をつけないと」（分かる）
「はっきりしない」から実にさまざまな内容が浮かび上がり、どの点を言っているのか「はっきりしない」。
場面を変えてみよう。木村夫人はブティックでドレス選びの最中だ。
「もっとはっきりしたのの方がかえって似合うと思うけど」「あっ、もっとはっきりした柄ですね」
「違うわ、色よ」
買う段になり「三二八〇〇円？ いっそのこと三万円の方がはっきりするからおまけしてよ」
領収書を書かせ「もうちょっとはっきり書いてね、三だか八だか分からないわ。それに、そのボールペン、字が薄いわね。もっとはっきり書けるペンにして下さらない」
やっと買い物が終わり「あのお客さん、ずいぶんはっきり（遠慮がない）ものを言いますね」
「はっきり」はドレスの柄なら派手で目立つもの、色なら濃い色、値段や数字なら端数のない数、文字なら草書より楷書、文字の色なら薄くより濃く、と実に範囲が広く、「はっきり」だけでは余りにもあいまいなのだ。

日本政府の外交の方法は、西欧諸国に「はっきりしない態度」とうつるらしい。それは「自信のなさ」の現れと見え、世界をリードする国に値しないと評価される。しかし、日本国内では「はっきりした態度」は傲慢（ごうまん）にうつり、自己主張が強いと見なされる。「あいまいさ」が好まれる所以（ゆえん）だ。（佐）

ひと（人）

「ひと」という言葉は実に多種多様な相貌をもっている。

①まず、生物学上の分類として人間を表す。この場合は、ヒトとかたかなで書くことが多い。

②次に、「ひとの道に反する」という時の「ひと」は単に生物学的な人間ではなく、社会関係を生きる人間のことである。

③「ひと様に顔向けできない」「ひと聞きが悪い」という場合は、社会一般というより「世間」といった意味あいだろう。

④「ひとに迷惑をかけるな」「ひとに言えない苦しみ」の「ひと」は他人一般である。

⑤「ひとによりけりだね」「ひとそれぞれというこどとか」という時は、個性による違いに目をむけて個人を表している。

⑥「あの人・いい人・うちの人」となると、思慕や親愛をこめて特定の個人を指す。この言い方は女性に多い。

⑦さらに「ひとのことはほっていてくれ」「ひとをバカにするなよ」となると、自分自身を指しているのである。

このように「ひと」は社会であると同時に個人、他者であると同時に自分でもある。この「ひと」の意味の広がりの中に、和辻哲郎は人間を関係的存在と見る人間観を読みとった（『人間の学としての倫理学』）。個人は社会を構成する原子（アトム）のような存在であるとみなす西欧近代の考え方に対して、つねに他者や世間との関係の中で自分を位置づけていく和辻的な「間柄存在」は、西欧との対比で日本人・日本社会の特徴を論ずることを得意とする「日本人論」の好むところとなった（木村敏『人と人の間』、

浜口恵俊『日本らしさの再発見』等)。

しかし、「ひと」に該当する語の意味の広さは日本語に固有の特徴なのか、また、たとえそうだとしても、「ひと」という一つの言葉の意味の広がりから直ちに日本人の人間観の核心を読み取ってしまっていいのか、といった疑問は残る。

さて、「間柄主義」的日本人論の適否はともかくとして、「ひと」の意味を追おう。

⑧「ひとがいい・悪い」「ひとを見る」「文は人なり」「ひととなり」あるいは「ひとでなし!」の「ひと」は、「人柄・気性・品格」といった意味である。

⑨さらに「政界にひとなし」や「ひとを得る」では、有能な人材をさしている。

「ひと」が登場する格言が多いのも、上記の「ひと」の多様な意味あいからすれば当然のところだろう。

「情けは人のためならず」

「人の口に戸は立てられない」

「我が身をつねって人の痛さを知れ」

「人のふり見てわがふり直せ」

「人は見かけによらぬもの」

「ひと」の多義性を駆使した多くの格言は「ひと」の世を生きる世間知にみちている。決して「ひとごと」ではない。(門)

ひどい

「ひどい」は「非道」を形容詞化した語で、本来は人の情けがなく残酷な様子を述べる時に使う。しかし、現代語では、たとえば待ち合わせに遅れた時、「ひどい人ね。三十分も待ったのよ」と軽く相手を非難する時にも使うし、「地下鉄で無差別殺戮(さつりく)を行ったばかりか、毒ガスによる攻撃まで計画していたそうだ。なんてひどい奴だ」と、万感の思いをこめて非難する時にも使う。その程度は、表情やイントネーションからはかるしかなく、あいまいである。

また「ひどさ」の内容も、「ひどい格好をしているね」(そう言われても、これがいつもの格好で、どこがひどいのだろう)、「ひどい言葉づかいだ。気をつけたまえ」(気をつけて部長には敬語で接したつもりなのに、どこがひどかったのだろう)など、年齢や階級・地

域によっても差があり、その人の所属する社会では当然なことが、他の社会ではひどいということもある。

「ひどい目に会いましたよ」と言われ「どうなさったんですか」と聞くと、その答えは実に広範囲に及ぶ。「大切な書類を盗まれて」「登山中に雨に降られて」「休暇返上で出張に行かされて」「目の前でバスに行かれて、その後一時間待たされ…」のように受け身形や使役受け身形の文型で表現されたり、「コンピュータが壊れて」「崖が崩れて」「電車がストップして」と無生物が主語になって、自分ではいかんともしがたかったことを表現しようとしたり、いずれにしても話し手の意識の中には「あってはならないことが自分の身にふりかかった」のが「ひどい目に会う」なのだ。

「ひどい」は、「今年の夏はひどい暑さだった」「自動車事故でひどい怪我をした」「そんなひどい叱り方をしなくてもいいでしょう」のように、度合いが甚だしい時にも使う。その度合いの目盛りはプラスではなくマイナスの方に向かうので「ひどい物分かりの悪さ」とは言えても「ひどい物分かりの良さ」とは言えない。

「ひどい部屋」は、たとえば日当たりが悪い・狭い・汚い・暗い・古いといったマイナスの形容詞を並べることで表現できるが、「*すごい部屋」となると広い・きれい・装飾が豪華・明るい・新しいなどのプラスのイメージの形容詞でも表現できる。どちらも口語で使われ、強調する時には「すっごい」「ひっどい」など促音化することもある。

特に若者言葉にこの傾向が強いのは、コミックや漫画の影響からだろうか。「あの人すっごいひどいの」などと言った使い方は、「すごい・ひどい」を重ねて使い、さらに促音化することで、感情を表現しようとしている。何とか少ない語彙で感情を表現するという劇画文化の落とし子がこの表現なのかもしれない。　（佐）

ひとつ（一つ）

「ものの始まりが一ならば国の始まりが大和の国

……」と、フーテンの寅さんの口上も始まるぐらいだから、数字の「一」は物事の基本というイメージがある。
和語の数詞の始まり「ひとつ」も、言うまでもなく事物が単数であることを示すのが第一義。
「一つください、おともしましょう」「ここに一人の青年がいて…」「あと一つの勝星がなかなかあげられない」「流れ寄る椰子の実一つ」
これを次のように転用すれば、物事を限定したり強調したりする役目をする。
「茶わん一つない貧しい生活から身をおこした」「人っ子一人通らねえ、さびしーい道だったと思いねぇ」
次に、「同じ」という語と同義に使われる「ひとつ」がある。
「ひとつ心の浅野の家臣…」「ひとつ釜の飯を食った仲じゃねぇか」「一つ屋根の下にこうして暮らしてみると、話も通じやすくなるわね」「ひとつ所に住んでいながら顔を合わすこともなくて…」
以上のような「ひとつ」は意味が画然と限定されているから理解にズレが出てくる余地はない。
ところが、「少量」「わずかな数量」という意味合いで使われる「一つ」がある。例えば
「朝のひととき、元気に体操いたしましょう」「ではちょっと一休みにするか」
これは二倍の分量なら「ふたとき」「二休み」となるものではない。さらに進んで、
「一つやってみようか」「それがよろしゅうございます。ともあれ一つ、お試しになっては…」
となると、数詞の「ひとつ」からは完全に離れてしまい、数や量とは無関係の概念になる。
「ちょっと」「軽く」「ともかく」「試しに」…という気持ちで「ひとつ」と言うこともある。
「ひとつお手合わせ願いたいもので…」「ひとつ、もんでやってもいいぞ。ただし、おれの胸を借りるからには覚悟して来いよ」「まあ、おひとつ、いかがです。寒い時はお酒でなくては、やっぱり…」など。
このあたりの「ひとつ」のニュアンスがわかって使いこなせるようになれば、日本語熟達度も相当だ

と言えそうだが、男が言えば似合う「ひとつ」を女が言うと違和感がある場合もあるから用心が要りそうだ。いつか、ある団体の機関誌の編集委員を引き受けたところ、事務局の職員から手紙が来た。

「これから何かとご指導いただくことになりますが、ひとつよろしくお願いいたします」

手紙の主は大学を出て間もない女性だったから、「ひとつよろしく」は何だか妙だ。中高年男性が、取り引き相手とか将棋の仲間、飲み友達などになってくれと頼む時のあいさつ文句を聞く機会を重ねているうちに、彼女に伝染したのだろう、とおかしかった。

(芳)

雰囲気・感触

「雰囲気的には、合格できそうですけど」

「雰囲気としては、こっちの方向だと思うんですよ、駅は」

「雰囲気」という単語が、若い人の間などでこういう使い方をされるのは面白い。客観的な根拠があるわけではないが主観的な印象としては、という意味だろう。「何となく」カンで判断する日本人の事物認識の方式を物語る用法の一つで、「感触」という語の使われ方とも似ている。

「まだこの段階では強行採決はないっていう感触だったんですが」

「感触を得た、というだけですが、いい方向にはからってもらえると思ってます」

など。これらの場合、「雰囲気」「感触」は肌で知った感覚的な情報であって、機器の力やデータに依拠した情報よりはアバウトなものという了解のもとに用いられている。

ところで、「雰囲気」は次のようにも使われる。

「駅に降りただけで雰囲気が感じられるんですよね。いい街ですねえ」

「山陰や北陸の小都市には雰囲気のある街が多いですね。旅すると心が安まります」

「すーっとね、雰囲気で人をひきつけちゃうんだ、あの人は。洗練されて、しかもあたたかいと言うのか…」

このように、土地柄や人柄について「雰囲気」ということも多い。「おもむき」「情趣」の意に近い。「あの街はもうこりごりだ。あんな雰囲気のとげとげしい土地には二度と行きたくない」という場合もあるが、どちらかと言えば、「雰囲気」の、この種の用法は、よい意味の場合が多い。「感触」の意味合いはもっと中立的で、この種の「雰囲気」と同列には使えない。

雰囲気にあたる英語のアトモスフェア(atmosphere)は、元来、地表を包む空気ということだから、もともとは客観的・物理的な存在であった。日本語では、*「空気」は物理的存在(大気)にも心理的状況にも使われる(「空気」の項参照)が、日本語の「雰囲気」はもっぱら人や場所が生み出すムード、すなわち心理的状況を指して使われている。

ムードとなればいかにも漠然としたもの、あいまいなものである。いい・悪いの客観的認定の出来にくいものだ。だが、人間生活にはこの種の「いわく言いがたい」要素が重要である。人について言えば、人の風貌・挙措・物腰、それらを通してその人が全体として帯びる雰囲気が出来あがる。その雰囲気の、よい・悪い、上品・下品は、主観的認定によって左右される余地はあるが、しかしおのずから多数の人が抱く共通の認識はある。

人の持つ意識内容、その現れとしてのマナー、身体技法を総合して「たしなみ」のよし悪しを評することができるが、よい雰囲気は「たしなみ」のよさと表裏一体のものである(それを拡大して、地域やグループにも「たしなみ」のよし悪しがあると考えることができる)。輪郭が画定されずあいまいさを含む概念ではあるが、「雰囲気」の大事さを、だからこそ、現代日本人は理解し再認識すべきだと思う。（芳）

別に

「別に」は必ず否定の表現をともなって、「これといって特別に～ではない」という意味になる。
「別にそんなこと気にする必要ないんじゃないか」
「今日は別に何も言うことはありません」
「彼女のこと、別に好きというわけでもないのだけ

ど…」

「特に」とほとんど同じ意味だが、「スポーツの中でも特に好きなのはスキーです」のように、「特に」の後には肯定表現も可能という違いがある。

では、例えば、「別に困っていない」と「特に困っていない」とでは、どちらの方が「より困っていない」と言えるだろうか。「別に」の方は、「自分にとっては普通なのであって、とりたてて言われるほどのことではない」という、相手の心配や配慮ないしお節介を拒絶するような構えがあるのに対して、「特に」の方にはそうした屈折はなく、ただ「特別に困っている」という状態を否定しているわけである。つまり、「別に困っていない」は単なる強がりで「ほんとうは困っている」のかもしれないが、「特に困っていない」という時は少なくとも本人の意識としては「ほんとうに困っていない」と言えるだろう。

「別に」は次に必ず否定をともなうので、それだけで否定の返答として用いられることも多い。

「どうかしたの？／別に」
「なにか怒ってるの？／別に」
「学校で何かあったの？／別に」

といった具合に、若い人たちが母親などの過剰な干渉を払いのける呪文(じゅもん)となっている向きもある。

「別に」という一語の応答には、あらゆる事柄への無関心を助長し、感受性を鈍磨させてしまうような感じもある。

（門）

〜ぽい

動詞・形容詞・名詞について、その傾向・状態などを強調する表現。語の由来や、「〜っぽい」というように、なぜ必ず「促音便」が入るのかについて定説はない。「飽きっぽい、湿っぽい、忘れっぽい、安っぽい、俗っぽい…」と「〜ぽい」のつくことばを並べてみると、マイナスイメージの表現が多いのにきづく。「安い」「子ども」「理屈」「水」などの中立的な語も「ぽい」がつくと、否定的なニュアンスになる。「赤っぽい」といった色彩表現を除けば、わずかに「色っぽい、あだっぽい」といった類の言葉だけが、浮島のようにマイナス評価を免れている。

こうしたマイナスイメージの強さは、「〜くさい*」ということばと共通している。実際、「素人っぽい／くさい、男っぽい／くさい、田舎っぽい／くさい」と言い換えられる例も若干ある。「〜くさい」が嗅覚からの全体的イメージ化なのに対して、「〜ぽい」は「白っぽい・黒っぽい」等の色あいを表す表現が基調になっているように思える。つまり、視覚イメージからの全体化という印象がある。

「安っぽい」のも「子どもっぽい」のも、外観や仕草が「そう見える」のが出発点である。「ウソっぽい」「色っぽい」「あわれっぽい」「不良っぽい」なども視覚的シグナルから発しているように思える。

ただし、「怒りっぽい、惚れっぽい、飽きっぽい」のように、動詞につく形は、「容易にそうなりやすい傾向」を表しており、視覚性はそれほど顕著ではない。頻発される視覚シグナルが傾向性として当の主体に内在化されたため、と見ておこう。

味覚表現の「しょっぱい」「すっぱい」も「〜っぽい」の音便と思われるが、これらについては、視覚性を強調するのは無理があろう。視覚イメージの表現が感覚越境を行ったものだろう。

最近の若者言葉では、「わざとっぽい」「だめっぽい」「デートっぽい」のように、どんな言葉にも「ぽい」をつけて、「〜らしい、のように見える」にかわる軽い表現として多用されるようになっている。そこにはマイナスイメージはほとんどなく、「ぽい」の軽い語感と非断定のあいまいさを楽しむ雰囲気があるようだ。 （門）

ほう（方）

「天気は西のほうからくずれる」「東方海上にある前線が…」「北方領土」…など、「方」は方角・方位を示すのに用いる。

「もう少し右のほうへ寄って守ってたら、いまの球はねえ…」

「南のほうへ雁（かり）が鳴き渡って行くなあ…」

のように方向を言う用法もあるが、その用法の一つに、「どちらへお出かけ？」「ちょっと駅のほうまで」のように、場所がわかっていても明示せず方向を言

うこともある。

それらと別に、物理的・地理的な方角・方向ではなく、複数の事物を比較して価値判断をくだす場合、比較される事物に「ほう」を付ける用法がある。

「そりゃ強いことは堀田さんのほうが強そうじゃけれど、しかし赤シャツさんは学士さんじゃけれ…」「つまり、月給の多いほうが豪（えら）いのじゃろうがなもし」（夏目漱石『坊ちゃん』の下宿の老婆）

「ぜひ、かれに会って直接話してください。そのほうがベターです」

「そんな金切り声出しておこるんじゃないよ。叱るよりほめたほうが、うまい育て方なんだよ」

「いまのはねえ、ピッチャーを責めたら酷ですよ。イチローの打撃のほうをほめるべきですね」

これら各種の用法のうち、「駅のほう」のように方向を言うことによって対象そのものをぼかし、漠然とさせる表現法は、古くからの日本語の伝統につらなっている。すなわち、人を指して「あなた」「こちら」「そのほう」…などと言うのはその類の表現で、このような対象のぼかし方は敬語表現の本質である。

婉曲（えんきょく）・あいまいな表現は、明快・露骨な表現よりも上品だ、という意識がある。敬語の本質は「婉曲・あいまい」にあるが、敬語は元来上述の意識を根底に持っていたことによる。

現代は人と人の間に心理的クッションを置きたがる時代だ。よく言えば上品さ、ものやわらかさを心がけ、悪く言えば取りすました、水くさい世の中である。そこで「ほう」を用いて物事の輪郭をことさらにぼかし、辺縁のブレた事物像を作る日本的手法が、次のように多用され、氾濫している。

「時間のほうは、そろそろ二時になります」

「お食事のほうは、どんなものがお好みに合うでしょうか？」

（留守番電話で）「メッセージのほうを、ピーッと鳴った後に、どうぞ…」

「エー、話し合いのほうもだいぶ盛りあがっておりますが、会場のほうの都合もありますので…」

心理的クッションを置くために「…のほう」は便利な語ではあるが、こうやたらに使われると耳にう

るさく、また歯がゆさを誘発される。婉曲、ぼかし、上品化も限度を考えたいところである。（芳）

ぼちぼち ⇩ ぼつぼつ

ぼつぼつ・ぼちぼち・そろそろ

雪の研究の権威、物理学者樋口敬二教授の青年学究時代の話である。八甲田山の積雪量の調査をして下山し、青森市内でコーヒーを飲もうとしたところ、品のいい老人が、自分もコーヒーを飲むところだから店へ案内しましょう、と声をかけてくれた。同じテーブルに向き合い、老紳士はひとしきり俳句の話題などを語った。樋口青年が紳士の職業を問うた時、老人は答えた。「このへんで、ボツボツやっています」

老人が席を立った後に判明したことには、かれは当時の青森県知事津島文治氏、つまり太宰治の実兄であった。現職の知事が自身の仕事を説明するのに「このへんで、ボツボツやっています」とは……。

ただし、津島知事は津軽の音韻システムに基づいて発話したので樋口青年の耳には「ボチボチ」と聞こえたらしく、この話を伝えた司馬遼太郎氏の文章（産経新聞「風塵抄」）には「ボチボチやっています」と記してある。このように引用した司馬氏は、知事の言に感服して言う。これは

「言葉というより、人間の風韻が鳴る音なのである」

司馬氏の賛辞に共感できるには、一つには、津島翁の奥行きのある人間像、その風格を思い描く想像力が必要である。そしてもう一つ「ボツボツやっている」という日本語のニュアンスが体感できなければならない。

ニュアンスの深さは語義の不明確さとつながっている。

まず、「ぼつぼつ」の辞書的意味は、こうなる。「物事が少しずつ進行する様子」や「物事をゆるやかに始める様子」である（このほかに「ぽつぽつ」と同じく「小さな点や穴が各所にあるさま」の意味もあるが、これはこの項目とは関係がない）。

少しずつ進行する意味では「店を開いて特別に宣伝もしないけど、まあ、ぼつぼつ買いに来る人がふ

えて。おかげさまで」「ぼつぼつ認められるようになってますから、絵も売れるようになるんじゃないかしら」……のように言う。それほどパッとしない様子の表現に用いられ、謙遜の辞にも使われやすい。
それにしても、顔も名も知られ、多忙でたまらないはずの県知事が「ぼつぼつやっている」とは謙遜の至り。そこに奥ゆかしさが感じられ「風韻」が生じたのだが、それには「ぼつぼつ」の持つ煙幕作用が効いている。
もう一つの「ゆるやかに始める」場合は、「ぼつぼつ衣替えの用意もしておきたいし」「ぼつぼつ取りかかっていただくと、七月の公演に無理なく間に合うかと思いますが…」などと使われる。大急ぎではなく、徐々に、というわけだ。
「ぼつぼつ出かけよう」は、日本語に不慣れの人たちにはとらえどころがなく、どんな出かけ方をすればいいのかと困惑させるようだが、金田一春彦博士によると、日本語に習熟してきた外国人学生などはこの語の面白味がわかるらしく、「ぼつぼつ出かけよう」と言ってはたがいに笑うようになるという。

その調子でこの語の微妙な味わいがわかるようになれば、太宰治の実兄の発言にこもる「風韻」が体感できる境地に近づいたと言えるかもしれない。
なお、「そろそろ」の語義にもほとんどこの「ぼつ」と共通するものがあり、筆者の知り合いの外国人も、やおら腰を上げて辞去しようという時などに「じゃ、そろそろ…」と常用している。ベールのかかり方がちょうど「ぼつぼつ」と同程度である。
また、必ずしも地域的な訛音と限らず標準語辞書に「ぼちぼち」の形も出ている。
さらに付記すると、大阪人が頻用する「ぼちぼち」という語がある。「もうかりまっか」「ぼちぼちでんなあ」。これは「悪くはない。どちらとも言えない」というほどの意味。「まあまあですね」に近いだろう。この場合は「ぼつぼつ」のつもりで音が変形したものではなく、元来の形がはっきり「ぼちぼち」である。
(芳)

〜ほど ⇓ 〜くらい・〜ばかり
ほどほど ⇓ 適当
ほ　ぼ ⇓ だいたい

コラム

比喩と身体ことば

「白雪姫」という名前は「白雪（のような）姫」という暗喩を含んでいると考えてみる。「白雪」は「白さ、清新さ、純粋さ、美しさ、冷たさ、やわらかさ、雪特有の感触…」と、いろいろなイメージをともなっている。

「白雪」でどんなイメージを思いうかべるかは、社会的にパターン化した連想のほかにも各人によってさまざまであろう。比喩はそうしたあいまいさをともなっている。そうした多様なイメージの中で「白雪」の「白」によって「白さ」が際立たされているわけだが、「清新さ」以下のイメージも意味の後景として生きている。

このように、比喩はあいまいさを意味の土壌にしている表現であり、比喩による異種のものの結合が人間の認識の根幹をなしている、と見る人もいる。比喩がはらんでいるあいまいさは、直観的な認識を生成させる原始的なカオスのようなものなのである。

比喩の一つの大きな方向として、抽象的な事柄を具体的な事柄で置き換える、ということがある。そして、われわれにとってもっとも「具体的」なものとは、「具体＝身体を具える」という表現（これ自身も比喩なのだが）からも見てとれるように、われわれ自身の「身体」にほかならない。

プラトンの比喩・比例の思想を継承したネオ・プラトニズムは、身体の中に宇宙を見ていた。マクロ・コスモスとミクロ・コスモスは、いわば入れ子型の構造をなしており、微小なものが極大なものの構造を自ら体現しているのである。こうした考え方は、現代のＡＩ（人工知能）研究やＤＮＡ研究にもどこか通じているようにも思える。

身体で宇宙を類比するというほどではないが、日本語の表現には身体に関する言葉をふんだんに比喩的に用いているのが目につく。部位ごとに列挙してみよう。

【頭】 頭数、釘の頭、頭領、かしら、頭から、頭ごなし、頭だし、頭が痛い、頭が下がる、頭にくる、頭をひねる

【目】 ひいき目、台風の目、目が粗い、落ち目、目が肥える、目がすわる、目が高い、目がない、目から鼻へ抜ける、目にあう、目に余る、目にする、目の色をかえる、目の黒いうち、目をかける、目を配る、目をつぶる

【耳】 地獄耳、パンの耳、耳が痛い、耳が早い、耳に入れる、耳に障る、耳につく、耳にはさむ、耳をすます

【鼻】 鼻が利く、鼻が高い、鼻が曲がる、鼻であしらう、鼻にかける、鼻につく、鼻をあかす、鼻を折る

【口】 とば口、働き口、一口、甘口、口約束、口がうまい、口うるさい、口が重い、口がかかる、口が堅い、口が滑る、口がへらない、口と腹は違う、口にあう、口にする、口に乗る、口を利く、口を揃える、口を割る

【顔】 顔役、顔が売れる、顔が利く、顔が立つ、顔が広い、顔から火が出る、顔に泥をぬる、顔を合わせる、顔を貸す、顔を揃える、顔を繋ぐ、顔をつぶす、顔を汚す

【首】 手首、首長、一首、首になる、首が回らない、首に縄をつける、首切り、首を傾げる、首を長くする

【胸】 胸があつくなる、胸がさける、胸がいたむ、胸がいっぱいになる、胸がおどる、胸が騒ぐ、胸がすく、胸がつかえる、胸がつぶれる、胸に刻む、胸に迫る

【腹】 腹が大きい、腹が黒い、腹がすわる、腹が立つ、腹ができる、腹に一物、腹に落ちる、腹を痛める、腹を抱える、腹を固める、腹を探る、腹を読む、腹を割る

【足】 机の脚、客足、足が地につかない、足がつく、足が出る、足が棒になる、足が向く、足を洗う、足をすくう、足を抜く、足を伸ばす、足を運ぶ、足を引っ張る

【体】 国体、文体、体面、体制、体があく、体が続く、体に障る、体を惜しむ、体をこわす、

体を張る

「身体ことば」は、いわば自分の身体全体をモデルにして世界を理解しようとする試みの産物と言えるだろう。都市に暮らす人々のまわりにはコンクリートずくめの人工的空間やメディアが提供する擬似現実のイメージ世界が取り囲んでいる。人間と共に生きる生き物たちの姿は見えにくくなっているばかりでなく、自らの身体性への感覚すら、ともすれば稀薄になってしまいがちだ。

「身体ことば」に体現されている比喩の力を再認識して、意味を生起させる「あいまいさ」の豊かさを追考する必要があるのではないか。(門)

まあ

「まあ」は、さして意味のない感動詞のようにみえるが、結構微妙な使い分けがある。もちろんイントネーションは違うのだが、同じ「まあ」が女性が使う場合と、男性が使う場合とでは意味が違ってくる例をみてみよう。

「まあ、お久しぶり」
「まあ、すてきなスカーフですこと」
「それはまあ、よかったですこと」
「まあ、この子は、なんてことをするの」

こうした「まあ」は驚き・賛嘆・非難の強い感情を表す感動詞だが、ほとんど女性にしか使われない。

それに対して、

「まあ、お掛けください」
「まあ、お一ついかがですか」
「まあ、ちょっと待てよ」
「まあ、ここは私にまかせてください」

といった「まあ」は男性の方が多く使うようだ。「まず、なにはともあれ」という感じの「まあ」で、相手の言動を軽く制止するような形ではたらきかけ、自分がイニシアチブをとるといったニュアンスがある。

時に、「まあ、そのう…」とか「まあ、なんだ…」という具合に間をかせぐ「まあ」を連発する人もい

るが、この「まあ」もイニシアチブを自分に引き寄せる「まあ」の転用と言えよう。

「まあ」のその他の用法の鍵概念は「限度・限界点」の意識にあるようだ。

①「まあ、いいか」の「まあ」には、限度を見極めて、十分とは言えないが「まずまずのところ」という評価が含まれている。

「まあ、やるだけのことはやった」
「まあ、今日はここまでにしよう」
「まあ、なんとかうまくいったね」
「まあ、こんなもんかな」

②「まあ、もう一息がんばってみるか」という時の「まあ」は、限界点を越えて努力してみる姿勢を表している。

「そんなにおっしゃるなら、まあ考えてみましょう」
「まあ、やってやれないこともないが…」
「まあ、何とか努力してはみますが…」

③これが、

「まあ、この先どうなることやら…」
「まあ、なんとかなるでしょう」
「まあ、これ以上悪くなるということもないでしょう」

となると、先行きがおぼつかない「まあ」となる。つまり、現状が限界点であり、将来はあまり芳しくない、というニュアンスを含んでいる。（門）

まあまあ

*「まあ」の畳語（じょうご）である「まあまあ」は、感動詞「まあ」の強めとなる。「まあまあ、ご立派におなりになって」「まあまあ、よくいらっしゃいました」という場合は、驚き・感動を表す女性的感動詞「まあ」の強めだし、「まあまあ、そう興奮しないで」「まあまあ、そう言わずに」の場合は、男性的感動詞「まあ」の強めとして、相手を制止し、仲裁に入るような場合に用いられる。しかし、こうした用法はそう頻繁ではない。

よく使われるのは、「調子はどう？／まあまあですね」「今日の試験どうだった？／まあまあ」といった

類の「まあまあ」である。「まあ」は、「まあ良かった」というように、次に出来ぐあいを示す言葉が必要だが、「まあまあ」はそれだけで程度を表すことができる。この点で、「まあまあ」は「まずまず」や「ほどほど」に似ている。

それにしても「まあまあの調子」や「まあまあの成績」とは、どれくらいの「調子・成績」なのか、きわめてあいまいである。程度を表す「まあまあ」は、「限度」の意識を表す「まあ」と関連している。「まあまあ」とは、十分とは言えないが、自らの限度を見極めれば、ある程度満足するべきところまでは来ている、といった感じである。

最近「まっ、いいか」というタイトルのラップが流行っているが、「まあまあ」には、「まっ、いいか」や「まあ、こんなもんか」と通じる、ほどほどの「達成感・自足感」と、「まだまだ」という「不満足感」が同居している。つまり、「まあまあ」は、ある程度の「満足感」とある程度の「不満足感」を同時に含む両義性をもっており、あいまいなのも無理はない。

「まあまあ」という返答は、この両義性を隠れ蓑(みの)にして正確な情報を相手に与えないで、質問をやり過ごすのに便利な表現として多用されているところもあるようだ。この点では、「もうかりまっか?」に対する大阪人の「ぼちぼちでんな」という返答と同種の「いい加減さ」がある。

(門)

まいる(参る)

「まいる」は下位の者が上位の者のところに移動することをへりくだって言う表現である。

「今すぐそちらへ参ります」

「明日、また参ります」

というように、「行く」「来る」が両方とも「移動行為」として一括されて「参る」になるところがおもしろい。この点では、上位の者の下位の者のところへの移動を表す尊敬語「いらっしゃる」と対応している。

「社長は今すぐそちらへいらっしゃいます」

「社長は、明日またいらっしゃいます」

「～ていく」「～てくる」の形も同様に「～てまい

りそれに対応する。

「行ってまいります／行って(い)らっしゃい」

「書類はいまそちらへ持ってまいります／社長がじきじきにそちらへ持っていらっしゃいます」

このように「行く」「来る」という区別が謙譲語「参る」と尊敬語「いらっしゃる」で無化してしまうのはなぜだろうか。「行く」「来る」の区別は話者の現在位置から遠ざかるか、近づくかという、話者の位置を尺度としている。社会的な上下関係を強く意識する場面では、そうした自己中心的な視点が保持できない、ということを表しているのかもしれない。

さて、「お宮参り」「善光寺参り」「墓参り」のように尊い場所への移動に「参る」を使うのは、神社・仏閣・先祖が絶対的に上位の者であることから当然だろう。では、困った時の「いやー、まいった、まいった」はどう考えたらいいだろうか。

「どうだ参ったか／参った」

「彼の理路整然とした鋭い反論にはほとほと参った」

「あんなところで上司と会うとはまいったね」

勝負事で負ける時に「まいった」と言うのは、いわば神仏のような絶対的上位者の前でかしこまるのと似た状態におちいるためだろう。そこから発して、非常に困惑することも「まいる」と表現するようになった、と思われる。

「この夏の異常な暑さですっかりまいってしまった」

「都会の騒音と孤独にはまいらされたよ」

というように、肉体的・精神的に弱らされることも「まいる」と表現する。このように「まいる」が移動以外の意味で使われる時は、マイナスイメージが強いが、「彼女にはぞっこんまいった」というように、魅せられる場合に使う時もある。もっとも、この表現にも彼女に魅了されて困惑しているというニュアンスも若干感じる。

尊い者の前に立つことを意味する言葉が困惑や衰弱をも意味するという「まいる」の両義性は、日本語のどのような精神分析的生態を表しているのだろうか。

（門）

前向き

「ご提案につきましては、前向きに検討させていただきます」と官僚が答弁すれば、それは、「特に何も対処しないが、参考意見としては聞いておく」という意味にすぎない、ということはよく知られている。それでも聞き手の方は、「前向き」の「前」が示唆するプラス・イメージに幻惑されて、ある程度の成果を期待したりしてしまうのである。

一時期、『巨人の星』というスポーツ根性マンガの主人公が「たとえ落ちぶれてドブにはまってしまうような生き方になっても、あくまで前のめりで生きていたい」というようなことを言って、「前向き」の価値を喧伝（けんでん）していた記憶がある。「前向き」は、前進が通常の歩行の姿であることからすれば、当たり前の姿勢なのだが、「後ろ向き」が進歩に背を向ける消極性や、時に反動性を表すのに対して、「事態を先取りする積極性」を表す、とされているようだ。

「高低・大小・軽重・広狭」等々のほとんどの形容詞的対立概念がプラス／マイナスの価値基準を内在させているように、人間の身体を基準とする方向性にも暗黙の価値了解が付与されている。例えば、「上＋／下－」「右＋／左－」「前＋／後－」という具合である。

しかし、「前向き」といった呪文（じゅもん）に対しては、二重の批判が必要である。第一には、「前進する」のではなく、「前を向いている」という「態度・構え」だけでいいのか、という点である。鋭い日本文化観察者によると、日本では動きを凝縮した「構え」が尊重される（李御寧『「縮み」志向の日本人』）とのことだ。だからと言って、「積極的な構え・姿勢」を示せば、実行が免除されるというわけではないだろう。

第二は、「後ろ向き」はいけないのか、という点である。戦争責任・戦後責任等の過去への配慮・対応が欠けていることが、日本の国際的信用を損ねている。それに、「進歩」「成長」をひたすら目指す「前向き」一辺倒の視線が破綻していることは明らかではないか。

「前向き」という官僚の常套（じょうとう）的なあいまい語のステ

レオタイプなプラスイメージに振りまわされない複眼的志向が必要とされているのである。　↓コラム「役人言葉」　　　（門）

まずい・うまい

「ご自慢のカレーライスと聞かされてたけど、案外まずかったじゃないの」「この大事なところで、まずいプレーをやっちゃいけませんねえ」

など、日常よく「まずい」という語を口にする。この語も頻用語であるだけに多義にわたり、あいまいさを感じさせる余地もある。

その多義さを整理すると、おおよそ次のように分類できるようだ。

①味が悪い、おいしくない。

「このカレーライスはまずい」「酒もまずいよ、こんな気分で飲む時はよ」

②へただ、つたない。

「まずいプレーだ」「あの人に作詞を頼んだ？でも、まずいよ、かれの歌詞は」

③具合が悪い。

「まずいですよ、あんな発言をなさっては。ひいきの引き倒しだわ」「この照明だけど、ちょっとまずいんだ。よくチェックしてよ」

④みにくい。

「顔はまずいが気だてはいい、頭はいい。おれならもらっちゃうね、こっちが独身だったら」「顔のまずい役者は主役にしないと昔なら決まってたもんだ」

このように分けられるが、もともと一つの語の意味が分化したものだから画然としないところは残る。一般にはこんな分類を意識して使っているわけではないので、分類しようとするとそれぞれの境界があいまいと感じられる気味もある。

「ああ、マズった（まずいことした）なあ。あいつに金貸すんじゃやなかった」のように、形容詞から動詞を生んだ学生スラング風の言い方なども、②と思えるが③と重なり合うところもありそうだ。

「まずい」の反対は「うまい」と相場が決まってい

る。そして、右の①②③には、ちょうど裏返しにした「うまい」が反対語としてある。
①味がよい、おいしい。
「評判にそむかず、この店の寿司はうまい」「どんなものでも、うまいうまい、と食べてくれる。張り合いがある」
②巧みだ、じょうずだ。
「うまいのは栃錦、強いのは若乃花。しかし、どっちも強くてうまかったぜ」「芸はうまくなくてもいい、監督の言う通り演技しろ、ってんだ」
③都合がよい、好ましい。
「うまい所へ来てくださったわ。どうしようかと思ってたのよ」「今度の自動車協議はうまく行きましたね」「うまい話を持って来てくれた。喜んでますよ」
このように裏返しになるが、④の反対は「きれい、美しい」で「うまい」とは言わない習慣。もともと『万葉集』に「うまし国ぞ　あきつ島　大和の国は」と歌われ、「美し国」と書かれたように、「うまし」には「美しい、快い、よい」の意味がこめられていたが、現代語では違ってしまった。
なお、男・女の用語の差がはっきりしている地域では、味のよさを言う時、女性は「うまい」とは言わず、「おいしい」と言うのが普通とされてきた。だが、近頃の若い女性には「うん、うまい！」と言う人がけっこういる。もっとも、改まった場合の表現ではないが。
ところで、味について「うまい」と書く時は「旨い」「美味い」などと漢字を当て、時には「甘い」を「うまい」とも読ませるが、技巧やタイミングのよさを言う「うまい」は、なぜか「巧い」と書くことが少なく、かな書きが多いようだ。「巧み」「巧者」に通ずる場合、「巧い」と書いてもよさそうなものだ。

（芳）

また

「また」の用法は広いが、その基本的な意味は同種の事柄がもう一つつけ加わること、すなわち「再び」という点にあると言えよう。

「またお会いしましょう」「またとない好機」「またお手紙します」
の「また」は、「再び・もう一度」という意味だ。
「彼もまた結婚した」「これまたすごい出来ばえ」
では、「同様に・同じく」の意味である。
「話の続きはまたにしよう」
の「また」は「いつか別の時に」だし、
「彼はまたなかなかの愛妻家でもある」
という時の「また」は「別の面でいえば」という意味である。これらの「また」は、同種のものの付加ではなく、異質の要素の付加を表している。しかし、「再度」というニュアンスが土台にあることは確かだ。

接続詞としての用法でも同様である。
「丁寧に説明してくださり、またレポートの添削までしてくださった」
では、同種の「親切さ」の累加が「また」で示されている。これに対して、
「彼は夫であり、また同僚でもあった」
「また、こうも言えよう…」
といった例では、別の側面を指摘する際に、「また」が用いられている。しかし、いずれも「同一の主題」に対して「再言」しているわけである。

このように、「また」の意味・用法の基盤を「再度」ないし「再言」という点に見ると、次の用法はどのように位置づければいいだろうか。

①「なんでまたそんなことをしたんだろう？」
「これはまたどういう訳だ？」
というように、疑問文に用いて「いぶかしがる気持ち」を強調する、「一体全体」に似た意味あいの「また」。

②「今日はまたなんて暑いんだ！」
「これはまた何たる不思議！」
のように、感嘆文の中で「驚き」を強調する「また」。

これらはいずれも、「再び」という基本的意味からの派生とはとらえにくい。『日本語大辞典』の「また」の補注によれば、本来副詞だった「また」が接続詞の用法をもつようになったのは、漢文の「且（かつ）・又・亦（また）」などの訓読みに用いられた結果、とのことだ。

とするなら、上記①②の用法は、「学んで時にこれ

を習う、亦楽しからずや」等の漢文の「亦」の意味あいが日本語化したものではないだろうか。漢文の文体や語彙の浸透は意外なところにまで及んでいるようである。　(門)

まだ・もう

「もういいかい?」「まあだだよ」という隠れんぼの時の決まり文句が「まだ」と「もう」の対応を語っている。ある事柄が話し手の意識の中で基準点を越えている場合が「もう」であるのに対して、越えていない場合が「まだ」なのである。

「夕食の支度がもうできている」「まだできていない」というように、ふつう「まだ」の方に否定的ニュアンスを受け取ることが多いようだが、それは「できつつある」ことに対する肯定的判断があるためである。その証拠に、「あんな猛練習はもうできない」「まだできる」というように、「もう」の後に否定がきて、「まだ」の後に肯定がくることもある。「チェックインまだできますか?／申し訳ありません。もう終わりました」「この間のウィスキーまだある?／残念ね、もうないわ」というような場合もある。

つまり、「まだ」と「もう」を分ける基準は、後ろに否定がくるか、肯定がくるかというものではなく、ある状態が継続しているか否かなのである。継続している場合が「まだ」であり、新しい状態に入っている場合が「もう」となる。「この暑さはまだ続く」「もうどうにも止まらない」といった具合である。

「もう」と「まだ」の境目は、チェックインの場合のように客観的に定められている場合もあるが、たいていはきわめて主観的なものなので、しばしば次のようなやりとりが見られたりする。

「ボトルにまだ半分あるぞ／もう半分しかないのか」

「いい加減もう投げたらどうだ?／いや、まだまだ勝負はついてないぞ」

「今からじゃもう間に合わないよ／まだ十分間に合うよ」

先の「意識内の基準点」は事柄の「完了／非完了」を中心とするが、場合によっては、完了以前の事態

にも「もう」を使うせっかちな言い方もある。
「もうそろそろできるんじゃないか？」「まだ当分できないわよ」。
この場合は、完了時点を先取りして、そこまでの時間間隔を「そろそろ*」で表現しているわけである。ここにも、「もう」と「まだ」の境目の主観性・恣意性が顔を出している。
「まだ」だけに見られる用法だが、「基準点に達しない二つの中で一方の方がよりましだ」という際に「まだ」が使われることがある。
「ボーナスが出るだけまだましだよ」
「少々の蓄えでも、全然ないよりはまだましだ」
「あんな大学に行くくらいなら、浪人した方がまだいい」

（門）

または・～か

選択を表す「または」や「か」という語にはなんのあいまいさもないように思える。しかし、次のような例ではどうだろうか。

①「食事の後にはコーヒーか（または）紅茶が出る」
②「遊びに行くなら、温泉か（または）スキー場がいい」

①では、「コーヒーか紅茶」のどちらか一つがサービスで出てくるのであって、両方を期待するのはムシがよすぎる（両方飲む人もいないだろうが）。それに対して、②では「温泉のあるスキー場」ならもっといいわけだ。つまり「または」や「か」の用法には、それで連結される二者の並立を認めないもの（論理学では、そうした「または」を「強い選択」という意味で「強選言」という）と、認めるもの（同じく、「弱選言」）とがある。
もっとも、こうした区別はたいてい文脈から容易に判別できる。また「強選言」であることをはっきりと示すためには、「AかBかのどちらか（一つ）」という言い方もある。しかし、「弱選言」であることを明示する表現（英語では "and / or" という苦肉の策を用いているが）はない。
ではA、B、Cという三つの事態の選択が「A」

あるいは「BかC」という場合と、「AかB」あるいは「C」という場合をどのような表現で区別できるだろうか。「Aか(または)Bか(または)C」と言うだけでは、はっきりしない。純粋に論理的に考えれば同じことなのだが、表現上は、大きな段階の接続と小さな段階の接続の区別をはっきりと示せる方がいいことがある。

法律では、「又は」と「若(も)しくは」を使い分けている。例えば、憲法第八条に「皇室に財産を譲り渡し、又は皇室が財産を譲り受け、若しくは賜与することは……」とある。皇室に財産を「譲り渡し」と、皇室が財産を「譲り受け、賜与する」が大きな区切りとして「又は」で示され、「譲り受け」と「賜与する」が「若しくは」で小さな区切りとされているのである。

法律用語では、同様に「AとBとC」という並列のあり方もはっきりと区別できるようにしている。つまり「並びに」を大きな連結に、「及び」を小さな連結に用いるのである。これは時に重大な相違を表すことになる。例えば、相続権は「甲及び乙並びにその配偶者」にある、とすると、「その配偶者」には「甲の配偶者」も「乙の配偶者」も含まれ、両者とも相続権があることになる。それに対して、「甲並びに乙及びその配偶者」という場合は、「乙の配偶者」は相続権を有するが、「甲の配偶者」には相続権がないわけである。

「又は」「若しくは」「並びに」「及び」は、このようにあいまいさが許されない法律用語の面目躍如たる表現ではあるが、よく批判されるように、日常語に根づいた言葉ではない。法律の言葉を分かりやすく、かつあいまいさを避ける表現が工夫される必要があろう。

（門）

まで・までに

「まで」は「皿洗いまで手伝ってくれた」「手紙は終わりまで読んでください」のように、動作・作用の及ぶ範囲を示したり、「練習の甲斐あって、やっと試合に出られるまでになりました」のように程度を表す。時には「ブルータスよ、お前まで」と意外・

驚きをあらわす表現になったり、「骨までしゃぶる」のように極端な例をあげて、その甚だしい様子を述べるのにも使われる。

ここでは時間・期間・数量を表す語につく「まで」を取り上げ、「までに」との使い方の比較を試みたい。その違いは漠然とは分かっていても、極めてあいまいだからだ。

たとえば一九九九年という語を考えた時、「一九九九年まで、私は生きていられるだろうか」「この家の契約は一九九九年までとしましょう」のように「まで」は動作や作用が継続する際の限界の時を示し、「まで」の後には「生きる」「契約する」のように「動作が継続することを示す動詞」が来ることが多い。

これに対して「一九九九年までに」となると「この小説をがんばって仕上げたい」「博士号がとれるだろうか」のように、動作そのものがある時点までに成立することを示し、「までに」の後には、「仕上げる」「博士号をとる」のように「動作がある瞬間に完了することを示す動詞」(届く、結婚する、咲く、電気を消す、つける、車が止まる、といった動詞)が来ることが多い。

「荷物は明日の朝までには(×まで)届くと思いますよ」

「今はまだ両親の許しがでませんが、今度先生とお目にかかるまでには(×まで)、私たち結婚しています」

「この花、クリスマスまでに(×まで)咲くといいですね」

「夜十時までには(×まで)必ず電気を消してください」のようにだ。

しかし同じ動詞でも

「この花、クリスマスまで(×までに)咲いているといいですね」

「確かその車なら、昨日まで(×までに)ここに止まっていましたよ」

と「動詞＋ている」の形で使われると動作の継続を表すことになり、「まで」が使われる。この辺が外国人学習者に説明するのに大変なところだ。

「いつまで食べているの。五時までに食べてね」

「原稿をあしたまでにお願いしますよ」

「昨夜も夜中の三時まで書いていましたよ」

我々は無意識のうちに「まで・までに」を使い分けているのだ。（佐）

までに ⇩ まで

見える・見られる

「見える・見られる」は、「私の家の窓から浅間山が見えます（見られます）」と、両方とも可能動詞のように「見える①」。ところが、たとえば留学生が「先生、パンダはどこで見えますか②」と質問した時、この文章に「見える」はそぐわないことに気づく。「上野動物園に行けば見られますよ③」と「見られる」を使うべきだと思うが、私にもまだ「見えない④」ところがある。それでは、我々はどのように「見える」「見られる」を区別しているのだろうか。

①の「見える」は「～のように見える」という使い方で、目に見えるのではなく、心に見える状態に対して使っている。

「彼は彼女がいなくても、平気なように見える」

「日本の首相は先進国首脳の中でも、落ちついているように見える」

「母は娘の帰りが遅いのを心配しているように見える」

と、どれも視覚を通してではなく、心の状態を言っているものだ。

②の「見える」は、見ようと意識しなくても、自然に目に映る状態を言う。パンダは、上野動物園という特定の場所に行かなくては見ることはできない。「見上げてごらん、夜の星を」という歌詞がある。

「夜空に無数の星がまたたいているのが見える」

「空の中央に天の川が帯のようにかかっているのが見える」

「あそこに見えるのは、流れ星かな、それとも飛行機の灯かな」

「山々がシルエットになって浮かび上がっているのが見える」

これらの「見える」はふと夜空を見上げたら目に自然にこれらのものが入ったという状況だ。これらは「見られる」とも置き換え可能だ。

③は「上野動物園に行けば」とある条件を設定して、「そうすれば見られる」という時に使う。条件文の「と・ば・たら・なら」などの文章を考えてみよう。

「アラスカに行くと白熊が氷原を歩き回っているのが見られる」

「新宿の名画座では、八〇〇円で映画が見られる」

「今晩七時にテレビを見たら、きっと木村さんが出演しているのがみられますよ」

「彼の作品なら、銀座の画廊で見られますよ」

どれも「見える」には置き換え不可能だ。「見よう」という意志があり、その場所に行くなり、テレビのスイッチをつけるなりしなければ「見られない」。

最近は「ら抜き言葉」の影響を受けて「見れない」という人も多いが、これは「見えない」とは明確に区別がついていないようだ。映画館などで「すいません。見れないので座って下さい」というのを聞いたことがある。これは明らかに「見えないので」だと思うが、「見られない」も「見えない」も「見れない」になってしまうのだろうか。

④の「私にも、まだ見えない」は、

「まだ慣れないもので、社内の事情が見えないんですよ」

「A社から契約がとれたって！　これで先が見えてきた」

のように、「理解する」「把握する」「見通す」などの意味で使われることがある。①と同様、目で見るのでなく、「心の目で見る」ということだ。（佐）

みごと（見事）

「人々の期待大きけれども、さしたる見事いつさいなし」というように、かつては「見るべきこと」「見もの」という意味もあったが、今日ではこの意味で使うことはごくまれだ。今日の用法は、

①「技（わざ）あり！　お見事」（立派なこと）

「お客を次々に案内する手際は、それは見事です」（巧みなこと、手際がよいこと）

「見事にだまされた」（完全に）

②「二歳だというのに親の考えていることを見事

に理解しているのですね」(ちゃんと。立派に)
以上のとおり、大半は、事物や人の行動を肯定的に見、感心したときに使う単語。しかし、「完全に」「ちゃんと」という意味に関しては「見事にだまされた」「あの人の借金のうまさときたらお見事というほかはない」「そこは業者同士、見事につじつま合わせがしてあるさ」のように、あきれたり、シニカルにものを見たり、強い批判をしたい場合にも使う。この場合、「見事」は立派とは正反対の意味になり、それゆえに強い反感を示す表現ともなる。
「ねらってた所を受験しましたが見事落第しまして」などとよく言うのは、「惜しいところで落第」というのではなく、問題にならず文句なしの落第、という気持ちかららしい。それはよいとしても、「○○先生は前回の総選挙に期する所あって出馬、しかし見事落選されまして…」などと第三者が紹介するケースは落ち着きが悪い。本人が言っても、オヤ？と引っかかることがあるほどだから、他者が言えばなおさらだ。だが、「見事落選」をまるで一語のようにセットで頭に入れている人はけっこう多いのかもしれない。
なお、「あなたの言い訳は見事だよ」という皮肉表現は、ある程度の言語感覚または自尊心をもった相手に通じることで、そうでない人に対しては、ほめことばとは思われないまでも、大して痛みを感じさせないことがある。皮肉（アイロニー）やしゃれが通じないのは、ことばそれ自体の問題というよりも、相手の感受性や社会常識の問題である。（芳）

コラム

自動詞と他動詞

国語辞典の動詞を調べると、必ず「自・他」と明記してある。たとえば「開く」を手元にある国語辞典で調べると「自五」(自動詞・五段活用)と記してある。それでは「開く」の他動詞は何か、日本人なら「開ける」とすぐ浮かんでくることと思う。
日本語には、このように自動詞と他動詞がペアーになっているものが多い。夫が帰宅して妻に「ねえ、お風呂沸いている？」と聞くときは

「沸く」という自動詞を使っている。それに答えて「ええ、沸いているわよ」と言えば素直な答えだが、「ええ、沸かしてあるわよ」となるとニュアンスは多少異なってくる。

「沸いている」というと、実際は妻が沸かしたのであろうが、いかにもお湯が自然に沸いたかのような使い方だ。それに対して「沸かしてある」というと、その背後に「沸かした人がいる──この場合はもちろん妻」といった構図が浮かび上がる。同じことを言うのでも、自動詞を使うか他動詞を使うかで、印象はずいぶん違うものだ。

この場合、もう一つ大切な点は、自動詞の「沸く」には「ている」が使われて「沸いている」となるのに対して、他動詞の「沸かす」には「てある」が使われ、「沸かしてある」となる点だろう。

自動詞と他動詞の概念はもともと西洋文法を移入した時に入ってきたもので、日本語に則したものではなかった。しかしこのように「沸く・沸かす」の例を見ただけでも、自他には動詞の性質の違いが出ていて、日本人は何気なくそれらを使い分けていることが分かる。「その違いは？」と問われると、あまりにもあいまいであり、たとえば「閉まっている」も「閉めてある」も「閉まる」という状態においては大した違いがないように思えるかもしれない。

ニューヨークのケネディー空港に行った時のこと、重いスーツケースをコインロッカーに預けようとしたところ、シャッターが閉まっていた。理由は爆弾テロがあったので、閉めたとのことだ。

この場合「閉める」を使うか「閉まる」を使うかで、だいぶ文意が変わってくる。「コインロッカールームは、ドアが閉めてあった」と言えば意識的に閉められた様子が伝わり、「テロ事件があったので、閉めてあるのだろう」といった類推が働くが、「コインロッカールームのドアは閉まっていた」と言うと、「時間外だからかな」ぐらいに思うのではないだろうか。

英語では「ドアが閉めてあった」と「閉まっていた」には違いが出ず、"The door was closed."となる。こう言われると自動詞にも他動詞にも受け取れる。翻訳の際は、翻訳者の裁量に任せられている部分だろう。

「自動詞」は物が主語で、そのものが自発的に働くことであり、「他動詞」は人が主語で、そのものに働きかけることだ。オートマティックなドアーならいざ知らず、「ドアが閉まっていた」という表現は本来ならおかしいということになる。

「沸く」「沸かす」も同様に考えることができる。ガスに火をつけ、やかんを載せて、しばらく待つという手順があれば「お湯を沸かす」になるが、最近は魔法瓶にお水を入れただけで沸くものがあり、「お湯が沸く」と自動詞の表現も十分にありうる。

ところで日本語を見てみると「紙を破く」「紙が破ける」のように、外国人にも自動詞と他動詞の意味的な対立が分かりやすいものも多い。

ところが、「お金がもうかる」「お金をもうける」のように誰かがお金をもうけたという点では変わりがなく、なぜ自他の対立があるのか分かりにくい表現もある。自然にお金がもうかったのか、意図的にお金を集めたのか、我々は心理的に使い分けているが、これなどはもっとも分かりにくいものであるらしい。

たとえばこんな場合、どんな表現が適切だろうか。

友人から旅行の間、植木に水をやって欲しいと頼まれたとする。しかし、ベランダに置いた植木のことなどすっかり忘れ、友人が帰ってきたときには木はすっかり枯れてしまっていた。「あっ、すいません。お預かりした木が枯れてしまいました」か、それとも「あっ、すいません。お預かりした木を枯らしてしまいました」か。

「枯らしてしまいました」は「枯らす—他動詞」で、その背後には当然、自分が枯らしたのだから自分の責任であるというニュアンスがある。それに対して、「枯れてしまいました」は、「枯

れる―自動詞」で、自分には、責任はないですよといったニュアンスが隠されている。

日本人なら、普通は「枯らしてしまってすいません」と他動詞を使って、たとえ自分に責任がないにしても、「枯れてしまって」とは言わないのではないだろうか。もっとも、酷暑で枯れても当然というような背景があれば別であるが。ところが、外国人にはこのニュアンスの区別は非常に分かりにくいようだ。文化的背景の異なる外国人にとって、この場合のように、「木が枯れること」があたかも自分の責任であるかのように表現する日本語の形態は、納得のいかない面もあるらしい。まさに異文化理解なしには、言語を使いこなせないという一つの事例である。

この辺が外国人に自動詞と他動詞を指導する際のポイントになるところだろう。自動詞で言うか、他動詞で言うか、我々はその場に応じて使い分けている。

「ああ、洗ったばかりのシャツが汚れちゃった」「汚しちゃった」

気づいてみたら汚れていたという場合には「汚れちゃった」だろうが、コーヒーをこぼした場合には「汚しちゃった」という具合にだ。

自動詞・他動詞の煩雑さは、この対をなす形になじめないことや、意味上の使い分けの難しさだけではない。自動詞・他動詞の形の変化の規則性を整理してみると十数通りにもなる。外国人学習者が戸惑うのも無理はない。

ここにその例をいくつかあげておこう。

	自動詞	他動詞
①	広がる(hirogaru)	広げる(hirogeru)

ローマ字で書いた最後の部分を見ると、aru-eruの違いが出ていることが分かる。このパターンには、染まる―染める、集まる―集めるなどがある。

②	痛む(itamu)	痛める(itameru)

ローマ字の部分、自動詞はu,他動詞はeruとなることに注目したい。このパターンには開く―開ける、育つ―育てるなどがある。

③ 残る(nokoru)　残す(nokosu)

日本語の古語には「ある」と「する」の対立があったと言われる。この場合の「のこる」の「ル」が「ある」に当たり、「のこす」の「ス」が「する」に当たると言える。仕事の残業を自らの意志でするなら「残る」だが、部長が部下に残業を頼めば「残す」となる。夜十二時を過ぎ、自分の意志で残業を切り上げれば「帰る」だが、「もう遅いから帰った方がいいよ」と部下を気づかって言えば「帰す」になる。

④ 乱れる(midareru)　乱す(midasu)

「兵隊たちは疲れたのか、だんだん列が乱れてきた。誰かが乱したというわけではなかったが…」、これは③のバリエーションとも言えるreru(自動詞)とsu(他動詞)の対立だ。

⑤ 揺れる(yureru)　揺らす(yurasu)

「地震で木が大きく揺れたかと思うと、ズシンと大きな音をたてて倒れ、川を流れて行きました」

「木の上に隠れていたが、誰かがユサユサと木を揺らして、木は倒されてしまった」

この自動詞と他動詞を入れ換えて見よう。

「地震で木が大きく揺らされたかと思うと、ズシンと大きな音をたてて倒され川に流されて行きました」

地震が擬人法として生きた意志を持った存在のように聞こえる。この場合はeru-asuの対立となる。

ここでは代表的な自動詞・他動詞の対になる例をあげておいた。このほかにも「仕事済んだ? 早く済ませてしまったら」「九時までには済ますから」のように、済む(自動詞)、済ませる(使役形)、済ます(他動詞)と込み入った形もある。

日本語の自動詞・他動詞の対立は一筋縄では行きそうにない。　(佐)

水

「水」は辞書では「われわれの生活になくてはなら

ない、すき通ったつめたい液体」などと定義される。つまり、日本人にとって水は「つめたい」ものに限るのだ。「熱い水」では日本語にならず、それなら「湯」という別の単語を使わなくてはならない。hot water という概念や表現を有する英語などとは、そこが違う。

地球上に、水は「つめたい」という限定をしない言語社会はあちこちにある。暑いマレーシアあたりには「氷」に相当する単語もなく、水・湯・氷を一語ですませているという。水をつめたいものに限る日本語の習慣には外国人が戸惑ったりいらだったりする事態も生まれる。

例えば、「盛りあがった雰囲気に水をさす」と、なぜここに「水」が出てくるのかも飲み込みにくかろう。「親子水入らず」「家族水入らず」や、「そんな水くさい真似はやめてください」なども、水はつめたい上に無色無味無臭で「味気ない」というイメージを前提にしなければ理解しにくいはずだ。

味のないものが入るとせっかくの濃密な味が薄まってしまう。親子、家族や親友などの人間関係を薄め、邪魔だてするものは「水」だととらえる発想は日本人には自然のものだ。

こういう、日本語社会のメンバーに共通の社会的連想を習得することも文化に深入りして話し手の心理を読み、味わう上には必要である。「みんなが連帯感を持って活動してるのに、あんな発言をして水をかけるなんて、変なやつだよ」も、水が「さます」「うすめる」作用をするという共通理解から出てきた発想と言える。

「ダメだなあ、若い放送記者は。まるきり水の向け方を知らない。なぜあんなのにインタビューさせるんだ」

と視聴者はいらいらするが、なぜ、「水を向ける」というのか、この場合は語源自体があいまいである。「呼び水」からの連想だろうか？

水が「液体」から「環境」の意味に転用されると、「はじめての土地へ行くと水がかわるから、体に気をつけて…」という用い方が行われる。この場合は、実際に、飲み慣れない水に体が適応できないという現象があり、そこから比喩的に「環境」の意にも用

いられているものだ。

ところで、古来、日本人は清潔好み、きれい好きである。万葉の歌の心や上代の日本人の民族性は「明く、清く、直き」と評されたが、「清く」が三本柱の一つなのは潔癖感がきわ立ったからだろう。「水」は、その清浄好み、潔癖感の象徴でもあった。神社には「ちょうず」という清めの水があり、土俵に上がった力士は「水をつける」。その水は「力水」と呼ばれる。

水を用いて「すすぐ」のは肉体をけがすものばかりではない。心理面のダメージを挽回することも「すすぐ」と表現されることがある。「恥は必ずすすすぐぞ」「今度の試合は雪辱戦ね」と力を入れる発言が多いが、その意味にしても、外国人の中にはとらえどころがないと感じる向きもあろう。

「すすぐ」ことが好きな日本人は、過去のトラブル、わだかまりを「水に流す」のを美徳とする。きれいさっぱり、でよいと感じるのだ。ところが、日本人と違ってしつこいことを悪徳と思わない諸外国からは、一方的にさっさと「水に流す」とはけしからん、と非難されることが少なくない。「水」に親近感を持ち、さまざまの連想やイメージをこめている言語社会のメンバーと、他の社会のメンバーの間に生じやすい文化摩擦を計算しておく必要がある。（芳）

見られる ⇓ 見える

虫

「課長、今日はどうも虫の居所が悪いみたいだよ」

「虫が知らせたというんだろうね」

「おごってもらった上に、車で送らせるとは虫のいいヤツだ」

「なんとなく虫の好かない男だ」

われわれの身体の中には、不思議な感知能力をもち、人を嫌ったり、人から嫌われたりする「虫」がいるようである。「それでは腹の虫がおさまらない」というような言い方からすると、この「虫」の居場所はどうやら「腹の中」のようで、何やら寄生虫のようなイメージである。この「虫」は、「宿主」である当人の気分や機嫌を左右する力をもつ。「ふさぎの虫がおこってしまって、何も手につかない」「そんな

ことをしたら、あの人の浮気の虫をあおるようなものだよ」
子供がわけもなく泣き止まないことを「癇癪をおこす」というが、これも「癇の虫が騒いでいる」ととらえて、「癇の虫をおさめる、しずめる」薬があったりする。
この「虫」につき動かされて何かに熱中するあまり、カフカの『変身』のように、宿主自身が「虫」になってしまうこともある。「仕事の虫」「練習の虫」「本の虫」「勉強の虫」。そうした「虫」ぶりを嘲ってはやしたてる表現もある。「泣き虫、毛虫！」「弱虫やーい」「点取り虫」
ところで、この「虫」の正体はいったい何だろうか。「虫が知らせる」とは、どうしてだか自分でも分からないが不吉な予感がすることだし、「虫が好かない」も、なぜか分からないが、好きになれないという自らコントロールできない嫌悪感をさしている。「虫」とは、自分でコントロールできない気分や感情を説明するために、そうした気分・感情をひきおこすものとして仮構されたものに他ならない。
「虫の居所が悪い」という表現には、「いつもはそんなに不機嫌な人ではないのに、今日は特別不機嫌だ」という、相手の理不尽な不機嫌への寛容さがうかがえる。「浮気の虫」や「癇の虫」という表現も、「虫」がひきおこすということにして、当人を多少とも免責しているところがある。
それにしても、小さな「虫」が大の人間の気分や感情をあやつっているという発想は、一寸法師が鬼の腹の中で大暴れしているようなイメージで、何やらおもしろい。「虫」にとってはいい迷惑かもしれないが、人間関係を円満に保つためには、時に「虫」に悪者になってもらうことも必要なようだ。（門）

むしろ

「むしろ鶏口となるも牛後となるなかれ」という中国成語がある。名言だとは思うが、「むしろ」の使い方としては、現在の日本の社会には即さない。なぜなら「むしろ」は二つを比べて「どちらかと言えばそれよりこれを選ぶ」のであり、比較の対象は同

等の程度にあるもので、「しいて言えばこちら」という発想だ。

鶏と牛を比べること自体が、思いがけない比較で、現在なら「あのレストランなら、ビーフカレーよりむしろチキンカレーをお勧めしたい」と使うところだろうか。もっとも、この成語が生まれた中国の社会では、鶏や牛が家畜として身近にいて、例えとしてふさわしいものだったのだろう。

「むしろ」が使われている文章を分析してみると、面白いことに気がつく。

「母よりむしろ父の方が子供の教育に熱心だった」

「私は近所の子供と遊ぶより、(むしろ)窓から子供たちの遊ぶ姿を眺めている方が好きだった」

「彼は天才というより(むしろ)気違いだ」

「地図で調べるより、(むしろ)聞いた方が早い」

これらの文章から「むしろ」をとっても文意が変わらないばかりか、意味がはっきりする。「『むしろ』がない方が(むしろ)意味が明確になると言えないだろうか」。前者より後者という明確な選択が「むしろ」を使うことで、「どちらかと言えば」と比較をあいまいにする役割を果たす。

会社の会議などで

「○○さんの提案も結構かと存じますが、むしろ××さんの提案の方が、社の方針と一致するのではないかと思います」

「社員旅行はスキーよりは、むしろ温泉の方が参加者が多いと思うよ」

人間の体で言えば盲腸のような存在で、その果たす役割は非常に微妙だ。

女性よりも男性が、子供よりも大人がこの表現を好んで使う。それは「むしろ」の中に前者より後者が適切であるという価値判断を伴っているからだろう。テレビドラマで、子供が「僕はCDの音よりむしろレコードの音の方が好きだよ」と言って「何を生意気な」と母親に言われている場面があった。これは、その子供の言った内容が問題なのではなく「むしろ」を使った話し方に母親がカチンと来たのだろう。

「僕はCDの音より、*かえって…」と言い換えることも可能だが、そうすると作者の意図する「こまっ

しゃくれた子供像」は弱まる。前者を否定する場合には、「化学療法に切り換えたら、病状は良くなるどころかむしろ（かえって）悪化している」と言い換えが可能だ。「海に行くよりはむしろ（×かえって）山に行きたい」と前者を否定しない場合には言い換え不可能だ。（佐）

〜も

戦争責任問題を問われて、例えば、「侵略行為と見ることもできる」と答える答弁のあいまいさは「も」に起因している。

「も」は本来、同種の物事や事態を文脈的に前提として、それに事例を付け加える働きをする。

「今日も（昨日と同様）暑くなりそうだ」
「（君が行くなら）僕も行くよ」
「（彼と同様）私もそれには賛成です」
「（これだけでなく）それも取ってください」

つまり「AもBも」という事態のうちの「A」を省略して「Bも」と言っている形である。ここで厄介なのは、「A」と「B」の「同種性」を判断しているのは話し手であり、文脈によっては、そこで明示されないままに並列の前提とされている「同種の事柄＝A」が必ずしも上の例のように明白とは限らない、という点である。例えば、冒頭の表現で省略されている「A」は「進出行為と見ること」かもしれないし、さらには「アジア解放と見ること」かもしれないのである。

また、「AもBも」という表現は同種の事態の並列から転じて、「右も左も分からない」「進むことも退くこともできなくなってしまった」「行くのも行かないのも参加者の自由」というように正反対あるいは両極端の選択肢を並列する場合もある。とすると、冒頭の表現は、「侵略行為と見ないこともできる」という解釈も許容しているのである。

「〜と見ることもできる」「〜とも言える」式の表現のあいまいさを避けるためには、暗黙の前提とされている並列事項「A（必ずしも一つとは限らない）」をはっきりさせることである。

さて、並列以外の「も」の意味を大まかに整理し

てておこう。「行くのも行かないのも」という文例が示唆しているように、「も」には両極への志向があるようだ。

「誰(何、どっち、いつ、どこ、どう)でもできる」

「誰もできない」

というように、不定代名詞に「も」をつけると全面的な肯定・否定になる。その意味的背景には、「Aさんもできる(できない)、Bさんもできる(できない)、Cさんも…」というような類例の枚挙という「も」の基本的な意味が働いている、と見ることができる。

では、「あの人とはそれ以降、あいさつもしなくなってしまった」という否定文では「も」はどう機能しているだろうか。「話をする」とか「行動をともにする」というような他の社交行為がないことを前提とした上で、最低限の「あいさつすらしていない」という意味である。「何もしない」が全否定であるのに対して、「あいさつもしない」は「あいさつ」という下限における否定を表している。

「びっくりして声も出ない」

「漢字どころかひらがなも書けません」

「バス代の二〇〇円も財布になかった」

「ボトルはもう半分も残っていなかった」

下限が「一」であれば、その否定は不定代名詞の時と同じように全否定となる。「一銭もない」「一人も来なかった」「一度も行ったことがない」「いっときも待てない」「一枚も残っていない」

「誰でもできる」という全面肯定のベクトルに対応する「上限」という含意もある。

「物価が一年で二〇%も上がった」

「一週間もあれば、できるだろう」

「難しい漢字も書けるようになった」

「十万円も貰ったんだから、何かおごってよ」

「ボトルにまだ半分も残ってるよ」

「も」の意味の広がりは、同種の事態の並列という基本義を踏まえて、並びたてるベクトルが上限/下限、さらに全面肯定/全面否定に向かう、と言えるだろう。　（門）

もう ⇩まだ

もったいない

「もったいない」の「もったい」とは何のことだろうか。柳田国男は「モッタイ及びメンドウは、現在何人もほとんどその由来を説明し得ない二つの俗語である」(『毎日の言葉』)としているが、多くの辞書では「もったい」の元の意味は「有り様、態度がいかにももものものしいこと」である、としている。

たしかに、「もったいぶる」は「わざとものものしく、さも権威があるような態度をとる」ことであり、「もったいをつける」は「偉そうにいばっている」様子を表している。「おおげさでいかにももっともらしい」ことを、「もったいらしい」という表現もある。

「もったいぶらずに、早く正解を教えろよ」「偉そうにもったいつけて話すヤツだなあ」といった具合に、いずれももっぱら「おおげさ」といった否定的な意味あいをもって使われる。しかし、あくまで「もったいぶる(らしい)」こと、「もったいをつける」ことが否定的な行為なのであって、「もったい」そのものにマイナスのイメージがあるわけではないとも考えられる。

では、その「もったい」に「ない」がついた「もったいない」の意味はそうした元の意味から説明がつくだろうか。柳田は先の本で「もったいない」の「ない」は、「せつな」が「せつない」となったように、「もったいな」が形容詞化して「もったいない」になったと見ているが、ここでは「もったい」を「ない」と否定したものととることにする。

「もったいない」には、大きく分けて①「惜しい」という意味と、②「分不相応」という意味がある。

①「時間がもったいないから、タクシーで行こう」
「そんなことにお金を使うのはもったいない」
「限りある資源を使い捨てとは、もったいない話だ」
「ご飯を残してはもったいない」

これらの場合の「もったいない」は、当の対象の価値や有用性が十分に活用されないことを残念に思う気持ちを表している。つまり、その物の「もったい＝有り様・あり方」がいかされていない、という

ところから来ているのではないか。

②「分不相応」の意味の「もったいない」は、目上の人の行為が恐れおおい場合と、不釣り合いによい目にあっている場合に使う。

「社長からもったいないお言葉をたまわった」
「尊いお方がもったいなくも、わざわざお出でくださった」

が前者だが、現在では、こうした「もったいない」で形容するほど「恐れおおい」ケースは稀になっている。

「彼にはもったいないほどの、よくできた奥さん」
「私にはもったいないような、ありがたいお話です」
「この部署におくにはもったいないような人材」

は後者の例。

考えてみると、②の両者の例とも、「もったいない」とされる当の人物や対象が、それ本来の「もったいない＝人としての有り様・品格」をはずれて、より下位の者に接近していると見ることもできる。「もったい」の原義を肯定的に捉えすぎた、こじつけだろうか。

（門）

もっとも（尤も）

「もっとも」には比較の上から使われ、「もっとも（最も）ひどい被害を受けたのは神戸で…」のように程度の激しい様子や、「このクラスでもっとも成績の良いのは…」のように「その中でも一番」という意味がある。

しかし、ここでは①「彼女が彼を嫌うのももっとも（尤も）だ」のような形容動詞の用法と、②「君は運転がうまいね。もっともスピードの出しすぎというきらいはあるが」など、接続詞の用法を取り上げたい。

①は、「当然そうだ。当たり前。道理に叶っている」という時に使われる。「陰険な告げ口をされたのでは、彼女が怒るのももっともだ」「不渡り手形をつかまされたのでは、あの会社との取引停止はもっともだ」のように、その事項について同感できる時だ。

しかし、この「もっとも」と感じるのは主観的なも

ので、いつの場合も「そう思うのも道理だ」となるかどうかは疑問の余地がある。
日本の社会で、上下関係がはっきりしている場合、なかなか相手の言うことに反論できないことが多い。「ごもっともです」などと相槌を打ちつつ「そんな理屈が通るわけがない」と思う人もいる。そんな時に
A「ごもっとも。ごもっとも」と相手の言うことに同意して見せるか、
B「おっしゃることは、ごもっともとは思いますが…」と遠慮がちに意見を述べるか、
C「いや、私はそうは思いません」とはっきり反対意見を述べるかだ。
人間関係によってももちろん違うが、日本の社会ではABCの順で上の人の意見に従う場合が多く、Cともなると「生意気だ」の誹り(そし)を免れない。自分では必ずしもそうは思わないが「もっともです」と同意して見せる。ここが「もっとも」の使い方のあいまいである所以だろう。相手の言うことに何事にも「ごもっとも」と納得してみせること、たとえばアメリカ政府の主張に日本がそういう態度をとってきたことで、どれだけの誤解を生んだことか。
「もっともごかし」という表現そのものの存在が、日本社会での人間関係のあり方を示唆している。「彼は自分の潔白を証明するために、いかにももっともらしげ(道理にかなっているように)に弁明したが信じる人はいなかった」などの表現も多用される。
②は、前言を否定するような何かか必ず「もっとも」の後に続く場合だ。何か条件を言っておいて、それに付け加える形で「もっとも」と言う。たいていの場合は「ただし」「一方」などと言い換えることが出来る。
「いつでも研究室に来ていいよ。もっとも仕事中の時はお相手できないがね」
「あそこは鰻(うなぎ)がおいしいんだ。もっとも高いから、僕たちの財布の中身では無理かな」
「報告書、なかなか良く書けていた。もっとも、漢字の間違いが多いけれど」
「彼の態度はなかなか立派だと思いますよ。もっとも、生意気だという人もいますが」

「日本は世界の中でもっと指導力を発揮すべきではないでしょうか。もっとも今でも十分に世界に貢献しているとは思いますが」

自分で意見を言っておきながら、これに対立するような事柄を補足する。「もっとも」は明確に述べると不安が残るという日本人には便利な表現ではある。（佐）

もの・こと

この世の「ありとあらゆるもの」という言い方が表しているように、この世に存在するすべてが「もの」であると言える。とするなら、これ以上あいまいな語はないわけだ。しかし、「物事」という言葉は、「もの」と「こと」をあわせた表現であり、この世には「もの」とは違う「こと」があるようだ。つまり、「物事」という表現は、「もの」がこの世に存在するすべてなのではなく、「こと」と呼ばれる、「もの」と同じくらいに広大な、意味領域があることを示唆している。

では、「もの」と「こと」はどう違うのだろうか。多くの辞書は、「もの」は形をもち、感覚でとらえることができる対象をさすのに対して、「こと」は思考の対象等の抽象的な事柄を表す、としている。たしかに、「もの」というと、まず第一には「物体・物質」を思いうかべるし、「こと（事）」は「こと（言）」から来ているという語源説からも、「具体／抽象」の対立と思いやすい。しかし、人魚や怪獣のような虚構的存在も「こと」というよりは「もの」だろうし、「人生もそう棄てたモノではない」という言い方は、「人生」のような抽象的存在も「もの」と言いうることを表している。「もの」と「こと」の区別は、形や具体性の有無にもとづくものではないようだ。

「もの」と「こと」をキーワードとして、近代的世界観の根本的転換を説いた広松渉は「○○というモノは〜だ」と「××というコトは〜だ」の「○○」や「××」の部分に入る表現を分類することによって、「もの」と「こと」に関する暗黙の了解を洗いだしている（『もの・こと・ことば』）。それによると、名詞類が「○○」すなわち「もの」であるのに対し

て、文章態は「××」すなわち「こと」である。例えば、「降る雪」や「雪の白さ」は「もの」だが、「雪が降る」や「雪が白い」は「こと」と言わざるを得ない。上の例で言えば、「人生」は「もの」として受けることができるが、「生きている」は「こと」でしか受けられない。動詞は、文章態の省略表現だからである。

広松は、名詞類での事態の把握、すなわち世界を「もの」つまり「他のものから独立して一つのまとまりをなしているもの」として把握する世界観を「物的世界観」と呼び、それに対して、世界を「できごと」すなわち文章態、「主―述」の関係態としてとらえる「事的世界観」を対置した。彼は、「もの」と「こと」のなにげない使い分けの内に、二十世紀の学知の構造的転換に見合う事態を見ていたのである。

さて、「もの」も「こと」もこうした世界観的事態に対応する用法以外にも実に多様な相貌を示している。興味深い点だけでも、ざっと見ておこう。

①「もの」も、言語表現や思考対象を表すことがある。「物言い」「物書き」「物思い」「あきれて物も言えない」。「物を言う」が、「金にものをいわせる」「これまでの努力がものを言った」のように、「力を奮う」「効果がある」という意味をもつのもおもしろい。

②「もの」も「こと」も、威力のある「もの」、きわめて重大な「こと」を表す場合がある。

「あいつは将来かならずものになる」
「ドイツ語もフランス語も結局ものにならなかった」
「そいつはことだぞ」
「彼はことを好むタイプだ」

「ものものしい」や「ことごとしい」という形容詞にも、この種の響きがある。

③「もの」も「こと」も、形式名詞化して多種多様な慣用表現を作りだす。

「〜ものだ」（希望、回想、感嘆、断定、当然等）
「早く合格したいものだ」「ここら辺をよく散歩したものだ」「よくあそこまでのし上がったものだ」「人生とはそういうものだ」「子どもは外で遊ぶものだ」

「〜もので」（原因、理由）
「ゆうべつい飲みすぎちゃったもので、ひどい宿酔なんです」
「〜というものは」（強調）
「そもそも医者というものは…」
「〜ことだ」（断定、感嘆、嫌悪等）
「若いうちにせいぜい頑張っておくことだ」
「ほんとにすばらしいことですね」
「やれやれ、お節介なことだ」
「〜したことがある」（過去の経験）
「メキシコには数回行ったことがある」
「〜することがある」（頻度の少ない行為）
「たまに近くでテニスをすることがあります」
「〜することができる」（可能）
「次の駅で乗り換えることができますよ」
「〜ことになる／ことにする」
「この度、結婚することになりました／ことにしました」
④「もの」も「こと」も終助詞的な用法がある。
「まあ、お久しぶりですこと」
「ご立派になられましたこと」
のように、「こと」は中年以上の女性が使うことが多いのに対して、
「久しぶりだもの。ゆっくりしていけよ」
「だって、つまらないんだもん（の）」
という具合に、「もの」は男性の方が多く使うようだ。
いずれも、「感嘆」や「理由」を表す「ことだ／ものだ」から転じたものだろう。
（門）

もらう ⇓ あげる

〜や

最近気になる終助詞は「や」だ。特に若者たちが捨て鉢な調子で使う「どうでもいいや」「ちぇ、つまらないや」は投げやりな態度が、そのまま「や」という終助詞に込められている気がする。
会話表現で「や」が使われる例を拾い上げてみると、「自分の小遣いじゃ買えないや」「こんな汚い海、泳げないや」「さめたハンバーガーなんて食べ（ら）れないや」のように可能表現の否定の形が多いこと。

「この雑誌、面白いや」よりは「面白くないや」のように、マイナス志向の表現が多いことなどに気付く。どれも会話表現というよりは、独り言めいて軽く言い放つものが多い。

「どれも高くて手が出ないや」「せっかく遊ぼうと思ったのに誰もいないや」、がっかりした時に使われるこれらの「や」は、誰に聞かせるともなく使われるもので、老若男女を問わず使われる。

「や」は「こっちに来いや」「一緒に食べようや」のように、男性が命令や勧誘の形で使うことも多い。「こっちに来い」という命令形に「や」が加わることで、命令というよりは自分の希望という色合いが濃くなる。ただし、この使い方は中年以上の男性に多く、白けた若者が使う「行きたくないや」「食べたくないや」とは趣を異にする。

ダイエットをしようと思っている女性が、山海の珍味を目の前にし、思わず「明日からダイエットすればいいや」と口走る。この「や」は、投げやりな気持ちというよりは、強いて自分を納得させようとしている様子がにじみ出る使い方だ。同様の使い方に「今日のテストは出来なかったけど、今度がんばればいいや」「報告書の資料が間に合わなかったけど、まあまあの出来だからいいや」などがある。

ドラマなどで方言が良く使われる。方言をもっとも方言らしく言うには、終助詞を多用することだ。「どこサ置いたらいいかんべー」「うち、そんなこと知らへん」、標準語だけでも多彩な色を帯びる終助詞に方言まで加わると「まことに日本語はむずかしゅうゴワス」ということになる。

「ああ、終助詞は難しいや」という外国人の悲鳴が聞こえてきそうだ。（佐）

～やすい

「このカバン、使いやすいですよ。ポケットはたくさんついているし、肩にも掛けられる。荷物が多い時にはファスナーを開けるとねっ、倍の大きさになる」

スーパーマーケットの入口で、人だかりがしている。何かと思ったら旅行カバンの宣伝だ。「でも布製

で破けやすいんじゃありません？」というお客さんの質問に「ヨットの帆布ですからね。革製よりずっと丈夫ですよ。洗いやすいしね」と答えている。

「〜やすい」は、動詞の連用形について「使いやすい」「破けやすい」「洗いやすい」のように、その動作が容易に行われるという意味になる。「使いやすい」は「使うのが容易」、「破けやすい」は容易に破ける、「洗いやすい」は洗うのが容易、しかし「洗いやすい」と「破けやすい」には微妙なニュアンスの違いがある。

「使いやすい」「洗いやすい」が、お客や店の人のカバンに対する主観的な評価であるのに対して、「破けやすい」はカバンそのものに対する客観的な評価と言えないだろうか。

「このペン、書きやすいですね」

「先生の文章はとても読みやすい」

「食べやすいように、小さく切りましょう」

「この椅子の方が座りやすいですよ」

これらはどれもそのものに対する話者の評価で、人によって「いや、この文章は平仮名が多すぎて読みにくい」「私はこちらの木の椅子の方が座りやすい」と解釈が異なる。これらは、話し言葉では「書きいいペンね」「この椅子とても座りいいわ。どこで買ったの」などと「やすい」が「いい」に変わることもある。

「破けやすい」のように、物に対する客観的な評価としては「ハイヒールはかかとが折れやすい」「雪道はすべりやすい」「この崖は崩れやすい」などがある。ある人物に対して客観的な評価を行う時にも「〜やすい」は使われる。

「この子は風邪をひきやすいんですよ」

「あの人、惚れやすいけどすぐ覚めるの」

これらの客観的な評価は、そのもの、あるいはその人自体が持っている傾向を表しているのであり、誰が見ても評価が変わることはない。「〜やすい」を単に「容易に」だけで解決できない使い分けがなされているのだ。しかし、どんな風に使い分けられているかは、かなりあいまいだ。

「書く・読む・座る・食べる・切る」と言った主体の意志的な行為に「〜やすい」がついた場合は「た

やすい」の意味になり、「破ける・すべる・折れる・風邪をひく・惚れる」といった自分の意志とは無関係に起こる「〜やすい」はそのものの傾向を表すと言えるのではないだろうか。なお、この場合には「やぶけいい」「すべりいい」とは言い換えられない。

自動詞と他動詞が対をなすものに、この「〜やすい」をつけてみると、それがはっきりする。「このドアは開けやすい」「この花は育てやすい」（他動詞、話者のそのものに対する主観的な評価）、「このドアは開きやすい」「夏はほっておくと雑草が育ちやすい」（自動詞、そのものが持っている性質・傾向で客観的な評価）となる。

（佐）

やっぱり ⇩ やはり

やはり・やっぱり

「やはり」の語源に定説はないが、「やわら（和）」などと同じ語源ともいわれている。つまり「静かにやわらかであること、動かさないでそのままにしておくこと」に通じており、そこから「もとのまま」とか「案の定」といった意味になる。そうしてみると、「やはり」という言葉を発する時には、この「動かない基準」といった意識が共通しているようだ。

①以前と同じ、もとのまま。
「昨日も暑かったが、今日もやはり暑い」
「今でもやはり横浜にお勤めですか」
「大人になってもやはり昔の面影はある」
「今日もやはり彼のところを尋ねてみるつもりだ」

②他の物・人・所と同じ。
「兄も医者だが、弟もやはり医者をしている」
「私もやはり皆と同意見だ」
「日本語と同様、韓国語にもやはり敬語がある」
「アメリカにもやはり日本と同様、自国民中心主義はある」

③思っていた通り。
「やはり君には無理だったようだね」
「後ろ姿が君かなと思ったら、やっぱり君だった」
「やっぱしね。こうなると思っていたよ」
「やっぱ、あいつが優勝したよ」

これらの文例のように、「やはり」はくだけた言い

方では、「やっぱり・やっぱし・やっぱ」などとなったりする。

④本来のあり方や社会通念・規則に合っている。

「いい筋はしてるけど、やはり素人だな」
「やはり血は争えませんね」
「やはり日本車は故障が少ないですね」
「横綱はやっぱり強いですねえ」
「どんなに頼まれても、やはり規則は規則ですから」

⑤いろいろ考えたり、試したりしたが、結局のところ。

「いろいろあったけど、やっぱり君が一番だな」
「いろいろ迷いましたが、やはりそれに決めます」
「たくさんの国の料理を食べてみましたが、やはり日本料理が一番です」
「紆余曲折がありましたが、やはり持つべきものは友ですね」。

⑤には、一見「動かぬ基準」ともいうべき「不動点」がないようにみえる。しかし、いろいろしたり、あったりしたが、「やはり」その選択肢が結局は一番よかったのだ、というわけであり、結論的に最善とされた選択肢が試行錯誤のプロセスの中で潜在的に「不動点」をなしていたことの再確認を表明しているのである。⑤の用法にも、やはり「動かない基準」という「やはり」の原意は生きているのである。

(門)

～よ⇒～ね

～ようだ

「ようだ」は、不確かな断定や数量を表す。「らし*い」に言い換えることができる。

「隣に誰か引っ越してきたようだ」
「彼女はどこかに出掛けるようだ」
「このレストランは若者に人気があるようだ」
「社長は今年いっぱいで後任に席をゆずるようだ」

はっきりとは分からないが、見たり聞いたりした情報からある結論へと持っていく時に使われる。たとえその情報が間違っていたとしても「あっ、じゃ私の勘違いでした」といってのけることができる。

週刊誌などでは、よく未確認情報を「〜ようだ」（らしい）も付けずに書いてしまうため問題になる。しかし、「○○と××が結婚するようだ（らしい）」では週刊誌は売れないので、「○○と××結婚」と書いてしまうのだろう。

「ようだ」は自分自身の感覚に対しても使われる。この場合「らしい」には言い換えることはできない。

「今日はとても気分がいいんだ。風邪がなおったようだよ」

これは本人が感覚的に感じていることで、実際は風邪はなおってないかもしれない。

「熱が下がったようだ」

「足の痛みがとれたようだ」

「今朝から続いた頭痛がすーと直ったようだ」

一時的にせよ、薬の効力にせよ、病人にとってはとても大切なことだ。頭痛を訴える病人に「快方に向かっています」といくら医者がいったところで、本人が感覚としてとらえることができなければ仕方ないからだ。

「ようだ」は「あっ、バスが来たようです」のように、確かな事実でありながら、婉曲(えんきょく)な表現として使われることがある。これは目上の人やあまり親しくない人と話す場合によく使われる方法で、あいまいに表現することで敬意を表すことになる。

会議などに出席すると、

「先生のお席はこちらのようですよ」（ちゃんと名前が書いてあるのだから「こちらですよ」でもかまわない）

「議長、質問の方がいらっしゃるようですが…」（さっきから手をあげている人がいる。「質問の方がいらっしゃいます」となぜ言わないのか）

「あそこに立っていらっしゃるのが有名な○○先生のようですよ」（さんざん写真やテレビで見てその顔は知っている。しかし知人でもないのに○○先生ですよ」と言ったのでは知ったかぶりしているようで、あまり好ましくない）

この「ようだ」は断定するのを避け、あいまいにぼかすことで、自分の考えを遠回しに伝える役割を果たすようだ。

（佐）

コラム

役人言葉

芸能界では時間にかかわりなく、最初に会った時の挨拶は「おはようございます」だそうだが、それぞれの業界にこの種の特有の表現があったりする。例えば水商売では「一見(いちげん)さん（はじめての客）」などと言ったりするし、野球界の「かまぼこ」はいつもベンチという板の上に座っている万年控え選手、落語界で「それる」と言えば、「話がうけなかった」ことを言うらしい。そうした特殊用語を駆使することによって、その業界の人間であることを相互に確認しあうという意味もあるのだろう。

　それらの業界の人々が仲間内でそうした特殊表現を使いあっているのは勝手だが、役人たちが、一般の人々に理解してもらわなくてはならないところで、役人たちの「業界用語」にあたる「役人言葉」を頻発する傾向があるのは、彼らの勝手と言ってはいられない。

　昔から、三大専門職と呼ばれてきた職種（牧師・法曹・医師）の共通の特徴の一つは、特殊な服装と特殊な用語によって威厳を保つことにあった。現代の役人たちは服装はサラリーマン共通のドブネズミ色のスーツに身をやつしているので、せめて特殊用語で民衆をケムにまくことで威厳をふるおうとしているのだろうか。

　江戸時代の武士が現代の役人の前身であったせいか、役人たちは一般にはあまり使わない漢語を使いたがる。そこには、ある時は、「民は由(よ)らしむべし。知らしむべからず」といった驕(おご)りがうかがえるし、また、ある時は、事態(こと)をあいまい化することによって自らの責任を糊塗するという姑息(こそく)さが見え隠れする。この種の「役人言葉」のいくつかを見ていくことにしよう。

　「日銀融資分を可及的速やかに返済させる」

「かきゅうてきすみやかに」といった言葉を役人以外に使う人がいるだろうか。「可及的」とは、「及ぶべく（可及）」つまり「できるだけ」の意味の漢文表現を「的」で和風に副詞化した言葉で

ある。「速く」ではなく、「速やかに」という古い表現を用いるのも気取っている。「できるだけ速く」と言っては、分かりやすすぎて言質をとられるとでも心配しているのだろうか。

「担当者と相談の上善処します」も役人の決まり文句。「善処」とは読んで字のごとしで「もっとも善い方法で処置すること」である。もっとも、漢字を見れば意味がつかめるが、聞いているだけだはどういうことか分からないというところが曲者で、民草をケムに巻く表現であることにかわりはない。「善処」の「善」は役人や役所にとっての「善」であったりすることが多い。

「善処」と似た表現だが、「その件につきましては、しかるべく対処します」と言うこともある。「しかるべく」は「然（しか）あるべく」つまり「そうあるべく」という意味だが、この「べき」が示唆する「本来の状態」なるものがどういうものなのかは、あいまいなままにされている。「しかるべき」とは、役所感覚によれば、結局のところ、「前例にならって」とか「上の管轄部署の指示に従って」という意味にほかならないのである。

「まことに遺憾に存じます」といった「遺憾」が謝罪の表現であるかのように使われることもある。しかし、「遺憾」とは本来、「自分の期待通りにいかず、残念に思うこと」であり、「実力を遺憾なく発揮した」といった用法の方が本来の意味に合っている。「役人用語」の「遺憾」は「残念」という感慨を述べることによって、「謝罪」の責任を回避する表現なのである。

一時期、「サンシャイン計画」なる高齢化社会への行政の対策が、実質的な意味があいまいな英語を多用している、として批判されたが、どこの「白書」を見ても、その種のカタカナ英語が乱用されている。民間企業でのカタカナ英語氾濫に輪をかけるようにして、行政も一般の人人には分からないカタカナ英語をちりばめるようになった。「役人言葉」のあいまいさの煙幕の素材は、漢語からだんだんカタカナ英語に移ってきているようだ。

（門）

よく

「よく」は、形容詞「よい」の連用形だが、それが独立して副詞になったものも多用される。日常会話ではよく使われる語である。

意味は多様で、次の六つぐらいに分けられる。

①十分に。くわしく。もれがないように。「よく調べておいてほしい」

②じょうずに。うまく。巧みに。「かれを傷つけずによく説得してくれたね」

③非常に。はなはだ。「ここまでよく焼けてしまったものだ」

④予想外なこと、しにくいことをしたときに。「よくもだましてくれたね」

⑤よくないことを逆説的にいう。「よくもまあ、そこまでばかなことをしたものだ」

⑥たびたび。ひんぱんに。ともすれば。「よく能楽堂で会いますね」「よく学校を休む」

「よく」は、一見、肯定的な表現のようだが、否定的ニュアンスを込めて使うことも多い。右の④⑤などはそれである。

そしてまた、程度をあらわす作用を含むから、程度の認識の仕方に個人差が生じ、それがあいまい度を高くする。この二つの要素が重なって、トラブルを起こすことがよくある。

たとえば、上役が部下の遅刻を注意したり、親が子供の遅刻を注意したりするときに「よく遅刻するな」などという。上役の心得といった本には、こういう注意の仕方には決めつけがあって、反感を起こさせやすい、などと書いてある。これが親子だと、「〝よく〟といっても、たった三回じゃないか」という反論も可能だが、上役と部下では、そこまで隔意のない問答はしにくいというわけである。

「三回」が多いか少ないかは議論のあるところだが、感情的対立が起こる原因は、その遅刻の回数だけにあるのではない。「よく」という言い方にはすでに「多い」という断定があり、これが相手の感情を刺激するわけだ。これなど、「よく」を頻発する癖には用心すべきことを示唆するケースである。（芳）

よろしく

「よろしい」の連用形から来ている。古語で「よし」が好ましい状態として積極的に評価することばであるのに対して、「よろし」は「よし」よりも評価の劣る事態を消極的に是認することばだった。今のことばで言えば「まあまあ」といったところだろう。同時にそこには、「分相応」という自足感もうかがえる。

現代人の「よろしく」にも、そうした意味の古層は生きているようだ。

「よろしくお願いします」という表現には、自分が最大限に有利になるような措置をお願いするというような意識はない。相手の立場でできる範囲で、自分にほどほどの好意を期待するという感じである。

「よろしくお伝えください」という場合も、「自分の好意や相手を案ずる気持ちを」「よろしく」伝えてくれ、と言っているわけで、やはりそこにも「ほどほどに」のニュアンスがある。

「ちょうどよい」ように、あるいは「適度に」というのが、「よろしく」の原義であることは、

「私のいない間に何かあったら、よろしく頼む」

「この後は、各自でよろしくやってください」

といった言い方にも表れている。ただし、どれくらいが「適度」かは相手の判断に委ねられている。どうも「よろしく」には、「適当に」という時の「適当さ」と対応するあいまいさがうかがえるようだ。

また

「借りてきた猫よろしくおとなしくなってしまった」

「オペラ歌手よろしく声をはりあげる」

のように、「いかにもそれらしく」という意味あいになるのも、「それに相応(ふさわ)しい」というところから来ているのだろう。

「よろしく」という表現は、「よろしさ」の判断基準を他人にあずけて願望や依頼をするというあいまいさをもっている。しかし、そうしたあいまいさは、人間関係の潤滑油として必須のものとも言えるのである。

（門）

〜らしい

「先生、木村さんは今日は欠席らしいですよ」
「そうだね、欠席のようだね」
「今、ちょうど映画が終わったらしいですよ（終わったようですよ）」

助動詞の「らしい」は「ようだ*」と使い方が非常に似ていて、使い分けはあいまいだ。

「らしい」は推定の意味を表し「欠席だ」とまでは言えないが、「風邪をひいている」「今日はコンサートに行くと言っていた」などの判断材料があり、欠席するのはかなり確かだと思える場合に使う。それに対して「ようだ」は、自身の感覚で判断する面があり、先生の「欠席のようだね」は、授業が始まっても自分の席にいないのを見て、多分欠席なのだろうと思っている面がある。

「先生の話では、息子の成績はかなりひどいらしい」

この場合の「らしい」は、ある確かな情報に基づいたものであり、確信の度が高い。それに対して「最近の息子の様子から判断すると、学校の成績がかなり悪いようだ」と、自分自身の感が判断の根拠になっているため、「ようだ」は「らしい」よりは確信の度が低いと言える。

「男らしい」「先生らしい」「子供らしい」と名詞の後に「らしい」がついた場合には、話者が「男とはこういう性格」「先生とはこんな風体」「子供とは…」といった基準を持っていて、その基準に合致した時に使う表現だ。しかし、「先生」の特徴とはどんなものだろうか。「男らしい」とは?、「竹を割ったような性格」は男らしく、「〜らしい」というのは明らかに褒め言葉だ。

それに対してけなす時には「〜くせに*」が使われ、「男のくせに意気地がない」という表現になる。先の男性と同じく「竹を割ったような性格」の女性がいたとしよう。その女性は何と言われるかというと「女のくせに男まさりで」となり、「女らしくしとやか」と評価が全く逆になったりする。

「〜らしい」という言葉は、その人の属性を見えな

い糸で縛りつけるものでもあるのだ。「〜らしくない」と言われないために、日本人はどれだけ「〜らしく」見えるように努力していることか。時代や社会の変化に応じて、この「らしい」の内容も徐々に変わっていくに違いない。　（佐）

〜られる ⇒ 〜れる

例の・かの

「例の話」「例の人」「例の物件」…など、この「例の」は、「いつもの」「あの」「件（くだん）の」「すでに御案内の」などの意。この・その・あの・かの・いわゆる…などと共に連体詞に属する。

そもそも「例」とは、「過去からあったならわし、しきたり（先例）」「いつも行われていること（通例）」「ありふれて目新しくないこと」「同類のものを代表し、類推させる個別的・具体的な事実（実例）」ということである。これに「の」が付いて「例の」となれば、どうなるのか。

過去の経験、通例、前例などから、お互いに知り合っていて、あらためて具体的に言わなくてもすむ時に次のように使われる。

「例の話だけどね」は、同じ話が反復されることを示す。「例の件、よろしく頼むよ」は、わかり合っているはずだという共通の前提を言外にしている。「例の人の耳に入ってもまずいから」も同じ。「例の話は、また、帰りながらでも、ね」は、第三者に話の中身をかくす時に煙幕のはたらきをする。

さらに、大橋禄郎氏の着眼によれば、自分の物知りぶりをそれとなく示すための「例の」もあるという。「例の、ベーコンの『知は力なり』が何を言おうとしているかと申しますると…」

なるほど、ちょっとした頭脳作戦だが、そう言えば、漱石の『坊ちゃん』で、山嵐（堀田教諭）と坊っちゃんを仲たがいさせようと奸計を案ずる赤シャツと野だいこは、ヒソヒソ話の一部だけ坊っちゃんに聞える会話で、山嵐に対する疑心暗鬼を誘発する。

「また例の、堀田が」「……」「生徒を…」「煽動して？」

以上のように、多くは省略したり隠したりすると

きに使う語だから、あいまい度は高い。そこにこそ存在理由・利用価値があると考えてもよい。

この語でコミュニケーションを行う前提としては、少なくとも当事者には「例の」が何を指すかがわかっていないといけない。しかし実際には、わかっていると思っていても別のもの(こと、人など)を指していることはしばしばある。

社長が秘書に「ちょっと、例のもの用意して」と言うのを聞いた客、「いえいえ、私のことならおかまいなく…」と食事の用意を辞退。ところが、秘書が持って来たのは、もてなしには関係のない、きれいに整理された重要データのファイルだった。

『産経新聞』のコラム「産経抄」で菊池寛賞を受けた記者、石井英夫氏は、ある日、こんな文章を書いている(このコラムの文章は傑作選として数冊の本にまとめられている)。

「有名な『人民の、人民による、人民のための政治』はリンカーンのゲティスバーグの演説の表現だが、もともとはリンカーン自身の言葉ではないという。『生きているわれわれは、ここに固く決意すべきである。(中略)そして、かの、人民の、人民による、人民のための政治を地上から絶滅させないであろうことを』

リンカーンが『かの』というからには他人の言葉の引用で、ものの本によると英国の宗教家の表現の借用だそうだ」

ここでいう「かの」は、「例の」と同じ意味を持つ。文章では、引用文はカギカッコでくくったり、それの出典を示したりするが、演説や会話では、しばしば省かれる。また、はっきり示しても、いつの間にか出典は除外される。時間がたったり、人から人へと伝達されたりするうちに、〝その〟部分は風化するのである。　(芳)

～れる・～られる

助動詞の「れる・られる」には可能・尊敬・自発・受け身とさまざまな用法があり、時には、それがどの意味で使われているのか判断に迷うことがある。武者行列を見ようと人垣の隙間からのぞいてい

て発する「見られた」と、物陰でこっそり着替えをしていて「見られた」は同じ表現だが、「何が見られたの」(可能)とも、「誰に見られたの」(受け身)とも受け止めることができる。

「あっ、机の上にあった書類は?」「持っていかれました」

これだけだと受け身とも尊敬ともとれる。税務署の調査が行われている場合には、受け身だろうし、単に会社での会話なら「部長が持っていかれました」のように尊敬表現で、主語が省略されたものとも受け取れるからだ。もちろん会話には、その会話にあった場面があり、前後関係から判断して、受け身か尊敬かは自明である場合が多い。しかし、最近問題になっている「着れる、見れる、来れる、寝れる」といった「ら抜き言葉」の存在は、何とか意味をはっきりさせて使い分けたいという、意識の現れではないだろうか。

「きのう買ったジャケット、今朝会社に着ていこうと思ったら、息子に着られてしまいましてね」(受け身)

「先月からダイエットした甲斐があって、またこのジャケットが着られる(着れる)ようになりましたよ」(可能)

一段活用の動詞は「着られる(受け身)、着れる(可能)」と本来なら両方とも「着られる」のところを、可能の意味をとる場合には「着れる」を使う人が多くなってきている。意味上の混乱を避けるために生まれた庶民の知恵と言えないだろうか。

「言葉の乱れ」と受けとるか、文法を整理しようとする現象と受けとるかだが、私は後者を支持したい。どの時代でも話し言葉は書き言葉より十年早く変化を始め、書き言葉がその後を追いかける。「ら抜き言葉」も十年もしないうちに市民権を獲得するのではないかと思われる。

受け身表現の〈れる・られる〉

「妻に殴られまして」と目の下に青痣(あおあざ)を作って出社した社員の弁、「褒められる、叱られる、押される」など他動詞が使われ、人を対象にしている場合は直接受け身、これに対して「ゴルフコンペを楽しみに

していたのに、雨に降られてしまった」などのように、「雨が降る」という自動詞を受け身にした時に、もとの文に現れない第三者が被害や不利益を被る場合は間接受け身だ。

外国人に分かりにくいのは、自動詞の「寝る・来る・泣く」が受け身文になったときで「なぜ『来る』や『寝る』の受け身形があるのか理解できない」という。

「きのうの日曜日は友達に来られて…」、日本人なら、ここまで会話を聞いただけで、その友達が歓迎されない客であるのが分かる。「きのうトムが来てね」と「きのうトムに来られてね」、単に翻訳するだけではこのニュアンスの違いを説明することはできない。“Tom came to my house yesterday.” 受け身なら“and I was unhappy.” と付け加えることで、初めて文意が伝わるのだ。

「きのうの忘年会の後、木村君に電車の中で寝られちゃってさ」、ここまでで、話者がどれだけ困ったか、日本人ならすぐその場面が浮かびあがるだろう。これを聞いた日本人なら「それは大変でしたね」などと多少同情をこめた返事をするところだが、外国人にとっては、「寝られる」ことで話者が困ったのだという意識を察することは難しく、「電車の中で寝た」という現象だけをとらえて「ああ、日本人はすぐ電車の中で寝ますね」とそっけない返事をかえすことになる。コミュニケーション・ギャップというのは、こういったところからも生じるのだ。

新聞やテレビの報道文でも「今日行われた閣議では」「新たな対策が検討されることになりました」など、受け身表現が多用される。これは人が主語に立たず、元来日本的な発想ではないとされてきた。しかし最近では、こういった受け身文は日本語の中で頻繁に使われるようになっている。「十二日にＥＳＳ主催のスピーチコンテストが開かれます」「これでやっとご苦労が報いられましたね」などだ。

日本語では受け手の立場に立って話す方が好ましい印象を与える。受け身表現が多用されるのも（×受け身表現を多用するのも）そんなところに原因があるのかもしれない。

自発表現の「れる・られる」

「秋の気配が感じられる頃となりました」

手紙をこんな文章で書きはじめると、そこには、話者の主体性よりも、秋という季節の到来に話者が受け身になって、ごく自然にその状況を受けとめているという感じがにじみ出てくる。「自然にそうなる」という自発の表現で、どこかに奥ゆかしさが漂い、そこに「日本人らしさ」が出てくる。単に「秋になりました」と、「秋」を客観的にとらえるのとはニュアンスは大分違う。

日本語の文章ではもっとも論理的であるはずの論文などにも、この自発の形はよく使われる。文末が「思われる」で終わる例だ。その英訳を見ると"I think"と主語が明確に出ているにもかかわらず、日本語になると、話者の主張をあいまいにする「思われる」になるのだ。断定することを嫌う日本語の発想では、時には欧米の人たちと裁判で争っても負けてしまうのは当然と思われる。日本語で考える時と英語で考える時には、この「れる・られる」の表現も大分違ったものになるはずである。

（佐）

ろくでなし

「ろくでなし」というと、越路吹雪のシャンソンのタイトルを想い起すが、「ろくでなし」が否定されている「ろく」とはいったい何だろうか。漢字は「碌（小石の意）」とのことだが、単なる当て字のようだ。漢字の語感としてはむしろ「禄」が念頭にくる。つまり封建社会において「禄を食(は)めない者」、今で言えばサラリーマン失格者というイメージである。しかし、どうもこれはあまりに「会社社会」に毒された発想のようだ。

「ろく」とは「陸」で「土地の平らなこと」から転じて「物事がゆがまないで、まっすぐなこと」（この点で「直」とも書く）を表す。したがって、「ろくで（も）ない」とは、「まともでないこと」になる。

「朝まで友達と話しこんじゃって、ろくに寝ていないんだ」

「会社の仕事が忙しくて、ろくに休むこともできない」

という時の「ろくに」は「まともに・十分に」という意味だから、「ろく」の元の意味をうけついでいる。しかし、この場合も「寝ていない」「休むこともできない」と次に否定表現がかならず呼応しているところがおもしろい。「ろくに寝る」「ろくに休む」とは言えないのである。

一部の方言では、「ろく」で「平坦」「まっすぐ」「正直」という肯定的な意味を表すようだが、共通語では、「ろく」という否定される当のものの意味はおぼろげになりつつも、「ろくでもない」という否定的言い回しだけが残っているおもしろい例と言えよう。 （門）

分かる ⇩ 知る

〜わけ・〜はず

「訳｜わけ」は物事の筋道や道理を示す。「わけにはいかない」「〜わけだ(はずだ)」「わけが＋わかる(わからない)」。

日本人は日本社会の規範に従って生きている。

「いくら式場が安いからといって、仏滅の日に結婚式をあげるわけにもいかないでしょう」

「一家の主（あるじ）が食べはじめないのに、嫁の私がさっさと食べるわけにはいかないんですよ」

こういった社会の道徳がいつまで続くのか、あるいは既に壊れているのか、いずれにしても「どうして仏滅なんか気になさるんですか。別にいいではありませんか」と言われれば、「〜わけ（道義）にはいかない」という表現も意味をなさなくなる。「わけ」の使い方があいまいである所以（ゆえん）だ。

「先輩に荷物を持たせるわけにはいきませんよ」

「いくらなんでも、関税を二〇〇％にするわけにはいかなかった。そんなことをしたら自分の国のディーラーが倒産に追い込まれるからね」

「わざわざ私を訪ねてきたのに、会わないわけにはいかないでしょう」

これらの「〜わけにはいかない」という表現も、社会的に見ても、道義的にみてもそうするのが自然だという時に使われる。

「わけ」は、未来のことを仮定する場合にも使われ

る。

「天気予報では、今日は一日晴れのわけ(はず)だが…」

「飛行機が定刻に着いたとすれば、夕方には家についてもいいわけ(はず)なのに」

「あの人に恨まれたからには、このままですむわけ(はず)がない」

「来年の今頃には、新しい建物に移れるわけ(はず)ですね」

仮定の結果を表す「わけ」は「はず*」に言い換えられる。

「わけ」は「わかる*」という動詞と一緒に使われることも多く、その場合には「道理がわかる(わからない)」という意味になる。

「どうして、そんなにわけのわからないことを言って私を困らせるの」

「あなたはもっとわけのわかった人だと思っていたのに」

「わけのわからないこと」は社会的な常識に反すること、また「わけのわかった人」は常識家と解釈できる。ところが次のような「わけ」の使い方になると「わけ」は、原因・理由を表す。

「彼女がどうして怒っているのか、さっぱりわけがわからない」

「あんなに仲のよかった二人がどうして離婚したのか、これでわけがわかったでしょう」

文末に「わけです」を持ってくると、話し手が自分が述べようとすることに、自信を持って言い切る表現となる。

「みんなで決めたことだから、君にも守ってもらわなくては困るというわけだ」(わけなんだ)

「日本にこれだけの経済力がついた以上、国連の常任理事国に名乗りをあげるのは当然というわけです」(わけなのです)

「学長も応援して下さることですし、この計画を積極的に進めたいというわけです」(わけなんです)

ここでは、まず理由をはっきりと述べ、この結果になるのは当然であり、常識的にも納得できるであろうという判断から「〜わけ」を文末に持ってくる。

これが

「君に守ってもらわなくては困るんだが…」
「君にも守ってもらわないと困ることになってね」
「君にも守ってもらえないだろうか、そうしないと困ることになってね」
という表現になると、相手の顔色を見ながら話すことになり、トーンはずっと弱くなり、相手に反論の機会を提供することになる。立場によって、こういった表現も使い分けなければならず、日本語の会話では文末の持って行き方一つで、断定表現にもなれば、依頼表現にもなるという一つの事例だろう。
　外国人に教える際、単に「『わけです』は『それは当然』という意味になります」だけでは、とてもこの「わけ」を教えたというわけにはいかない。（佐）

割　合 ⇩ 案外

あとがき

『あいまい語辞典』という辞典の企画があるのですが、共同執筆者に…」というお話を、東京堂の福島氏を通して頂いたのが、確か一九九三年の春だったと思う。一読者として、そんな辞典があれば読んでみたいとは思ったが、執筆者になるには一大決心が必要だった。

無謀にも、このお申し出に従うことにしたのは、芳賀先生の「日本人論」の視点からの「曖昧さ」の追求に興味を覚えたことと、私自身が外国人に日本語を教えるという経験を通して得た体験を、この辞典に盛り込めるのでないかと考えたことによる。幸い、共同執筆者に同僚の門倉教授にも加わっていただけることになり、哲学・論理学からのアプローチが加味されることになった。

問題は、この辞典でとりあげるべき語彙の選択だった。「結構ですね。ぜひ行きましょう」のように快諾の返事にも使われるが、「もう結構です」のように断りの返事にも使われる表現、「女のくせに」のように、日本という文化的・社会的規範を含蓄しているが、その基準が曖昧な語、「部長のおかげで」と言えばプラス概念だが、「部長のせいで」と言えばマイナス概念になるというように、話者の心理によって選択が可能な語彙、「ええ、行きたいんですけど…」のように、肝心の否定表現「行けません」を省略する言い差し表現など、「曖昧」というキーコンセプトのもとに、あらゆる角度から語彙を選ぶ

作業が始まった。語彙の収集・選択に約一年を要して、最終的に絞りこまれたものがこの辞典である。
しかし、こうした語彙の選択には、主観的・恣意的な要素つまり「曖昧」さがつきまとう。「なぜその語があいまい語とみなされるのか」については、各執筆者の判断による部分が多い。今後、書き足す部分、書き直す部分などが生じることと思う。読者の方々にも「何が曖昧か。どうして曖昧か」をともにお考えいただき、ご教示いただければと思う。
あいまい語の語彙と、それに関する資料の収集については、元成蹊学園教諭の加藤達馬先生、横浜日本語研究会のメンバーにご協力いただいた。これらの膨大な資料が手元になかったら、この辞典は未だに完成をみなかったと思う。ご協力に対し、心からお礼申し上げたい。
また東京堂の編集者、福島光行氏には企画の発案者として、また最初の読者として、常に暖かい励ましと時には厳しい感想を頂いた。福島氏の出版への熱意が、この一書になったという思いが強い。足掛け三年にもわたって、辛抱強く、叱咤激励して下さった福島氏に心より感謝したい。
この『あいまい語辞典』は、既成の辞典の概念にはおさまりにくい類のものだと思う。読者の皆さんにじゅうぶんに楽しみながらお読みいただければと願っている。

佐々木瑞枝

一九九六年五月

ま 行

や 行

ら 行

わ

な 行

は 行

さ　行

た　行

索　引

解説文中から採録した言葉は、細ゴシック体で示した。

あ　行

か　行

芳賀　綏（はが・やすし）
1928年熊本市生まれ。東京大学卒業。東京工業大学教授・NHK解説委員等を経て東京工大名誉教授。日本文化（政治文化）論・社会言語学専攻。主要著書に「日本人の表現心理」「言語・人間・社会」「新・売りことば買いことば」「現代政治の潮流」ほか。

佐々木瑞枝（ささき・みずえ）
1942年京都市生まれ。日本語学・日本語教育学専攻。山口大学教授を経て、現在横浜国立大学留学生センター教授。主要著書に「外国語としての日本語」「留学生と見た日本語」「日本語ってどんな言葉」「日本語教師という仕事」「日本事情」ほか。

門倉正美（かどくら・まさみ）
1947年東京都生まれ。東京大学卒業、東北大学大学院修了（哲学専攻）。横浜国立大学教授。ヘーゲル研究から出発して近年は日本学・レトリック論に関心をもつ。主要著書に「日本社会再考」（共著）「日本事情ハンドブック」（分担執筆）「会話のにほんご」（共著）ほか。

あいまい語辞典

平成八年六月一〇日　初版印刷
平成八年六月二〇日　初版発行

著者　芳賀綏
　　　佐々木瑞枝
　　　門倉正美
発行者　大橋信夫
印刷　㈱東京コピイ

発行所　株式会社　東京堂出版
東京都千代田区神田錦町三ノ七（〒一〇一）
電話〇三－三二三三－三七四一　振替〇〇一三〇－七－二七〇
製本　渡辺製本

ISBN4-490-10421-9 C1581
Printed in Japan